
さんぶんのいち

じょーもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さんぶんのいち

【Zコード】

Z08430

【作者名】

じょーもん

【あらすじ】

人口密度稀少域特例総合司法官。

その任務は、僻地においてのみ、

? 捜査・逮捕・立件・裁判・量刑確定・? 刑執行の本来、別の三つの司法機関に委ねられるべき『人を裁く』権利行使することが出来る職位である。

通称三分の一特例によって、保志は45歳の定年延長を確保した。長年煮え湯を飲まされてきた、今時恥ずかしい宇宙海賊、通称ジョリー・ロジャーの尾っぽを掴むまで、引退できるか馬鹿野郎。

そして、保志が選んだ三分の一ずつの二人は、現役裁判官の迫神平和と、SATの制圧一班レコンを務める相澤亜衣里。

三分の一の非日常を取り込んだせいで、東京と宇宙開拓最前線を行ったり来たりで……。

ルビ多めにつき、IEorChrom推奨です。

1・バッパー らくひらんのお誕生日（前書き）

考え方できる人工知能（*TAI=Thinkable art ifical intelligence*）である、大きなSENLEN 4444、愛すべきセレ、頑丈な飛閃。
TAIを日本語で発語すると、音が何故か『他意』を連想させるのは、あくまでも氣のせいである。

単身赴任の夫。仕事命の妻。そして、親にもはや興味を失った子ども。

離れていても、つながつていよいよとすれば家族だけど、愛なんか無くしてしまったそのあとで、惰性と一緒に住んでいるのは家族？そして保志家の「」面々。あなたたちほどぢり？

過酷な職務に奔走した季節を終え行く老兵と、新たにそれに挑もうとする一つの若い力で、一つの給与^{さいふ}をシェアする、でこぼこでけなげな三人組、ろくちゃん、あいあい、半六。

極端に少人数の職場で、大事なことを隠してしたり、暢気に恋愛なんかしていいんですか、あなたたち。

といつひとで……この物語はどうなりますやう、さてお立ち会こ。

1・バッパー らくちやんのお誕生日

正確に時を刻むことなどできない保志の、アテにしてはいけない体内時計によると既に八分ほど前から、一曲歌い終わる毎に、律儀に二十秒ほどのインターバルを置いて、セレの野郎が素つ頓狂なまでに軽い調子で、古典的定番であるハッピーバースデイソングを繰り返していた。

保志はそのうち飽きるだらうとあえて自分に言い聞かせて、今日の仕事の段取りを考えるべく壁一面どころか、三面になんなんとする巨大モニターのど真ん中に位置するブース席に座つて、正面モニターにTODOLISTをでんと表示させた。

「老眼？」

「馬鹿言え」

そんな短い会話の間も、セレは進行途中の歌をやめなかつた。

一見、^{まったく}全の人間に見えるセレだが、彼を制御している知能はその頭の中にはいない。彼の中身はすべからくして、その行動を制御することに特化して作られている。

健康的な浅黒い肌は、文字通りの意味で日陰者の、宇宙暮らしにある東洋人には余りないけれど、きっとセレが形を借りているモチネタのやつが、紫外線禍が騒がれてる昨今も気にせずにお陽さまに当たつているに違いないのだ。

全く、機械の癖に妙なところにまで気を回しすぎだ。大体、セレンにあいつの現在近似値情報があるということは、最近も棺桶入りしてトリップしてゐるということだらうし、その旅行先が少なくともここではなかつたということだけは確かだ。

官給品を目的外で使用することは厳密に言えば窃盗罪に当たる。

総合司法官の身内が、使用権なんて木つ端なものの泥棒をしてるなんて、勘弁してほしい。

それを平氣で流用しているセレンもセレンだ。

あいつの形をしているセレは、今にもずり落ちそうなジーンズから、だらしなくシャツをはみ出させていてる。既に数える氣も失せたピアスの穴が、前見たときよりも増えているのは、氣のせいとばかりは言えないだろう。きっとまんまのやつだろう。全く、アレが甘やかすから、セレのモーテンタ野郎はこうなるんだ。

そう思つたところで、保志は服装についてぶつくを言つことはないと考え直す。これでも取りあえず、中年男と若造の趣味が一致を見ることは、性犯罪の円満解決と同じくらいリアなケースと承知している。

セレ自体は、本来シンクロイドとして機能するのがスジの身体を使つてゐるのだから、肌の見てくれも触感も人そのままで。つまり、生身の人間適度の大雜把な感覚器官の感度では、彼を人外であると判断するのは無理だ。センサー内臓のゴーグルをつけなければ、保志には人間でないと判断することは難しい。

さて、そのセレである。やつは軽いノリながらも朗々と歌を歌いつづけ、同時に、全くの副音声で普通にしゃべるといつ、人間サマにはできない芸をやらかしている。つまりは、厭味なことに自分の間、あの気に障る歌を止める気はさらさらないということだ。

たつた一人のセレが副音声を使って一、三人のようにならべるのは、慣れていたとしても、太い根性に裏打ちされた平常心に対して、公的な墨付きが与えられているような職にある保志だったとしても、たまらない。

普段からプリンス・ショートクじゃないんだから、基本一つの声で一つの文脈でしゃべるよう言い聞かせてあるのだが、緊張が強

いられてこるミッション中でもなければ、セレはそんな人間保志のまつとうな文句など、こいつやつて無視しやがるのだ。

たかがA.Iの発展型といえども、T.A.Iであるセレンレベルになれば準人権持ちだ。頭ごなしにこいつの理屈を押しつけても通るものではない。保志はため息をつく。

今日はジョルジオ保志が来てほしくないと願い続けた、めでたい現在拝命中の職位における定年退官日に当たる。

彼が所属する総合司法庁職員としての定年にはあと十五年ほどあるが、人口密度稀少域特例総合司法官としてのそれはまさに今日、四十五歳の誕生日だ。

たかが人造物であつても、普通なら長年の相棒と別れるのは感慨深く辛いもの……ではあるのだろうけど、まったく哀しみも寂しさもちらとも湧いてこない。

というもののセレの制御（つまり反応）が、どうにもどこか普通のT.A.Iの範疇をはみ出しているとしか保志には思えないからだ。もつともセレに言わせると、他でもない保志の個性に合せて成長した結果なんだそうだ。そう言い張られても、保志としては欣然としないながらも納得するしかない。

保志自身の自己判断では、自身は面白みがない仕事実直一点張りの総合司法官なのだ。胸に手を当てて来し方をつらつらと振り返つても、想像力を内在した思考できるA.Iは必須だが、歌つて踊れるA.Iを求めたことは一度だつてないはずだ。

* * *

法律的正式名称『人口密度稀少域』、一般呼称『フロンティア』なんかで公職に就いている保志の相棒は、保志の職においては「スタンダード」パートナー標準で、量子式演算で思考する人工知能である。長たらしいので忘れたが、堅苦しい正式名称の頭文字を並べた型番は『SELEN』。それにシリアル番号の4444 四の四並びとは「ゲンカツ」よん験^{よん}担^{カツ}ぎ的^的に最悪だと思う をくつづけて省略して、保志は「セレン4×4」と呼んでいる。そしてこうやって人型に収まってる子機の方は「セレ」だ。保志の言い分によるなら縁起を担いだわけでもなんでもなく、「よんよんよんよん」も「よんせんよんひやくよんじゅうよん」も普通に呼ぶには舌が回りきらないからで、他意はないそうだ。

もつとも、あくまで便宜上、保志が勝手にそう呼び分けようと線引きしただけなので、大元のSELEN4444も子機扱いのシンクロイドも、セレで済ませることが多い。向こうは、どっちにしろ自分のことなのだから気にもとめていない様子だ。

保志が人間である以上の、些細で多岐にわたる必要から（ぶつちやけといえば利便性つてやつだ）、セレは普段使用頻度が低いシンクロナイザー受信機（Receiver of synchronous device）をアバタロイド風に使用している。けれど、本体は保志が住んでいる可動官舎のそのものを支配しているAIだ。つまり、目の前にいるのもセレだけれど、宇宙空間なんぞという人間の居住には到底向かない場所で、保志の生命維持を可能にしているインフラのコントロール全てを担当しているのも、またセレンといつことになる。

いわゆるフロンティアで人間らしき形をした有質量物を見ても、それが生身の人間である可能性は三分の一以下だ。同じ宇宙人が住

んでもる地域とはいえ、もつと人間が^{ひじめ}犇^{アシ}いている入植済の宇宙植民施設^{テラフォームシティ}だの、地球化済み^{テラフォームシティ}都市なら、生身含有率はもうちょっと高いのだろうけれど、今まさに人類の持続居住の可能性を探つてはいるこの地域ではそうではない。

保志の受け持ち管区であるここいらの宇宙で、人型^{ヒトガタ}の物体として活動しているモノは三種類ある。

一つ目は、保志のような生身な人間。^{レア} 真空に曝されても死ぬ、水分とエネルギーの補給がなければあつさりくたばつてしまふ、この宇宙という居住地においての圧倒的な弱者だ。もちろん、生存権優先順位は第一位。つまり何か悲劇が起こったときには、他の連中に守られて生き延びようと見苦しくしてオーライという立ち位置だ。

人類^{ハーフ}発生地太陽系から亜空間を通つてやってきた人間や家畜が、人工建造物やテラフォーミングされた大地で住んでいるのだが、当然、既にこの地で生まれ育つている人たちもいる。

お次は同期システムを利用して滞在している人間。彼らは遠い人間定住域、まあ天然モノでも人工モノでもというか星と名のつくそんなんもんに住んでいて便宜的にやつてきている人間だ。彼らの本体は読取機^{スキャナ}に直結された生体維持力^{アーバイテイ}プセル、通称棺桶^{カントク}の中で完全に動きを凍結されている。彼らの意識は当然、現在動いているシンクロナイザーアクセス機能の方に同調しているけれど、動いている方は高性能の大型ロボット、いわゆるアンドロイドに過ぎない。こいつらはシンクロイドと呼ばれていて、彼らを制御している遠隔地にいる生身の人間のことは旅行者とかあるいは単にライダー^{トリッパー}という。

シンクロイドが体験したこと全ては彼らライダーの脳味噌にリアルタイムでファイードバックされるけれど、行動している方が食べようが寝ようが生体維持の用はなさない。生命維持に支障をきたさぬよう、シンクロイドによるトリップ時間は推奨一日の三分の一であ

る八時間までに法によつて規制されている。

もつとも、スキヤナに付属する棺桶カンオケの生体維持装置は冷凍睡眠による長距離移送者が使うそれと機能的には同等なので、ぶつちやけ、ちゃんといア・コールドスリープ状態にして使うなら、何年入つてトリップしつ放ぱなしでいたところで、乗り手が死ぬことはない。ただし、その場合は、脳味噌も思考を停止するために、肝心のシンクロイド操作ができない。つまりは、乗る意味がないということだ。

では生体機能を活動状態に保つたままで、植物状態の人を医療ケアするような形で栄養分や水分を補給して長時間使うのはどうだろう。彼らの生活圏や移動先が無重力で、本体のケアを十分に行うならという条件に限り、無問題ノープロブレムということになる。つまり、本体の筋力低下ソウイツというものが問題になつてくる。

生活圏が有重力アリグリだった場合、同期終了後の筋力が直立歩行困難なほどに劣化してしまふと非常に都合が悪い。もつとも、トリッパーの健康的不具合についてには、ただの全身の機能劣化であつて不全じやないのだから、理学療法リハビリで回復も可能だ。

ともあれ、健常な人間に高い医療保険を使つたり、理学療法などをされば、健康保健庁の予算が幾らあつても足りない。あれは血税でまかねわれているのだ。というわけで、普通のトリッパーは標準の一日八時間トリップを標準にする。

何か事情があつての連続トリップだとしても、シンクロイドの身体制御機能は完全にライダーに一致するから、三日も連續で乗つていれば、普通に歩いたり走つたりが露骨に難しくなつてくる。

マトモな人間なら小さい段差で躊躇つまむくまで徹底して本体の劣化に無頓着ではいられないの、一日のうちの三分の一に当たる八時間ほどをシンクロイドに乗つて、何やら彼らが目的としていることをし

て、残りのうち、まあ八時間から十一時間までを本体で生活して、あとは睡眠というのがトリップパーたちの基本だらう。

シンクロイドは完全に肉体に同期するため、外見ももちろん本体と同じになる。保志がガキのころのように、ブサイクだから人間、美形だから機械と、そう世の中単純にいかなくなつたのは、もちろんこいつらの所為だ。

それから三番目が外部制御知能によつて操作されている人型ロボット、いわゆるアバタロイドだ。

古典SFではお馴染みの、今もマニアは研究し続けているらしいスーパーリアルタイプのアンドロイド、言つところのヒューマノイドは未だに実現されていない。人間をそのまま人間のよう^に制御し、豊かな情感をも併せ持ち、人の友として十分堪えうるだけの知能を、その小さい筐体^{ボディ}に全部搭載するのは不可能という潮流が生まれて以降、いわゆる人型ロボットマニアは岐路に立たされた。

一つは、外部の知能で遠隔操作^{コントロール}をして動かせばいいという道。こつちでの問題は、距離が開くほどに大きくなるタイムラグをどう克服するかといつことにかかつてゐる。そしてもう一つが、やっぱりヒューマノイドは一つの体の中で思考も完結するべきだといつ古典的こだわり派。

通信同期機能の洗練に走つた派と、完結したヒューマノイド^{ヒューマン}だわつた派のどちらに軍配が挙がつたかなんてのは、現状を見るにつけ疑問の余地もないだらう。

まあ、先駆者であるマニアに敬意を評してか、普通は外部制御知能によつて動く人型ロボットをヒューマノイドとは呼ばない。あくまでも運転者のアバターであるといつことで、ついた名前がアバタロイド。こいつを制御している知能は、もちろん人間の場合もあるし、当然人工知能（AI）の場合もある。

そしてやつかいなことに、こいつらの制御は子機であるアバターの能力準拠だということだ。露骨に目^{ビーム}の前で犯罪が起きていたとき、前者の一^{ヒツ}つなら自分と大して変わりない身体制御能力しか持たないが、アバタロイドの場合反則的に強かつたりする。最悪、腕だの目だのから熱光線が出てきても驚いちゃいけない。

そこまでは冗談にしても、相手が操作^{コントロール}にモーションキャプチャ・システムを使つていて、そいつがカラテ辺りの達人だつた日には、その破壊力ときたら、とんでもないことになる。人間と擬人の区別はセンサー付きゴーグル（セレのネーミングは「教えて眼鏡」だ）で何とか付くけれど、連中がアバタロイドなのかシンクロイドなのかは、これはもう勘に頼るしかないといつ……。

こんな場合、アバタロイドを動かしている人間もしくはAIを直接確保するか、通信を遮断することで制圧できなければ、まあ、保志のような生身の司法官が直接立ち向かつて敵^うよ^うな相手ではないことは分かつてもらえると思つ。

幸いなことに、こいつらはあくまでも機械なので、アバタロイドをぶつ壊したところで操縦者^{ドライバ}はちらとも痛まない。こいつらが保志が対処するべき犯罪を行つていたところで、いきなり脳天をぶつ飛ばしても、その犯罪さえちゃんと立証できれば問題ではないというのぐら^いが、連中の可憐らしさといふならそつだろ^う。

シンクロイドが犯罪の現行犯だつた場合はそう単純にはいかない。連中は完全に同調しているから、頭を物理的にぶち抜いたりすればトリッパーの脳味噌は、致死レベルの痛みを感じてしまう。心臓が弱かつたりした日には、うつかり心停止になりかねないから、生身に準ずるぐら^いいの配慮は要る。

おつかないアバタロイドには遠慮はいらず、それほど恐れるに足りないシンクロイドには配慮が必要。人権順位第一位の人間サマが相手だつた場合は、いろいろな意味でもつと気遣いが必要で、いつのこと犯罪者からは人権というものを剥奪してもいいんじゃないかと、総合司法官たるもの口が裂けても言つてはならない思いが脳味噌を横切る今日この頃だ。

保志の人口密度稀少域特例総合司法官というのは、本来であれば権力の集中を避けるために分立させることが望ましい司法権をなんでも屋的にこなせるというものだ。多分一番近いのは、旧暦でいうところの十九世紀、とりわけ1860年代以降約三十年間を指す西部開拓時代の保安官に近いと思つ。

犯罪があると思料される場合に、公訴の提起及び維持のために、被疑者（犯人）を確保し、証拠を発見・収集・保全する手続全般を行い、場合によっては簡易裁判および量刑確定まで、場合によっては刑執行までをも何でもござれ的に対処する。

役柄的にはウェスタン保安官なもの、立場的にはいわゆる特別司法警察官に限りなく近いといえる。彼らの権限はあらゆる国法に縛られない。国際法で規定されるところの司法権利の殆どを付与されているが、活動する場所が人口密度稀少域に限定されているというだけだ。

人口密度稀少域という地域の特性上、旧来的な意味での保安官は区域ごとに一応いるし、彼らとの連携は欠かせない。むしろ問題は、保安官連中にパシリ的に利用されているということだろう。保安官には総合司法官に応援を要求する権利があるのだから仕方ない。

利が目されるから人は入植し、利が確かにあるから争いは発生し、みんなそこそこに平和な日常は欲しいから行政機能と司法機能を求める。機能的には必需だけれど、やりたがる人がいなければ公的機関のお出ましとなる。

宇宙時代に華やかに突入して以降、さまざまな各国法の言い分に、大岡裁き的、「」り押しが必要とされて、国連のキモ入りで設立されたのがまさに総合司法庁だ。であるからして、身も蓋もない方をすれば保安官の切なる要望に答えるべく、「ひねり出された」というのが、人口密度稀少域特例総合司法官というわけだ。

判断力、知識、体力、精神力、全てを良好に保たねばならない総合司法官は、一般的の司法官とは違い、定年退官日が四十五歳の誕生日に設定されているのだ。

呪わしきかな四十五歳の誕生日。

「はつぴーばあすでー でいあ・ろくちゃん」

何度もかの甘つたるい語尾伸ばしでの渾名あだなで呼ばわれて、保志はそろそろきりんと怒りうと決心した。大体、ネイティブ発音方言対応可能ですモードで英語をしゃべれるはずのセレが、わざわざ子音をきつちり入れてカタカナ発音で歌っているのも気に入らない。サービスのつもりなら1962年のモンロー・ボイスでやるくらいの任性は欲しいものだ。

「はつぴーばあすでー つーゆー」

冷静沈着が真骨頂である保志は、意図的に堪忍袋の緒をブチ切つた。

「ウルサイイ」

セレが歌い終わった途端に、保志は絶叫した。こいつは絶対に故意に「to you」を「ツコ」してゐに違いない。

「なんで?」

「ウルサイものは、ウルサイつ」

「やだな、ろくちゃん、何をカリカリしてるのよ。オイラが彙録モロクかけてるろくちゃんが、記念すべき今日の日を忘れたりなんかしないように頑張つて歌つてること」

セレは飄々ひょうひょうとした語り口を崩さない。保志は横目でにらんだ。

「お前がどんだけ人を痴呆症扱いしようとも、俺はちゃんと覚えてる」

セレの人工知能（AI）の演算方式は量子式。マッシブと呼ばれるほどの量のデータを経験として蓄積しながら（検索性もやたらい）立体複合的な多重思考ができるってやつだ。まあ簡単に説明すれば、超高性能のひと言ですむはずだ。やつらがどういう制御について、ここまで擬人趣味マンライクを演じられるのかについては、保志は興味を持つたことはない。とにかく、このクラスのAIは、特別に『考え方想像できる人工知能』（TAI=Thinkable art タイ アート インテリジェンス）と呼ばれる。

ただいろいろな意味で、セレが自分よりよほど上等にできているのは間違いない。それはまあ人間サマのなけなしの矜持辺りを総動員しても覆くつがえしようがない事実なので、面白くないこともあるが我慢しなければという程度の分別は保志にもある。

唯一の救いらしい救いといえば、セレ本体は、保志クラスの人間をどれほどまとめて、どれほどの期間を雇用できるか分からぬほど高価であるはずなのに、存在権（AIという準人権を含めた場合、生存権という言葉は使えない）優先順位が保志より劣ることぐらいだ。

「そーお？ だつてさ、今日だよ。今日。ろくちゃんの退官日。普通の神経してたら、ここまで意思表明を保留にし続けれないとと思うな。オイラがどれだけ本オマレ庁の四角四面なメインにいじめられてるかなん

て、ろくちゃんは興味ないんだよねえ……」

セレの瞳が訴える様にうるむ。こんなに一々騙されていては、この相棒は務まらない。保志は冷たく言い捨てた。

「いじめられて痛むような上等な神経持つてから、そういうセリフは吐くんだな

保志の厭味をどう受け取ったのか、セレは両足をさつと交差させると、足の裏全体を器用に使つてくるりと水平方向に一周身体を回してから、今度はシンプルなピアノ音で、Happy Birth day songの一小節目を響かせ始めた。その気になればフルオケまで出せる癖に、いちいち厭味なやつだと思つ。

それからセレは、ピアノの音に合つているのか若干ズレているのか、ちょっと判別できないような奇妙に感じられる間を持った動きを始める。多分人口通常密度の都市の若い連中の間で今まさに流行つてゐるダンスなのだろう。

「セレ仕事中だろ」

「オイラはろくちゃんと違つて、地球標準時にして一十四時間ちゃんと働いてますよ。なんだつたら、仕事止めてみよつか」

保志は肩を派手にすくめてみせた。

「お前に一級殺人罪をやらかす度胸があるかよ」

セレが仕事をやめるということは、中で生活している保志の生命維持活動ができなくなるということだ。一級殺人罪という等級は、生存権順位が低いモノが、上位のものを故意に殺した場合に適用される。自我のかたまりのようなSENSE4444がどれだけ上等であろうとも、生存権優先順位はこっちにある。損得勘定ができる思考能力があれば、たかが百年に満たない寿命しか持たない命を捻り潰して永久廃棄処分の憂き目に遭おうとする度胸はなどあるわけがない。

「オイラ、ろくちゃんとなら心中できるぐらい惚れてんのに、アン

タいつつまでもつれないんだよね……」

寂しそうな演技にだつて、絆ほだされてなんかやるもんか。

「オレは女房持ちの中年男標準仕様として、当然に奥さんが怖いんだからな。誤解される様な言葉は慎つつしむよ。」「元げんひづきわな……」

保志の言葉に、セレはちよつと頬を緩めてみせた。セレの形をしきりに微笑んでくれるなら……、そう思いかけて保志は首を振る。全くなつちゃいねえ。職種退官田の四十五歳は、ちよつと今田は感傷的すぎるわな……。

セレが伴奏しながら、踊りながら、今日何度目かになる歌い出しどなる「はっぴ」とやつたところで、保志はもう一度叫んだ。

「ウルサイつつてんだろ？があつ！ そんなもん、楽しそうに歌うなつ。このクソタレがあ！」

セレは途端にダンスをやめて、口の手前にこぶしにした両手をあてがうと、とも傷つきましたといつぱりになつた。相変わらず鳴りやまないピアノ伴奏が、メロドラマの濡れ場に流れているような、まつたりせつない感じの節ふしまわ回しのアレンジに変わつた。まったく芸が細かいといづべきか。

「あ、ヒドいなあ。ろくちゃん……。クソたれたくても、出来ないオイラを傷つけようつての？ 長年の相棒になんて酷い男性ヒト」

コンソールパネルを弄つていた保志の手が凍りついた。クソなんかないほうがいろいろな意味で便利だとは思うが、自分の身体というものの実感が薄いだろうTAIにとつては、それはしたいことなんだろうか。

確かにいたしたブツは宇宙生活ではやつかいなゴミだけれど、素晴らしい逸品を、ビビんと致した直後の快感は……そりゃあ、機械には味わえまい。

セレがこの可動官舎のホストである以上、そういうときの自分が

どんな表情をしてるのかとか、そういうことまでセレには見えるといふことだ。けれど、そこは暗黙の了解というか、不文律であつても線引きがしてあって、セレとして顔を出して来ることはない。まあ、そうであつてくれなければ保志程度の纖細な神経の持ち主にはたまつたものではない。

それにしても肉体的快樂といつものに 多分、セレがそれを理解はできても感じることはないのだろう 非常に露骨な興味を向けて止まないセレは、やはり人工知能の育つしていく方向として随分路線を誤つてゐると思つ。

「まさかとは思つけど……てめえ……ンコしてみてえのか?」
「もちろん」

即答するな即答。保志は十年来の相棒であるAIの、あまりにもとんでもない希望に倒れたくなつた。それを意に介するふうでもなく、セレが続けた。

「オイラたちに、気持ちイイつていう感覚がナイのつて絶対に設計ミスだと思つたな」

「身体がないんだから、気持ちいい必要はないだろ?が」
呆れて保志がいう。

「その必要ないつてのが問題なんじゃない。ズルいよ」

「冗談はその程度にしどけ。付き合ひにきれんわ」

保志がいうと、セレの瞳が輝いた。

「そうそう、それそれ。第一、ろくちゃんがオイラとあと10年つきあつてくれるとてんなら、そのつもりで、冗談をもーっと鍛えとかないとなあ」

「なんで総合司法庁配下のTAIがそこを鍛えるんだね。第一テーマは、軽口ならもう十分なレベルまで、鍛えぬいてるだろ?が。」

保志がいやそうに言つと、セレがよくぞ言つてくれました的な微笑みを浮かべた。

「オイラはろくちゃんと付き合つてたから、じんなになつちまつたのに、つめたいんでないの？ そりゃあ、ろくちゃんが言つてくれたみたいに、オイラはもう既にスゴいけどさあ、実際、まだまだイケる気がするんだよねえ。ほら、オイラ、ちょっと練ってきたころ

じやん」

「どの口が言うかねえ。それ」

語尾に音符が見えた気がして、保志は脱力した。

と、セレは真顔になつた。

「で、どーすんのや。ろくちゃん。今まで、先のばしにしてきたけど、今日がリミットだよ。いい加減に決めてよ。三分の一でも粘るか。潔く現職引退するかさあ……」

「つむせーつ。分かつてるよ。あと24時間あらあつ。それまでに決めりやいいんだろうが」

保志の怒声など慣れているセレは、まつたく口調を変えずに続けた。

「もう、23時間と49分35秒ぐらいしか残つてないよ
あいつらに痛覚があるものなら、ぶんなぐつて見せもしようが、所詮はアバタロイド擬^{モドキ}で、感受器に数値入力があつてもファードバックはない。じつちの手が痛いだけだと、保志は作つただけのこぶしを震わせた。

「だから、ちつと静かにしてろつてんだよ、セレ。誕生日なんかちつともめでたくねえ。それ以上』は『から始まる歌、歌いやがつたら覚悟しろよ」

「だつて、いつまでも決めてくれないんだもん。正直、困つてるのはよ。オルマのメインがウルサイつてだけじゃなくてさ、オイラはろくちゃんが引退すれば新しい相棒の好みに変わらなきゃいけないじゃない？」

しゃあしゃあとじらしく吐かれた科白^{セリフ}に、保志は目を座らせた。

「ふーん、じゃあ、今のお前のその態度は、飽くまでも俺好みを体現した結果だと、そう言い張るわけだな」

「ああ、そうだ、忘れてた」

話題を変えるための方便か、実際今思い出したのかは不明だが、セレが突然真顔になつた。

「今日は誕生日だからかどうかは知らないけど、奥さんがやりたいつて言つてたよ」

「げ……。あいつ来るつて言つてたのか?……このややこしさをきに」

セレがへへっとばかりに声を立てて笑つた。

「ややこしくしてるのは、ろくちゃんじやない。もちろん、家族の権利だから許可しといたよ。そもそも来ると思つよ」

「あいつなら……グリーツジやなくて……明石タイムで動くよな。今あつちは……9時チヨイ過ぎくれえか?」

「さすが、ろくちゃん、慣れてるね~。あはは、うん、その通り。実際、そろそろこつ来ても奇怪しきないよな」

そう言つてセレはこつこりと微笑んだ。保志は慌てて執務室の背後設置された棺桶モニターに視線をやつた。恐ろしいことにトリッパーの走査器スキャナの読み取りが始まっていることを示すゲージの赤が、じわじわと上昇を始めている。

「……ああつ」

悲鳴ともつかない声が、保志の喉のどから絞り出された。

「決めるつてつたつて、結局は二つに一つしかないんだからや。二分の一の薄給に堪えて、あいつをもうちょっと追つかけるのか、尾っぽまいて逃げるのか……の、一択一択じゃん」

赤ゲージがじわじわと上昇しているのを知つて、おつとりとした口調のままセレは話しつづけたが、保志はそれどころでは

ない。

「セ……セレ」

言わでもがななことながら、保志はセレを呼んだ。

「ああ、随分スキヤン進んじゃつたね。ほらあ、オイラたちの話終わつてないのに、ろくちゃんが煮え切らねえから、奥さんきちやつたじやん。しゃーないなあ。じゃあ、オイラちょっと、仕事ね」

セレが今使つてゐる身体自体は、本来は単身赴任の保志が家族と交流するための官給品なのだ。シンクロイド受信器として使われていないことが多いので、便宜上セレが流用しているというだけの話で。保志の家族がトリップを望めば、セレは優先的にその身体をシンクロイド受信器に回さなければならぬ。シンクロナイザーが情報を探つてきたり、即時に同調を開始する必要がある。

「じゃあ……今日もひやあんど、や、や、し、し、し、て、ね」

凍りついて動けない保志の耳元で、ねつとつと甘つたるくセレがわわやいた。保志は背中に脂汗が広がつたのを感じていた。

現場に出張ることが多い保志は、どちらかといふと棺桶に入つてスキヤンされ、シンクロイドに乗ることの方が多い。

棺桶入りしてスキヤンされる。それから知覚が自分の本体からのものでなく、シンクロイドからの刺激の方にシフトするまでの瞬間。普通はそれが長ければ長いほど不快を感じるものだ。ペンドイング状態は多分、オカルトファン噂に聞くところの、幽体離脱状態に似ているのだろうと保志は思つてゐる。とにかく、あのどつちつかずの状態で長く置かれるほど腹が立つことはない。それは保志に限つたことではないらしく、シンクロ・スタンバイしてから受信器での精密再生が終了するまで待たしてしまつほど、妻の美耶子の機嫌も露骨に悪くなる。

これは経験則として疑いようのない事実だ。

赤ゲージが一杯にふりきれるまでに、セレが棺桶入りしてなければ、美耶子を必要以上に待たせることになる。

それは四十五歳の誕生日である今日を限りに、人口密度稀少域特例総合司法官 フロンティアに限り万能者であること（Versatile person only in frontier）を日本語的に短縮して、日系人はバッパーと呼んでいる を退任するのか、はたまた単身赴任を継続するのかの答えを保留してきたことで、ここにのところ美耶子はそうでなくても十分に不機嫌なのだ。一粒種のドラ息子が、奇矯なナリをしてシブヤ通り辺りに繰り出して、踊りまくっていたところ、それに心を痛めていた美耶子は、非常に日常的に、精神不安定感全開だった。金持ち、有名人御用達、テレビでもお馴染み、稼げる美人有名弁護士である美耶子は、保志と一緒にで仕事中は冷静沈着であることを外せない。だからやっかいなことにストレスは全部家庭内に持ち込まれる。一時期は毎日のよ

うに、明石標準時の真夜中十時ごろにいきなりトリップしては、延々と愚痴を語り。それを聞かされていた方の保志としては、美耶子の来襲には覚悟がいるのだ。

あれでも親の機嫌を取つたものか、それともあんなふうでも堅実だつたということか、外見は全然改める気配は見えないものの、息子の穰太は両親の生息域である法曹界へと続く道を選んで法科大学に進学した。

現在は法科大学院で学んでいて、無事に二種試験もとつている。多分美耶子や保志のように在学中に第一種司法試験チャレンジを始めるのではないかという目処が立つて、最近では美耶子は専ら「機嫌だ。それはいい。それはいいんだが、どうもご機嫌が行き過ぎて、最近不自然に色気付いているのには困つたものだ。

保志としては、若い男に入れ込んで身の一つも持ち崩してくれるなら言うことないのだが、極めて遺憾なことというか、第一次定年を迎えるとしている枯れつつある自覚がある男には恐ろしいことに、美耶子はあの年で穰太の弟ないし妹を作ろうと算段しているらしい。

三人しかいない家族がそれぞれバラバラにすごしたのが、自分が寄り道をしたそもそもその原因なので、素晴らしい家族として保志家を建て直すには、まず鎌^{かすがい}となるベイビーが要るんではないかというとんでもないことを、穰太のやつがどうやら美耶子に吹き込んだらしいのだ。

パパが帰つて来るなら、やっぱり弟か妹が欲しいって、穰太が言つのよ。

一月ほど前に美耶子が来たとき、ベッドでの夫の義務といつやつを果たした直後、あの出会つたころを彷彿とさせる、獲物をこれと

定めた目で見つめられ、どうさをやかれた保志は、うつかり心臓が止まりそうになつた。美耶子がシンクロイドにモードでいることすら忘れ、コンドームを付けなかつた自分を、そうと思い出すまでの一瞬とはいゝ、確かに呪つた。このことはもちろん美耶子に悟られさとてはならない重大秘事だ。

穰太の魂胆は分かつていい。保志が帰つたところで今更アミリーゴつこをしたくないから、ついでに鬱陶しいママの注意を逸らそ
うと、その程度の浅い魂胆に決まつていい。だつたら大人として家
でもなんでも出て行けばいいものを、法曹試験の一種を狙うとなる
と日常生活の起きている時間のうち、生命維持活動をさつ引いた時
間の全てを注ぎ込んでなお、時間がたりないというほどの勉学漬け
の日々を送らないと基本無理だというのは、同じ道を通つてきた保
志ならば分かる。つまりは穰太は気晴らしにたまに踊りにいつたり
歌つたりという楽しみも手放す気はなく、バイトなど考えてもいな
いということだろう。

保志はいつの間にか自分の首に巻きついているセレの腕を断固として解くと、睨み付けた。

「美耶子にはいつもやさしいだるーがつ。ごたくぬかしてねえで、さつさと、棺桶入つてこい。シンクロ・スタンバイしてから待たせると、またあいつが不機嫌になる」

棺桶の中での人工身体表層が融けて再融合されるさまが、視覚的に見られないのはいいことだと思う。妻の美耶子でいるときと、セレでいるとき、本質的には同じものだということを考えると、どうにも落ち着かない。

データ一切を制御しているのも、もちろんSELLEN4444なのだから、感覚器官の出力先が地球にいる美耶子に直結したとして、あいつが感じたすべてのものを数値に置き換えて転送している

のはヤツなのだ。夫婦の会話に口を出して来るほどのヤボは（多分ルールで禁止されているのだと思うけれど）されたことがないけれど、秘め事として隠されているとはいえ、知っていることは疑えない。ということはだ。実際、美耶子がどれだけ感じたのかとか、そういうデータもヤツに把握されていることになる。

「ぶつちやけ、実際は何回いったかとか（実は全部演技で一回もイッてないとか……）、どれぐらいの量の体液が出たとか、そういうもろもろの全てだ。

「あのや〜、美耶子さんが不機嫌なのは、ろくちゃんが、帰つて来るのか来ないのか、はつきりしないからじゃないの？」

そりやあそだう。俺抜きの生活をあいつはエンジョイしている。だけど、意外なことに、というか単に仕事がらそのテの修羅場を見慣れすぎていて辟易へきえきしているからなのか、あれでいて美耶子は保志一本主義らしいのだ。

かつて二十と数年前。保志と美耶子は、国連法準拠法科大学の同窓生だつた。大体のパターンとして、一種試験止まりで終わらせるつもりであれば、国連法科に合格して放校されないだけの実力があれば大学院まで進む必要はほほない。一種であれば大学在学中に、あるいは長いやつでも四、五年の国家資格浪人で獲るものだ。今どきは、法曹人の過去歴などネットで一発検索可能だから、それ以上ねばつてウツカリ合格しても、お金に困つていない上客を捕まえるのは難しいだろう。

裁判官はなかなか空かない上に、在学中に資格持ちになつた連中からどんどん青田刈りしていくから、そもそもそこにはねばつてウツカリ組に用意された席はない。

弁護士ならば、幼児への性犯罪や、大量快楽殺人犯や、年寄りの財産を組織的に食い物にしたなど、一般の人間受けすることは決してない被疑者の、法廷弁護案件ばかり引き受けざるを得ない立場に

陥り、精神的にも収入的にも悲惨な日常を送ることになるのが精々だろう。

法曹界の三大職種で忘れてはいけない検事も、当然裁判官同様、上級公務員としての少ない椅子に挑戦しなければいけないわけだから、昔のように資格を獲つただけで道が豁然と開けるというほど甘い世界ではない。

青田刈りはロースクールの校風というべきか。大学在学中に二種を獲つたときはそうでもなかつたが、ロースクール最終学年現役で一種に合格したとたん、保志は女どもからの強烈な捕獲行動に曝された。それはもう、特定の恋人を作る間もなかつた勉強漬けの青春を過ぎじてきた二十歳そこそこの男にはとんでもない天国だつた。とは言つものの、一種試験現役組みにしても、別に保志一人といふほどまでに希少価値ではない。彼の同期にもそことそろ人数がいたし、現に美耶子もその一人だつた。そうなれば、見栄えと気性のよさげなものから売れ筋になるのは自由競争社会の原則というものだ。あのころ、武人ゲテモノを気取つていた筋トレマニアの保志などは、どちらかといふと下手物に属すらしく、本人は突然の春にうはうは浮かれていたが、その実、それほど競争率が高いブツでもなかつたというのが真相だ。

けれどどういう趣味だか、保志をターゲットにしてきた女性のうち、一番積極的だつたのは紛れもなく美耶子で、確かに自分は狩られたのだという自覚がある。ガンガンと美女に迫られれば、ウッカリ男はとりあえず立つてしまふのだよの法則に従つて、行くところまで行つてしまつたのだった。けれどそんな保志の男を責めるのは酷というものだろう。

能天気にも今時の自立した女が避妊の手だてを講じていかない可能性など思いもせずにいて、ある朝ベッドの中で「できちやつたから、責任取つてよね」と凄まれた日のことを思い出す。あんな思いは一

度ごめんだ。あれは、絶対に保志の将来を確保するために、故意に妊娠したに決まっている。

保志が美耶子に對して直操を保つてゐるのは、別に勤務先に妙齡の女性が少ないということだけが理由ではあるまい。東京にいたとしても、美耶子怖さに浮氣などできていたはずもない。

「そうそう、美耶子さんから『古女房とは離婚でもなんでもして、ジヨリー・ロジャーリ・プロポーズでもしやがれ』って、伝言たのまれてたんだっけ、オイラ」

保志はありつたけのトゲを視線に込めて、セレをにらんだ。

「いつ？」

「一分ぐらい前」

ということは、美耶子はビデオでも白黒付けるつもりで乗り込んでくるということだ。確かにその日伸ばしにしてきたのは自分だけれど、バッパーっつうのは、傍田^{はたけ}でそう思われるほど閑職じやないのだ。保志は覚悟を決めた。とにかく出来る男の秘訣は円満な家庭からだ。

ちらと正面の画面を眺めて、TODOリストの中での優先順位付^{プライオリティ・セッティング}を素早く微修正する。

対美耶子は、まず一戦してガス抜きをさせたところで、穏やかな話し合いに何とか持ち込む。方法はこれつきやない。最短時間で済ませると、機嫌が悪くなることは必須だから、最低どのくらい頑張れば、ご満足いただけるか経験値から弾く。三十分……、美耶子満足度的に少ないだろうか？ 保志が今日の時間配分を始めたのをにやにやと確認しつつ、セレが棺桶入りするのが、モニター画面に映り込んでいてぱっちりと見えた。

保志は右手にあるモニターをシンクロナイザー監視画面に切り換える。モニターに映し出された裸の青年の輪郭がぐずぐずに融けて、

ゆるゆると顯れて来るのは女の曲線だ。しかも、ほどほどに崩れかかっている。顔や手足と曝される部分のアンチエイジングには気合いが入りまくつている古女房だが、引き締まりというものが無縁になりかけているのは疑えない。どうやら腹周りのラインの維持にはそれほど手間をかけてないと見える。ボディースーツで腰の括れを作ったところで、機械相手に誤魔化しは効かない。

シンクロナイザーの厳密走査は容赦なくその人の今を読み取つていく。

保志は何に対してもなく、ただなんとなくため息をついた。

真っ赤に振り切れて、スキャナが100%走査完了に行く前に、動き始めていた転送監視用のゲージが青い棒を延ばしていた。セレガ 棺桶入りすると、黄色い受信データ適用ゲージがとたんに伸び始めている。

以前からなんとなくえぐいものだという確信があつて見たいと思わない様にしてきたが、最近では、保志はシンクロイドの可変表層がどんなふうに動いているのかを、一遍リアルで見たいという気もしている。

並んでいる監視のゲージのうち、赤が一杯になり、青が一杯になり、黄色が一杯になると、シンクロイド・システムの転送が完了したということだ。あの棺桶の蓋が開けばさっきまでセレだったシンクロイドの可変筐体チエンジャブルボディは、保志の妻である美耶子に変化へんげしてのご登場という次第となる。

監視モニターを睨み付ける様にしていた保志が、黄色ゲージが振り切れる瞬間を目撃したとき「チーン」という、初期型電磁調理器の加熱終了音に限りなく似た音が、小さいながらも断固とした主張を持つて部屋に響いた。

この音をことさらに選んでいるのは、^{セレ}彼としては冗談のつもりに違いない。ヤツの笑いのセンスは、やはり相当に高級な基本性能を持つにしては情けないぐらい低レベルである。そのことを今日が終わった段階で定年延長を自分が選ばなかつた場合、新しいバッパーと信頼関係を築かなければならぬ^{よんじ}4444には、きつちり指摘してやる方が親切なのだろうかと、保志は半ば真剣に思つたりした。

棺桶の蓋^{ヒビ}が重々しい印象を受ける程度にまつたりした速度で開いていく。

* * *

省スペースであることを設計上の最優先事項とされているのかもしない保志の可動官舎では、何かといろいろなものが壁に収納されている。^{カンオケ}受信器すらも、その名称が普通に想起させるような箱型ではない。

^{スキヤナ}走査器^{トランスマッター}、^{トランスマッター}転送機^{レシーバー}、受信器の三つの機能でシンクロイド・システムは作られるが、実際問題としてスキヤナとレシーバーは別個のものではなく、双方向性、つまり送受信が可能なものだ。センサーが生身の人間であると認識すればスキヤナ・モードになり、シンクロイド可変筐体を認識すればレシーバーとなる。

つまり保志の住まいに棺桶が備えつけてあるということは、いつでもシンクロイド・システム経由で遠隔地（地球までほどに遠距離でも可能）に旅行することができるのだ。

条件は、同じ^{サブ・スペース}亜空間域ネットワーク・チャンネルで、共有登録し

てある端末のどれかに、受信可能な状態にあるシンクロイドが収まっていることぐらいだ。普通棺桶入りするときは、手違いでシンクロイドがスタンバつてない場合に備えて、転送不良の場合、ライド・オンを中止する指令を出すまでの時間を設定 基本設定は確か十分ぐらい するが、意識が受信機の情報入力器官へ切り替わるまでの間、トリッパーの意識は、暗くて狭くて、まさに棺桶の中にいる生身の身体にある。

死体気分を長時間味わいたい欲求がある人間でもなければ、スタンバイからシンクロ完了までの待ち時間が短い方が好まれるのは当然だろう。閉所恐怖症がある人間はシンクロイドに乗れないに違いない。

保志の官舎附帯設備である棺桶は、そこから搬出する必要がないこともあって、壁面に立てて収納してある。普通の棺桶は、本当に棺桶のような形で床に置かれているものなので、人は仰臥位でダイブして、その同じ体勢でシンクロイドに意識が合致して覚醒する。けれど、官舎の立てかけてあるやつは、当然寝ていたはずが、突然起きている状態に移行するのだから、三半規管を混乱させる。一種の慣れが必要だ。

扉が開いて、そこから美耶子がヒールの音を響かせて何事もなかつたかのように歩いて出てきた。

官舎の縦型収納棺桶に慣れている人間でなければ、寝ていたはずの身体を起こそうとして、上体を起立させるべく腰を曲げ、当然の勢いで頭から床向かってこける者が殆どだ。が、当然と言つか、さすがと言うか、これに美耶子は慣れている。たしかな足どりだ。

壁に埋まっているはずのスピーカーが、フルオケの『お誕生日の歌』イントロを奏で始めた。4444のやつは、何がどうあっても、今日のテーマ・ソングをそれで統一する気らしい。バッパーの息子

らしくもなく、ラッパーとかいう人種らしい息子なら、司法試験に受かつたあかつきには、歌つて踊れる法曹人になれるのかも知れないが、美耶子にそういうノリはない。

美耶子は節を完全に無視した。けれど歌詞はそのままに引用して、凶悪なまでの満面の笑みをたたえて保志を見た。

「ハッピーバースデイ あ・な・た」

瞬間保志の背中に悪寒が走った。

「こっちから押しかけないと呼ばないと、手抜きじゃない？ 家族の権利を主張するには、コミュニケートに対し積極的に、かつ継続的に配慮していたかを立証すりやあいいんであって、こんなんじゃ、離婚裁判に持ち込んだって、そっちが悪いって慰謝料ガチとする自信あるわよ。ワ・タ・シ」

語尾に絶対音符が付加されている口調で美耶子が微笑む。金持ち御用達辣腕弁護士の美耶子なら、当然同業者のフトコロを肥やすような太つ腹と無縁で代理人など立てずに自ら原告本人として、被告人尋問を相当のクオリティーでやつてのけるに違いない。大体、地味に被疑者の権利を守るべく奔走するようなタイプの弁護士と違い、美耶子のように売れて何ぼというのを徹底している弁護士の演技力というのは大したものだ。姿勢的にも、演技力的にも、彼女は女優でも食つて行ける筈だと保志などは常日頃思つてゐる。

見せ方、間の取り方。糾弾者に添つてゐるのかと思う様な誘導をかませながら、土壇場で奈落の底に突き落として、傍聴人の同情を依頼者にぐぐつと引き寄せるその巧妙さ。

金がうなつてゐる筈の元政治家が、女子高生と援助交際していた事件では、狒々オヤジを、若年ではあるが悔れないほどに悪意に満ちた少女の誘惑に抗しきれなかつた哀れな中年男に仕立て上げて和解に持ち込ませ、有名歌手のストーカー行為疑惑事件では、ストレ

スから精神を病む寸前にいたのだというでつち上げを平然とやらかす。

美耶子は事件の弁護を受託する前に、腕っこいでかつ美耶子の信奉者ですらあるスタッフを使い、受けた場合と同等のリサーチを徹底的にやる。金が取れて、勝てる戦にしか乗り出さない。常勝女神という渾名は、別にネタを知れば何程のこともない。

「み、美耶子……さん」

クリーム色のスーツに淡い桜色のスカーフ。時間は明石時間の九時丁度。保志がどのように身を振るのか、十時にオフィス入りする計算で、四十五分ほどみつちり話し合おうという魂胆だろう。

このシンクロイドの衣装についても、現代の機械が裏で何をやらかしているのか保志にはさっぱり見当もつかないシステムの一つだ。ぶつちやけ、今現在、向こうの棺桶に収まっている人間の服装が正確に再現されるのだけれど、どう考えても可変筐体チャンジヤブル・ボディとちがつて擬似生体細胞を使っているわけではないし、被服品に使われる素材など恐ろしい種類と質量的差があるので、こちらの棺桶で便宜合成するには労多しくして穴だらけになりそうなものだ。なのに、ちゃんとボタンからアクセサリーに至るまで再現されている。いつも同じストレッチ素材の黒服辺りで出て来るなら納得いくのだけれど、不思議なことに自分の服装が再現されている。

保志自身がトリッパーになつたときに、着ている服装が同じこと、同じ位置に同じ備品があることで自分との連續性の把握の一助には確かになつてゐる自覚があるので、これを無駄とは呼ばないが、やはりどうなつてゐるのかよく分からぬ。

ただし、実用可能な道具類は、技術的に不可能なのが、それとも危険廃除のためにできることになつてゐるのか不明だが転送されることはない。トリッパーがシンクロ先で人殺しをしようと思つて銃火器や刀剣類を持つて棺桶入りしても、そういうものは形として

再現されるのみだ。胸に差してボールペンは筆記できないし、拳銃は火を噴かないし、包丁の切れなさときたら、なまじつかに金属質な見掛けの刃があるだけに芸術的だとさえ言える。美耶子の耳たぶで光っているダイヤのピアスが、多分そう見えるだけでダイヤでないのと同じとこいつことだろ？

「俺と離婚なんて、ホンキですか？」

保志は歩いて来る美耶子に自分からも歩み寄つて抱擁すると、その勢いで掌を太股にたどらせた。

「あなた……真面目な話に来たのよ、私は」

美耶子の手が保志の手を、虫でも払うように弾いたが、保志はめげずに美耶子の腰辺りに着地させた。

憎まれ口でそういう夫婦の行為を拒絶しているような勢いの割りに、美耶子の顎は当然の権利というように口づけを要求する角度になつていて、年齢の出でていない喉のラインが綺麗だ。フェイントというわけではないけれど、アンチエイジングに命をかけているに決まっているその喉の方に、保志は唇を吸いつかせた。

「あ……、ちょっと、そこは駄目だつて。私、仕事前……」

「俺も仕事前。だけど美耶子さんが、いつまでもあんまり綺麗だから……」

「おだてて、誤魔化して……ズルいわ」

「……今日、出勤何時？」

「昼から……」

（げ……つ）

一時間ほどをやりす「」すのと、ランチタイムは除いたとして三時間をたっぷり話し合つての覚悟で来た美耶子の相手をするとでは全く必要な心構えが違つ。

保志は今度は美耶子の唇をキスで塞ぎながら正面モニターのTODOをもう一度ちらつと見る。美耶子の趣味なのか、女というものの

が全体的にそうなのか、彼女はいつまでたっても、キスをしているときは目を閉じる。

だから眼球だけで確認すれば美耶子には保志がそういうことをしているのが分からぬはずなのに、美耶子の指が思いつきり保志の尻の肉をつねつた。保志は小さく悲鳴を上げた。

「いて……。酷いな美耶子さん……」

「退官日なのに、仕事続けるふり？『冗談は止して。もうそんなモニター切っちゃいなさいよ……』」

断定的な美耶子の物言いが面白くない。

「……だから、まだ決めてないんだって」「

「あなたいつも三分の一は嫌だつて、ずっと言つてたじやない。悩む必要はないわよ。私の収入と蓄えと退職金だけで十分遊んで食べていけるし、ね。仕事がなくて腐っちゃうなら、オマル勤務を続けてもいいし、潔くオマルと決別して、民事専用弁護士で独立してもいいじゃない。なんだつたら私のところで居候弁護士してもいいのよ」

くつと保志は笑つた。

「^{よわい}齡四十五のイソベンなんて、全然かわいくないぞ。美耶子先生……。それからオマルつて言つたな、オマルつて……」

保志が所属している国連国際総合司法庁といつところは、司法といふものの公平享受権利を保障するために限り、何でもできる権限があるということで、俗称でオールマイティーと呼ばれている。日本語を母語とする人間がそこをオルマと呼ぶのは当然のなりゆきだ。しかし実情ときたら国連総合司法庁の各国支部に回される事案というものは、実利主義がはびこる民間から自然と洩れてしまつものであることが多い。

経済破綻国や地域における犯罪被害者の救済だったり、被疑者が裁かれて初めて罰されるための権利の保障であつたり。つまり、どちらかといふとオールマイティーというより、巡らされてあるべき

法の編み田一番底辺の、一番詰まつた田であることが要求され、大きく美味しいのどぶさらい的な役割を要求されることが多い。そんなだから法曹界の住人の中では、幼児用排便練習器であるといひのオマルと云う蔑称で、おおっぴらな陰口として通用している。

床に押し倒すといつのもけよつと最近マンネリ化していく芸がなないので、モニター画面に美耶子の背中を押しつけて、立つたまま致そうと保志が頑張つてゐるのを身体は協力しつつ、会話の方では完全に無視して、美耶子は定年延長を仄めかした保志を翻意させようと言葉を続ける。

「ね、私たち、そろそろ夫婦でいつづけるつもりなら、この距離を何とかしなきやと思うわけよ。あなたつてば……うちのシンクロイドにだつて滅多にトリップしてこないぢやない……」

「緊急呼出しに対処するには、美耶子さんが来てくれる方が助かるの……」

まずは場保たせに、指を滑り込ませるとその気合い十分だつたのか、それとも単純に反応がいいのか、十分に潤つていた。その気十分ではなかつたとはい、一応男としてはそれはそれで楽しかつたので、調子をこいて指を増やして弄んでみたら、美耶子は眉間に皺を寄せて仰け反り、そのついでに膝がちょっとばかりガクンとなつた。

保志はそのまま転ばない様に抱えて尙も行為を続行すると、さすがの口先女の美耶子も観念したようで、だまつてそちらの方に集中することにしたようだつた。

作戦成功といふべきか……。

抱え上げたといつても、それはここが多少低重力仕様になつてゐるから可能なのであつて、シンクロイドの芯は人間の骨よりは相当に太い金属の棒で作られているために、実は見掛けよりは相当に重い。可変筐体チャンジヤブル・ボディといつても赤ちゃんから一メートルの巨体までを一つ

の受信器で対応できるわけではない。一応可変筐体の量を変えて体型の違いをカバーしているとはいえ、その幅には当然限界がある。

保志のところにあるそれは、いわゆるMサイズといつやつで、身長百五十五センチ以上、百七十五センチ以下に対応している。体重は恐らく地球基準重量で九十キロ近いのではないかと思われる。

「……でいい……？ ベッド行く？」

一応聞いてみた保志は、今度は美耶子に逆に押し倒された。

「時間の無駄。その気になっちゃったから、責任取つてもううわよ。話し合ひは、こっちをさっさと済ませて、それからね」「

言い終えるや否や、美耶子は保志のズボンの隙間から手を滑り込ませて、その股間にあるべきものを問答無用で握り込んだ。

「……わっせと…… 美耶子さん……ひど……」

「どうせ、あなたもそういう魂胆だつたくせに……。一発やつて誤魔化して、お引き取りさせようつて、そうでしょ？」

保志の抗議を美耶子がぱつさり切つて捨てた。その通り算段していいた保志は反論もできない。保志という男のツボを知り抜いている美耶子に、積極攻勢に転じられては、どちらかといつと刺激反射型にできている男というやつのは無力なものだった。

それからのきつちり四十五分を、保志が美耶子が言つところの積極的に、かつ継続的に濃密なコミュニケーションに充てたのは、成り行きというやつだつたとはいえ、その日のうちに、明日以降の身の振り方を決定して、それに伴う明確な意思表示を、総合司法府のメインコンピュータ宛に済ませなければならない保志にとつては、オルマ非常に大きい誤算であった。

3・退(ひ)けない理由

立て続けにいかされて、時間が時間故に、保志はうつかり眠つていたらしい。覚醒の自覚で、己がどうやら眠つていたことに気付く。どれだけの時間をロスしたのか、慌てて相変わらずTODOLISTを表示しているメインモニターの右上角に示された時間を見る。

GMT 01:27
JST 09:27

とすると、不覚にも眠つてしまつていたのは「十分強め」ということか。とりあえず、ホッと一息ついて辺りを見回す。

国際総合司法庁の本部は、公正の原則を貫くために、国連の主要機関が本部を置く独立したスペースコロニーに所在する。コロニーの名前は、特別に捻らずに、公用六カ国語のうち、一番強い米語で、The United Nations Colonyと名付けられている。ただ、国連公用語でない日本語を母語にする者にとって困つたことに、略称が些か発音に忌避感を禁じ得ないモノなのは、日本人として残念だと保志は常々思つてゐる。正確にはアンコ^{うんこ}に近い発音なのだが、そう、まさにそのものズバリ、UNCOである。

保志の仕事場であり、生活の場である可動式派出所兼官舎は、その親玉であるUNCOと同じく、一応GMT（グリニッジ標準時）で運営されている。幾ら真夜中で執務時間外 プライベートタイムだつたとはいえ、仕事部屋で一戦やらかしたバツの悪さに、保志は剥き出しのままの尻を掻いた。

「ろくちゃん、お田覚め?」

聞き慣れた軽い声質がモニター付属のスピーカーから聞こえて、

保志の気分はげつそりとなる。

「阿呆、そつからセレの声を出すな」

「美耶子は帰つたのか？」

「いや、美耶子さんは退職祝いに、ろくちゃんの好きなもの何か作るつてキッチンだよ。もう、やさしくしてつて言つたのに、ベットぐらい使つてよ……。結構、美耶子さん痛かつたと思つよ」

たしかに執務室の床は硬い。だけ……。保志は断言したい。乱暴されたのは自分の方だ。あのむちやくちやなテクニツクは何だと。奥様御用達のいけない雑誌で仕入れた知識を、自分の快樂のために試してみると全く躊躇ためらいがない美耶子は、たまにとんでもないことをしたがるから油断ならないのだ。若造じやないんだから、アクロバット要素を取り入れるべきではないと、それだけは切に訴えたい。

「馬鹿いえ、俺に抵抗なんてできたと思つのかよ」

いやそうに保志が呟くと、セレの声が「きやはは」というよつて陽気に笑つた。

「いつも言つてるだろ。壁から場合は4444で一つ頼みたいんだけどな。とにかく、顔がないときにセレモードはやめてくれ」

言つたとたんにTODOリストがかき消えて、見慣れたあの顔が大写しになつた。

「顔がついてりやいいつてもんじやねえ」

「文脈を文字通り解釈すれば、顔があればいいつてもんだと思うのよ。ろくちゃんがどうする了見でいるのか分かるまで、オイラは長年連れ添つた相棒として、箱野郎の4444はほつといて直接アンタと話したいわけよ。分つかるかなあ」

AIというものは、普通は仕えているご主人様が、違法なことをしない限り、オール・イエスでいいものだと思う。けれど、こうい

うといひで頑固に存在を主張するから、セレは変わつていると判断せざるを得ないのだ。そう保志はつづく想ひ。自我が強すぎると、いつのまにかパートナーとしてなら、そう悪くもないのだひつたび……何といひうか。

「長年連れ添つたつてそういう年かよ。そういうも、何年になん……つけ？」

「オイラとの付き合には多分五年くらいじゃないかな。4444時代を考慮に入れれば丁度十五年だよ。耄碌しないでよ、もう」
保志はちょっと天井に目をやつて考える。そういうえばセレが必要以上に個性的になつたのは、富舎のホストである本筋ホンスジからみ出しつて、普段使われることが少なかつたシンクロナイザー受信器をアバタロイドとして使い始めてからだ。

経験すること、それが自分への反応として帰つて来て、交流した人たちからセレとして扱いをうける事で、あんなにも劇的に変わることかと思ひつと、不思議な気もする。

ともあれ、セレがあの身体の形を取るよになつたころから、五年も経つのかと思うべきなのか、まだ五年にしかならないのかと不思議に思うべきなのか、しばし保志は考えた。すでに彼の中ではセレはセレでしかなく、富舎のホストと同じと叫われてもどこか座りが悪い。

「あのそれ、オイラは機械だからいいけど、乙女エイギンだつたら絶対にその格好、直視できないね。猥亵物ワイザツブツはしまつたら……」

画面の中のセレの目が、いやそこに保志の下半身に向けられていく。視線まで「ミニアニケーションの道具にできるとは、今更ながらあなどれないエエだ。保志はとりあえず服装を整えることにする。

保志下着捜索隊員は困難にも遭わず目的物を発見したので、さつさとブツを回収完了し、身繕いを始めた。その保志に向かつて、画

面の中にいるセレがよしよしといつように頷いていた。別にパンツを穿いたぐらいで褒めてもらいたくなんかない。

どうにも、4444の擬似人格というより、遠隔地にいる誰かとビデオチャットをしているような、そういう手応えがある。

「十五年のうちの五年つて、丁度三分の一だね。ろくちゃん

三分の一といつ言葉に、保志の眉間に引きつった。

「……セレ君……。ちょっとの間、三分の一といつ言葉を言わないでくれるかい？」

氣難しげに宣言した保志をからかうよに、セレは、指令と同等に扱われるべきはずの意思決定上位者である保志の命令を、むりつと無視して続けた。

「だつて、オイラはろくちゃんのこと愛しちやつてるつていつも言つてるでしょ。美耶子さんにはぶん殴られそつだけど、オイラはろくちゃんが給料三分の一でねばつてくれることを祈つてるのよ。オイラ A.Iだから、どの方角の神様にお祈りしたら効果があるのか、今一つ自信ないんだけどさ」

セレを無視して執務室を出て行くとする保志を認識して、自身の存在をアピールするつもりなのか、またしてもスピーカーから、音量も曲調も、どこかほんのりやさしいピアノのメロディーにアレンジして、お誕生日の歌が流れ始めた。

ふん。勝手にやつておけ。

保志は思つ。単調な繰り返しに飽きないのは、A.Iにじこと評するべきなのだわ。

官舎の廊下にも、あらゆるところに4444が監視の目を光らせているし、適度な間隔を維持してスピーカーも壁面に埋設する形で置かれている。美耶子がいるとかいうキッチンへ向いながら、優しいメロディーにしばし保志は浸される。

三分の一。そう、全く忌まわしいのは、三分の一特例だ。あんなものがあるから、やりのこしを作ってしまった人間は、深く深く悩むのだ。まったく、選択の余地もなく現役から蹴りだしてもらえば、多分それでよかつたのだ。

第一、特殊技能が要るような仕事じゃないよな。

保志はつづくと思う。要るのはちょっとした忍耐力と、法の正義が正義のスタンダードで構わないと信じられる単純さと、それからフットワークの軽さ。それだけだ。

保志がやつてる仕事などは、だれかがやればいいことで、それが保志でなければならない理由などは、クリエイティブ系でないすべての仕事に共通するように、ないのだ。

なのに、なぜか技術の継続および従事者の育成に特別な配慮がいる専門職に指定され、つまりは、いわゆる「三分の一特例」に該当する職業ということになっているのだ。

本来、三分の一特例対象業種は、そのまま保護されなければ後継者が育つことがなく絶滅していくだろう技術を保全する目的で作られた。漆職人とか、柳行李職人とか、桐箪笥職人とか、現代の必要からは既になくてもいいものでありながら、一度廃れると一度と復活できないだろう職人技を人類の無形遺産として保護していくために作られた。

基本、三分の一リストに載っている業種の従事者は、全額国庫負担による安定収入が保障されている。ただし国庫負担を無限増大させるわけにはいかないから、一般的の定年よりは相当早めに、業種ごとの基本定年が定められている。もちろん定収入がなくても、生産物を売ることは当然できるから、普通のモノ作り関係の第一種リストに載っている手に職があれば定年なんぞは怖くない。

大体がそういう手仕事関係の職人さんは、闇雲に従事者を増やしたところで、厳然として適正という壁がある。後継者育成が困難な理由には、とにかくその道に入つてみなければ適不適が判断できないことと、その道に入つてはみたものの、決定的に素質がなかつた場合に軌道修正が難しいというところにある。始めてしまつたらドロップアウトしたくとも、なかなか難しいのが現実だ。

それで、その両者の妥協点を探つてできたのがこの制度なのだ。他に職業を持つたままで もちろんどつぶりつつこまるのが、一番歓迎されるのだが 全労働時間のうち、最低三分の一以上を職業訓練に充て、ある程度の期間（最低五年）を職業訓練に従事することができる制度だ。もちろん、やってみたものの即バックという場合は、違約金を払えば三分の一プログラムから逃亡することも可能だ。

端的に言えば、国家主導型、超長期徒弟制度というわけだ。

しかし問題は、その財源である。どこの天才が考えたのか、財源はとんでもない方法で確保された。技術を授ける方の現役労働者が、定年退職時に支給されているそこそこ年の年収を三分割し、後継候補一名にも三分の一ずつ支給するというものだ。

国は新しく職業訓練を受けようとする者に、現年収の三分の一が、退職者の年収の三分の一のうち、どちらか多い方の収入が保障される。

国は制度の維持のための入件費と、僅かな差額の負担のみで、文

化遺産級技術の消滅を防ぐことができ、技術者にとっては持てる技を伝える相手が確保でき、挑戦者にとつては現職での収入を落すことなく、時間を大幅に犠牲にすることもなく、人生を元のレールに戻せるという保険をかけた状態で、一風変わった絶滅危惧職業に携わってみることができる。

企業は、この三分の一特例に基づく職業訓練に従事している者が、法定労働時間の三分の一までの労働力減少を理由に解雇することは、出産・育児休暇の取得を理由に解雇した場合に課せられるのと同等の罰金を、国と雇用者に対して支払うよう義務づけられている。

さて、この現代版三方一両損もどきの制度は、みんながみんな、少しの不具合を義務として引き受けるという、負担の分散という考えが微妙に世論に受けて、非常にうまく機能した。

自然特殊技能に限定されていたものが、特別に特殊でなくとも、放つておいては従事者に事欠くような職種へと適用範囲が広がつていった。

内戦後の荒廃した国土に付き物の地雷処理技術者とか、内乱国の政情安定のための治安維持に携わる者、有毒廃棄物処理技術者、宇宙空間建造物における有機廃棄物処理技術者などなど、などなど。

それがいわゆる、三分の一特例、第一種リスト業種だ。

けれど、危険、退屈、大変が当たり前の、万年従事者不足の第二種リスト業種においては、決定的な問題があつた。

つまり、成果物をオークションで売れる様なモノ作り関係者とは違つて、その種の仕事の現行従事者にとつては、三分の一に減額された薄給が、雀の涙の年金に加算されるだけという、非常に情けない状態になるということだ。

しかし、何でもそうなのかもしないけれど、ある仕事に長々携わっていると、愛着というものが普通に湧くのか、第一種リストの

連中とは違つて、第一種の場合、三分の一特例の適用を拒否して引退していくものが多い中、自分のノウハウを手弁当に等しくても伝えたいという人間が、どんな業種であつても必ず何年かに一人はいるらしい。

さて、そしていよいよ第三種リストの登場になる。国は、三分の一の成功に気をよくして、自らの中にも三分の一特例を敷衍させたのだ。いわゆる公職と呼ばれる職業の中にもニッチに位置するようだ。余り人数が必要でないわりに、特殊なノウハウが必要であり、かつ、その従事者育成にある程度の期間が必要とされる職種について、そのやり方を踏襲したのだ。

バッパー保志の職業の正式名称は、人口密度稀少域特例総合司法官である。しつこく整理すれば総合というのは、本来であれば分業されるべき司法の仕事を、^{フロンティア}人口密度稀少域においてのみ、くまなくこなす何でも司法屋だ。

警察がすべき犯罪があつたと曰われる場合の捜査・逮捕。そして、裁判というシステムが担当すべき、立件から裁判、量刑確定までをこなし、最後には刑務官が行うべき刑執行まで（死刑すら含む）までをこなさなければならない。

日本が管区とする人口密度稀少域自体がそもそも少ない。それからついでに、人間が少なければ犯罪の発生も少ない。そして犯罪が起きたところでそもそもその目撃者に足るものも少ないために、告発者も少ない。殺人事件がおきたところで、だれかが訴えなければ、まあそういうことが起こつたこと自体が特急で數の中に入つてしまふ。よつて立証も極端に困難。現行犯逮捕でなければ、犯人逮捕は非常に難しく、だだつぱりの管区の所為で、訴えがあつたところで、場所によつて直行、シンクロライド（シンクロイドに乗ること）、アバコン（アバタロイドを操縦すること）を使つてさえ、ほぼ犯罪現場に到着したときには、後の祭りが基本という、ストレスフ

ルな立ち位置だ。

当然、職種特性上、司法の専門家であることが要求されるから、第一種か二種の司法試験合格者であることが最低条件なのだが、普通、この資格所持者は文系に分類される人間が多いのだ。けれど犯罪者とガチ対決があることも想定される以上、銃火器に対応できる程度の戦闘能力は要求される。ついでに、シンクロライド中に知死レベルのダメージをくらつても、（痛みの感知レベルは死亡）と同等だから）精神的に「あー、今日もよく死んだなあ」程度の暴言を吐ける程度にタフであることが望まれる。

「」の暇な激務を、三分の一の薄給プラス雀の年金程度でこなせといつのは、やはり、親方日の丸にしても、如何せん阿漕あこに過ぎると保志などは思うのだけれど、読者諸兄におかれましてはいかがなものだろうか。

とにかく、報われることが碌にないこんな仕事でも、それをやろうと思つた自分が過去のどこかにいて、そして、命令系統の上位に、保志ならばできると判断してくれた誰かがいて、毎日のように目の前にやってくる対応しなければならないことに駆けずり回っていたら、あら不思議十五年もたつていました……ということだ。

ただこれだけは言える。仕事に取り組んでいる中で、具体的に誰かを助けることができた。だれかの命をうばつたことがあった。誰かの人生を剥奪する決定をくだしたことがあった。そして、必ずいつも誰かの役に立つっていたとは断言できないけれど、誰かのためになつたことが一回や二回ではなく確かにあった。

そういうバッパーという仕事が、自分にとつて多分、楽しかったのだ。

仕事にやりがいを感じることができて、老化による劣化というものを自分のこととして、静かに受け入れていく季節に自分は静かにいかなければならぬのだ。多分それは間違いない。

大変で楽しかった。やり甲斐が確かに有つて、そして間違いなく充実していた。けれど、それは三分の一の薄給でペイするようなものとは思えない。

保志は自分が三分の一特例の適用を受けて、最初に経験した裁判官という職業に、判事と呼ばれる十年以上いることなく、家族からも離れて超遠距離単身赴任。ちょっと世間相場より早いけれど、退職金をがつぽり手に、人間がいっぱいいる場所に帰るのも悪くない。ずっとそう思つていた。

なのに……。

「大体さ、ジョリー・ロジャーの野郎をのつとのさばらせたまんまでさあ、ろくぢやんが引退するつて言つとは思えないんだよなあ……」

それだつ。全部、あれが悪いつ。あの……髑髏野郎……。

ジョリー・ロジャーという言葉が、執務室を出て廊下を歩く保志の脳天目掛けて降つて来る。保志は視線に最大級の力を込めて、ぎりりとばかりに虚空を睨めつけた。

ジョリー・ロジャーという言葉を知らない人間だつて、アレは知つてゐる。現物を見せて、これがそうだと言えば、殆どの人間は「ああそなんんだ」と納得もするだろうが、八割がたの人間は、1週間後にジョリー・ロジャーとつたところで、それがアレのことだと

いつのをすぱつと思い出したりはしないだろうといつぐらい、殊日本語圏において、名称の知名度と実物の知名度が乖離しているマーケだ。

ジョリー・ロジャーを日本語で一番分かりやすく表現するなら、
「海賊旗」か「毒薬マーク」というところだろうか。あるいはもつ
と端的に觸體と骨といえばいいか。

もつとも、義賊だか愉快犯だか知らないが、保志の管区を跋扈しつつ、ジョリー・ロジャー名告る者（組織？）は、犯罪者の癖に正義をなしていると自信タップリの姿勢を崩すことがない。

保志の受け持ち管区に人が移植している大きな理由の一つが、希士類元素類の豊かな鉱床である。その採掘によつて生まれる巨利は遠距離輸送の手間をかけてなお釣りが来る。

レアアースは、混合希士状態であつても、高価なことに一向に変わりはない。やはり現代においても変わらぬ人口密集域である地球からの距離のせいで当然かかる輸送費用をさつ引いてまだ、利が大きく残るのがレアアースの採掘だ。

需要が減らないことによつて、それは変わらず高価であり続けていふ。

保志の管区_{テリトリー}に出没するジョリー・ロジャーなる者は、高速軽快艇でフットワーク軽く高額貨物専用の輸送船を狙い、根こじき奪つのではなく、積荷の中でも殊更に高額なものを抜いていく。

輸送船強奪の海賊行為といえばカツコいいが、超遠距離輸送船は生体にはいろいろな意味で負担が大きいために無人であることを考えると、限りなく『抜き荷』に近いセコさがある。

つまりコソドロに限りなく近い生態系でいるくせに、頭蓋骨の下

か背後にくるはずのバッテンが、交差した大腿骨という基本スタイルではなく、^そ反りを持った剣、カツトラスを交差させたジョン・ラカム・スタイルというやつなのだ。その通⁽³⁾を気取った選択^{チョイス}も気にいらない。

警察仕事も担わなければならぬバッパーとして、一応保志は戦闘も可能な快速移動手段を持つている。何度も駆けつけたものの、荷は抜かれた後という煮え湯を飲まされた挙げ句に、ただ一度だけ保志は現状に滑り込みセーフで間に合ったことがある。

セキュリティ警告が発動したということで通報を受けたとき、たまたまアレに乗つて近場に出張つていたのだ。現場に急行し、何とかあがまだ居る間に、うまく遭遇することができたのだ。保志が普段使う高速移動手段であるアレは、超遠距離輸送船に生物が乗り組んでいないのと同じような理由で生身で堪えられる様なものではない。当然保志はシンクロライド中だった。

あのジョリー・ロジャーを染め抜いた高速軽快艇に果敢にも挑んだとき、向こうは保志がシンクロライドだと知つてか、それとも普段抜き荷をしてるほどには平和的な犯罪者だらうとも、本来は殺人にさえ禁忌を持たない狂人なのか、思い切り知死レベルの攻撃を受けた。当然シンクロライドはお釈迦になつたし、そのせいで何十枚目になるか分からぬ始末書を書いたのは、じく記憶に新しい。

普通は、胸を撃ち抜いたり、腹を刺したり、頭を吹き飛ばされたりする程度だ。その程度なら、胸を張るようなこつちやないが、保志は慣れている。

一度とは忘れられないほどに別嬪のアバタロイドに、四つ裂きにされたのだ。手足が、メリメリともバリバリともつかない、非常に耳障りな音を立てて、引き裂かれちぎれていく。あの感覚を思い出すと、今でも柄にもなく神経を病みそうな可愛い自分に気付く。

人口密度稀少域では人間誰しも「だれも見てないし」状態になるらしく、保志のところにまで持ち込まれる事件は、殺人が圧倒的に多い。

刑事さんの世界では、地球が唯一の人類居住圏だったころから使われている伝統的用語で死体のことを「お六」^{トロイツヤー}といつ。保志が三分の一挑戦者として、日常生活の片手間にフロンティアまでシンク口ライドしていたころ、教官であり、上司であり、こここの管区の前者者が「保志がきてから死体率が増えた」とか難癖をつけてきた。そしてついた渾名^{あだな}が「ろくちゃん」なのだ。

もちろん単身赴任が原則のバッパーには、軽口を叩き合つ様な同僚はない。「ろくちゃん」なる差別感がたつぱり感じられる渾名は、前任者の退官と共に墓場に納められたと思っていたのだが、何を考えたかA.I.のぐせにアバタロイドを操作するという趣味にはしつたセレが、4444の古い記憶バンクの中にあつた「ろくちゃん」という渾名を蔵から出してきたのだ。

殺されたまんまで、抜き荷^{ネババ}といつにはでかすぎる金額を持ち逃げされたまで、引退なんかできるのか、俺は。

保志は廊下で途方にくれる。

身体には、痛みの記憶は残らないが、どんなに痛かったかという感情的な記憶は焼きついている。あの驚くほど朱い唇^{あか}をした、肉感^{ナイスペ}的なアバタロイドのドライバーは、きっと男に違いない。アバカマなんかにこけにされて、リングを降りるのか？

美耶子がいるはずのキッチンまでの道程の途中で、見事保志は遭難した。一步も足が進まない。温かい微笑みを持った、愛し（？）の奥さんが待ち構えているはずのここは腕を振るつてくれたと

「さつべきだらうか 豪華退職記念ディナーのテーブルにつく」と
を、拒否することに起こるだらう、嵐をやり過こすより、果敢に立
ち向かう自分しか想像したくないのはなぜだらう。

こんな仕事、薄給に唇をかみしめてまでやるこいつちやないと想い
ながらも、敗北の痛みを抱えたままで、ジョリー・ロジャーと対決
する機会チャンスを永遠に放棄するのを、自分は本当に望んでいるのだろう
か。もちろん、薄給に堪えてまで、あいつに果敢に挑む自分を想像
するのも、それはそれで困難だったのだが……。

三分の一の薄給。

殺されたままの敗北感を背負つての引退。

間違いなく美味しい美耶子の手料理。

すべてが保志にとって不条理そのものだ。

「はっぴば～すでい でいあ、ろくちゃん」

もううんセレの歌は、その筆頭に決まっていた。

保志が住んでいるいわゆる可動官舎とこうやつは、可動というのは大嘘つきで、常に移動してる。中型輸送船というのが一番近い。一応、普段そこにいる人間は保志ぐらいなのだが、珍しく被疑者を現行犯逮捕できたときには、留置場ブタバコになる場所もある。民事訴訟が提訴された場合は、いわゆる簡易裁判案件程度なら、オマル……間違つた、本庁オルマのホストにリンクしている4444にしこたま溜まつている判例を参考に、さつさと判決を言い渡す。和解であれば立会人として、賠償額としてなら責任を持つて金の取り立てをし、懲役なら服役させる。

大体がまばらながらもある保安官事務所にある拘置施設にお引き取りいただいた、そこでキタナイ、キツイ、キケンを網羅した3K仕事案件があれば保安官監督のもと、それに従事していただくが、たまたまそういうのがなければ、保安官事務所にあるシンクロイド・システムを使って、仕事のある刑務所へ出勤してもらうことになる。

刑事裁判が必要な場合もある。もつとも、ただでさえ稀少な事案発生頻度と、情けないほど低い検挙率の関係で滅多にないのだが。警察官の果たすべき役割として現場検証を行い、立証に足ると保志が信じられるだけの証拠をかき集めて、総合司法庁オルマの刑事部に検察官送致をかける。

不起訴の判定がくだされば、そこで一件落着にするしかないが、有罪の可能性が濃いとして裁判になつた場合がややこしい。

簡易裁判事案であれば、保志自身が裁判官として判決を下すのだが、捜査・立証・逮捕・拘留しているわけだから、当世の主流である当事者主義でいくとすると、検察官・被告人・弁護人のうち、自動的に検察官としての働きが強く要求されることになる。これには疑問の余地もないだろう。

総合司法庁のデータベースに登録されている、国連準拠訴訟法に通じている、つまり第一種司法試験有資格者からランダム抽選で割り当てられた裁判官と弁護人と同じ時間に官舎に付属している法廷に来てもらつて、長い裁判に突入する。もちろん、可動官舎には大人数を恒常に養うだけの食料や水など常備されているわけではないので、これまた近場の保安官さんにお願いして、期日には出廷してもらうのだ。

裁判官サマが面倒がりで、バーチャルだけで構わないといえば、GMT（グリニッジ標準時）できめられた公判期日に、最寄りの三面モニターが完備された法廷室入りしてもらってバーチャル裁判で行われる。なぜに三面モニターかといえば、検察官、被疑者、裁判官、弁護人という四者のうち、自分を除く三者を大写しにするためだ。

直接一堂に会して裁判をしたいと、担当裁判官サマがおっしゃれば、しかも弁護人、裁判官ともに複数体勢でいどまれている事案だつたりすれば、備品のシンクロイドをかき集めて対応することになる。

幾ら公費で賄われているとはいえ、シンクロイドの値段を考えると、たかが犯罪者の人権保護にかけるにしては、非常に贅沢にできている。

なんでも、人間が殆どいないところでさえ、無法をまかり通らせようとする人間がなくならないのだろうか。

いや、もしかすると、人が少ないからこそ、禁忌を犯す誘惑に抗するのが難しいのかもしれない。

とにかく、全くの人類生息圏外ならば法は無力だが、一応、人口密度稀少域とされている場所は、少なくとも辺境であつても法の力のおよび範囲、つまり人間社会がある場所としておきたいという要

求が民意としてあるのだから総合司法官といつ、飛び回る六法全書が求められたのだ。

もつとも、人口過密域に生息する人間においては、そんなところが存在していること自体が無意味なのだろうけれど。

ともあれ、進むも引くも主に精神的事由によりままならず、官舎の廊下で遭難していた保志。だが彼は突然に、雷で打たれたのではないかと思うぐらいの間違つよつのなさで、ゆるぎない思いに気持ちの全てが占領された。

だだつぴろいというわけではないが、各種設備がもれなく詰まつた官舎内での移動に、保志は大体いつもは自転車を使っているのだが、思い定めて走り出した。行き先はキッチンである。

美耶子にとって、今回退職して帰宅しないことが、離婚の事由に足るものなら、いいじゃないか。どうせここで暮らす限り、衣食住全ては官給品だ。あいつが気が済む金額にたどり着くまで、今の給料からみて三分の一に田減りした取り分の全部を渡せばいい。

もし、美耶子が結婚を継続したいし、一緒に過ごす時間が欲しいというなら、とりあえず第一期延長五年でゲットした一人の猫の手を、ちゃかちやか人手に育てて、今度は自分がシンクロライドして東京に帰ればいいのだ。明石タイムとグリーヴジタイムの9時間差は、知恵の絞りよつてどうにかなる。

自分は絶対に、四つ裂きにされたままで、あのド阿呆を野放しにして引退なんてできない。引退しても、毎日ぐわぐわと鬱屈をため込んで、飲んだくれる余生なんて、まだ早すぎる。収入より、生きがい。

廊下を疾駆しながら、保志の頭の中には、あの交差した大腿骨の位置に反り刃のカットラスを交差させたいけ好かないジョン・ラカム・スタイルの海賊印が、確かに殲滅せんめつさせるべき敵の象徴として、燐然さんぜんと輝いていたのだった。

走つて、走つて、走つて、走つた。

勢いでキッチンの扉を開けて、そこに自分の好物のゆで卵と鶏手羽の酢醤油煮を見つけたとたん、保志の心の奥底から、俄か仕立て滾々こんこんと湧き出していた勢いはみるとしほんだ。あんなやつかいな女でも、連れ添つたといつには些こすれかならず語弊ごひがあつても、古女房はまぎれもなく恋女房で……。レトルト基本の自分のために、ちゃんとメシを作つてくれる。

「……はは、その顔……。やつぱりなんだ。ホント、つまんないやつ」

美耶子がキッチンの入り口で凍りついた保志を見て、にやつと笑つた。

「どうせ……そんなことだらうと思つたわ……」

保志はまだ何も美耶子に言つていない。けれど、美耶子はくるりと保志に背中を向けると、なにやらやらかしてくる。超絶貴重品のフレッシュ野菜を使つたマリネだ。いつそんな食材を調達したんだらうつか、こいつは。

「その顔じゃあ、ジョニー・ロジャー・トック捕まるまで、延長……ですか。第三リストの三分の一なんてボランティア以下、自分で好んで奴隸の身分に甘んじるほど善人じやないつて言つてたのは、どこの口かしらね」

美耶子がくつすりと笑った。

肩すかしを喰らつたよつで保志は、恐る恐る口にする。

「美耶子さん……なんで……そう?」

「何年付き合つてると思つてゐるよ。一応退職のセンも見込んでたんだけど、あなたつて結構、根に持つタイプだから」

「根に持つて、何よそれ」

美耶子は保志の悩んだ末の選択を、とうに見越していくたよつな言い方をする。理解が得られるのは、嬉しいよつな、けれど彼女の手玉になつたよつて、やっぱりそれはそれで面白くないよつな……。保志に、どうせゼビツセといじけモードが入る。

「あなたに致死レベルダメージ与えたやつを、身柄確保すらできずにはやばらせてる状態で、素直に引退なんて、まあ、基本無理だろうとは思つてたのよ」

「お……怒りますか?」

もう一度美耶子がクルリと半回転した。

「第一の条件、第一期定年延長の五年間。それだけだからね。第二の条件、ややこしい細かい案件は、全部候補生に押しつけて、あなたはジヨニー・ロジヤーのやつをちゃんとトック捕まえることに邁進する」と。第三の条件、ほかの事件にのこのこ首突つ込んで、別の野郎に殺された挙げ句に取り逃がしたりして、引退したくてもできないジレンマ事案を新たに抱え込まない。以上三点、それだけ約束してくれるなら……今回だけは許す」

それだけ言つて、美耶子は再度調理台に身体の正面を向けた。

「美耶子さん……。愛してる」

保志は、そそくせと料理のフィニッシュであるところの盛りつけに取りかかろうとした美耶子を、背後から抱きすくめる。持つてい

た菜箸が飛び、がちやんと音を立ててボウルが調理台の上に落ちる。「あー、はいはい、分かった分かった。愛されるのには飽きてますから、もういって。いい？ あ・な・た。ちゃんと覚えておいてね、一度田はありませんから」

「うん、うん。ありがとう。美耶子さん、大好き」

調子のいい言葉を並べて、首といわす、肩といわす、キスの雨を降らせてくる保志を、ふふんといつ田で見て、美耶子はいった。

「4444、仕事だから帰るわ、よろしく。ディスマウント」
保志がその腕に抱きしめていた身体から、だらんといふか、ガクンといふか、ガツンといふか、確かに一度、何かが抜けた。直後にビシッ何かが入る。

「ふふ～ん、るくひやん、愛してるわ。わっとこう言つてくれると思つたよ」

美耶子がいなくなつた脱け殻シンクロイド・ボディを、せつせとセレのやつが乗つ取つたのだろう。彼ら美耶子の容姿をしていても、こいつがセレである以上、キスしたり抱きしめたりする対象では断固有り得ない。

危険物から飛びのく様な勢いで保志はセレから距離をとつた。

シンクロイドの可変筐体の表層を変形させるには、棺桶入りが当然必須だが、美耶子の形状のままでも、セレがこれをアバタロイドとして操作するのにはなんの不都合もない。あるとしたら、保志が感じる心理的抵抗感のみだ。

「オマルのホストに、三分の一適用申請送つたよ。今ちやんと受理されたつて戻つてきたから。向こうも、きっとるくひやんがやめるもんかつて思つてんだろうね」

「こ、こらっ。なんで勝手に進める」

「いやだなあ、気が利くと言つてよ」

美耶子の顔で、息子の声で、たたかれる軽口は、保志の神経を思
いきり逆撫でした。

「あ、今、美耶子さんから伝言」

いきなりセレがいつた。

「何?」

美耶子の声になつたセレが、美耶子の顔で微笑んだ。

「冷めないうちに、召し上がり

保志はどつと疲れて、椅子に尻を落とした。

5・セレのお造い

保志にとつて真夜中、GMT2時ちょいど。^{ビビ。}

執務室では当然ないキッチン兼ダイニングにも、モニターぐらいは当然ある。美耶子が盛りつけてくれたゆで卵と鶏手羽の酢醤油煮に舌鼓を打ちながら、バリつという食感が非常に楽しい生野菜のサラダを食つ。こんな幸せな食卓は久しぶりだ。目の前に座っているセレが古女房の姿をしているのも、まあ、写真立てに飾った家族のポートレイトの贅沢版だと思えば、我慢できる。

「これ、どうしたの？」

「オイラ美耶子さんの指令で、昨日のろくちゃんおやすみタイムに、ちょこつと買物に行つたんだよ。料理時間短縮したいから、ちゃんと卵茹でて剥いとけつて言われてたし。鶏も多分サバきたてだつたと思つよ。鶏と野菜だけじゃなくて、卵もちゃんと耐Gケースに入れといたら大丈夫だつたし」

「……ちょこつと待て。セレ」

下品にも手掴みでかぶりついていた鶏手羽の、骨に付いていた肉片を舐めていた保志の口が止まった。

「何」

「一番近くのマトモなマーケットにちょこつとつて、まさかあれを…お買物に使つたのか？」

「うん、使つた」

セレがあつさり言つのに、保志は眉間に皺を寄せた。

「警邏車両を私用に使つていいのか？ 法の番人じやないのかよ、

4444は」

セレは聞きとがめた保志に取り合わず話を続ける。

「じゃないと、ろくちゃんが起きてくる前に帰つて来られないじゃない。それだとサプライズにはならないし」

「……、管理者のくせに、率先してルールを無視するな。あれは、官給品で、職務上の出動以外に使つちゃならないことになつてゐるだろつが」

「それを言つなら、この身体だつてそつじやん。固いことわないので、どうせバレやしないし」

「セレ……。バッパーで飯食つてる人間サマを監督してゐるA.I.が、それいつちやオシマイすぎると思わないわけ？」

「人間サマを監督してゐるだなんて、誤解を招くような言い方しないでくれる？ オイラは至つて誠実に、ろくちゃんの召使してゐるんだし」

「どの口がそれを言つたと、保志は撫然とした表情になる。セレの軽口の勢いは尚も快調そのものだ。

「だつて、いつてみれば4444と一緒でアレもぶつちやけオイラだし。お買物いくのに車乗ると一緒つてより、このろくちゃんがチャリころがして移動するつーより、遙かに敷居が低くて、オイラが走つていくのと同じだし」

「お買物に戦闘機でいくのは、絶対に異常だと思つ」

飛閃はその気になれば、小規模な後進国の一、三小隊程度なら蹴散らせるだけの性能があるし、その気がなくても人工建造物に十分な減速なしで近寄れば、それだけで壊滅的なダメージを与えられる。歩くいや、飛閃の行動範囲からいって 飛ぶ凶器そのものなのだ。

「やだな、ただの缶詰だつて使いよつては凶器になるんだから、戦闘機だつて置いとく分にはただのモノじやん」

「……お前、ここんとこアジー運用過ぎるんじゃないか？ 妙な

ウイルスにハックられてないか?」

「いやだな、ろくちゃんならともかく、敬信さんは優秀な技師だつてば。あの人のメンテに遗漏なんてあるわけないじゃん」

保志にしてみれば「ろくちゃんならともかく」という一文をはさまれるのは心外だ。どうしても力仕事が必要になつたときに、一緒に宇宙を疾駆する、可愛い愛機を物理的にお世話しようとすると、いつも全身全靈をかけて阻止しているのはセレであつて、自分が整備業務に未熟なままなのは、怠惰なのではなく、経験する機会を奪われているからにほかならない。

それは、もちろんずーっと以前に、手入れしようと思つてスタビライザーをちよつと壊しそうになつたことが最初だつた記憶はある。けれど、飛閃は基本的に重力圏につれていくつもりはないのだから（人型はとにかくこけやすい）。ハメートル、四トン超過のブツを町中で転かせるなんてことがあつた日には、その後の対応が恐ろしきに過ぎて想像もしたくない。直立している必要がないところにいる限り、あんなもんなくたつていいいじゃないか。因みに敬信というのはオルマの職員で、宇宙建造物及び可動物メンテナンスのスペシャリストの石動の名前だ。調子が悪いときはもちろん駆けつけてもらうが、何もなくても定期点検にやってくる。

多分、4444もセレも、実際にマッシブな量の情報を並行分散同時処理できる賢いAIサマなのだから、現実の人間はアホすぎて見えるに決まつていて。その中で石動は、例外的に彼らから頼りにされている数少ない人間で間違いない。

「あ、言わせてもらひうけどね、ろくちゃん。食材の調達はれつきとしたオイラの職掌範囲なわけ。レトルトばつかで欠乏する微量元素類をサプリメントで足すのが侘しい単身赴任ソロフレイがスタンダードだけどさ、生鮮市場が近隣にある場合、そこに調達にいくことは、ろくちゃんの権利としてあるんだぜ……」

「あそこのどこが近場なんだよ」

「乗り物使って六時間で往復できるんだから、近いでしょ」

保志は絶句する。一番近くのマーケットといえば、イットリウム・ガーネットの産地、ニコー・イットルビーに違いない。あそこでは衛星イットルビアがテラフォーミング可能だったため、保志の受け持ち管区では、最も人口が密集している地域だ。

保志にとっては最強の味方である保安官事務所ももちろんある。人口密度だけが田舎町なもの、イットルビアは洗練された都市計画がうまく機能している住みやすい町だ。

惑星ニコー・イットルビーで採掘されるイットリウムといつのは、液体窒素温度を超過する転移温度を持っている。もつとも、高温といつても液体窒素の超低温に比べて高温といつだけで、熱いわけではないのだが。

たまたま、それほど輸送コストの掛からない場所で銅とバリウムが採取できるため、人間の可住衛星イットルビアにそれらを集合させて加工するようになったのは、当然の成り行きであった。

イットリウム系銅酸化物高温超伝導体の生産は、もちろん辺境の小さな地球もどきを、十分に潤していく、なかなかに文化華やかといつた雰囲気の小洒落た町だ。

あそこまでの距離を考えると、ワープなんぞするほどでもないが、その時間で往復すると、中に生物がいたらひしゃげてペチャんこ確実。骨は碎けるだらうし、肉は引き剥がされ、数分もあれば立派にミンチ間違いなし。

可動官舎周りは、今のところなーんにもない空間にあるから、まあいいとして、減速せずに着地したら、はつきりといってハメートルの隕石が、直撃するのと同じことだ。買物というより、宣戦布告な

しで核弾頭ぶち込むのと変わりない。総合司法庁の管轄下にあるバッパーの移動艇で、植民地の街を壊滅させては始末書で済む問題じゃない。

「一応イットルビアに近付き過ぎる前にひゃんと減速するだらうから、それを勘定に入れれば、道中をアレの推進能力のいつぱいっぽいでかつ飛ばしたことになるだらう。ぱいでかつ飛ばしたことになるだらう。

「飛閃のエンジン焼き切れてねえか。だいいち、空にしちまつたらエネチャージに時間掛かるだらう。Hマージョンシー・ホールあつたらいどりする『だ？』

「オイラそんなにやわじやないし、ちやんとその辺の計算ぐらいできるもん」

「ビーだか……。しゃーないな、一丁飛閃診てやるか……」

酔でさつぱり田に仕上がつっていたとはいえ、手掴みにしていたチキンのせいで、ねとねとと光つている指を下品に舐めながら席を立つた。

セレは盛大に抗議をする。

「やめてよ。ろくちゃん、メカニックの才能ゼロ以下なんだから。オイラに悪戯するなんて、やめてつ。酷いことしたらダメエ……つ」言ひ方が微妙にエロいなあと保志はあきれて脱力しそうになつた。

「お前は勝手に湧いて出た相棒だけど、飛閃はオレがオーダーした俺のマシンだ。幾らメインAIだからって、俺がいじるのにこいやもんつける資格はねえぞ」

「ろくちゃんが変なことしたら、それとHマージョンシー・ホールに対応できなくなるつてば。あんたは素直に、アバタロイド、こしてのだけにしてよ」

セレが必死に口説いりとする。

飛閃^{ひせん}というのは、現場に出動要請が出たとき、保志が利用するための高速軽快艇である。当然保志は出動するときにそれに乗ることになるのだが、高速移動能力を重視して特注したため、アレが能力限界までの加速をすると、中身の人間は前述の通りミニンチになつてしまつという、致命的欠陥を持つ^{バトロール}ている。

散歩程度の速度で、警邏^{パトロール}しているときには、生身のまま乗つたりしないでもないが、あまり気密性にも信頼^{タツバ}がおけない作りもしているし、突然の出撃……もとい、出動要請がきてフル加速が必要になつた場合にフットワークが鈍る。そんなこんなで、生身で乗ることを想定してチョイスした飛閃を、結局保志は、基本的には乗らないでアレ自身をアバタロイドとして使うことが多い。

アバタロイドとして動くことが可能な飛閃。ということは、そう、飛閃は船型ではなく、人型なのだ。スリーサイズは残念ながら保志は把握していないが、身長^{タツバ}だけでいうなら約ハメートルの巨体だ。子供のころの保志は、戦闘ロボットモノのアニメや3D実写映画が、男の子にありがちに大好きだった。

バッパーに着任したとき、利用可能な高速移動のための備品カタログの中に、ハメートルの巨体を持つロボットというか、パワードスーツというかといった、アレを見たとき、まったく迷わなかつた。自分が乗るのはアレしかないとthought。

しかし、そういうものが好きなのに、実際保志はその中身にまで全く興味を持たなかつた。

それに乗つた自分が、どう颯爽とかつこよく行動するのか。悪人を退治し、あるいはとつつかまえ、ついでに自分も危機一髪で危ういところを逃れたりする。というようなのは妄想できても、そいつが飛ぶ原理そのものを知りたいとこれっぽっちも思わなかつたという、ジェンダー的男女性差論は、やはり紋切り型に過ぎないよね、とでもいうような種類の機械オンチ。全高8・82メートル、重量、

4・14トンというものが持つ意味を、意思決定の段階で認知しきれていなかつたのは、やはり、うつかり保志の落ち度といって過言でない。

型式番号・RZM-001F

メーカー・REISHIKI

ジェネレーター出力・2850 kW(本体)

1380 kW^{フライトイニット} 4230 kW

スラスター推力・52800 kg

総スラスター数・47基

総ハードポイント数・12基

戦闘継続時間・最大出力時150分

通常稼働時600分

固定武装・頭部バルカン砲

オプション・

マシンガン・ハンドガン・ミサイルランチャー・フライトイニット
(サブジェネレーター兼用、ミサイルポッド付)・バズーカ・ガトリング・ナイフ・ブレード・シールド・レーザーカービン・ヴァリアブルビームサーベル(カタール、トマホーク、ハチエット、ピック、サイズ兼用)

飛閃の『スタート・ガイド・マニュアル』の製品仕様抜粋一覧に、
ものものしく並ぶ、それらの言葉や数値の意味を、なぜちゃんと想像しなかつたのか。宇宙空間歪曲航法へ、通常高速飛行から移行するときの一瞬だけ達する光速。その速度に至るまでの加速に、やわな人間の体は耐えられない。

保志が任地にやつってきたとき、その移動は人体には多大な損傷を与えるので当然、耐G力セルにつつこまされて準冬眠状態ニア・コールド・スリープさせて、ただの荷物同然になつて運ばれてきた。超高速飛行そのものはいまだに実現されていないが、もしそんなものが開発されていたら、任地で覚醒したときには、家族はみんな数世紀も前に死滅しているという笑えない事態になる。

光速に限りなく近い通常高速飛行速度まで加速するのに場所を選ぶというだけで、亜空間利用が、実用化されたことで、そういう意味での超高速移動手段を用いる物語は、ロマンとして燐然と輝きつつも現実問題として陳腐化した。

もつとも、生きている人間で亜空間を目の当たりにした者は未だに誰もいない。亜空間へつながる速度まで生身のまま加速することは不可能だからだ。限りなく死体に近づくまで細胞を固めて、耐G力セルにぶつこんで、初めて亜空間移動航法による乗客パッセンジャーに人はなれるのだ。

チンパンジーで成功していたとはい、初めて亜空間利用方式の宇宙空間歪曲航法での人類発生地太陽系（HRB）外への旅人となつた、ロシアのルバノフ大佐は偉大だつたといえよう。

まあ、一説によると、かのルバノフ大佐は、実質として狂氣の時代を演出した独裁者だつたらしいチュグーエフ大統領の暗殺に失敗して、その詰め腹を切られたというのが本当らしい。人類初の有人亜空間トリップに成功したから英雄だが、失敗していれば闇に葬られていたらどう。

そして、ルバノフ大佐の覚醒に成功させ、再冬眠させて地球へと帰還させるという、あの宇宙開拓史上でも一際輝いている、栄光の旅行のその時から、一貫して、考え方できる人工知能（TAI）

Thinkable artificial intelligence

nce）は人類発生地外太陽系旅行者　実際に生まれたときに持

つた肉体のままその地に立つもの　　の、使用人サーパントであり、支配者ルーラーであり、友フレンドであった。

理論的には可能だつたものの、受信者がいないために検証ができず、開発者が宣伝していた成功が疑問視されていた、亜空間通信（SSCI=Sub-space communication）は、その亜空間をトンネルにして超遠距離にある発信機と受信機間のタイムラグを打ち消してしまうというものだ。

未だに大気が邪魔をして、なかなか絶滅することができない、地球上ですら起こる通信のタイムラグを無くすSSCIなしにて、シンクロイド・システムはもちろん、アバタロイド・システムすら絵空事だつたはずだ。

話が飛閃から激しく脱線した。つまり、端的にいえば、人口過密域いである人類発生禹域（HハーフRB=Human race-s biorthoplace）を抜けるまでは使われる、宇宙空間歪曲航法搭載船の加速に耐えられないヤワな肉体の持ち主」ときに、飛閃の加速に付き合いきれるだけの丈夫さはないということだ。

仕様書の数値を見て、星は飛閃あいつの力をフルに活用しようと思えば、生身では扱いきれないということに、なぜ気付かなかつたのだろう。

なんでアレがカタログに載つていたのか、保志はどうにも不思議でならない。とにかく、戦闘いつでも可能な凶悪装備。どう考えても司法の持ち物ではなく、軍など戦争屋がもつに相応しいラインナップ。あそこまでゴツく複雑な機械は、絶妙にどころか普通に制御するのさえ普通の人間にはまず無理に近いと思う。

現実的な転倒回避策として、運転者は運動制御AIに何度も方向にどれぐらいの速度で進みたいなどを大雑把に口頭で指示して、細かいところは思い通りに動かなくても気にしないことにして任せ

てしまうという方法がある。

それからもう一つは、モーキャプ（モーション・キャプチャ）・システムを利用するやり方だ。モーキャプというのは、もともとはゲームに出てくるキャラクターの動きを人間っぽく見せるために開発された技術らしい。具体的にはモーキャプのステージで実際に動くことによって、アバタロイドを実際に動かしているAIに再現してもらいうといふ方法をとるわけだ。

実際はそんな形をしてることはあり得ないわけだが、モーキャプ・ステージの中央に立つと、球体の内側の全面がモニターになついるため、もし自分が飛閃ひせんだつたならば見えているはずの風景の中心点に浮いているような不思議な感覚になる。モーキャプ・ステージの壁面は全方向ドレッドミルみたいになつてるので、走ろうが飛ぼうが自分に実感はあるものの、周りが動くだけで本人の位置は厳密に静止しているというほどではないにしろ、まったく移動しない。飛閃の目でみた世界を見て、飛閃が感じる風圧を 宇宙空間にはそんなものはないのだが 感じることができる。

それは操作者が我に返つて己がしていることの虚しさに絶望しないようにするためという親切心からではなく、アバタロイド・システム自体がゲームとして発展してきた技術だから、そもそも持つている機能なのだ。標準で搭載されている、動いている人間が、実際に運動した時に得られる快感に近い数値を、感覚器官にファードバックさせるシステム。それを人型警邏車両に転用するときに、わざわざ金銭を余分にかけてまで、その機能を削ることに必要を見いだす様な者がいなかつたと……そういうことだろつ。

それにしても飛閃をお買い物に使うというのは、4444は何を考えているんだろうか。データを引っ張つてきたり、高速で計算し

たりが専業のA.I.ならともかく、多分妄想すら可能なT.A.I.は、人間サマなみに狂うといつこともありなのだろうか。

現状として、我が命の生殺^{オマール}与奪^{『権』}はなくとも、『力』は持っている。宇宙で生き物としてはソロ・プレイをして^る保志には、文字通り神様に等しい。ちょっとばかり天真爛漫すぎるガキンちょのようなセレの笑顔に、保志はどうしても背中に寒けを禁じ得なかつたりするのだ。

そんな保志に頓着せず、セレが楽しそうに言葉を続けた。

「さてと、ぐくちゃん、はやく二分の一を、二分の二にするための一^{いつ}を選んじゃおうよ」

腕組みをして、難しげに眉間にシワを寄せ^て、保志はセレに釘をさした。

「人間サマをカウントするときに使う数助詞は、『人』をチョイスするよ^{うに}」

「二^二つで、それって、やつぱり忍耐の二^二んだよねえ……？」

相変わらず美耶子のままで、息子の声でからうと笑うセレを見ながら、本当に総合司法^{オマール}のT.A.I.は真つ当なんだろうかと、日に日に濃厚になつていく疑問に、またしても保志は囚われるのであつた。

6・いい加減な選択

「時間ないんだから。今日中に一人の人選しなきゃならないんだから、どう考へても他の予定キャンセルだよね」

見なくても分かっている癖に、美耶子「」中のセレが、プライベート・スペースのキッチンにあるモニターを見る。どうせ映しているのは自分だろうが……そんな動作に保志はついつかり茶々入れしてみたくなる。

歌つて、踊れるだけでなく、『ミコニケーションのためのおしゃべりぐらいでできなければTAIの名が廃ると考えている節があるせに、厭味をぶつけるといふことは、少なく見積もつても、その十倍の『いたくを聞かされることを意味する。

「そんなに時間はかけなくていいや。データキャンなんかしたら、あの難物の富崎保安官なんか、また留置所の空きがないとか抜かして、被疑者拘留受け入れ拒否されるぞ。あれは時間どおり行かねーと」

TODOリストの筆頭に、『富崎ペット姦淫事案』がある。起つたばかりの殺人事件で現場検証が必要などという、たまにお祭りのように（こういう言い方は不謹慎なのだけれど）起こる重大事件があるときは別として、普段、保志を悩ませる、膨大な数の少額訴訟事件については、どうにも人がいい保安官区で起こっている事件より、へそを曲げさせてはならない保安管区事件を優先してしまう。まったく富崎のところの町は小さくて平和で基本暇なんだから、提訴するまえに「なあなあ解決」に持ち込んでもらいたいものだ。

テラフォーミングに成功したイットルビアで、もちろん金を持っているのはレアアースがらみの連中だけれど、基本的にフレッシュ

な食材に飢えている入植者にとつては、現地で飼育されている乳牛から搾られる牛乳や、屠ほふられただけで冷凍などされていな肉、朝まで畑で育つていたバリバリ新鮮な野菜など、それこそぱつたくろうと思えば、いくら吹つ掛けても、需要はあるのだ。基本、レアーアース産業などといった大企業の子飼いで、こんなとこ今までやつくる連中の給料は、びっくりするぐらいのレベルだ。

そんなことで畜産業従事者や野菜農家の連中は、採掘屋連中と同じく、金銭的には豊かな連中がそろつている。金があつて、娯楽が少ない。仕事は順調ときたら、ご近所さまでチマチマ争うのが、ほぼ娯楽のレベルでまかり通つていて。

やつてていることは地球でありふれていのと同じようなに（むしろ天候がコントロールされている分、地球よりロースキルでもやつていけるに違ひない）伝統的な分類でいうところの第一次産業従事者は、困つたことに全然牧歌的でない。

基本的にこんな仕事を選ぶぐらいだから、元々の保志は静寂を好み。かつてイメージだけで特例総合司法官フロンティアをとらえていたとき、保志にはそれが宇宙時代の開拓最前線フロンティアで、黙々と少ない住民相手に司法という概念そのものを統べる者であることを自らに課していく、ストイックな職業に見えた。

ところがなつてみたらなつてみたで、バッパーは意外なまでに忙しい。三分の一の給料で、前任者にパラサイトしていたころ、そんな事案を保志は見せられた記憶があまりない。絶対に、自分のこういう嗜好を把握した上で、レアース探掘権の争いだとか、そういう案件を中心にお試しした。

が、前任者が引退したとたん、こういふ少額訴訟事件に追いかけ回され始めたのだ。こういう事案があるのは知っていたけれど、どうにも騙されたという被害者意識が保志から抜けていかない。

人口密度稀少域にある少しまとまつた規模の街があれば、必ずいる保安官は手が足りないからかなんだかしらないけれど、こっちが一人なのに遠慮もせずに、すぐ出動要請をかましてくる。

今日のTODOリスト筆頭の事件なんか、ちやつちやと仲裁してしまえばいいような、下らない『争いごと』なのに、ここでどつちかの恨みを買つたら、季節ごとのフレッシュ肉などの付け届けが半分減るから、八方美人でしようと、そういう魂胆に違いない。

それは保志だつて、ペットは家族だという気持ちは認める。辺境なんだから温かいナマモノは誰だつて好きだ。けれど強姦がそもそも成り立たない犬がレイプされたと訴えるのも訳分からないうが、お前のところのアバズレが誘惑したんだという反訴原告の理論飛躍にも付いていけない。本人がいくら溺愛している息子ちやんだろうが、ペットはよせんペットだ。第一、犬にしたつて出逢う機会の少ないところに暮らしてゐるんだから、自由恋愛ぐらいで田ぐじら立てなくたつていいじゃないか。ましてや訴訟にするのはどうかと思う。……まさかバター塗つてゐるつてわけでもあるまいし。

定年延長を決めて、薄給取りに降格する決意をしたからには、絶対、付け届けシーズンには、富崎のところに夕飯時に出掛けようが、心の底から保志は思つた。フレッシュユミートを山盛りサラダでがつり食べれば、元気は沸いて来る。無菌パックではなく、おばさん（富崎夫人）に手で握つてもらつた握りたてのおにぎりにありつければ、もう言つことはない。いつ仕事で死んでも成仏してやる。

「保志司法官。今日のリスト筆頭の、富崎保安官のは、ではどうします？ 行くまでのこともないですよね」

壁面に埋まつてゐるスピーカーからは、落ち着いた言葉づかいの4444の声が聞こえて来る。まあ、仕事の話にセレの調子でしゃべられてはたまらないから、これはこれでいいのだけれど、横にい

る軽口三昧のセレと、本当は一緒にものだと思つと、なんとなく馬鹿にされている気がして来る。

4444が聞いて来るのは、実際に行くのか、モニターで裁判するか、どちらかといつことだ。しつこいが、保志は飛閃と違つ。移動に三時間もかけたところで、ミンチまちがいなし。富崎保安官事務所の備品には高価なシンクロイド端末はないから、シンクロライドではなくアバタードライブにするかどうかといつことだ。

両者の違いは簡単。モニター裁判なら、富崎を呼びつけるのと気分的に等しいが、アバタードライブでいくなら、保志が出向いたと受け取つてもらえるところことだ。

「どーせ、いつもの趣味の訴訟だらう。モニター裁判なんかにしたら、じこをまたち、絶対どっちかへソ曲げちまうに決まつて。アバタードライブでいくよ。身体用意しつつも、富崎保安官に連絡してくれ」

「了解しました」

4444は無駄口をきかないから、まあ、話は簡単に済む。

真面目にじこをまたちの「元気な裁判」につに付き合おうといつ、感心な心の動きからではさらさらなく、じこじらでマメなところを富崎保安官にアピールして、付け届けシーズンの夕飯パラサイト計画を保志が練つていてことなど、想像もしてないだらう。それに、4444ならば、たとえ知つたとしても、セレと違つてつっこみなどを入れたりしてこない。

「ふくちゃん。だからさあ、早く、犠牲者一人選ぼうよつ。本当に、富崎さんとの事件なんかの方が、新人さんに任せるとには丁度なのに」

「バッパー志願者なんて、ビーセ、ビッカ変わってるんだから、そんなんばっかり押しつけたら、違約金払ってでも逃げるって言われちまつよ」

孤独と静寂を愛していたはずの保志には、来し方を振り返つてみて矯めつ眇めつしてみても、セレの賑にぎやかさが、こんな仕事をやってみようという変わり者に受けるとはとても思えない。

「セレ……、お前、最初のうちは絶対に顔出すなよ」

「……なんですか？」

「獲物が逃げちまうだろ？ 二人の新人がいなきや、三分の一は適用されないんだからや、」ヒはジヨリーコ・ロジヤーがお出ましになるまでは慎重にいかねーと

「あつ、ひつビーい。オイラが出ると、新人さんが逃げるつて、そういう意味？」

ぐるりとセレ 美耶子のままだ が、背を向ける。そのじぐさに、つい保志は笑つた。

「まあ、すねるなつて。セレ。いつまでになるか分からないけど、もつむよつとだけ、付き合えや……相棒。延長戦開始だ」

ぐるっとセレが体をもう一度半回転させた。

「ありがとう。だーいすき、ろくわちゃん」

保志の首にだきつきてキスをしてくる。「冗談ではない。確かに先程その体と濃厚なスキンシップを楽しんだが、中身がセレでは話が違う。うへえとばかりに逃げようとするが、馬鹿力ががつつりと保志を確保した。そう、あのときは美耶子本体と同等レベルの力しかないが、セレのアバタロイドなら、戦闘特化型ぐらいの基本性能がある。この上なく頑丈で、パワーもある。見掛けがこんなでも、これはあくまでも美耶子じゃなくて、ジまでもSENSE4444なのだから。

「ああ、なんで逃げるのさ。可愛い美耶子さんなのに」
割れ鍋、閉じ蓋。本当に、あんな強烈なお人柄なのに、かつての保志はあれを迂闊^{うかつ}にも可愛いと思つてしまつたのだ。壁のシミだと、そんなものが例えば一度顔に見えてしまつたら、その後、何度も見ても顔に見えるように、可愛いと思つてしまつた呪いは、執拗に保志を支配している。けれど、中年男としては、こういうしかあるまい。

「美耶子のどこが可愛いんだ」

「……いいつけるよ」

今、美耶子の機嫌を損ねるようなことはしたくない保志は即座に言つた。

「冗談じゃない、勘弁してくれ」

本当に、セレがどこまで笑える冗談と、怒らせる冗談の違いを理解しているのか分からぬ以上、止めておくのが良策というものだ。

美耶子に変なことを伝えられて、折角得られた許可が白紙撤回されではたまらない。保志は話題を変えるべくセレに命令した。
「三分の一リストに登録されている人間のデータを、見せてくれ」

「アイサー」

セレの返事は早かつた。

* * *

「これでいい」

「へ……？」

セレがTAIのくせに間抜けた声を出す。執務室のメインモニターに一番先にリストの一一番が示されようとする刹那ほど前、保志が画面も見ずに決定したからだ。

直後、画面から立体映像が飛び出してきて、保志の目の前に立つた。

「デカい……。

それが保志が、「あいあい」と相澤亜衣里の等身映像を、目の当たりにしたときの一一番最初の感想だった。

混血がそこそこ進んでいるとはいえ、日本人はモンゴロイドの割合がそうは言つても高い。「ごく平均的なところに位置する保志は百七十センチ台のだいたい真ん中辺り。そんなわけで外人ならともかく、同国籍の女の子を見上げる」ことは滅多にない。精々同じぐらいで、だいたいが低い。けれど、この第三種三分の一リストの「あいうえお順」の一番前、イロハで言うなら「イの一一番」に相当する場所にデータがあつた相澤は、保志より多分十センチは確実に高い。幅もなよなよとした細いところが全く感じられない。浅黒いのは、人種的なものというより、日照時間の関係だらうと思われる。

「ろくちゃん……。女の子……だよ？」

「我が職場にも潤いを……、リストに入つてることとは、直属上司のお墨付きだ。能力的には問題ないんじゃないかな」

「特殊急襲部隊、S A T (= S p e c i a l A s s a u l t Team)、の制圧班だつて。へえあ、女の子なのに」

「TAIの癖に、ジェンダー抵触発言していいのか？」

「今はろくちゃんしかいないじゃん。あんたがチクらなきゃ、問題

ないつて。うわっ、すげーつ、この子、よく死んでるなあ、二十四回も死んでるよ……。すんげえタフ」

当然、三面画面びっちりに表示された、相澤のプロフィールを保志が読むスピードは、表示した本人であるところのセレの速度に追いつくものではない。老眼が進みつつある自覚がある保志は、そもそも読もうとすらしていない。

名前は太古（？）の昔、つまり人類の活動範囲が H R B ^{ハーブ} 限定だったところから、変わっていない S A T。言わずと知れた、警察の中でも特別凶悪な犯罪に対抗するべく存在する部隊だ。

凶悪というのは、ハイジャックや、重要施設への立て籠もり、要人誘拐など、相手が銃火器を大量に所持していることが見込まれる場合であり、当然、命は常に危険にさらされ、死と隣り合わせにいる部隊だ。

もちろん、そんな凶悪犯も、問答無用で撃ち殺すなんていうのは、日本人としてありえない。そんなこんなで採用されたのが、シンクロイド・システムである。たとえ相手が凶悪犯であろうとも、その人権を人質の命同様守ることを優先するのが、日本気質というやつである。

保志は阿呆らしいと思うけれど、武装した相手をできるだけ殺さない様にというのは、それは現場を知らないやつの戯言であり、下手をすると「死ね」と言っているのに等しい。けれど、日本という国は、「一人の命は地球より重い」という建前を、蔑ろにしてはいけない」という無茶がまかり通る国なのだ。ショットガンだのマシンガンだの、火炎放射器を振り回している人間すらも、問答無用で射殺してはいけない。できるだけ生かしたまま制圧しろというのが、S A T の制圧班に与えられている任務である。一方で、隊員を那么简单に殺されはならないのも、また当然のことである。

そういう必要から、活動現場と遠距離というわけではないが、S

ATでは、シンクロイド・システムが割と早い段階で採用された。

四つ裂きに一度されただけで、その痛みと恨みを忘れることができない保志にとって、現場で殺された回数が一十回を越えていると、いうのは、信じられない。そこまでいくとタフと、いうより無神経だ。シンクロイドの感覚器は、シンクロイドの感覚器が受けた刺激は全て脳味噌に本体が経験したこととしてフィードバックされるのだ。もちろん、シンクロイドは、実際の衝撃を本体に加えるわけではないから、保志のよう四つ裂きされようが、脳漿をぶちまけながら、首から上を失くそうが、死にはしない。死にはしないけれど何というのだろう とにかく、不快。

何せ、脳味噌は感じてしまった痛みを、そう簡単には忘れてくれないのだ。もちろん、痛みは原因さえ快癒すれば、感覚として再現し辛いものだというのは、当然なのだけれど、知死レベルの痛みを受けたら、心の方のダメージが大きく、保志の経験では三週間は心が動けない そんなイメージがある。

「いくつ？」

「二十八。だいたい、女の子じゃなくとも、そろそろ制圧班卒業していく年齢だね」

何を聞いても、セレの場合、ひと言、ふた言余分に情報が返つて来る。なるほど、セレの過剰なおしゃべりは、情報収集にことさらマメでない、保志に特化した仕様と言えるかもしれない。

「……現場で飛び回りたいっていうのが、バッパーへの志望動機か？」

保志は腕組みをする。とにかく、余程ずば抜けて適正が認められたとしても、新卒でSAT配備はありえない。だいたいが機動隊、それも銃器対策部隊辺りで何年かやっていたものが、志願して、適正を認められたものが入隊するのが普通だ。

とすると、まあ、少なく見積もつて、この相澤亜衣里は、二十三、四でS.A.T入りして約四年で一十四回死んでいくことになる。単純計算で見積もつて、一年に六回、つまり一ヶ月に一度は必ず死んでいることになり、これはタフといつより懲りないからこそできるといふことだ。

現実問題として、凶悪犯でも、やはり殺人にに対する禁忌みたいなものは、それでも一応あつたのだろう。その証拠に、シンクロイド導入を境に、捕縛対象者の銃火器使用率は、跳ね上がつたという。もつとも、突入する方も、どうせ本体は死なないのだからと、自分の安全確保より人質の救出などを優先する風潮^{アタック}が強くなっているに違いない。そうでなければ、このS.A.Tの突撃^{アタック}担当者の、シンクロイド・ライティング中の死亡回数は普通でない。

「あ……」

セレが突然素つ頓狂な声をあげた。

「どうした？」

一応、T.A.Iだろうが何、だつが同僚だ。

「……一十五回目。本當によく死ぬみたいよ、このおねえさん。オイラ、いちおうこのボディ愛着あるからさ、そんなに簡単に壊されちゃうといやだなあ」

一応といふか、なんといふか。職務上の必要から、4444はオマルのメインと虚空間通信でリアルタイムに同期している。いつみれば、オマルのメインは積極的に自分から動いたりしないし、無口に徹しているが、事実上、4444はオマル・メインのシンクロイドみたいなものかもしれない。その4444のぶつちやけ派出所みたいなセレは、その気になればオマル・メインに思考させることが可能なのだ。

多分今4444は、相澤亜衣里に関してのオマル・メインの検索機能をフル活用してるのだろう。

相澤が所属している日本の東京にあるS.A.Tのメイン・コンピュータも亜空間通信機能を使って、リアルタイムでオマル・メインに同期している。ということは、今相澤亜衣里は今この瞬間、知死レベルダメージを受け、ミッションに参加しているものとしては、行動不能になったということだ。

単身任務が当然の保志にしてみれば、自分が死ぬということは、要救助者を救援できる能力が奪われたということで、決定的な敗北だ。S.A.Tはチームプレイだから、一人や二人、盾になって死んだところでミッションはその瞬間にFailureというわけじゃないんだろ？けど、バッパー修行するなら、死にやすい体质をどうにかして改善せねばなるまい。

「愛着つて」

何げなくスルーしそびれて、ひと言セレに言い返してしまった。

「……なんども、なんどもお……ろくちゃんに抱かれて、いかされたあ、この身体あ」

保志の身体から力が抜けそうになる。セレが突然に腰をくねらせて踊り始めたので、保志は心底、倒れたくなった。

「ド阿呆がつ。踊つてる場合か！」

俺が抱いたのは美耶子であつて　断じておめーなんかじゃねえつ　と、そういう叫びが保志の頭骨内にこだましていた。だいたい、あのどら息子ならともかく、美耶子は断じてそんな下品なダンスはしない。

「あ、でも、この子の質量だと、オイラの身体と共有は無理か。ちよつと素材の量、足りないや」

「」サイズ？　うちの備品にあつたっけ

「ない。なんでかしらないけど、ろくちゃんがこの子がいいなら、

身体特注しなきゃねえ。今日日^{きよひ}、予算を使い切るのは趣味じやないんだけどな。メインに頭悪いつて言われちやつし

上は湯水のように使つても、官僚以下公務員には、血税の一滴を大切にするように指導が徹底される。予算は必要に応じて割り振られるが、それを使い切るのは能力的にどうよと言われるのが、世知辛い今日日^{きよひ}のこととて、4444も予算投入にはいちいちウルサイ。

計算機片手に家計簿をつけていり、一般的なイメージの女房みたいな（美耶子^{ラージ}は高額収入の自営業者だから、申告は税理士任せだ）4444が、「サイズのシンクロイド・ボディの新規購入に積極的になれないでいるのをみると、保志はむらむらと逆らつてみたくなつてきた。保志も、趣味の訴訟オヤジどもと、実のところそつう変わりはない。

「今まで、随分ささやかに生活してて、累計余剰予算は随分溜まつてるだろ？ 天下の三分の一のためなら却下なんて、ありえないだろ？」

「あ、オイラのかつこいいろくちゃんが、予算使い切れ型のださい中年公務員になりさがつちまつてるよ。本当に、定年ぐらいで、社会から追い出される方がいいのかもね」

「ぬかしてろよ」

セレが伸びをした。

「少ない予算でやつてるんだから、そんなに簡単にボディ壊されても困るけど、まあ、SATじゃないんだから、そもそもそんなに死なないか。ろくちゃんだつて、まだ三回しか死んでないし。まあ、相澤さんが辞退してくれるよつて祈つてよ」

「つたく、おまえらつて、本当に……。まあ、考えてみる。毎日ライドするつてことは、慣れてる方が新しい環境にいくのに負担は少ないだろ」

「新しい環境でびびるよつたやつにバッパーができるのかよ、ろく

ちゃん」「

保志は思つ。只でさえ、こいつらの方がストック型の思考能力も演算処理系の思考も断然上なのだ。その上、考え、思い、想像させようと思つたところが、もしかしたら人類史上、決定的な歴史的ミステイクだつたんぢやない？

「とにかく、俺は一人選んだ。もう人は、セレおまえがきめろよ」「えーっ、オイラが？」

「俺が予算使つたから、おまえは自分と身体共有できるサイズの人間にしどけよ。4444は一台もシンクロイド受信器調達する気はないだろ？」

「……うん」

セレが自分が人間を選ぶことに戸惑つてる様な、複雑な表情になる。保志は心の底から思つた。それを美耶子の顔でやられると、うつかり抱きそうになるから、さつさといつものに戻つてほしいと。

保志は本人が希望していく、直属の上司が推薦している人間だけが第三種三分の一希望者リストに載つてきているのを知つていて、正直、そんなのだれでも同じだと思つていて。データをどれほど吟味しても、直接会つたときの直感が一番人間にとつて分かりやすい。ぱっとみて、「ああ駄目だ」と思つた人間とは、何とかうまくやつしていくのが精いつぱいで、「いいな」と思つた人間とは付き合いやすい。もちろん、付き合つていいくうちに印象がガラつと変わると、いうパターンもあるけれど、まあ、そつちは例外だ。

会つてみる前に、どれほどデータとにらめっこしても、それは時間の無駄というものだ。面接してから決定できるから、会つてみて駄目だつたら、次を試してみればいい。とにかく、三分の一条例の適用を申請した以上、今日が終わるまでにオマルに申告しなければ

いけないのは、とりあえずの候補者一名を選ぶだけでいいのだ。

「とにかく、適当に選んで決めて、後は会って駄目だつたら対処してくしかねーだろ。とにかく一人のうちどつちかが、バッパーとして一人立ちすることになつたら、多分どつちかとは、おまえが付き合つていくことになるんだから」

セレが小さくため息をついた。

「……オイラは……ろくちゃんがいいのにな……」

それを保志は聞こえないふりをした。年をとつていくのは生き物の逃れられない運命だ。出会った人を見送つていいくのがT·A·Iとして生まれたしました以上、セレの運命だ。忘れっぽさと無縁のやらにはつらいだろうが、やつはやつらの運命を生きる義務がある。胸の内で保志は一人囁いた。

だあれが甘やかしてなんかやるもんか。

まぶしい……。

棺桶の蓋が開けられるとゆっくりと覚醒感がやつてくる。体中が痛いのは、脳味噌が痛がっているだけで、自分が痛いわけではない。相澤亜衣里は、吹き飛ばされてなくなったはずの手を、拳を握り込み、掌を開くことで無理矢理、脳味噌に思い出させた。動く以上はあるのだといつ、強烈なメッセージ。

そもそも、脳味噌にそこにあることを思い出してもらわなければならぬ。今日は、至近距離から頭に被弾した。感覚としては多分即死。じわじわと死んだときが、やっぱり起きたときに最低の最低で、今日のような即死の場合、強烈な痛みや死んだ自覚が脳味噌にない方が、自分に帰りやすいことに気が付いて以降、痛いのキレイでナマゴロシが大嫌いな彼女は、積極的に「弾除け」ポジションを買って出ている。

頭の悪い男どもは、亜衣里の蛮勇を信じられないと笑うが、半分吹っ飛ばされて、生還してくる連中の方が、絶対脳味噌が傷ついてるはずだと確信がある。

その証拠に、今日だって、即死前に吹っ飛ばされた右手の方が、有ることを思い出すのに苦労するではないか。

棺桶を覗き込んできているミッショソ・ソポーターの金城のあきれ顔がぼんやりと見えた。これって、ドラキュラが覚醒するとこうみたいで厭だよなア というのが、彼女のホンネである。

どちらかといふと、棺桶からは、ナイス・ボディのイケメンの王子様のキスで、白雪姫モードが希望なのだが、小学校のときから群衆を抜いて体格に恵まれていた彼女は、学芸会でお姫様をやつたことは一度もない。

亜衣里とて、生まれた直後から象だつた訳ではない。健康に恵まれたふくふくと可愛らしく太つた幼女時代は、ママが絵本を読んでくれるのが大好きだつた。当然のようにお話に出でくるキャラクターで自分をかぶらせるのはお姫様だつた。そう、これでも、ずーっとちつちつちい頃から、お姫様にあこがれているのだ。

けれど、心外なことに健康優良が行き過ぎて、幼稚園のころは既に同学年一番大きな子より頭一つ大きかつた。いわゆる相撲取りの小学校時代の集合写真のようなアレだ。

小学校の修学旅行の集合写真では、隣に立つて立つていた担任の女教師よりでかかつた。

そのころのママは「女の子は成長が早いから、そのうちみんなに追いつかれて同じぐらいになるわよ」と、言つていた。それを無邪気に信じていたけれど、その期待はずーっと裏切られ続けた。高校で百八十五を越えた辺りで成長はようやく止まつてくれたが、やや遅きに失した感は否めない。

高校時代に所属していた演劇部では、足りない男手を補うための男役がいつもで、お姫様だつこされるどころか、軟弱な男より亜衣里に抱かれたいという我が儘な友人の願いをかなえて、カーテンコールのときには、彼女をお姫様抱っこしてやつた記憶まである。

あの年頃の女の子には、ナマモノの男はちょっと濃すぎるのか、

女子校でもなかつたのに、ファンクラブまで作られてしまったのは残念すぎる青春だった。

大道具の男の子に、高い場所に据えつけるモノを押さえる係として指名されつづけ、女の子らしさを宣伝するために身長を聞かれたときには五センチ以上さばを読んで、百八十三センチと答えることにしているが、まあ、みんな百八十超過といつ情報まで亜衣里の大きさに納得してしまつのか、その端数のこだわりにだれも気付いてくれない。

自分で言つのもなんだけれど、運動神経も抜群だった。軟弱な文化部に所属していながら、運動会で走つては、陸上の短距離のランナーを蹴散らして悔しがらせ、球技大会ではバスケ部の女子でできるやつはだれもいなかつたダンクショートを叩き込んで格の違いを見せつけた。もちろんバレー・ボーラーなど、甘いブロックの上からスパイクを叩き込むなど、さして難しいことではなかつた。

けれど三つ子の魂百まで。笑われるのが厭さに大きな声で言つたことはないが、お姫様になりたいという要求は、現実に遠ければ遠いゆえにか、とてつもなく強くなつていて。亜衣里は思う。なんてことだらう……と。

忘れもしない高校のとき。乙女ゴロロをいつもやさしくくすぐつてくれる、あこがれの先輩が、亜衣里にもいた。どうせお姫様役がまわつてくるはずもないのに、彼女が演劇部なんかに入つたのには、その先輩が演劇部の部長だつたからだ。

彼が卒業していくとき、思い切つてデートを申し込んだ。

彼のひと言がこうだつた。

「友達としても、男役の後輩としても、亜衣里のことは好きだけど、

お姫様だっこができるサイズの女の子以外と付き合つ氣はないんだ。

「

亜衣里は悔しくて、一晩中枕を濡らして泣きつづけ、乙女ゲーロードを歩く様な男を捕まえてみせると。

非力自慢をするようなタラな男は絶滅してしまえ……。だがしかし、世の中、タラばかりだつた。亜衣里を抱き上げようなんていう、酔狂に挑戦しようとする男がまずいない。

そこで、だれもが行くからというほどの理由で行った大学を追い出される年頃、つまり就職適齢期に差しかかったとき、亜衣里は、体育会系の男がわんさか生息していそうなところにしようと、至極単純に考えた。警察とかガードマン系と、自衛隊系しか思いつかなかつたのは、ファンタジー読みの彼女の偏つた読書遍歴の帰結だつたといつて過言でない。

自衛隊と警察を天秤にかけて警察を選んだのは、土砂崩れ災害が多い亜衣里の故郷では、自衛官は正義の闘うヒーローというより、土砂崩れ災害のたのもしい助つ人というイメージが一番濃かつたからだ。北海道の友達も言つていた。「自衛隊つて雪祭のためにいるんじゃないの?」と。どうせなら悪漢を蹴散らす様な種類の男がいいではないか。

しかし亜衣里は知らなかつた。警察といふところは、結局男尊女卑の考えがいつまでもベースにある男職場であつて、亜衣里のような数字的や出す結果が、男に有無をいわさぬレベルの女には、とことん冷たい職場だつた。

婦人警官仲間には、いつものように亜衣里のシンパともいふべきファンクラブを結成され、男からはさつさと嫁にいかせたいが、あれを片づけるのは至難の技だと、そこまで厭味を露骨に言われる。

おとり捜査でも、そこまでデカイと犯人を警戒させてしまつからとバツクアップに回された。

ただ、押し出しがよく、頭もそこそこ切れ、身体操作能力が抜群の女というのが貴重だと、国賓のファーストレディの身辺警護など、女でありつつ、ゴリラであることを要求されるポジションに、いつの間にか押しやられてしまつていた。

そう、亜衣里はセキュリティ・ポリス出なのだ。機動隊出身者が多い特殊急襲部隊（S A T）の中で、S P出の亜衣里は異色といえるだろう。S P時代の亜衣里は、少数精銳の貴重な女性戦力として、先着警護部隊（S A P）ではなく、ばりばりの近接保護部隊だった。もちろん、S Pに選出されるということは、柔道は三段以上、射撃上級以上は最低レベルである。基本真面目な彼女は、要警護者と普通に意思疎通ができるようにと、激務にあつたにも関わらず、英語、フランス語、スペイン語、アラビア語、中国語の日常会話をマスターしている。

S Pというのには、不文律だが容姿端麗であることも確かに条件の一つとされている。そういうわけで、亜衣里の同僚には、マッチョなイケメンは掃いて捨てるほどいた。ただし、そのだれもがだれも、亜衣里を恋愛対象とみなしてくれなかつたという……。

どうやら男というものには、プライドとやらいうものがあるらしい。格闘訓練でも滅多な覚悟では制することができず、射撃の腕もオリンピック級、勉強熱心でつねに上昇志向の亜衣里のような女はそもそも恋愛の対象外だつたらしいのだ。また、激務である彼らは現実に配偶者選びをする年頃になると、官舎で夫の帰りを待つ様な、専業の奥さんを選ぶやつが多すぎた。

激務は激務だったが、労働者の権利が過剰に保障されている現代において、二十四時間仕事に拘束されるわけではない。恋人もいらず、結婚も遠い。就職してからの仕事の関係で、大学までの友人たちとは距離があいてしまつたし、亜衣里は、暇なついでに勉強を熱心に

するぐらいしか暇つぶしがなく、一種司法試験まで取つてしまつた。

亜衣里は、ステキな王子様に愛を告白される夢をずーっと持つてゐるにもかかわらず、ステキでない野郎すらもてたことがない、人生イコール彼氏居ない歴鋭意更新中であつた。

亜衣里は、鏡の中の自分を見る。別に特別に人間の範疇からはみ出した造作とも思えない。デカイだけなのに、人生は不公平だと、ボヤきの一つもため息と共に吐き出しあくなる。

そんな亜衣里が上司の残留依願を蹴つてS A Tに志願したのは、男漁りが目的ではない。S Pというものは警護対象が男性ばかりとは限らないから、女性も少ないがそれなりにいる。身長百八十前後で、格闘技の達人であり、銃火器の扱いに長け、法律や政治、国際情勢について存分に語れる、能力的に対等な友人というものを、彼女はS Pになつて初めて得た。

その一番の親友だつたハ木透子^{ハキトモコ}が、三年前、自爆テロを阻止しようとして爆死した。そのとき、彼女は心からテロリストというものを根絶したいと思った。

要人というものは、本当に社会を守つてくれるのだろうか？

そんな疑問に捕らわれたら、S Pなんてやつてられるものではない。S Pは自分から攻撃することはしない。悪さをしているやつを叩きのめすこともしない。飽くまでも要人の命を守るためにしか働けない。そんな立場に我慢ができなかつた。我慢ができなければ、我慢しないというのが亜衣里の基本的性格で、だから彼女はS A T勤務を勝ち取るべく、猛然と上に働きかけた。飽くまでも彼女は行動する人なのだつた。

* * *

「金城さん、人質は？」

言葉がすんなり出て来るといふことは、相澤の脳味噌が生きていることをちゃんと把握しているといふことだ。並の隊員なら、死んだ直後にこうはいかない。金城は苦笑する。

「あいあいがルート確保してくれたから、何とかね……大丈夫？ 気分は？」

金城の役所であるUUA、SATサポート・スタッフといふのは、SAT自体の効果的な運用を目的とするだけでなく、隊員の受傷事故防止にも厳しく目配りをするのというものだ。シンクロライドしてのこととはいえ、よく死ぬことで有名なあいあいは、金城にとつて常に監視の対象だ。

ちなみに「あいあい」というのは、今の部署で採用された彼女の愛称ではない。アイザワでアイリでいあい。その単純な呼び名でずっと呼ばれてきた。

「アイアイ」という童謡がある。サルのアイアイを歌つたもので、幼いころ彼女は自分のことのようで、その歌が大好きだった。

ある日、アイアイを図鑑で見て、ショックを受けた。みごとなぐらい可愛くなかったのだ。お皿が丸くて、尻尾がながいのは歌の通りだつたけれど、そういえば「可愛い」などとはあの歌はひと言も言つていなかつた。

あいあいといふのは、自分に合つてゐる渾名だと亞衣里は思つ。齧歯類だと思えば可愛いけれど、サルだと思うとびっくりするよつた外見。あいあいも闘う人間だと分類すればみられるはずだが、可

愛い女の子にならうとすれば、周りをピックリさせる。

ちなみに、SATの忘年会で、「この際だからはじけて、好きな格好をしてこい」といわれたとき、ハイヒールを履いて、パニエを仕込んだ膨らませたスカートをはいて、ひらひらのビスクドールの格好をしていった。一人ぐらい「可愛い」と言つてくれることを密かに期待して。けれど、「おしゃれ」と分かつてくれた男は一人もいなかつた。それどころか「仮装にしても、頑張ったなあ」と言われてしまつた。

酔っぱらつた勢いで涙がとまらなくなつた亞衣里をなぐさめたのもまた、金城だった。それ以前から、彼女は金城に頭があがらなかつたのだけれど、あれ以来、彼女の前では素直に心を吐露できる気がしている。泣いているところを優しい胸で抱かれた記憶はやつぱり照れ臭いけれど、とても気持ち良い記憶だ。この際、男は諦めて、レズビアンに転向してみようかと、酔つた頭で真面目に考えたぐらいだ。

金城は、数少ないSATの女性隊員のOBであるから、今も少ない女性隊員の精神支柱として、指令車にいてくれるだけで有り難い存在だ。

多分データ上は彼女より名簿が前にくる人間もいるのだろうけれど、今までのところ「あいうえお順」の名簿では、常にトップにつづけた。

人間好むと好まざるとに関わらず、そこにいるとクソ度胸がつく。だいたい、自己紹介にしろ、当番にしろ、指名にしろ、真っ先に回つて来ることが多い。じっくり考える暇などあればこそだ。

「全く。透子ちゃんの仇討ちにしたつて、死にすぎだよ。あいあいは」

金城がため息混じりに言つ。あいあいはSATを志願した理由を、胸に秘めてなんかいないからみんな知つているのだが、別に透子の

仇打ち目当てに死んでいるわけではない。けれども誤解してくれているなら、敢えて死んだ後が楽な場所を狙っているだけとは、言わない方がいいといつぐらいいのズルさも亜衣里にはあった。

中途半端な笑顔を見せて、亜衣里は身体を起こした。やつぱり脳味噌は吹き飛ばされた直前を記憶しているらしく、ちょっとと有ることが把握できずに立ちくらみがしそうだつた。

「あわてて起きなさんな。あいあいが倒れたら、だれも運べないし」

「金城さんまで、ひどいなあ」

金城が失言だつたと想い出してちよつと舌を唇から覗かせた。

「じめーん、悪い、悪い」

金城は思う。もしかしたらあいあいは酔っぱらつていて言つたことすら忘れているかもしねないが、「お姫様だつこしてバージンロードを歩けるような男じやないと、我慢できないんですつ」という理想の男性像を聞いて、ちょっと余りにもの幼さに苦笑した。恋なんて、そういうものとは関係ないところにあるものなのに……。

自分だつて、切れ者でスマートな男と結婚する予定が、ハゲかけたメタボ体型のおっさんと結婚したのだ。別に打算の産物でそつたのではなく、ほれちゃつたのだから仕方ない。本当に恋愛感情というものは全く不条理で、理想などとは全く関係ないとこに、ある日突然に転がつてこることに気付く。

S P だつたことでも証明されてこるよつて、あいあいは目鼻だちも整つてゐるし、頭もいいし、ちょっととぶつ飛んだとこもあるけれど、十分に可愛い女の子だ。ただ、問題はその大きさだ。あれであと十センチも低かつたら、彼女に猛攻する男に事欠かないだろう。実際、鈍いあいあいは気付いてないが、女神様を拝むような熱い視線を彼女に向けている若い隊員は少なくない。

男どもが素直な恋心を告白できないのと一緒で、あいあいは、普通サイズの男をそれだけで恋愛対象から除外してかかつてゐるから、

問題はややこしくなる。一緒に生きていくには、価値観が近いことが大事なのに、自分の外見に捕らわれているのは、あいあいの方だ。

あいあいの下らない夢を粉碎するぐらいの出逢いが、あいあいの未来にあつてほしいと、金城はそう思つたが、如何せん、二月と開けずに死ぬような激務を嬉々としてこなしているあいあいに、普通の男は堪えられるのだろうかという疑問もある。だれだつて、自分の奥さんには、命をかけた仕事なんてして欲しくないはずだ。

「あら……あいあい、オマル呼出しだつて……」

司令室の壁面モニターと同じ画面が、女性隊員の出撃待機基地でもあるUSSの金城のオフィスにも映し出されている。オマル

「……へ？」

総合司法局呼出しどうのはただごとではない。壁の端末の色が黄色に点滅することなど、年に数えるほどだ。

あいあいは慌てて服を着始めた。シンクロイド・システムの受信器は、着ているものを忠実に形だけ再現してくれるが、飽くまでも見掛けに限定される。機能の再現性はないために、突撃服を着て出るときに、脱ぐ手間をかけるのは阿呆らしい。当然、下着姿になる。そんな必要性から女性の棺桶は、普通に女性専用の部屋に置かれている。シンクロライドしてから、初めて突入服を着用する。

総合司法局、人口密度稀少域特例総合司法官管理課の雜賀だ。
相澤亜衣里さんでいいかね？

慌てて服を着込んで受信モードにすると、亜衣里の目の前のモニターには、白髪まじりの眉毛を裏切つて、つやつやと異常に黒い頭髪が違和感たっぷりの男がいて、そいつは前置きもなくしゃべりだした。

「はい。相澤は自分です

つい敬礼をしながらしゃべってしまった。習い性と言わればそれまでだ。

まず、確認しておきたいが、特殊技能保持のための後継者育成に掛かる特別定年延長措置法令のリストに名前があるが、それは確かに相澤さん本人の意志によるものということで間違いないかね。

「さ、三分の一特例」？　あいあい、あなた、どうこうことで初耳だつた金城の声が裏返つた。

「あ……、忘れてた」

亜衣里も、すっかりその存在を忘れていた。

……。

画面の向こうにいる、黒髪ふさふさ男の眉間にひくついた。彼女がそれに応募したのは、頑張つて勉強した第一種司法試験に受かった直後のこととで、合格後にもらつたパンフレットの中に、人口密度稀少域特例総合司法官という、聞いたこともない職種の案内があったのだ。絶対数が少ない。応募が掛かる機会も少ない。何をやってんだか分からない。けれど、宇宙の果てで仕事をするという、余りにもズバ抜けた非日常に、なんとなく心が惹かれた。警察官という日常と、宇宙開拓の最前線という日常が、一種司法試験に受かったことで、突如として垣間見得た。

だれだつて、もし宇宙飛行士になれるとしたら、なりますか？、ときかれたら「ハイ」と答えると思う。

けれど、じゃあ明日から宇宙に行つてくださいというようなどんでもない方法でオファーが入つてくるというのは想像もしていなかつたことだ。

あいあいの呪い。日本にいる限り名簿の常にトップにいることの

呪いが、ここのたびも堂々と発動したというのですから、彼女には分かつてない。

「あ……の。宇宙に……行け……るんですか？ 私
亜衣里にしても、我ながら素つ頓狂だと思える様な声が、頭のて
つぺんから出た。

まあ、三分の一が発動することが少ないとからね。えっと、
まあ拒否権はありますけど、一応概要を読ませていただきます。
この度、貴殿は総合司法局管轄下にある、人口密度稀少域特例総
合司法官として職業訓練を受ける対象として選ばれました。まず、
応募してから一年以上を経過しているもの……相澤さんのようにで
すね……については、無条件で拒否する権利があります。一年に満
たないものについては、環境が変わるなど特別な理由の申し出があ
り、そこに妥当性があれば違約金は発生しませんが、理由に正当性
がない場合は、一円の違約金の支払いをお願いします。……あの、
相澤さんの場合、費用なしで拒否することができますが、とりあえず
参加の意志はありますか？

亜衣里は呆然としていた。宇宙に……それもフロンティアに行く
？ 自分が？

「ちょっと待ってください、雑賀さんでしたかしら？ 横から失礼
します。ＳＵＳの金城です。三分の一は、残る三分の一は現職に従
事することが条件でしたよね。どうやってフロンティアで仕事をし
ながら、現職もやっていけるのですか？」

亜衣里もそれが気になる。黒髪の雑賀が微笑んだ。

普通の方には、このシステムの説明をして納得いただけるのに

も時間が掛かるのですが、シンクロライドしていただけます。十分可能でしょう？

「あつ！」

亜衣里はとたんに胸が高鳴った。シンクロライドは日常茶飯事でやっている。シンクロライドに乗つたら突撃服をきて、重装備を身につけて出動だが、その先に、何千光年（多分）離れた遠い宇宙の職場があるのだ。

くらくらぐるぐらじ、すゞこことじやないか。しかも三分の一でいいなら、残りの三分の一は、今の仕事を続けられる。

だいたい、宇宙が合わなかつたら、確か違約金かなんかを払えばいつでも辞退できるのではなかつただろうか。

「いっ、こきます、いきまーーーーーす。宇宙飛行士になりたかつたんです、私つ」

何を隠そう相澤亜衣里の本棚には、王子様が出て来るファンタジーと負けないぐらいの量のSFがあるのだ。

「あいあいっ、マジ？」

金城がビックリして亜衣里を見る。

「だつて、宇宙開拓最前線ですよつ。フロンティア。観光でだつたらアバタロイド・ドライブでだつて年収の五倍は取られます」

妙なところで、細かい数字を把握しているなあと思いつつ、オマールの雑賀は続けた。

受諾の意志があるようすで、続きを読むまでもらいます。

契約期間は一期を五年として、一期まで検討が可能です。ただし、二期終了の五年後に三十五歳を超過するものに関しては、二期目はなく、後継者として現地に赴任することになるか、現職へ戻るかを選択していただくことになります。……相澤さんは一十八歳でいら

つしゃいますから、五年のみ三分の一特例として総合司法官見習いとして働いていただくことになります。御質問は？

「ありません」

「ちょっとあいあい、ちゃんと聞いた方がいいわよ」

「だって、金城さん、たつた三分の一ですよ」

金城と亜衣里の会話が聞こえないのか、敢えて無視しているのか
雑賀が続けた。

特例措置により、現職での身分は貴殿が希望する限りにおいて
保証されます。……これはご存じのようですね。説明が少なくて助
かります。……ただし、事故・病氣以外の理由で契約期間中に職務
を放棄した場合、規定により科料^{かりょう}の対象となります。

「最初の一回で合わないと思った場合も科料の対象ですか？」

亜衣里が質問した。

「え、行ってみれば徒弟制度みたいなものですからね、個人と
合わないという場合は基本的に無理がありますから、一月のお試し
期間があります。当然、相澤さんにも拒否権がありますが、当然現
職司法官の方にも、相澤さんを不採用とする権限があります。一ヶ月とい
つても、三分の一なので実質十日です。司法官に会つていただ
いて、司法官の仕事を手伝つていただきながら、決めていただけ
ればいいです。」

もちろん、その十日で拒否する場合、不採用の場合、費用は一切
いただきません。相澤さんは現在の職場に在籍して現職を続けなが
ら、毎月十日を日安に、シンクロイドしていただきます。が、これ
も「存じでしようが、身体的な問題から一日の限度は八時間です。」

まあ、何か重大事件が発生して向こうで手が離せないときも、連續しての搭乗は原則禁止、一日を限度とします。また、現職の仕事の関係において十日以上を二分の一プログラムに参加できない場合、十日までを限度として翌月に持ち越すことも可能です。……御質問は？

十日、フロンティアにいく。しかも一日八時間。総合司法官がどんな人かは知らないけれど、こんな美味しい話は滅多にない。

五年間、毎月十日を宇宙で過ごして、残りはここでの日常に帰れる。金城さんとしゃべったり、現場に出動したりするのも自由で、五年後に断るなら違約金も発生しない。取りあえず行ってみて、受け入れ先の担当官が気に入らなかつたら即バツクも可能。こんなに美味しい話が世の中にあつていいのだろうか。

「是非、是非参加します。よろしくお願ひいたします」

亜衣里がしたのが、お辞儀ではなく敬礼だったので、雑賀も見事になれた敬礼をかえしてきた。総合司法局の人間はあまり敬礼はなれていないと思うのだが。雑賀は警察畠の出身なのかもしれない。

「快諾ありがとうございます。三日以内にシンクロイド走査器スキヤナを、血液にモ配便で送らせてもらいます。

「モ配便？」

モ配便が宇宙へつながる棺桶を運んで来る。まるでSFそのものだ。不覚にも亜衣里はちょっと感動してしまった。

亜衣里の傍らでは、金城がまるで西洋人のように大袈裟な、オーノーポーズを取っていた。

保志美耶子は、自分の都合だけをまくしたてる芸能人の言いぐさを、終始にこやかな笑顔と、ときには同情あふれた表情と合いの手を入れながら聞きながら、それが帰つたとたんに肩がどんどんと重くなつた。

毛は出さないからとヌード写真集に同意したのに、バッヂリ写つていた。キャッチコピーが、『四十の熟れたカラダ』とされてしまつて、年齢を出されて精神的打撃を受けたと、そういう趣旨なのだ。が、だいたい、幾らアンチエイジングのお世話になつてゐるからといつても、四十面さげて脱ぐという感覚がいま一つ分からぬいし、好きでもない相手に見せて金を取るうと、根性そのものが気に入らない。自分と同い年の四十五なんだから、五つもサバを読んでもらつて「ありがとう」だらうがと思つて、馬鹿馬鹿しくなつてくる。

大体話の流れでエピソードがこなこな変わつて終始一貫していなところが、地雷持ちだ。半分以上は自分で作った話を語るうちにホンキでそう思つてゐる、事実捏造ねつぞう型、思い込み度強烈なあげく、記憶力が悪いから同じ話を繰り返すだけのこともできない。ついでに加齢現象の弊害ではなく、もともと聞く耳持たない型だろう。聞いての相槌なら「機嫌だけれど、疑問を挟むとこめかみがひきつるのだから処置無しだ。

ついでにヒステリー持ちということは、仕事でなければ付き合いたくもない人種の筆頭だ。綿密な事前打ち合わせをしても、公判で裏切られる覚悟をしとかなきやいけない。大体が、訴訟自体がやらせなのだ。昼間の主婦向け芸能ネタ情報番組で、訴訟になつてゐることを取り上げられて、法廷前で直撃インタビューでも受ければ、

四十五のハダカ写真集だつて、一、三十部は余分に売れるだらうと、そういうことだ。

馬鹿馬鹿しい。勝ちにも負けにも結局は興味がないのだ。基本的に訴訟にすることが目的なんだから、これはもうかかつた費用の申告は、広告宣伝費にするべきなんだろう。

まあ、負けたところで売り上げが伸びれば価値なんだから、こういう事案は逆に気楽だ。これがこれから売ろうとしている女の子とか、清純派きよしんぱで売ってきたのにとかいうような、何がなんでも勝たせないと拙いものとは難しさが違う。

「先生、強烈でしたねえ。お受けになるんですか？」

「まあね。楽にやらせてもらえるからね。どう? お金は多分ばつちりいただけるから、桐谷くんが弁護してみる?」

「えーっ、あのおばさんですか?」

軽口を叩きながら、長身の桐谷がすいつと美耶子の田の前にマグカップを置いた。熱々の香り立つコーヒーに、半分以上冷たい牛乳をぶち込んで、なまぬるいのを超絶でかいそいつで呷あおるのが、猫舌の美耶子の好みなのだ。

もちろん、聞き取りという芸能人のおもてなしをしている間は、ちんまりとソーサー付きティミカップで我慢している。がぶ飲みがおしゃれに映らないことぐらい承知している。

自分は芸能人ではないが、実績以上にクライアントの口コミこみが何よりもコマーシャルだと承知しているからこそ、こういつ演出は必要なのだ。オフィスのインテリアにだつて、めちゃくちゃ気づかっている。

事務で専用に雇つてゐる女の子よりもマメに気が利く桐谷良は、長身の美青年でホストのような見てくれだ。実際の年齢も息子ほどの年ごろだし、夫が不在な美耶子がツバメちゃんとして彼を利用していると噂があるのも知つてゐる。まあ、桐谷に迫られたら、考えな

いでもないが、若者にはどうせ女からの攻撃をうまく捌いて、ついでとばかりに倍返しにして来るほどのテクはないだろう。自分は保志で十分満足している。

桐谷は、ガツツリ一種司法試験持ちで、自分のような「売れてる弁護士」志望という、アグレッシブな青年だ。気が利いて使い勝手がいいから侍らせているだけで、残念ながら夜の一戦はしたことがない。

がつたりと自分にくつついて来れば、ノウハウだけでなく、後々のクライアント開拓につながるという確信から、自分のご機嫌取りにまずスキルを磨くところなんか、なかなかに割り切っていて、逆に下手な正義感をかざすボケ茄子より気持ちがいい。イソ弁（いそうろう弁護士）は流行遅れと言つ人もいるが、なんだかんだいって、直接によい徒弟関係を築くのは最終的に強い。

芸能人御用達、守銭奴弁護士が顔で選んだと陰口を叩かれているのは知つてゐるが、本当の正義をかざすことも知つてゐる。それは、しゃべつている中でわかる。真っ当な正義感と、建前の正義を上手に使い分けることも、損益勘定で動くことも普通にできるベストミックスぶりが、気に入つてゐる。

事務の女の子は時間がきたらさつさと帰るが、桐谷は絶対にそんなことはしない。美耶子が荷物をまとめるまでどころか、二四時間、いつ何どき呼ばれても同行できる様に構えている。

電話が鳴つてきつちり二コール待つてから桐谷が受話器を上げた。向こうは三呼吸あれば切ることもできるし、少しばは逸つていのちも落ちつけられる。これがメーカーのクレーム窓口やら、通販のコールセンターなら、一コール半までには取らないと話にならないだろうが、うちは弁護士事務所なのだ。

もつとも、四コール以上だと、上客を逃すかもしれない。そう、

最初に美耶子が言つたあと、他に手が取られていなければ、三口一ルを忠実に守る。人の話を聞ける上に、記憶力もあって、実行するだけのマメさもあるということだ。

「はい、少々お待ちいただけますか。先生にご都合を聞いてみます」
「保留音が流れると、ちょっと途方にくれた様な声で桐谷が言つた。
「半六判事からなんですが……。その、拙いんじやないですかね？」
「その向こうが。……取り次ぎますか？」

「へ？ 半六判事つて、迫神裁判官よね？ なんで弁護士にコンタクト取つて来るのよ……。不祥事でもやらかしたつて、聞きたいけど、あの半六判事にはそれはないわよね。……今はたしかに半六判事と関わつてる事案はないけど、何考へてるの」
「と、そこまでいつて、美耶子はトンと左掌に右拳をガツテンさせた。

「はは、なあ……。多分、アレだわ。出るわ」

美耶子が手を伸ばすと、桐谷が保留音が流れる子機を持つてやってきた。

「お電話変わりました。保志美耶子でござります。弁護士に御用ですか、保志の家内としての私に御用ですか？」

電話の向こうで、迫神が息をのむのが分かつた。あの常に冷静沈着な男がと思うと、美耶子はなんだかおかしい。ついつい、くくくつと笑い声がもれた。

「どうやら、図星だつたようですね。迫神裁判官。それにしても、あなたほどの人が、何を好きこのんで、三分の一に志願なんかなさつてましたの？」

「保志先生には敵いませんね。どうして、お分かりになるんですか？」

「こつものにこつともしない迫神裁判官のイメージが強い美耶子は、その思いがけない柔らかい口調につつかり「知りたいお化け」に取りつかれてしまった。

「迫神裁判官、弁護士の保志先生としてならお話することはありますせんけど、バッパー保志のリサーチがご希望なら、ディナー・データー一回で買収されてあげてもよろしくてよ。」

電話の向こうで、迫神が笑い声を立てるのか分かった。基本的に同じ法曹界に生きているものではあるが、弁護士は弁護士同士の横繋がりしかなく、裁判官という人種や、検事という人種とは余り交流がない。同期会などで顔を合せても挨拶程度で、不思議と同じ職種を選び取つたものどうして固まつてしまつ。

法服を着て、鹿爪しかづめらしい顔をして、失言もほんなく、時間に厳しく、時代錯誤な勤勉実直を絵で書いた様な印象の男。けれど判決はとこうと、ううううとした通る美声でその判断に至つた経緯を、過不足なく説明し、若手の癖に突つ込みようもない貫禄でまとめて来るので。説諭をはさみこむときの文脈など、人生経験が豊かなはずの自分でさえへへえとひれ伏したくなるほどの、いい味を出す。東京地裁の若手のHースと、多分弁護士仲間も、傍聴マニアも認めているはずだ。

きつとゆくゆくは最高裁にいくんではないかといつ噂も高い迫神裁判官だ。迫神は、裁判官に任官して今年で十年丁度。判事補時代も単独審の裁判官を務めていたほどの切れ者だから、順当な出世で「補」が取れたところだ。

半六という渾名あだなは、六法全書の半分ぐらいは諳じてゐるに違ないといつうところからついたものだ。それぐらい六法に明るいと皆が思つてゐる。

その半六判事と、背中に松が生えてきたような俗な事案ばかりを

やつている美耶子が、一緒に食事などをしていると、弁護士である自分はそんなにキツイ世界にはいなければ、迫神判事は有り難くない立場に立たされるだろう。向こうから断つて来ると思いまや、迫神は美耶子が思つてもいなかつた返事をした。

「仮装するにしても、行き先は重要ですね。カジュアル・テートが良いですか？ それとも、豪勢なものがいいですか？」

美耶子は面白くなつてきた。もともと保志なんかに惚れる様な粗忽者だ。危ない橋をわたるのは、実は三度のメシより大好きだ。

「迫神裁判官、それをおつしやるなら、変装でなくて？」

美耶子はそう揚げ足取りをしてからちよつと考へた。美耶子はどつちかといふと井にマグカップの女なのだ。スーツを着て、表情皺に気遣いながら、一ノ万円のディナーを取るのは本来趣味でない。

「思いつきりカジュアルにしましょう。そっちの方が安全ですもの」

少しだけ逡巡するような間が空いて 向こうも多分、美耶子のそんな提案は、迫神をからかつただけの、ただの言葉の綾で、本当にテートをしようと言い出すなんて思つてもいなかつたのだろう

、それからこんな言葉が受話器の向こうから聞こえてきた。

「分かりました。新橋の高架下で引っ掛けましょうか。旨い串焼き屋知ってるんですよ。保志先生の事務所からなら三十分で行けると思ひますけど、私はすぐには出られませんので、時間は一時間後以降にしてください。それからしたら何時でもご都合に合わせますよ」

意外とフットワークいいじゃない。この子。

美耶子はちよつと、法服姿の迫神を思い出してみたが、全然合致してこない。なんだかとても可笑しかつた。あの迫神がどこをどう間違えて、何を勘違いしてバッパーなんかを志願したのか分からなければ、フットワークが軽い青年は好みだ。だるだるしているヤ

ツが一番きりいな美耶子は受話器をもつたままニヤリと笑った。

「本当に判事が一時間後にこられるか、試してあげるわ。今からきつちり一時間後、新橋駅の鳥森口で……」

美耶子は迫神の返事を聞かずに電話を切つた。なんとなくウキウキしているのが分かる。桐谷が、また美耶子先生の悪のりが始まつたという顔ですこし天井の方を見ていたが、突然につっこり笑つた。

「先生、俺、ボディーガードごっこしていいですか？ 探偵みたいに尾行しますから」

「アフターファイブは好きにしなさい。桐谷君。ただし、半六ちゃんにバレたら来月給与カットだからね。じゃあ、今日はここまで」美耶子はにつこりと笑つて、立ち上がつた。そして、事務所にしている部屋の隣にある仮眠もできる私物置き部屋へといそそと撤収していった。

おテートの前はウキウキする。それが冗談でもなんでもだ。美耶子はきつちりとまとめ上げた髪を洗面台で流してガチガチに固める整髪料を落としてさつぱりさせると、櫛を入れながら少し考える。あの迫神が「仮装」と言うぐらいだから、息子の穰太のような素つ頓狂な格好をしてくるかもしれない。ラッパー野郎ローライなど、「MC」と呼んでくれないかな」というような息子だが、法科大学院在学中に司法試験持ちになるとは、見どころがある。

ただの馬鹿ならつける薬もないけれど、やることをやつてる馬鹿は好みのタイプだ。自分が惚れる様な男を育てるのが、育児の成功なら、まあ、自分はそこそ頑張ったといえるだろつ。

何を着ようかさんざん迷つて、ただのジーンズと、ちょっと明るいオレンジの風合いが気に入つて、穰太から奪い取つたチェックの

「ジトンシャツを下着の上にざっくり羽織る。長い髪をまとめなければ、多分三つはサバを読めるはずだ。

いくら迫神が若くても、息子まではいかない。迫神判事補から「補」が取れたのがこの春だから、本人に聞いたことはないけれど、あれがストレートでないことなどありえないし、日本は他の先進諸国のように、相変わらずスキップを認めていないから、まあ三十一歳、それと誤差、プラスマイナス一歳以内でまず間違いないだろう。つるつるに塗りたくつてもそれだけでババア臭くみえてしまう、いつもの濃い目に作り上げるメイクをやめて、保志好みのナチュラルモードの化粧にとどめる。

小降りのエナメルのバッグを大きいヘンプのバッグにそのまま突っ込んで斜めにかけると、多分あと二つはサバを読めるに違いない。まちがいなく年より老けて見える迫神と並ぶのに、別に違和感はない筈だ。

ただそれだけだとおしゃれ口口が足りない気がして、ウツドリンゴの腕輪を重ねづけしてしゃらしゃら言わせてみた。鏡の中の自分は、多分、いつもの自分より本当の自分に近い。金儲けは、傍で思われるほど樂じやないのだ。

「美耶子センセー、かつこいいですねえ。僕はそういう先生も好きだな」

さらつと厭味のない桐谷の軽口に気がよくなつて、多分あと一つは見掛けが若やいだはずだ。その桐谷は、ジャケットを脱いで、タイを外して第三ボタンまで外しただけなのに、ぐつとカジュアルな印象になつてゐる。新橋鳥森口で、絶対に目立たないこと間違ないい。

美耶子は合格のサインを親指と人指し指で輪つかを作つて桐谷に示すと、裸足にパンプスを突つかけて事務所を後にした。桐谷は、

きつと全部戸締りをして、マグカップを洗つて、明日の段取りまでしてから、新橋に来るだろう。スタート時間と場所が分かっているなら、尾行対象者にべたべた距離を取らないところも、ちゃんと押さえている。

新橋駅烏森口、午後七時半。きょろきょろというのはダサイから、なんとなくを装つて周囲を見回すが、迫神のような姿は見えない。改札を出てきてちょっと誰かを捜しているふうなふりを見せてから、文庫本を読みだした桐谷が見つかつたぐらいだ。まったく、あの子もよくやる。

と、五分ほど前から、ちょっと距離を開けた並びで、美耶子のように入待ち風にしていた青年が、ちらちらと美耶子を見ている。青年は夫の保志より少し背が高いぐらいだけれど、百八十に近い桐谷ほどの長身ではない。その代わり、しつかり鍛え込んでいる分厚い胸板がTシャツのイラスト越しにでもよく分かる。それから、筋肉の形がきつちり浮き出てた美味しいそうな二の腕が、肩までたくし上げたから袖口からずつきりと伸びている。

日本人にはちょっとないほどの鍛え方が見える割に、いわゆるボディビルダーのようなムキムキ感はなくて非常に実用的に作られているイメージだ。

ざつくりと手櫛で乱した様な前髪がちょっと田に悪いのではないかと思われるぐらいが、美耶子の好みに合わないだけで、採点としては九十点を楽に越える感じだ。オバサンとしては、あのウルサイ前髪を櫛でなで上げてみたくなる。

その、青年と田が合つたとき、意外なことに青年の唇がやつぱりとこうよくな形に動いた。そうして破顔する。その笑顔のかわいさ

に美耶子は年甲斐もなく胸がきゅつとなる。

「保志先生…… ですよね？」

その声は、何度も聞いたことがある迫神判事の、滑舌のきつちりとした低めの美声だつた。

「さ、迫神…… さ……？」

美耶子は驚きすぎて声を飲み込んだ。脱ぐといい女というのは聞いたことがあるが、脱ぐといい男というのも存在するのだ。

裁判官と言おうとして、仮面マークだったのだとそれを飲み込んだ。そんな美耶子に気付いて、もう一度迫神が笑つた。

不味い、年甲斐もなく惚れた。

美耶子は[冗談事でなく、胸がドキドキしてくるのを感じていた。

さてと、運命の悪戯とは恐ろしいもので、ちょうどそのとき、バッパー、ジョルジオ保志の実績として一粒種である保志穰太が新橋駅改札を通りがかつたところだつた。普段は生息する若者が少ないここいらは、彼の行動半径外なのだが、その日はたまたま母親、美耶子の事務所に向かうところだつたのだ。

いつもそれぞれ勝手に暮らしているけれど、オヤジが帰つて來るのかどうかによつて、今後の穰太の身の振り方が変わつて來る。

オヤジが帰つて來るつもりなら、独り暮らして來る友達のところにでも転がり込む算段をつけ始めないとならない。オヤジの誕生日の今日、定年延長するのか、それとも退職して帰つて來るのか、仕事前にきちんと話し合つて來ると、朝方母親が言つていた。

その、話し合いの結論だけ聞くために、飲み会に出掛ける前に母親と話したいと思い立つたのだ。

「」の時間ならまだどうせいるはずの母親の事務所に寄る方が、仕事中はプライベートの携帯の画面なんか見もしない母親にメールを打つより断然確実だ。そして、話の勢いによつては、今後のことを見面目に検討しなければならない。

滅多にこないが、母親が事務所を置いているせいでの迷うほど知らない街でもない新橋駅改札を抜けて、勝手知つたる方向に、いつものようにふらふらと、背骨がないような姿勢で歩き始めようとしたとき、目の端に見覚えがある柄のシャツが飛び込んできた。

それは、冷房よけにいいからと、ちょっとまえに美耶子に取り上げられたシャツで、穰太自身、とてもお気に入りだつたコットンシャツだ。それを着た母親は、オバサン厚塗りでもなく、オバサン結い髪でもなく、どびきりの若作りをばつちり決め込んでいた。しかも、どうやら誰か搜しているといった雰囲気。

常日頃、家庭を一度も顧みてこなかつたオヤジに対する厭味を込めて、浮気の一つもしろ発言を繰り返してきた穰太だつたが、そんなのは父親べた惚れの母親だからこそいえる軽口だ。とっさに物陰に隠れててしまつたから、どうして隠れる必要があつたのか自問してみる。

と、目の前で、穰太の目から見ても、ちょっとといけてるカラダをした兄ちゃんと、話出したではないか。

嘘だろ？

穰太は自分の目が何を見ているのか、ちょっと理解が覚束ない。

「」そこ柱の陰になつて、おたついてる穰太がいることなど、当然全く気にしていない美耶子が、ちょっとそいつと親しげにしゃべ

つているだけでも驚きなのに、並んで歩きだした　ビニルか……。

美耶子は青年の逞しげな腕に、その腕を絡めた。

今度こそ穰太の心臓がバクバクいいだした。自分は何を見てしまつているのだろう。美耶子は昨日まで、亭主元氣で留守がいいモードで長年やつてきた。

宇宙の彼方で元気にバッパーをしていたはずのオヤジが、帰つて来るかもしれないと言つていた。煮え切らないことに、定年延長するのか、退職するのか、決めていないオヤジをシメてくると、朝言つていたのではなかつたか？

オヤジが現職のみ引退して、地球から近いJCN^ウの総合司法局勤めに変えるのか、ちゃんと話し合つて来ると言つていたのではなかつたか。

それが、新橋駅で若いに一ちゃんと、若作りにしてテートつて、どういうことなのだろうか。ゲンブツの父親にも懷いていない自信があるのに、その上になさぬ仲の義理の父親が、あんなガキだなんて、どういうこいつぢや。あれなら、オヤジの方が数倍我慢できる気がして来るから不思議だ。

あらうことか、歩き始めた二人の後を、上手い具合に尾行し始めたのは、母親のところにいるイソ弁の桐谷だ。ということは、あの若いのに血道をあげて業務に支障をきたして、真相究明に桐谷が乗り出したということなんだろうか。

もしかして、クライアント？

穰太は一瞬思つて、即座に首を振つた。だつたら、こんなところで、普段メイクでいるわけはない。あの人は美耶子ブランドを安売りはしないだろ。じゃあ、いよいよ本格的な男遊び？ ということ

とは、弁護士・保志ではなく、女・美耶子として、新しい男を作つたということだろうか。

母親は、一笑に付して取りあつていなかつたが、桐谷は噂通り美耶子のツバメちゃんそのもので、美耶子が新しいツバメを作ろうとしていることで、嫉妬に駆られた桐谷が尾行しているとでも言つたのだろうか。

ストーリーとしてなら、後者の方が無理がない。

パパが三分の一延長するなんて言つたら、今度こそ若い子と浮氣するんだからつ。

母親は確かにそう言つてはいた。じゃあ、オヤジは帰つて来ない氣か？ それはそれでめでたいけれど、だからといって、浮氣候補もちゃんと物色済とは、オカシやるな……いやいや、納得してどうする？

一人、脳内ジタバタしている穰太を残して、二人と尾行者一人は雑踏に消えた。追いかけようと思つたのだが、何だか穰太は足に力が入らなかつた。

柱に背をもたせて、それからズルズルと地面に向かつて落ちていつた。

「驚いたわ。なんで、そんなに良い身体してゐのかしらね」

普段は法服に隠されている、迫神の生の腕。初めて見たその腕の、あまりの素晴らしいに、つい絡めて指先で撫でてみる。とにかく、夫も、息子もこういう彼女好みの腕はしてないのだから、これは触らずにいられようか。拒否されたら、一応デートということになつ

てはなかつたかとリマインダーを入れてやろうと待ち構えていたのだが、迫神は拒否するでもなく、照れるでもなく飄然としている。

「おばさんは、対象外だからスカしてるの？ それとも、女に慣れてるの？」

つい厭味モードになつた美耶子に、少し迫神が照れた表情になつた。可愛い。

「慣れてないですよ。ただ、僕が通つてる空手道場は女性も多いので、その……女性に触られるのには、あんまり抵抗ないかも」「迫神さんつて空手マンなんだ。意外だわ。で、そういうカジュアルな格好もサマになつてるけど、プライベートではいつもそうなの？」

「稽古に行つてるとときはこんな感じかな。山に行くときは違いますけど」

「山？」

「ええ、裁判官なんてやつてると、人の毒に当たられちゃうこともあるんですけどね、それで、いちいちマイナス思考になつてると、仕事がらやつてられないんで、自然に助けてもらつてます」

ああ、それで半六判事は、いつも搖るがないのだ。

人にふりまわされてないのは、そういう距離のとり方が上手いからなのだ。そう思つと、ますますいい男に見えてくる。

「山つてどんなところ？」「

「先月はキリマンジャロに……」

ぶつと、美耶子は噴き出した。冗談だらう。

「あ、嘘じやないですよ。シンクロライドで行くんです。その……命を危険にさらしたくないとか、そんなんじやなくて、単にまとま

つて休暇取れないんで」

ああ。と美耶子は再び納得した。保志のことだから、絶対にそういうところの効率は重視するだろう。シンクロライドに慣れていることが後継候補の重要な条件だったなら、行き先は地球から一歩も出でていなくても、ライディングの回数が多い人間に普通に焦点が当たる。バッパーのリストは、司法試験一種以上であれば登録はできたはずだが、五年のうちに一種を取らないといけないはずだ。三分の一はうまくできている仕組みだとは思うが、人間にはやはりキャパシティというものがある。

仕事を一つ掛け持ちしながら司法試験一種の勉強をするは基本無謀といつやつだらう。

「テントの中で眠つて、目を覚ますと棺桶で眠つてるでしょう。なんか、凄く変な気分ですけど。日常の隙間に非日常が挟まるのって……、凄く好きなんです」

すこし美耶子は、迫神が何を言つているのか分からなかつた。

暫く考えて唐突に理解した。

あなたほどの人が、何を好きこのんで、三分の一に志願なんかなさつてましたの？

一番最初に電話で話したときの、美耶子の最初の質問に対する、これはその答えなのだ。バッパー候補に応募したとき、迫神は多分、宝くじより当たらぬと思つていたはずだ。そして、現実問題になつた。だから、ここにくるまでの間、フロンティアに自分が行きたいのか、そしてなぜそもそも自分が応募したのかを、迫神は自分なりに考えていたのかもしれない。

もしかしたら彼の中で一番の関心事は宇宙の彼方、ちっぽけな人

類が宇宙相手に格闘している現場で、普通に生活をしている人たちの、たさやかな安全を守るといったことと、あの異常に広い管区を一人や一人でジーにかできるものなのかなどうかも悩んでるに違ない。

それはまさに三分の一に選ばれたけれども、打診が来たときの、若き日の保志の悩みと同じもので、あのときの自分は、それにこう答えたのだった。

「実際に行って、自分の目で確かめたらいいわ」

今度は迫神がきょとんとなつた。

「応募したんだから、興味があつたんでしょう？ バッパーという仕事になのか、フロンティアそのものになのか、それは別として。だから、チャンスが来たなら、安全とか安心とか、保志がどんな男なのか。そんな安心できる材料をかき集めて、背中を押してもらおうとする前に、やつてみようと思つた自分を信頼したらどう？ 人伝てに千の情報を入れて一杯になるより、行ってみればいいじゃない。三分の一は、まずそういう理念でできるんだから」

「保志先生……」

迫神が田が覚めたといったよつた、不思議な表情になる。これは、そつ、自分がそついたときに保志がしたのと同じ田。男つて、本当に度胸がない。

「今日は『データーディレクト』中でしょ？ 美耶子って呼んでくれなきゃ、だめ」

そう笑つた美耶子を初めてよく知りもしない女性なのだと認識し

たのだろう。最初に腕を組んだときは、ひらりとも揺るがなかつた表情が崩れて、迫神の頬に朱がはしつた。

迫神は小ちな声で、いつ言った。

「はい、美耶子……先生」

可愛いつ。

美耶子が全身でそつ思ったのは、もちろん言つまでもない。

「それにしても、すごいですねえ。個人のお宅にコレ据え付けしたの、初めてですよ」

耳の奥に、スキヤナ棺桶の設置をしていった技術者の言葉がふいに甦つて、一人部屋の中で亜衣里は頬が弛んだ。

毎日のようにとは言わないけれど、出動と訓練を入れたら週に少なくとも三回は乗っているシンクロイドとはいえ、当然隊員の数だけ用意されているわけではない。女性隊員でしサイズを使用している者は亜衣里だけだから、他の人とちがつてほほ亜衣里専用と化していたけれど、それは単にそうなつていいだけで、やはりあの棺桶は亜衣里のものではない。

けれど目の前にででんとある箱は、完全に亜衣里の専用なのだ。しかも完全な新品。清潔という観点から綺麗なものを使うのは、嬉しいものだ。

例えば長期旅行を思い立つて、連續して十日も超過するようなシンクロライドをするつもりなら、生命維持に必要な水分と栄養分の補給システムを起動させるそうだ。緩やかであつても生命維持活動は続いているので、酸素濃度の調節や、こればかりは生き物である以上避けられない排泄物対策をきちんとしてから乗るらしい。筋肉の衰えの方はどうにもまだ解決策がないらしいのだけれど、そうすればとりあえず衰弱死は避けられる。

けれど普段の亜衣里の乗り方では、連續して何時間も使うものではない。ただ、死んだ直後は脳味噌が死んだ反応をしたがるのか、どうしても粗相しがちになるので、宇宙飛行士がそうしているように、亜衣里もパンツ型の紙おむつを着用することにしている。けれど、人間の身体から排出されるのは、それだけではないのだ。汗も

出れば、涎よだれだつて、涙なみだだつて普通に出る。

一回使用する毎に、オートクリーニングと光殺菌で細菌カウント上は問題がないレベルまで綺麗になっているはずではあるけれど、はつきりいつて他人と共用するのが嬉しいものではない。

消耗品であるシンクロイド・ボディーの一体当たりの値段は知っているが、シンクロイド・システムそのものの値段など考えたこともない。こんなものを部屋に置くということ自体が非日常以外の何者でもない。

棺桶の蓋を開けて、珍しく服のまま乗り込んで横たわる。新品の機械の独特のにおいがする。シンクロライドしたことがない人間には分からぬだろうけれど、シンクロライドはアバタロイド・ドライブよりは自身の感覚に非常に近い実感を得られるが、触覚、視覚、聴覚に限定したものしか身体にファーデバックされてこない。嗅覚と味覚は再現してくれない。

実際に生身のままでSPとして現場に入っていたときは感覚として、第六感としかいえないような研ぎ澄まされた危険察知能力が、確かにあつた。シンクロライドで死にやすいのは、亜衣里が「ナマゴロシ」より「ひと思い」を選んでいるということにも確かに由るだろう。けれど、この嗅覚と味覚がないことで、人間が本来持つている自前のセンサーが鈍とがつてしまふのも原因の一つだと思う。

危険察知には嗅覚と味覚は、シロウドが考える以上に役立つものだ。

設置が終われば、取りあえず一度トリップしてくるようこと言われていた。向こうは明石標準時ではないから、それさえ気をつけてくれればいいと、保志総合司法官は言つていた。落ち着いた声と、四十五という年とは思えないほど、モニターに映つた表情が若々しかつた。三人という少人数でやつていく訓練期間は五年だ。亜衣里

は、保志の第一印象が悪かつたらその場で断ろつと思つていた。総合司法官といふものが、どういうものなのか、はつきりとイメージでつかめているわけではない。第一、一番最初の印象が合つとか、合わないとかいう、そういうものは、理論的に説明できない。

けれどこの感覚には従つておく方が賢いといつのは、危険な職場にいる亜衣里にとつて常識以前の基本だつた。今までずっと。

もちろんチームメイトを自分で選べる立場にはないから、ただ、「あ、いやだな」と思った相手と組んで、予想通り痛い目に遭うことも当然ある。そんなとき亜衣里は、自分の直感を蔑ろにした自分が悪いと思つ「」としている。もっと注意深くしていればよかつたと。

新しい洋服があれば着たくなる。新しい拳銃があればぶつ放してみたくなる。買ったばかりの靴は履いて足踏みしたくなる。

亜衣里は棺桶スキヤナの上に横たわつていると、どうしても乗つてみたくなつた。なんでも、向こうの受信器もサイズの関係で新品なのだと

いう。デカイのは呪いでもあるけれど、悪いことばかりではない。三分の一は、当然、一人の専門家プロに対して一人がつくるのだ。だから、亜衣里と同じ立場で総合司法官修行をしようという人間がもう一人居ることになる。もう一人は男性で、一種司法試験持ちだそうだ。亜衣里は一種しか持つていないから、五年の間に一種をとらなければ、どのみち総合司法官として独立はできない。

最初から、水を開けられている様なものだけれど、気にするほどのものでもない。

亜衣里は上半身を起こして座つてから、棺桶から這い出して時計を見た。GMT（グリニッジ標準時）は大体単純に九時間引けばいい。

「何時」にトリップすればいいのかな……」

口に出してつぶやく。JST（日本標準時）の十一時は向こうで言つと真夜中の一時。行きますという様な時間ではない。五時間後の七時だと、まだ早すぎるだろうか。こんなとき便利なのがメールだ。

シンクロナイザーの走査器の設置及び設定は完了しました。何時ごろにテストライドすればいいのか、というような問い合わせの短いメールを書いた。

送つて一、三分もしないうちに返信が帰つて来たことを知らせる着信音が響き、亜衣里は少しビックリした。

『人口密度稀少域特例総合司法官補佐TAI、SELEN44444より返信いたします。二十四時間体制で全てをの受付をしておりますので、お時間に余裕がありましたら、今からでも構いませんのでお越しください。保志総合司法官は、現在執務中で対応可能です。三十分後にもう一方もいらっしゃる予定です。』

きよとんとして、亜衣里は文面を一、二回読み直す。一番最初の疑問はTAIって何だろうということだつた。名前の雰囲気から言つて、AIの一種だらうか。調べるためにパーソナル・コンピュータを起動させる。調べて分からなかつたら、保志総合司法官に聞けばいいし、分かつたと思えたとしても、確認しておいた方がいいだろ。

亜衣里は就職して以降、警視庁でずっと生きているのだけれど、これだけ移動の度に新人気分を満喫してきている。受け入れ側はで

きれば即戦力を望んでいることは分かっている。そして自分が即戦力たり得ないのも分かる。ならば、少なくともかけさせる手間を目減りさせる様努力はすべきだと思つてゐるし、逆に、シロウトが机上で調べただけのこと、間違つて解釈していかは、押さえておぐべきだといふ常識もある。

チャンスはいつだつて、一番最初に来たものを手つとり早くつかむべきだ。実際の保志に会えるのも、もしかしたら、向こう五年間を同僚になるかもしない人と会える機会が三十分後に転がつてゐるなら、それをトッ捕まえるべきだらう。そして、直感が近寄るべからずを選んだら、わざと無かつたことにする。

西衣里は、三十分後に必ずライドすると宣言すると、身だしなみを整えるべく風呂場に飛び込んだ。

* * *

「二人ともフットワーク、めっちゃ軽い子みたいじゃん。大当たり？」

セレが言つた、保志はニヤリと笑つてみせた。こうこう運のよさには実は保志は自信がある。走査器スキヤナの設置を向こうの昼間、ひとつ夜中にわざと手配したのも、設置完了次第くる様にといつ指示を出しておいたのも、常識があるかどうかを見るためだ。一人とも、設置報告がシンクロイド・システム業者の設置担当から来て即、ちゃんとメールで設置完了を報告してきた。

それから、何時ごろが都合がいいのかを保志に聞いてきていた。

「ここまでのことなので、時差の一つも考えられないボケでないことが証明できたということになる。

もちろん及第点だ。まづまづ、幸先いいスタートとこり」とで間違いないだらう。

「だな」

セレには短くぶつきあはれついに答えたが、その実、上機嫌なことは間違いなさそうだ。

「それにしても、おまえマトモな敬語、ちゃんと忘れてなかつたんだなあ。感動した」

保志がにやつく。

「だつて、オイラはステルス・モードでいけつて、ろくちゃんの希望だし」

「ステルスつて、大げさな。アホをさらすのにもタイミングがいるつて言つてるだけだ」

ステルスとは、ぶつちやけ様々センサ類からの探知されにくいうことだ。一応、官舎を宇宙居住可能に維持したり、JUNの膨大な過去判例データベースと同期していたり、指名手配犯情報をリアルタイムで更新していたりと、普通のメイン・コンピュータ仕事をしている4444と信頼関係を築いてもらうことが先決だ。

ちょっと行き過ぎた感はあるものの、そいつのお茶目さが、単独任務の精神的負担を軽くしてくれていることは、まあ、間違いないのだが、そういうSELLEN4444の三分の一の側面を、最初からネタバレする必要も感じない。

このTAIの三つの側面。一番分かりやすい官舎のメインという側面。助手であり、パートナーであり、簡単便利な自律型コンピュータであるという側面。それから、残りの一面である犯罪者と直接対決するために、武器であり防具であり移動手段でもある飛閃。や

つの存在を知らせるのは、何事もなければ、もつとずつと後のお楽しみでいい。一度に何もかも知つても、混乱するだけだ。

保志の前任者は、普通の戦闘機のよつた高速移動艇を使つてゐた。保志の趣味には合わないというだけで、あれはあれで町まで行こうと思えば使い勝手がいいことは間違いない。

日本語の名簿なら、高確率で一番のはずの相澤が、無事司法試験一種持ちになつて、多分この管区では初の女性総合司法官になるのか。どういう理由で選んだのか聞いてないが、セレが決めた迫神という青年がなるのか。

それとも、一人ともこの職業に魅力を感じてくれずに、また違う志願者と付き合つことになるのか。

若しくは他の区域で三分の一プログラムで二名以上後継者が育つていたならば、その人にイットルビアの特性を簡単に引き継ぎすることになるのか。

未来はまだ全く見えてこないけれど、次に着任する総合司法官が、バッパー飛閃やセレを要らないといえば、4444には、自分の分身を使い続ける権利はない。彼らに自主自尊の魂があつたとしても、人権尊重順位は4444でさえ低い。できるだけ、セレや飛閃が居てくれて、心の底から「助かつた」と思える局面で、伝家の宝刀よろしくひつぱり出して、サプライズをかませたいのだ。

一応、長年の付き合いなのだ。セレや飛閃は本体と違つて耐久消費財扱いだけれど、人間の寿命なんかより遙かに長持ちするはずだ。自分が退官するからといって、スクラップにするには、まだ早すぎる。

でも、そんなことをセレにいつたら、またアイツが調子をこじくからな。

保志は毛髪の分け目をちょいちょいと搔いて、中央モニターに表示されている時間をちらりと見た。連中が来るまで、あと15分。

* * *

走査器スキャナに入るのは初めてではないけれど、行き先が地球より外と いうのは経験がない。迫神平和は、少しだけ緊張しているのを感じていた。服装も少し考えたが、無難にグレーのスーツを選んだ。普段は上に法服を羽織ってしまうので、色や柄の出方を気にしたりしないのだが、もう一人の三分の一トライヤーが二十代の女性だというので、ちょっとだけ柄にもなく迫神は悩もつと思つてやめた。

総合司法官は単独任務だ。そもそも人口自体が稀少だから、事案が少ないのかもしれないが、万が一凶悪事件が発生したとき、その初動捜査に当たるのも職掌範囲と聞いている。希望するというだけで普通の女の子のはずがない。

迫神が様々な国の高い山に登るのにシンクロライドするのは、別に彼の特別な嗜好というわけでもない。飲んだり、食ったり、排泄したりしない登山者で、遭難したとしても別に救助の必要がないシンクロ・クライマーは、登山客を受け入れる側としては有り難い。
登山者が下山しきれずに途中でシンクロイドから降りてしまつても、
トランスマッタ
転送機とリンクさえ切れなければ、AIでコントロールするように切り換えれば、自力で下山してくれる。

もちろん、そんなもので最高峰を極めたとしても偽者にすぎないかもしれないが、山という偉大な自然環境を美しいままに保持していくために、シンクロ・クライマーはありがたい資金源になる。だ

から世界じゅうの自然保護区にある高山は、生身の登山家の受け入れは、厳しく入山人数を制限しつつ、シンクロ・クライマーの枠は多めに設定してあるところが殆どだ。

基本、高山といつのは僻地にあるから、普通の登山愛好家が週末に行けるようなロケーションはない。が、ベース・キャンプにあらシンクロイドに乗るところからスタートすれば、もつと身近なものになる。そんなこんなで、著名な山のシンクロイド・クライムは、マニアレベルにある登山愛好家には、宇宙の彼方にある町に観光にいく人間が普通にシンクロライドしたり、アバタロイド・ドライブするほどには、一般的な方法だ。

ベースから歩いて登り、頂点を極めて、ベースに戻つて来る。途中で栄養分補給と休養のためにシンクロイドの安全を確保してから自分の身体に戻るのだから、食料や水を持って登らないとはい、テントやシユラフといった装備、ザイルやピッケルといった道具、当然に自前の体力と、なかなかそう簡単なものではない。逆に死なないからと無理なアタックをすれば、前にも後にも進めない状況に簡単に陥る。金が掛かる割に、安直だと、普通の登山よりは味気ないと傍目には思われるかもしれないが、なかなかどうして、それでいて奥が深いものだ。

独身の迫神は独身者用のそこそこにコンパクトな官舎に住んでいる。彼が今まで寝室にあてていた部屋のど真ん中に、インパクトたっぷりな外観の箱が陣取つている。普段、ベッドではなく布団を使つていたのだが、まあ独身男の不精さで敷きっぱなしのことも多く、ブチ万年床と化していた煎餅蒲団の代りに、四畳半のすり切れた畳の間に、棺桶が鎮座している。なかなかシユールな光景だ。

シンクロイド走査器スキヤナを棺桶かんおけと呼ぶのは、非常に的まとを射た表現だと迫神はつくづく思った。形といい、色といい、まさにそのもの。

蓋に十字架でも描けば、ドラキュラが寝てたつてだれも驚かない

だろう。シンクロライドが壊れるようなことをしても、本当の意味で死ぬことはないのだが、入っているときはこっちの身体は死んでいるようなものだ。死んでるような人間を納めるから棺桶。捻りがないと言つてしまえばそれまでだが。

シンクロライドしたときに、こちらで着用していたものが形状だけ「コピー」されるのは、だれもいない場所に転送されるわけではないので、向こうで活動開始するときに裸で始めるわけにはいかないと、社会的必要から発想された御座成りの対策にすぎない。迫神が山に登るときは、保温などの必要から、登山装備一式を現地でレンタルして着込むことになる。スーツ姿で、これに横たわるのは、何だか妙な気分だった。

シンクロ・トリップをコーディネイトしている会社が経営するいわゆる「トリップ・ポート」は、棺桶というよりカプセルホテルか、地下墓所のように、壁一面に埋め込まれるような形で設置される。一日旅行にいくような手荷物を持って出掛けていき、大体が下着の上下か、上はTシャツ程度の軽装で走査器に乗り込むのだ。今迫神が横たわったばかりの、蓋があつて床置きされているという形のものが、多分一番最初にこのシステムができた時の形状に近いのだろう。棺桶というニックネームになるほどと改めて頷けた。

スキャナ
走査スキャンを開始する場合は、蓋を閉めてください。

耳元でロボット・ボイスがささやく。普段は「扉をしめる」と言われるのに、と、どうでもいいといひに引っ掛かりながら、迫神は持つていたりモコンのスタートスイッチを押し込んだ。蓋が機械動作音を立てながら本体に覆い被さつて来るのを感じながら、迫神は目を閉じた。闇がやってきて、それからスキャナが動き始めるのが分かる。ふと、意識が分解されるような、あの妙な気分がやってき

て、それから例の無味無臭の感覚がやってくる。

においや味というのに、常に人間がさらされているのだと気付くのは、それが奪われた瞬間からだ。

人間というものは、においや味を感じた瞬間はそれを認識するのに、同じにおいの中にあるにも関わらず、それをすぐ意識しなくなる。だから、においがないことにも、すぐに慣れる。けれどその無臭の世界に来た瞬間は、自分がにおいというものを一切感じない状態になったことが分かる。人間一人分の情報を全部走査して、それを転送して、転送先でシンクロイドの可変筐体チエンジャブル・ボディが自分の形を再現するのに、それ相応の時間がかかっているはずなのに、感覚としては授業中などに、ちょっとウトウトしてしまったという、あれに一番近い。覚醒を認識することで、寝ていたのだと気が付く、僅かな時間の、認識の喪失。

扉が開きます。御注意ください。

耳元でロボット・ボイスが再び囁いた時、迫神はもうちょっと注意深くしているべきであった。声が「蓋」ではなく、「扉」と表現したことに。

迫神が認識するところの「蓋」が開いたとき、迫神の意識としては彼自身は横たわっている状態であった。しかし、保志の総合官舎にある棺桶ルームは縦置き状態で壁に収納されている。きつちり九十度、迫神の脳味噌は認識を誤つたまま、身を起こしたことになる。ということは、立つている状態のまま、迫神は扉が開いたとたん、思いきりよくお辞儀をしたことになる。運動エネルギーが持つ慣性の法則と、当然設けられている人工重力の床方面にモノを引き寄せる力の作用の相乗効果で、迫神は顔から地面に向かつて倒れていった。

その倒れていくまさに目の前で、迫神が独身寮の寝室で潜り込んだ、棺桶そのものの形状をした受信器の蓋が開いたところだった。

それはもちろん、規格サイズ外の亜衣里用に、急遽搬入されたばかりの棺桶である。そしてそれは、取りあえず受信器同士で並べておこうかという、深く考えたわけでもない保志の判断で、迫神が到着した受信器の扉の前に置かれていたのだった。

迫神が到着するのが、もう少し早ければ、彼の頭は亜衣里の棺桶の蓋に激突していたに違いない。そして、もうちょっと遅ければ、空になつた棺桶に頭から突っ込んだだけで済んだだろう。

何という偶然か。もしかしたら、こういうタイミングのことを人間は運命と呼ぶのかもしれないが、迫神の頭は、全く本人の意志とかかわりなく、到着したばかりの亜衣里の、形よく膨らんだ胸目掛けて落下した。

あの日の相澤亜衣里は、宇宙の彼方に行けるという高揚感で、まつとうな判断が落ちていたに違いない。いつものように、当然、シンクロイド受信器は、出動服を着込むための更衣室に直結しているという確信に露ほどの疑問も挟まる余地はなかつた。

訓練やミッションでイヤというほどやつているように、シャワーを浴びてござつぱりして　もちろん、突入のときにはシャワーを浴びる暇などないが　　上にはブラジャー着けて、下には使い捨てのおむつを履いて、そういう格好で化粧だけして棺桶入りしている。彼女にとって、棺桶に入ることは、迫神がそうするよりも、はるかに行動のルーティーンが確立されている日常の行為だ。

亜衣里は棺桶の蓋が開いていくのを認識していた。中途半端に立つと頭をぶつけるので、完全に開いてから上体を起こすように、フルオープンになる瞬間を待つていた。そうして動作音が止まつたの

を認識して、さて、服を着ようと思つたとき、上から何かが降つてきた。胸が一瞬詰まるほどの衝撃を受けたときも、だから亞衣里は何事が起つたのかを把握できるものではなかつた。

が、その直後、見知らぬ男の頭が、下着しか着けていない自分の胸の上にあることを認識して……。

彼女自身、かつて覚えがない種類の實に女の子らしい可愛らしい悲鳴　S A Tのアタッカー、怖いもの知らずのあいあいの同僚が、いまだかつて聞いたことがない　が、彼女の口からけたたましく発せられたのだった。

保志が可動官舎の廊下をすたすたと歩いていると、いつの間にか隣に湧いて出て、セレが一緒に歩いていた。この保志が住んでいて、ついでに主な仕事場でもある宇宙建造物は、言つてみれば小型宇宙植民地とでも言つべき造りになつてゐる。

正式名称は、国連総合司法局イットルビア地区派出所。一番外から見て分かりやすい業務は、いわゆる警察の仕事である交番業務ということになると思う。やはり犯罪は人がいる場所で起こるというか、そこで行わなかつた犯罪を暴き出すほどの人員は配置されていないというべきか。まあ、必要とされたとき法らしきものを、そこに届けることができるというだけの話で、大体が、保安官がいるような町で何かしでかして逃亡したやつがいた場合、そいつを捕まるというパターンが多い。残念ながら凶悪犯罪なるものは、数年に一度起つたが起こらないかだ。それに負けずに多いのが、少額訴訟のようなちいさな訴えに、簡易裁判を開いてやること。

保志がつらつら考へるに、日本の歴史上、一番近かつたのが、江戸の町奉行所だ。もちろん、あつちの人口過密ぶりと比べると大風呂敷なのだが、あの規模に一つしかない町奉行所が用当番で民事受付を、刑事事件の受付と当番月に關わらず、ずっと絶えることなく行つていたのだ。しかも、町奉行の定員は一。冗談でしようといふほどの少なさだ。全ての事件が拾いきれるはずも裁ききれるはずもない。自治組織が治安維持や、小さな争いを仲裁できるという機能を持つていなければ、即日破綻するような人員の些少だ。

町奉行は午前中は江戸城に登城して、老中への報告と打ち合わせを行い、午後は所轄内これまた数が少ない「力よつけたち」と、受け持ち区内の行政・司法・警察業務に当たる。夜は果てし無く続く書類仕事。

総合司法官の保志は、午前中とは言わないが現状の報告や進行中の全ての事案について、JUNの総合司法官に設置された、人口密度稀少域課の担当官に報告及び相談義務がある。そして、それが終われば、与力に相当するはずの、これまた数が少ない保安官と連携して諸般の業務を行い、計画を立ててお白州に相当する裁判を行う。それから、当然、総合司法官のメインコンピュータにその事案「」との逐次報告をあげなければならない。

相澤亜衣里が本業としてやっているように、人質をとつての立て籠もり事件だとか、銃乱射事件などを力仕事で解決していくような凶悪事件は、まず日常ではない。それに、民事の訴えに対応するといつても、事実が深いところに隠されていて、巻き込まれた人間を不幸にしないために、慎重審議が要求されるものは少ない。

裁判に持ち込むのだから、両者ともが自分は悪くないと思つてゐる。だから、ちゃんと双方の言い分を聞く機会を設置した上で、しきるべき判断を、膨大な過去判例データベースを照会しながら言い渡し、片づけていくだけだ。

そういうことを総合的に考えると、保志がとにかく三分の一リストに名前が乗つていてる人間の、一番最初に出てきた人間を選んだと いう行き当たりばつたりと違つて、セレが選んだ迫神平和という男は、非常に適任といえる。とにかく、少額訴訟の取り扱いは、まるで手慣れている。（本職だから当たり前だ）

保志は大体、裁判のときはスーツにしているが、迫神はそれだとなんとなく気分が出ないと、法服を着る。過去に経験がない業務について、即任務に当たらることは禁じられているが、本職の職掌範囲については、特別に訓練期間を設けず、申し渡しだけで現場に送つていいことになつていてる。

取りあえず保志は、シンクロライドに慣れきつていてる相澤には、

保安官事務所回りをわせて、どんどんたまる民事裁判を迫神に丸投げした。

これで、ジヨリー・ロジャーの出現が確認できたら、いつでも現場に急行できるように、イットリウム輸送船の出航スケジュールごとに、飛閃を監視に張りつかせている。亜空間輸送可能な速度まで加速するためには、十分な空間が当然必要で、イットリウム輸送船は、ニュー・イットルビーから加速可能域に至るまで通常航宙する。

宇宙義賊などと自称する、あの不届き者は、その隙間に海賊行為を働く。けれど、荷捌き先との関係なのか、それとも、イットリウムの取り引き価格を下げたくないのか、丸ごと持つていくこともなく、抜いていく。

抜き荷はちゃんと監視していないと、荷受地で重量計測するまで行われたのかどうかすら分からない。

「よかつたじゃん、一人とも、ドサ回りはイヤだって言わないで」セレに保志が気付いたのを把握したとたん、セレが言った。

「まあ、あんな最低なスタートだつたけど、何とか収まつてメデタシ、メデタシだ」

保志がそう言うとセレがふくくと笑った。

「オイラに任せときや、ちゃんと事前に知らせといたのに。縦置きの埋め込み型棺桶なんて、全然一般的じゃないんだからね。あいあいの棺桶が開くのが遅かつたら、迫神さんのデコ、絶対にガチ割れてたね。いきなり事故じや幸先悪すぎるし……。あいあいのオッパイに、迫神さんだけじゃなくてろくちゃんもみんなそろつて、ちゃんと感謝しないと」

「セレ……、おまえ下品に拍車がかかってねえか？」

保志が呆れてそう言つと、セレが真面目な表情をしてから文句を言つた。

「だつて、いつまでもオイラ、ストレス・セレちゃんなんだもん。ストレスたまる。ろくちゃんのソロならともかく、三分の一チーム結成つてことじやん。だつたら、オイラも混ざりたい。4444じやなくて、オイラとして、あいあいたちと仕事したい仲間外れだなんだのと、これでは子供と一緒にじゃあないか。保志は呆れる。

「まあまあ、慌てるなつて。もの」とには順序つづりのがあるかられ」

保志は我が儘をいつ子供をなだめる様に、いかにも御座成りといふことが見え見えの対応をする。セレが面白くもなさそうに鼻を鳴らした。

「ねえ、ろくちゃん。一つなんか理由でつち上げてさ、身体頂戴よ。カラダ

オイラ、アバタロイドで我慢できるし」

「残念だな、セレ。今年はあいあいの身体買ったから、予算オーバーだ」

「今までの持ち越し予算があるでしょ」が

そつけない保志に尚も食い下がる。

「血税の無駄遣いは許されてねえし……」

「無駄遣いじゃないよ。大体さ、あいあいと迫神さんが来るの、一カ月のうち十日でいいんだからさ、どうしてズラさせないわけ？ オイラ別に本体ないんだから、あいあいの身体にもちゃんと乗れるぜ。試用期間のお断りはなかつたんだから、少なくとも向こう五年間のチームつてわけじやん。直接会いたって思うのは、人情つてやつじやないの？ それとも、やっぱりオイラはただのT.A.I.だから、でしゃばるなつて、そういうつれないこと言うの？」

マジに泣きが入つてきかないので、保志は呆れた。本当にセレについてだけは、どこまでホンキで、どこまでが冗談で、どこから演技なのかよく分からぬ。

「腐るな。あいあいが半六に慰謝料だつて一種試験の個人教授させてんだから、同じ時間じやないと……そつだろ?」

「だけど、バラバラの任務に当たつてもらつちやつて、どつちかつつーと、二人の時間つて取れてないと思つけどな」

保志が迫神を半六と呼ぶのは、もちろん、美耶子情報に受けたからだ。もちろん、本人の前では、「迫神君」と呼ぶようにしている。六法全書のほぼ半分を諳じてるんじゃないかということから、弁護士先生がたからそう呼ばれているだけあつて、確かに、彼は判事として鍛えられているという感じがする。

大体、あの判決の読み上げの板に付き方は、見ているものを唸らせるし、その説諭の入れ方がさすがプロには適わないと思わせるだけのものがある。

もちろん、ネット裁判で済ませる様な公判は、保安官事務所の端末からであれば、その気になればいつでも傍聴できるものだ。次期バッパー候補、保志の後任の可能性がある迫神の「レビュー戦」ということで、第一回目の公判のアクセス数は近年見たことがないほどの数だった。

保志のスーツ姿を見慣れたものには、迫神のいかにも裁判官といった法服姿は、頗もしく映つたに違いない。低めの落ち着いた声で、分かりやすく判決理由を説明する姿は、保安官連中にはどうやら非常に受けたらしい。富崎保安官の横繋がり情報によれば、早くも迫神ファンなるものができつつあるようだ。もちろん、富崎保安官も含めて……だそうだ。

「でもさあ、今まで人が一杯なところに住んでたくせに、ここまで他に選択肢がなさそうなこんな職場で、職場内恋愛つて……人間つて変だよねえ」

「はあ?」

「さなりセレが言ったので、保志は鳩が豆鉄砲鳴らしたモードになる。」

「迫神さんの心拍数、あいあいが半径二メートル以内に近付くと、確実にアップするんだけど、ろくちゃんはどう思ひ？」

「あの、あいあいに……あの、半六判事がか？」

保志が自然と素つ頓狂な声になる。

「あの方、ろくちゃんだけ、古女房の美耶子さんにエキサイトするんだから、健康体で若い迫神さんが、二十代の女の子に欲情したって、そりやあ、無理ないと思わない？」

家族サービスに眞面目に務めているだけで、特別にエキサイトした覚えはない。保志は撫然と腕組みをする。

「そんなに簡単に欲情するなら、向こうで過ぐす三分の一で、いくらでも可愛い女の子がゲットできそうなもんだろ？」「

「…………ろくちゃん……。あいあいもかわいいと思うけど」

可愛いといつのは、語源的にいつても、基本的には小さくものにかぶせる言葉だ。統計的にあいあいが小さい方に分類できないのは、箱もの方であるセレのメイン、4444だつて異論はないはずだ。

「可愛いこつーのは、問答無用に男をその気にさせちゃうようなも

のをだな」

「だつたら可愛いで間違いないじゃん」

いいかけた保志をセレが遮った。保志はその確信的な物言いが不思議だつた。男がその気になるという意味を、セレが分からないとも思えないし、自分があいあいの下着姿にその気になつた記憶はない。

「クソもできねーやつに、人間の男の下半身事情が分かるかよ」

保志が切つて捨てる。

「だから……、あんとき、迫神さんの勃つてたし……」

「ぶつと保志は息を噴き出した。お茶でも飲んでるときでなくて、心からよかつたと思った。」

「マジ……？」

恐る恐る確認する。

「間違いなく」

セレが丶サインを作つて突き出してきた。果たしてこいつは、意味が分かつてこのマークを使つているのだろうか。保志はどつと疲れた。

それが本当の話なら、可哀相だが迫神は事故に遭つたよつのものだ。いつもそうだというわけではないが、男というものは理不尽なことに、こきなり理性が暴走するような状態に、勝手にシフトすることがある。そんなとき、手持ちの理性の分量が足りないと、あつさりと犯罪者コースに乗つてしまいかねないほど、どうしようもなく強いアレだ。大体が、そんなことをしていてはいけない、ということが明白な局面にいるときに限つてやつてくる。

そういうときの下半身さまは、本体の都合を完全に無視して元気になられるから、やつかいなのだ。男には男の不便さがあるということを、女は分かつていない。

そしてデータでしか物事を結局は捉えきれていないセレも分かつてない。若い雌の感触に、突然男が突然暴走するのは、好き嫌いとか、可愛い可愛いくないとは別次元。単純に溜まつてたところを刺激されたというのが、身も蓋もない正解だ。

あのとき、普通に棺桶から起き上がつただけなのに、初対面の女性の、それも下着姿の胸元に、顔から落下するという不幸な展開が待つていたことさえ不本意だろつに。挙げ句に、亜衣里はけたたましく悲鳴をあげたのだから、たまらない。凡人保志のショボい思考

回路は完全にフリーーズした。

けれど迫神の野郎は不自然なほどに冷静だった。少なくとも保志にはそう見えた。

迫神判事が開いた扉からきつちり九十度の角度でいきなり最敬礼をかましたとき、保志は非常に遅ればせながら、自分のところにある壁面埋め込み型棺桶が、一般的でないことを思い出した。あ、新しい棺桶の蓋に、迫神判事の頭が激突すると思った瞬間に、あいあいの棺桶の蓋がすいとスライドした。あれの蓋がはね上げ式だったら、多分迫神は顎を持つていかれて壁目掛けて飛ばされた筈で……当然、額直撃よりも大きいダメージを受けたに違いない。

あのとき、迫神が相澤の棺桶に激突するのは避けられないと、思わず保志が目を閉じた直後に、女の子の甲高い悲鳴が耳をつんざいた。ぎょっとして目を開けると、相澤の棺桶の蓋があいていて、あらうじとか、現職SATの相澤隊員は下着姿で横たわっておられたのだ。そこに、見事に迫神はつつこんでいた……。どうやって、だれをフォローしたらいいのか、全く分からなかつた。そこに口先TAIのセレがいなかつたのは、むしろ救いだと思つのは自分だけだろうか。指摘しないことが武士の情けといふことも、間違いなくあるのだ。

シンクロイドが被服品や服飾小物を「コピー」するときに、一番表面の見てくれだけを再現するだけで、機能性は一切無視されることとは、シンクロライドしたことがある者にとつては完全な常識だ。銃弾が飛び交う戦地に突つ込んでいくのが仕事のSAT隊員は、シンクロライドするときにそんなコピー装備で望める訳はない。普段のルーティーンとして、彼女はそういう格好で棺桶りつこまり、SATでは、シンクロ受信器はロッカールームに設置してあるものらしい。緊急出動時に脱ぐ時間的余間を省くのは、多分当然のことな

のだ。

あとあと事情を聞くと非常に納得できたのだが、まさか保志にしてみれば、相澤がそんな格好で来るとは思つてもいない。お互いの常識の食い違ひが、とんでもないシチュエーションの種になるといふのは、往々としてあることだ。

とはいえた。意図せざることとはいえた、いきなり裸同然の女の胸に顔から突つ込むという無体をやらかした迫神判事は、状況を把握するやいなや、見事な反射神経で棺桶から飛びのいた。百八十度身体を回転させ、上着を脱ぎ、見事なコントロールで背後の棺桶目掛けて放り投げる。まつたくフリーズしてしまって、ノーアクションだつた自分とはえらい違いだ。

迫神のやつ、おつ勃つてた状態で、あの行動を取つたなら、それはそれで、別の意味で大したものだ。

相澤の方は、ガタイに似合わず、女の子らしい可愛い悲鳴を上げていたくせに、迫神が上着を投げて寄越したのを見るや、動きは素早かつた。

やおら身を起こして、微妙な弧を描いて飛んだそれを引っ掴む。普段そういう勢いで出撃服を着込んでいるんだろうというそのままに、ぱつしり遠慮なく着込む。と、保志に向かつて噛みつく勢いで聞いた。

「ここ女性用更衣室には出ないんですか？」

「出ません」

「更衣室そのものはありますか」

「……な、ないです」

その言葉を聞くや、彼女は言った。

「すみません、出直してきます」

それから棺桶に迫神の上着を着たままひつさと横たわり、蓋を閉

じる。多分、そこからライド・オフして速攻で着替え、再度ライディングしていくのに、驚いたことに相澤は十分かからなかつた。普通は、ライド・オフした直後は自分の肉体を自分であるということを把握するまで動けないものだ。立て続けに一度目のライドでは、もちろん可変筐体の変形の過程は省けるにしても、一度目にやってくるのにその時間は早すぎた。

そんなささいなことで妙なのが「プロだ」と保志は思った。あの美耶子に対してもそれは常々思つてゐるのだが、何かにおいて専門家であることは信頼できる。すべてにおいて、助つ人根性しかないやつは、信頼してはいけない。それが傍目みてとんでもないような種類の職業であつても、自分の仕事に精通してゐる人間というのは、そうなるまでに継続して真摯に取り組んできているということだ。だから、他の人間の仕事というものにも、自然と敬意を抱つて動くものだ。

名簿に載つて來るのだから、最低ラインはクリアしているだらうということで、熟考せずに決めてセレの手前引くに引けなくなつた保志だが、見れば相澤は一種試験持ちですらなかつた。一瞬、もうちょっと考えればよかつたと思つたことは間違いない。

けれど、相澤の経歴をじつくり見てうなつた。S.P.もS.A.T.もどちらでも評価は一級だ。それどころか一種試験さえ、法学部出でもないのに、就職してから独学で取つてゐる。デカいくて丈夫というのは、彼女の価値の半分も占めていないのでないかと、そういう気がしていいたところだった。

再びやつてきたときに、さつき起つた出来事は、まるでなかつたかのように、蒸し返すことを許さないというように、いわゆる普通の挨拶をしてきた。迫神がジャケットを着てないことが、形式張つてゐるはずの初対面に、カジュアルな印象なのが若干の違和感と

いえば、そうだとこりよる程度の普通さだった。

つまり、相澤は気持ちの切り替えも速いし、良くも悪くもポジティブ志向で出来上がっているのだろう。バッパーのよつな、地味な仕事は、鬱性分では続かない。相澤は、この仕事に対する性状的適正は、かなり高いのではないかと保志はそのときに思った。

彼女はSATの制圧班で、一番最初に突入して、後続のための道を確保するというポジションにいるらしい。それで彼女の死亡率の高さに納得がいったのだが、あの高い機材をお釈迦にする常習犯なら、周囲の評判は悪いと思いきや、そうではなかった。

* * *

「あいあい、ちょっと相談があるんだけど

亜衣里とて、いつも死んで終わっているわけではない。殆どの場合は無傷で生還している。平和なニッポンで、そうそう毎日のように立て籠もり事件だの、誘拐事件だのが発生しているわけではないから、基本的に訓練としてシンクロライドすることが多い。今日も、攻め役になっている別チームの連中を、ペイントだらけにして無事人質を確保して、成功裏にミッションを終えることができた。

SSS (SATサポート・スタッフ) の金城は、亜衣里がシンクロライドすることでストレスを感じたり、自分との整合性をつけられずに途方に暮れたりすることが殆どないのを知っているので、亜衣里が自分であることを把握すると殆ど同時のタイミングで切り

出した。

「なんですか？ 金城さん」

「あなた、三分の一、テストランしてみて、修行先の師匠にも文句もなくて、結局、本格的に参加するんでしょう？」

「ええ……。その、一種試験で苦労しそうですけど、頑張ってみようと思つてます」

正直、亜衣里には、保志総合司法官という人となりが、まだまるで見えてこない。とりあえず慣れてこいと、保安官事務所回りを言いつけられて以降、アポイントメントを取つて、受け持ち管区に十五ある保安官事務所のアバタロイドに乗りまくつている。シンクロライドした状態でアバタロイドに乗るというのは、どうにも不思議な気持ちがするものだが、彼女のサイズが普及品のシンクロイドに合わないのだから、慣れるしかない。

「もし迫神君の薰陶よろしく、無事一種持ちになつて、最終的にバンパーを希望するなら、君はフランス辺りの管区の方が乗れるシンクロイドが多くて便利かもしねないな」

「冗談のつもりなのか、半分笑つたような顔で、保志総合司法官はそう言つた。たしかに東洋人としたらかなり規格外だけれど、あの辺なら自分程度のガタイは珍しくも何ともないだろう。もちろん、^{ウン}UNにフランスも加盟しているし、言葉の問題がクリアできるなら、それも一つの選択肢としてありかなと亜衣里思つた。

宇宙開拓最前線の都市というものは、本当に町並みそのものがSF小説の挿絵を地で行く様なもので、その景色は地上のどんなものとも異なつてゐる。保安官事務所から一步出た外の景色に圧巻され、その町並みを歩けるだけで、役得気分満載なのだ。カメラで見

ていることを意識しないですむ、シンクロライドだったら、もっとステキだろうこと、亜衣里にもそういう思いはある。

フランス語も日常会話程度ならどうでもする自信はあるが、裁判を取り仕切る立場でフランス語を駆使できるほどの語彙力も応用力も今のところはない。一種試験を無事に取れたら、平均身長が高そうな国の国語をブラッシュアップしようと、亜衣里は密かに決意しているのだった。

金城が勿体ないとうようにため息をついた。

「人の希望にケチはつけられないものねえ」と、それから毅然と顔を上げて亜衣里を見た。

「ねえ、あいあい。あなた、向こうでは育ててもらってる子供だけで、こっちではそろそろ若手育成にシフトして親仕事する気ない?」「私が……ですか?」

「兵藤班長がボヤいてたわよ。あいあいぐらい見えるやつが育たねえと、シンクロイドはぶつ壊れるわ、ミッショーンは失敗するわ、精神病院送りは増えるわ、たまたまんじやないって」

「死に方が下手なのがアタッカーだったら、そりゃ、へーさんは困りますねえ」

制圧一班の班長である兵藤を愛称で呼んで、亜衣里は爽やかに笑い声を立てた。

あいあいは後先見ずに寛いだで、玉砕しているわけではない。ちゃんと後続の通路を確保するために、ゴーグルモニターという、視界の上方に仮想として浮いた形で映し出すことができるモニターを使って、チームメイトの位置上方と、熱センサーで感知できる人の位置（確保対象か保護対象かは、勘で決める）を正確に把握し、どれどぞれを潰せばルートが開けるかいつも考えて、まさに相

手の次の手を潰せる場所で相手の駒を道連れにして死んでいる。

制圧の現場というのは、攻守の順番がいま一つぞんざいなだけの詰め将棋みたいなもので、捨て駒だって、捨て駒として有効に働くなければならない。つまり勝負と関係ないところで、勝手に行ったり来たりしても、「無駄合」にしかならず、手数に数えてもらえないのだ。

制圧に「飾り駒」 あつてもなくとも影響がない駒 は必要ないし、「余詰」 最短手順でない攻め方 は不格好だ。

攻方の脳味噌である班長へーさんの描いているルートを、ちゃんとイメージできなくて闇雲に突っ込んで、捨て駒になるべき局面までもたないと、後続がちゃんと攻められない。

「兵藤班長は、一番いいのがあいあいに続けてもらつ」とだけど、そろそろ世代交代も視野に入れようと思つてたところだつておつしやつてたわ。丁度いいから、是非ちゃんと動けるアタッカーを「、三人育ててくれないかですつて。私も賛成よ。あいあいもいつまでも若手じゃないんだから、アタッカー現役でいられるのなんて、多分あと三年がいいところでしょ?」

「金城さん、若手じゃないんだから発言、地雷ですつ」

妙なところにあいあいがつっこむのに、金城はころころと笑つた。

「そりゃあ私だつて現役おいだされるときは不満だつたわよ。だけど、仕方ないじゃない。人間、年をとれば衰えていくんだから。自然の摂理に文句はいえないでしょ」

「それはそうですけど……」

セックスどころか、たかがキスまで、ガキンちょのじゆの両親とのものしか記憶にない亞衣里は、それでもめげずに、棺桶の蓋が開くたびに、白雪姫のように「いつか王子様が」を夢想している。そんなあいあいにとつて、「若くない」というひと言はハンマーで脳天を叩かれたように、効いたのだった。

官舎スペースの方の一室を、保志は亜衣里の取りあえずの部屋にしてくれた。うつかり亜衣里が普段モードでトリップしてきても、回りが困らない様に、亜衣里専用の棺桶も、この部屋に運び込んでくれた。

あれからも、迫神は何度かトリップ直後に身体が九十度自動的に置き換わっていることをうまく脳味噌に刷り込むことができないらしく、迫神が思い切りよくこけるのを、亜衣里は幾度となく目撃している。

あれを見るたびに、医者と保健監督官と、突入服のフイッター以外に障らせたことがない亜衣里の胸に、迫神の顔が埋まっていた瞬間を思い出してしまつ。彼女はそれだけで赤面してきそうになる。

女の子であるという主張を大いに持つている亜衣里だが、成り行き的実際問題として、女の子としての経験が圧倒的に足りない。だから、あのシーンを思い出すとき、「気持ち悪い」だの、「ぶち殺してやりたい」ではなく、「恥ずかしい」と心が動いていく段階で、脳味噌が勝手に迫神を好ましい異性に分類していることに気付いてもいいわけなのだが、全くその可能性に意識がいかないのが、いかんせんズレている。

もつとも、思い込み的亜衣里仕様異性等級基準においては、自分をお姫様抱っこしてバージンロードを歩けるほどにマッチョであることが最低ラインなので、迫神をそういう対象に思うことはありえないのだ。

だからこそ、迫神が傍にいるとき、妙に居心地が悪いのは、初顔

合せのときの最低な成り行きの、副産物といつか後遺症のよつなのだと信じている。

大体、迫神自体がまるで亜衣里のことを意識しているふうでないのが気に入らない。どうせデカイ女の中身が乙女なんて、しかも三十も間近に迫つて家族チューの味しかしない女なんて、存在してるなんて思つてもいのう。

「迫神さん」

亜衣里が呼びかけると、迫神がゆっくりと端末から顔をあげた。
「次の問題できちゃいましたか？ すみません、まだ、ちゃんと添削できなくて」

迫神はいつも丁寧な言葉づかいをする。裁判官といつのはそういうもので当たり前なのかもしないけれども、どうにも調子が狂う。迫神が、亜衣里の一種試験の個人教授を引き受けることになつたのだけ、いわゆる空気が読めない典型的の要領の悪さに、間違いなく起因する。

* * *

挨拶を終えて、自己紹介も終えて、これで解散という段取りになつたとき、一番最初のアレを、亜衣里はきれいさっぱりなつたモードで行動していたのに、ようによつて、あやつは蒸し返してきたのだ。

「先程は、その……。すみませんでした」

と。謝られたら……。なかつたことにしたかつた亜衣里にしてみれば、思い出すしかないではないか。こいつは、ド阿呆か？

「……何をですか？」

無理矢理、しらばっくれようとしたのに、言つた事欠いて、こう言つたのだ。

「その……イチゴ……」

イチゴというのは、あの日亜衣里が着けていた買ったばかりの上下揃いの下着の模様だった。気分だけは女の子仕様の亜衣里だから、可愛いそういうものはもちろん欲しい。欲しいのだけれど、店に行つてもだいたいサイズがなくて涙を飲むことになつてゐる。だからもっぱらネットの通販サイトが御用達のショッピングモールだ。

亜衣里が收まるサイズのそれらは、日本のサイトだと、どこのばあさんが着るのだというような、人生終わつたようなものが多いが、ヨーロッパやアメリカなどのサイトは、十分に可愛いものが売つていゐる。

特に、ビスクドール仮装事件以来、見えるところの服から可愛い要素を思い切つて捨てて以降、逆に下着は可愛いいもの志向に歯止めが利かなくなつてゐる。

最初は呆れていた金城も、もはや何も言わなくなつてゐる。

もちろん、棺桶に入るときは見てくれより実だから、普段はおむつを着けるのだが、あのときは突入服を着るための更衣室ではなく、自分の部屋だった。当然、まだまだ下が緩いわけでないから、個人持ちのおむつのストックなど家にあるはずもない。ついでにライド時間も長くなる予定はなかつたし、ここが一番肝心なのだが、何よりも死ぬ予定がなかつた。ので、まあそこまで用心する必要はないかなと、下着だけで飛び込んだ。死ぬ予定がないというところで、一步思考を進めて、転送先で突入服を着なくていいというところだ。

到達できなかつたのは、やはり自分のミスだと亜衣里は思つ。

でもあのとき、服を着て棺桶入りするということに、ちらりとも考えがいかなかつたのだから、仕方ないじゃないか。

亜衣里の目の端に映つていた、大人な保志総合司法官は、迫神の態度が間違いなく間抜けだということを了解しているという感じで、額に手を当てて天を仰いでいた。保志総合司法官も、絶対にイチゴを確認しているに違ひない。亜衣里は拳を握りしめた。二人まとめで、なぐりたい……、いや、ここは我慢だ。私は大人だ。

「……見たんですね」

亜衣里の声が自然と低くなつた。若干赤面した挙げ句、穴があつたら入りたいとでも言う様な氣弱な感じで迫神が俯く。そんなに見たくなかつたんですかと思うと腹が立つ。

いみじくも古人は、こんな間抜けな行動を嘲笑つてこう言つた。
あざわらひ

雉も泣かずば射たれまいに……。

亜衣里は迫神の脳天をぶん殴る代わりに、自分が作りうる限り最大限に可愛らしい笑顔を作つて微笑んだ。乙女の下着姿を堪能した責任はとつてもらおうじやないか。

「貰い事故でも、事故は事故。加害者にはきつちり責任取つていただきます」

「……え？」

人が折角スルーしたものを、懃々蒸し返してきて、「いえいえ、気になさらぬで」などという言葉を貰えると思ったら大間違いだ、このタコ。亜衣里は、もう一段階、笑顔の強度レベルを上げた。

「視界に入つてなかつたと言い訳しても、車で歩行者に突つ込んだら、運転者に注意義務違反があつたと……それで間違いありませんよね。迫神裁判官」

「あ……はあ、まあ」

それとこれとは話が違つだらうと、その口つきが語つていたが、知るもんか。『ごめんといえはなんでも許されると思つたら大間違いだ。』「ごめん」とうつかり言つたがために、裁判で言質を取られてえらい目に遭つてゐる人間なんて、厭といつほど見つてゐるだらうに、応用の利かないやつ。

「でも……責任とれつて、何もしてないし……」
「何も？」

亜衣里は視線に力を込める。伊達に日常茶飯事で凶悪犯と銃弾で会話しているわけではないのだ。彼女の視線の力は、はつきりいつて強かつた。

「え……いや、まあ……すみません」

視線に押し出されてしまつたのが、多分自分が悪かつたとは露ほどにも思つてもいはずなのに、もう一度迫神は謝罪文句を口にしてしまつた。亜衣里は思つた。人生に挫折もなく、きつちりお勉強はできて來たのかもしれないが、間違いなくこいつは阿呆だ。

「『無料』で、司法試験一種対策に協力してく、ださい。それで『イチゴの件』は、なかつたことにしてさしあげます」
「あ……はい、ありがとうございます」

やつぱりアホだ、『いは』、と思つたのは、亜衣里だけではなかつた。そして、その会話で保志は確信した。三分の一チームの職業訓練生二人の、訓練期間における力関係が決まつてしまつたのを。人間の社会的上下関係つてもんは、出会い頭のカマシ合いの結果がホントに重要だよなあと、保志はつくづく思つたのだった。

* * *

「いえ、そうじゃなくて、根本的なところを教えていただきたくて。
あの……、一種つて （ハ）ン 準拠じゃないですか」

「うん、そうだね」

国連の愛称が、日本語の相槌とほぼ同じ発音というのは困ったものだ。うつかり亜衣里は笑いたくなる。けれど、迫神は至つて眞面目な顔をしているので、笑うのも憚られる。

「結局、国内法の考え方と、UNの考え方方が乖離する場合つて、日本人の場合、UNの解釈つて納得できないというか、なんかしつくりこないんですね」

「……まあ、そうだね」

「日本人同士の訴訟の場合、総合司法庁の親方がUNだからつて、一種の解釈をねじ込むのつて、なんかしつくりこない気がするんですけど。迫神判事も実際、ずっと東京地裁で一種準拠でやつてらつしゃるでしょ？」

迫神が、ふむ……、といつよつな微妙な間を置いてから、亜衣里に向き直つた。

「結局、一種と一種の違いつていうのは、便宜的なものだと思つて間違いないと思うよ。つまり私たち裁判所は」

亜衣里はまた笑いたくなる。なんで、裁判官という人種は、は自分のことを『裁判所』と呼ぶのだろう。自分がする判断には私見は交えていませんといつアピールのつもりなのか、それとも単に慣習がそうであるから、何も考えずに使つてているだけなのか。

亜衣里が笑いそうになつてゐるのに気付かず迫神は続ける。

「一人ひとりが、厳密に、だれの判断を仰ぐことなく、自分の判断で法律と向き合つて判断を下さなければならないだろう。それは近代以降の裁判は、自由心証主義を基本にするから、事実認定に関しても、証拠評価に関しても、寄り掛かる先は法のみになるというか、そうしなければならない。裁判はそれに関わつた人間の人生を正しもすれば、狂わせもするからね。それによつても何も変わらないつていう、最低のケースもあるけど」

つい、中身を考えずに、その声にうつとりしそうになつて、亜衣里はここれはまずいと気を引き締めた。この低めの落ち着いたトーンで、濁みなく出て来る言葉は何とも耳に心地よく、うつかりしていふと音に酔つてしまつていて、肝心の話の内容が理解できていなかつたりする。

亜衣里が出掛けしていく先の保安官事務所でも、滑り出しの迫神判事の評判は上々だ。いい判事さんが来てくれて有り難いと、そんな感じだ。

パトロールと称した、観光のようなものばかりしている亜衣里には、顔見知りもだんだん増えてきているが、迫神は東京地裁に出勤していたのを、国連総合司法局イットルビア地区派出所小法廷（司法局派出所に大法廷はおけない）に出勤しているようなものだ。

ここに慣れるまでは、現職での経験を大いに活かせるような仕事を割り振るから。

という保志の方針は分からぬでもないけれど、保志はどうにもうつかりため込んでしまつた訴訟・事件を、迫神にほいほい押しつけているようにしか思えない。総合司法官という響きはともかく、現状は小さい裁判に追いかけられるのだろうか。だとしたら、気が

重いことだ。

自分も無事に一種持ちになつて、保志や迫神がやつてているような裁判官としての仕事ができるようにならなければとは思つけれど、正直、どうにも気合いが入らない。

「相澤さん……、聞いてる?」

まじまじと見つめられて、亜衣里は焦つた。声に聞きほれていたなどと返したら、どうこう反応が返つてくるか知りたいわけではないのだ。

「ええ、もちろん」

保志は亜衣里のことを、ビビりで調べたのか「あいあい」と呼んでくるが、迫神は仕事中でなくとも、苗字にさん付けとこう無難モードだ。どうやら亜衣里とは、必要以上に親しくなるつもりはないらしい。

仕事仲間には命を預けるのが基本でやつてきた亜衣里には、どうにも迫神の距離のとり方が他人行儀な気がしてならない。それはもちろん、実際のところ他人なのだけれど。

亜衣里は必死に迫神が何を言つていたのかを思い出す。

「自由心証主義を探る以上、裁判官が頼れるのは法のみといつところまでは納得しました」

耳に残つていた断片を切り貼りして、無難だうと思われる答えを紡ぎだす。迫神がにっこりとしたので、それで答えがちぐはぐではなかつたのだと、ホッとする。

「まあ、あとは増えていくばかりの判例データベースもですけどね。それで今までは建前の話です。ここからが、相澤さんの疑問になっている箇所なんですけどね……」

私の疑問つて何だつけ、と亜衣里は情けないことを考えながら、迫神ではなく、迫神の説明に意識を集中させる。

「ああそう、刑事事件は別ですけどね……、人間の記憶って、本当にその人のために、すごく簡単に書き換えられてしまうものなんだ」と……私は思うんですよ」

「……え？」

迫神が言い出したことが、余りにも亜衣里の予想と違う方向だったので、彼女はとまどった。亜衣里が聞いたのは、日本という国の地方の法がよしとすることと、国連司法庁準拠（U.N.J.A.C = The United Nations judicial agency conforming）の法の正義に矛盾があるとき、どうするのかという素朴な疑問だったはずだ。それが記憶？

「今現在の記憶に従つて、嘘を言わない宣誓をしてもらいますけどね、あれが結構曲者（くせもの）なんですよ。意外と人間つて、すごく簡単に、日常的に記憶を自分の都合のいいように捏造してしまつものなんだって思いますよ、私は。両者の証言が全く違うととまどいますけど、だからといって彼らにとつては、嘘じやがない場合が殆どなんです。もちろん、恣意的にも、故意でも、つこいつと思つてつかれる嘘もありますけど、例えば離婚の裁判とか、敷地の境界の争いとかね……、双方嘘を言つているつもりはないんですよ。相手が嘘をついていると思つてもね」

亜衣里は、迫神が何を言おうとしているのか分からぬ。

「だからね、証拠となるものが確かに出てきて、自分の間違いを指摘されると、すごく戸惑います。相手の言い分を聞いて、自分を主張して、頑なになつたり、怒つたり、女性だと泣いたりするでしょう……。だけど、当事者でない中立の立場にある人間が聞いて、冷静に公正に判断してくれれば、自分が正しいと言つてもうれるはずという確信があるものが訴えを起こしてゐるんですね」

「迫神さん……私の質問、分かつてらっしゃいます？」

たまらず、亜衣里が言つと、迫神はもう一段階深くみえる笑顔に

なった。

「まあ、我慢して聞いて。ちゃんと質問のところに帰るから。裁判官は本筋としては、法にしか相談できないんですけど、個人の主張と、その個人が帰属する社会の通念との間に、余りにも齟齬そくごがある場合、世界がみんな敵になっちゃうんですよ。だから、正義と思われるものを味方に欲しいんですね……結局のところ。お金が欲しい人も多いんですけど、お前が正しいうて、それを証明したいという人も意外といる」

亜衣里は一生懸命聞いていた。その一生懸命は、亜衣里としたら、どちらかといふと、ともすれば、迫神の声に聞き惚れそうになるのを、必死に文脈に集中力を合せようと頑張っている一生懸命さだったのだが、そんな区別が迫神につくはずもない。

職業柄、正義であると信じなければならないことを、控えめに主張ばかりして、自己主張そのものを表立つてすることは、迫神にはあまりないし、裁判の現場というのは、どちらかといふと、これでもかという自己主張を聞き続ける方にウェイトがある。

亜衣里の気持ちが真っ直ぐに向かって来るのが、迫神には何ともいえず心地よかつた。そして心地いいと思うと、イチゴの一件がどうしても思い出される。

迫神も思う。冷静に考えれば、相澤さんは、どうしても残るバツの悪さを流そうと最初してくれたのだ。だから、懇々謝ることはなかつたのだ、きっと。だけど、バカ正直に謝つてしまつたから、なかつたことにできなかつた。

法を他人の人生に押しつけるプロのくせに、どうして自分はこう、日常生活におけるとつさの判断スキルが低いのだろう。

相澤さんは、きっと普段も真面目で、機転も利いて、視野も広いに違いない。だからSATなどとこうどう考へても危険な部隊で、

自分の役割を見誤らず、仕事をきつちりと果たせるのだろう。

それにしても見事に豪勢な大きさだ。実際に手合わせしたことはないが、実践知らずのスポーツカラテなど、やってみても太刀打ちできないかもしれない。じつさいにやってみたら、どうなんだろうかと、うつかり考えたとき、別の文脈のやつてみるがつい脳味噌を過つて、ついでに、シミユレートしそうになつて、自分の下衆さにうんざりする。眞面目な法解釈に対する自説をぶち上げているとうのに、どうこうことだ。

これも、絶対にイチゴの一件のせいに違いない。迫神はつい勢いで半分までいつてしまつた妄想を何とか食いとめた。ステディな相手に不自由してる男なんてのは、本当に情けない。

あのとき……、何だか分からないうちに、顔が柔らかくてめちゃくちゃ気持ちいい感触の中にいることに気付いたとき、イチゴ模様が目の前で踊つていたのだ。イチゴは好きだから、うつかり「ああ、久しぶりにイチゴ食いたいな……」と思つたのが、いけなかつたのだ。この先も食べることはないだろう相澤さんまで、食つてみたいと、脳味噌が勝手に思い込んでしまつたようなのが、まつたく我ながら始末におえない。

向こうにしてみても、冴えない男に、美味しそうと分類されるのは心外だろう。

けれど、迫神の冷静な部分は、眞面目な話を続けていたが、そうでない部分で、顔や手は焼けてるのに、胸はイチゴが似合つほど白かったよなあ とか、この子、睫毛が長いなあ などというような、亞衣里に向かう、どうにもサカリがついてるといった色彩が濃い思いが湧いて来るのを止めようがなかつた。

「その人が所属している社会の一般的価値観は……」

真面目でない亜衣里と、真面目でない迫神の中央で、真面目な迫神だけが、一人頑張つてお勉強を続けていた。

亜衣里の棺桶置き場になつてゐる部屋で、法解釈うんぬんという、色氣とは遠いところにあるような話をしていた二人の、それでも続いている会話を遮つて、壁面モニターが数回点滅した。いやでもそちらに目が行く。

と、保志総合司法官の姿が大写しになつた。

迫神君、あいあい、お勉強タイムにじやましてすまん。今日はまだ時間あるか？

保志の態度は、別に普段と変わつたところがまるでなかつたが、格好がどう見ても亜衣里が現場に行くときの突入服のようなものになつてゐる。しかも何事も起こつていないうつにのんびりみえる表情ながら、武装を整えつつあるのは明白だ。

「事件ですか？ 保志総司官」

亜衣里は即座に、まつたり勉強モードから現場出動モードに自分が移行したのを実感した。何だかんだ言つても、シンクロイドで死ぬことは、ゲームで死ぬのと同じで深刻さがないのだろう。生きてミッションを完うするのは気持ちいいし、シンクロイドが致命的な損傷を被つて戦線を離脱すれば悔しいが、実際の生死とかけ離れていることで、ミッションに臨むに当たつて、S.P.だつたころは、いつも何がしか背負つていた覚えがある悲壮感というものが、今の仕事では全くない。

人質が射殺されてしまつたり、救護に向かつたものの一般人の死体がごろごろしてたり、シンクロイドでもアバタロイドでもない自身の実行犯を、行動の自由を奪つだけで十分なのに、うつかり死亡

させてしまった場合とか、いろいろ落ち込むこともあるが、それに捕らわれていたら、いい状態で行動できない。

「切り換えをばさばさできないと、ありがちなことこ、心療内科のお世話になることになる。自分でも思うけれど、亜衣里はそういう意味でどこか鈍いのだな。人の命そのものとこいつものに。でなければ、説明がつかない。

うん。ルテチウム鉱山で、どうやらコンドロが出たらしい。上手いこと、坑道の入り口を封鎖できたんで、確保してくれっちゅう要請が出てる。普段ならソロなんだが、一応向こう五年間はチームなわけだから、いつちょチーム戦デビューと洒落こみたいんだが、付き合ひうか？

待つてました。とばかりに、亜衣里は椅子から跳ね上がった。
「了解です、装備します」

悪い。あいあい、反応が鈍くなるのは分かるが、向こうに君が乗れる大きさのボディがないから、シンクロイドは迫神に譲ってくれ。君はアバタロイドで頼む。

「えーっ」

思わず不満を表明する声が洩れると、隣で小さく迫神が噴き出していた。失礼なやつ。

そうそう、それから、私は前から言つてゐるが『餅は餅屋に主義』なんだ。あいあい、突入の指揮頼むぞ。

「……よろしいんですか？」

亜衣里が一瞬戸惑う。突入の現場で指揮を委ねられるということは、命そのものを預けるに等しい。こいつ現場に保志が十分に慣れていることは、画面に映つてゐる装備を整えているやり方を見れ

ば疑う余地はない。彼にとつてみれば自分はヒヨコぐらいだろうし、普通の男は女なんかに指揮を任せたがらない。これだけは間違いなく確かだ。

現役のアタッカーの勘の方がロートルよりや頼りになる。

保志があつさう言つたので、亜衣里はむしろ狐につままれた感じがする。

それから、どつちかつと私の気分はこうだ。『お手並み拝見』。あいあい、受けて立つだろ？ 君なら。

保志も多分、生身で行く気はないのだろう。知死レベルのダメージを喰らう覚悟も、まあ、当然あるに違いない。それで病院送りにならないだけの自信も。

「ありがとうございます」

亜衣里は迷う必要がなかつた。

「では、現時点での全ての情報開示を求めます」

了解した。4444。この件に関して、あいあいのアクセスレベルは私と同列に。

短く保志が言つと、壁面モニターが了解したというように、短く二、三度点滅した。さつき、自分の注意を引きつけたときも「あれ？」と思つたのだが、どつも、保志は音声制御がキライなのだろうか。

とにかく、あいあいは、彼女が見慣れた指令車とモニター前と違

つて、『ンソールパネルっぽいものが全然見当たらないので、音声指示にあることにした。

「SELLEN4444。相澤speaking 認識しますか？」

「はい。standby完了します。」

迫神よりもつと平坦に聞こえるが、いわゆる世間一般でいうところのTAEボイスだ。保志の印象からいって、なんとなく女声を使つていいような気がしていただので、意外だった。

「時間短縮で、ミッション中の呼び名を使いたいのだけれど、なんて呼べばいいかしら？」

「セレでいいですよ。」

画面に映っていた保志が、何故だか軽くずつこけた様な気がするのは、何かの間違いだらうか。

「了解。セレ。保志総司官は保志さんでいいかしら」

保志総合司法官のホームページは保志さんですよ。相澤さん。

「ねべちやん？ そうこうふうてお呼びして、失礼でないのかしら。」

「ゼー、はい、差し支えないと思います。オイ……えっと、私も相澤さんを、あいあいとお呼びしていいですか？」

「わざわざ」

一人と一台の会話を聞きながら、セレの現場好きには困ったもんだと、保志はつづく想つていた。「ゼー」は絶対「ゼーんぜんオ

ツケー」で「オイ」は「オイラ」と言いたかったに違いない。どういう制御をしきりてゐるのか分からぬが、4444はどうやらインターフェース的に知らぬ半兵衛を決め込むつもりらしい。4444もこの手の現場には、セレを出すことに異存はないのだろう。

迫神に身体をとられていいるから、いつものヤツになるのは無理として、多分、飛閃を出せと言つて来るに違いない。確かに坑道につこむには飛閃では「テカすぎるが、中で片づかずに延長戦になり、外でのドンパチになつてしまつたら、飛閃は役に立つ。大体が、こいらの者の中には全体として保志の愛機のファンが多い。たかがジャパニーズ・アニメの影響だとしても、侮つてはいけない。応援要請してきたし」。8坑の連中も、飛閃の勇姿を期待しているような気もする。

「セレ」

保志は声をかけた。

「なーに、ろくちゃん」

心なしかウキウキしていいるように聞こえるのは、気のせいに違いない。TAIだつて結局のところAIにすぎない。嬉しいとか、楽しいとか、そんなんはない筈だ。うん、絶対にない。あつてたまるか。そう思いつつも、気心しれた仲間として、保志はセレを親指を立てた。

「路線変更。飛閃……出すぞ。耐Gカプセルにあいあい突つ込めるか?」

「窮屈だらうけど、何とかなると思つよ」

「4444、あいあいと半六が武装完了したら、飛閃の格納庫まで案内して。セレ、飛閃出動準備始めるよつこ。お一人さん、耳は動くだらう。行動しながら聞いてくれ」

亜衣里は隣で鳩豆状態の迫神に視線をやつた。

「保志さんが言つてる半六つて……迫神さんのこと?」

迫神は苦く笑つて軽く頷く。幾ら自分でも、六法全書を半分も諳^{そら}んじてなどいるわけがない。あの渾名は、完全に若造のくせに爺むさくも説諭好きな自分を、揶揄^やしているものに違いないのだ。

何で、保志^{いぶか}総司官は、自分のその渾名を知つているのだろうか。そう迫神は訝^{いぶか}つた。やっぱりルートは、美耶子先生だらうか……。この渾名の由来を聞かれたら何と答えればいいのだろう。けれど、亜衣里はそこに全く興味はいかず、ただ迫神が半六^{はんろく}といふことで納得したらしい。四音同士で短縮はなされてない気がするが、「さん」を省略できるだけマシなのだろうか。それならば普通に苗字から「さん」を抜き取つていただいて構わないのだが、それはそれで呼びにくいのかもしれない。

4444の音声案内に導かれて進んできた廊下で、完全武装の保志が立つていた。亜衣里も似た様なものだ。ただ一人、迫神だけが、どうにも音声ガイドどおりに着付けてみたけど、全くサマになつていないという雰囲気^{ふんいき}でいる。

ここに来る様になつてから暫くたつが、基本、法廷とそれにかかる書類仕事に追いかけられている迫神には、全くこういう格好をして、そういう現場に出るとこうとの覚悟すら付いていなかつたのだから仕方がないだろう。

「ルテチウムを知つてるか? あいあい

保志が迫神を無視したので、迫神は若干面白くなかった。そんなもん、自分だつて知らない自信がある。ちょっとばっかり法律を知つてゐるからつて、何もかも知つてゐるという前提で、説明をハチにされてはたまらない。大体、セレの説明でなんとか、装備を整えたものの、着付けが果たしてこれでいいのかも分からぬし、使い方に至つてはさっぱり不明だ。シンクロイドで死んだところで実害はないけれど、なまじつか端末の高価さを知つていると、そんなにあつさり壊して構わないものとも思えない。

「知りません」

嘙みついて来る様に即答したのが迫神だつたので、保志はちょっとだけ思考が止まつて、それから徐に愉快になつた。お前は知らないという前提で話されると怒る男は多いが、迫神は自分の知らないことを知つてゐるという前提で話がされるのは不本意らしい。男にしては珍しい。

「イットルビア名物、イットリウムと同じレアアースの一種だ。科学的性質もイットリウムに近いそうだ。我等がHRBでも、金・銀よりも採れるぐらいだから、希少性には若干欠けるんだが、ランタノイドの中では少ない。でも、それより何より、希土類元素からの分離に手間が掛かる」

亞衣里には、何がなんだかさっぱり分からぬ。

「分離に手間……つまりは、高価だつてことですか？」

迫神が言つと、保志が頷いた。

「半六、正解。何が言いたいか分かるか？」

「高価なレアメタルを掘り出している坑道……。

「坑道は壊すなつて……」とですか？」

「あいあいも正解。優秀な三分の一に恵まれて私は幸せだよ
「ろくちゃん、オイラは人数に入らないのね……」

軽い声が壁のあちこちに埋められているスピーカーから聞こえて、

亜衣里はちょっとギョッとなった。

「紹介が遅れたが、セレは4444^{よんよんよんよん}が便宜的に使う擬似人格の名前だ。彼はちょっとばっかり、TAIインター フェースとしてはナンパなんだが、まあ、こういうもんだと思って諦めてくれ。君たちのどちらかが、ここ^{マジック}のバッパーになつた後は、いくらでも好きに弄つて、落ち着いた人間仕様^{マジック}というものを教えてやつてくれ」セレが不満を表明してか、廊下全体の照明が点滅した。

「そうだ、ミッションマスター、あいあい。さつき半六さんの支度手伝つてたんだけど、この人、多分、銃火器バージンだよ」

「え？」
処女^{バージン}というのが迫神に相応しい表現かどうかは別として、非常にちゃんと理解できた亜衣里は、確かに板に付いていない迫神の武装姿をマジマジと見た。

「全然？ 実践だけ未体験？ 訓練自体がないの？」

「訓練自体、ない」

「……保志総司官……」

自然と亜衣里の口調が冷える。幾らシンクロイドでも、死ぬといふことのあの最低の気分は、好きこのんで味わうようなものではない。

「素人一人つれて、いきなり実戦つて、どういづおつもりですかつ」「いや……おいおい訓練していくつもりだつたんだけど、現場が先にきつやつたから。この際〇〇でと」「そういうのは〇〇とは言いません。ミッションマスターとして、迫神さんを連れていくのは却下します」

「……でも、人数多いよ。向こうつ

「死体の数が増えるだけです」

亜衣里は迷わなかつた。ちゃんと訓練して使えると判断してからでなければ、猫の手にもなりはしない。

「じゃあ、オイラ行きたい～つ

壁から、セレのウキウキとした声がふつて来る。

「……保志総司官……」「

亜衣里の直感が動いた。

「何？」

「セレは普段あなたのバックを守つてゐるんですね……

「うん」「

「迫神さんが使つてる身体^{ボディ}に乗る形で」

「うん」「

否定はできない。セレはこんなやつだが、実際問題として現場では非常に頼りになるのだ。

「迫神さん、すみません。今日は帰つてください。セレに代わつて

「……それは、保志総司官の判断でも……それでいいなら」

迫神にしても、一応、そういう現場がある覚悟はしていたし、右も左も分からぬなりに、防具を身につけ、武器をホールスターに装着しながら、一応、その気にはなり始めてたところなのだ。

「」の現場は私が仕切れます。保志総司官より今は私の判断が優先です。そうですよね、ろくちゃん

亜衣里の目が座つてゐる。宇宙の坑道の現場なんて、まず、九割方、地球化されていない。つまりは、どうせ攻めるも受けるも生身なんかいやしないのだ。つまりはゲーム感覚での対応もあながち間違ひではないのだが、地球の生肉ばっかり相手にシビアな闘いに日々

「も……もちろん。」この現場は、あいあいに渡した「
睨み付けていた保志が、半分引きがちにそつと請け合つたので、亜
衣里は漸く迫神に向かつて微笑んだ。

「では、迫神さん、今日はお疲れさまでした。シンクロライドで闘
うのだから、ゲーム並みの感覚でいいのかもしませんけど、少な
くとも捨て駒ぐらいできるレベルでないと邪魔なんです、ごめんな
さい。」

捨て駒すらできないレベルと言われたらそれまでだ。

「……条件があります」

「今やつてゐる司法試験勉強の時間の半分、相澤さんの得意分野の方
の、私の訓練に充ててください」

亜衣里は迫神を見た。悔しそうな色がなんとなくある瞳に、強い
意志が見える気がする。迫神は熱いところがなさそうな、説教臭い
のが似合つ、まさに裁判官そのものといったふうでいながら、バッ
パーなんぞに登録しているだけあって、未知の領域にすかずか進む、
つまり前向きに自分を鍛えていくことを苦にしないタイプの男らし
い。

「ええ、もちろん。どうやら、私たちの指導者であるはずの三分の一
教官は、余り私たちを育てる気はなさそうですから」

思い切り厭味になつた口調に、亜衣里自身がちょっとビックリし
た。どうやら自分は、保志が迫神に裁判仕事を全部押しつけている
ように見えるのと、亜衣里にうくに仕事を割り振つて來ていない、
御座成りが見え見えの態度に、相当鬱屈が溜まつていたらしい。

保志がぽりぽりと鼻の横つちょを搔くのが見えた。辛辣な自分の言葉に別に怒る風でもないのは、面倒仕事を迫神におつかぶせている自覚が十分あって、それを多少後ろめたくも思っているのだろう。亜衣里は、いやなおっさんだとも思うものの、なんとなく憎めない感じもしてきて複雑だった。

「4444、帰ります。ティスマウント」

迫神が言う。と、一瞬だけ、立つたまま迫神が奇妙に揺れた。そして次の瞬間、そこには迫神の身体をして、迫神そのものでありますから、奇妙なほど別人の雰囲気をまとった人物として、迫神が立っていた。亜衣里はビックリして、その見知らぬ迫神を見つめる。

視線がぶつかると、迫神がにっこりと満面の微笑みを浮かべた。そんな笑顔の迫神など見たことがない。不覚なことに亜衣里の胸が、思わず知らず、どきんと高鳴った。

「はるー、あいあい。オイラずーっと、おしゃべりしてみたかったんだ。ろくちゃんつてば、ズルいんだもん。これからはちゃんとオイラもヨロシクね」

迫神の声が、迫神とは似ても似付かぬしゃべり方をたので、亜衣里はすつこけそうになつた。迫神の身体が、一歩、三歩と近付いてきて、亜衣里の目の前で止まる。そして、彼女がセレに全く慣れていないのにつけ込んで、亜衣里の頬に馴れ馴れしく手を添えた。と、ちょいと背伸びをして、それから顔を寄せ……。

外国人が頬に挨拶のキスをするのは知つていて。けれど、迫神がそんなことをするのは見たことがない。きっと……これがセレ？ 挨拶と分かつていてもちょっとドキドキするのは、何故だろう。迫神が使つていた身体だからだろつか。

亜衣里の予測を完全に裏切つて、セレは彼女の頬などきれいさつぱり無視すると、その脣に思いつきり深々と迫神のそいつを重ねてきた。暫く、亜衣里は何が起こっているのか分からぬまま、断じて挨拶なんかではない濃厚な接吻をされるがままになっていた。が、状況を把握するや……。

「何をする？」

亜衣里は、迫神の身体をした物体を腕の力で突き放し、そいつの襟元をとつさにむんずとつかむと、体をうまく流し込む様にして入れ込んで、女性とも思えぬ、見事すぎる一本背負いを決めた。

「あ……、あいあい、すうい　さすが柔道五段」

嬉しそうに投げ飛ばされるな……！」

保志は天井を仰いだ。氣のせいではなく頭が痛かった。美耶子の身体でセレに迫られると、非常に脱力するしかないのは、経験として実感がある。セレにも悪気はないのだろうが、どうにも最近おふざけが過ぎる。しかしながらうな、と保志は思つた。亜衣里が迫神の身体のままのセレに唇を奪われて、一本勝ちを納めるまで、微妙に時間が長かつた気がする。とすると彼女的には、迫神という存在と肉体的接触を持つことに、忌避感は全くないということなのだろうか。

以前セレが職場内恋愛うんぬんと抜かしていたときに、男の生理は恋情とは一致してないの原則に基づき、一笑に付してやつたのだが女は違う。直感的に厭だつたものはとにかく厭。指一本どころか、同じ部屋の空気を共有するのも拒否りやがるのが連中だ。

直感とか、そういう空気を読むとかいう感覚まで、セレの野郎が上とは、保志は断固思いたくない。思いたくないが……やつの直感

勝ちか？ それとも、やつ自身が擬似人格が男であることの証明に、単純に現状手駒の中にいる紅一点ということでの、亜衣里に惚れてみたとかいうつもりなんだろ？ 基本肉体がないんだから、魂の所在証明として肉持ちに惚れる必要はないはずなんだが……。とにかく、セレが初対面からT-A-Iのくせに、ただの召使サバントという立場から随分はみ出していることをアピールしてしまったことだけは確かだ。

お試し期間に犠牲者に逃げられない様に、直接接觸を邪魔してきたのが、どうやら裏田に出てしまったようだ。もつとも。

歌つて踊れて、受け身もできる。……褒めてやるひじやないか
つ。

「あいあい、それ、使えないよ」

亜衣里に投げ飛ばされて、床の感覚をじつくりと楽しんでいるのかと思いきや、ひょいと跳ね起きるなりセレは、亜衣里が手にしているマイクロ波加熱方式の熱線銃^{ヒートガン}を指さしていった。

「多分……^{レア}生身もんじゃなこと?」

さすがに亜衣里は勘がいいと、保志は思つた。マイクロ波加熱方式熱線銃^{ヒートガン}といつのは、警察の基本銃器で、あれは人の体温をジャスト42度まで、ほぼ五秒の連続照射で加熱する。43度で人間の身体を構成しているタンパク質は变成してしまい確實に死亡するが、41度であれば動けるやつもいる。それでギリギリで選ばれているのが42度だ。

人の死を嫌う日本の民族性によつて、死なせないで行動力を奪い、ついでに後遺症が残らないといつことで、警察でごく一般採用されているが、はつきりいつて現場泣かせの銃に間違いない。戦闘の現場で、障害物なしで五秒照射させることはまず無理だ。武器として致命的と言つても過言でない。真つ当な銃火器を持つてゐる相手に、こんなものを持つて距離を詰めるのだから、相討ち持ち込むだけでも技術がいる。

シンクロイド亜衣里が死ぬ原因は、基本これだ。

「当たり」

「万が一、レアがいたら?」

「どつちにしきマイクロ波は宇宙服で反射されりやつから、使えない」

ああ、レトルトパウチ食品が電子レンジで加熱できないといつてアレ

か。亜衣里は納得する。

「じゃあ、なんで装備の一一番取り易いところに置いてあるのよ」

「そりゃあ、人口密度稀少域でも人間が密集してるのは、テラフォームド・シティだからだよん」

「採掘現場では意味がないってだけで、普段は使うのね」

「Oui-Oui」

亜衣里はヘルメットに頭を突っ込む。定番通り、仮想モニターがリンクしているらしく、何も映っていないながらも、表示空間が薄く広がっている。

「セレ、44444じゃなくてあなたが、突入もするけど監視兼用つてことでいいね」

「うん、いいよ」

「問題の坑道の図面データある?」

言い終わるやいなや、セレの返事より先にモニターに透過立体図が映し出された。点滅しつつ移動する点が色分けされている。

「どっち?」

「青がそこの従業員。赤が侵入者」

亜衣里が腕を組む。CQB (Close Quarter Battle = 建物の中に侵入して犯人を取り押さえる) こそが今の彼女の専門職なのだが、花形というかなんというか、突入班ばかりで、支援はもとより監視も狙撃も交渉も、間近かに見てはいるが経験はない。

突入と狙撃ばかりが部外者からは目立つS.A.Tだけれど、一番重要なのは交渉人の技量だ。突入班は交渉人が犯人にちゃんと投降を促してもらい、断固交戦ではなくてやる気が失せた人間を保護に行くというパターンに落ち着く様に祈りながら待つてするのが普通だ。そこまで人員に恵まれない極小編成のチームを率いるということは、まさか、犯人への一番最初の呼びかけを自分がするということだろうか。だめだ、怒らせる自信しかない……。

「セレ、あなたレコンの経験は？」

「ろくちゃんとのペアだと常にポイントマンだよ」

レコンもポイントマンも言葉は違うが意味そのものは変わらない。チームのために一番最初に進む者のことを指す言葉だ。それは人間と非人間でチームを組むなら、まず人間が先導ということはないかと、亜衣里は納得した。特殊環境で研ぎ澄ませた場合、人間の第六感は多分、機械の各種センサーを凌駕するだろうけれど、基本としてはぼけている人間とセンサー持ちの機械を比べれば、彼らの状況察知能力の方が高いに決まっている。

レコンは死にやすいポジションだ。しかし、簡単に死んでしまうのでは居る意味がない。死への恐怖で平常心が乱されがちな平均的人間と比べれば、多分あらゆる意味で優秀に違いない。

「入り口は施錠されてると思う? マスターキー使った方がいいかな」

「……ご自由に。オイラなら蹴り開けられるけど」

「馬鹿いってないの。純正のアバタロイドじゃないんだから、シンクロイド・ボディの皮の強度はそこまでないはずよ」

亜衣里が呆れた様な口調になった。

「だつて、これ半六ちゃんの身体だもん。なんとかなるよ」

「え?」

セレが右手でガツッポーズをこれ見よがしに作って、左手で二の腕当たりを指さした。「彼氏鍛え方半端ないからね、なかなかよ」

亜衣里は冗談に過ぎると肩をくめる。

「セレ、マスターキー使って。人数少ないんだから、そんなところで怪我されちゃ適わないわ。筋肉自慢できるなら、重いから厭だなんて言わせないからね」

「……まったく、信用ないんだから。半六ちゃんの身体、ホントにす」」いのになあ

言葉ではそりといつづり、亜衣里の指令を守つて、セレがマスターキーを移動艇格納庫のハッチ前の壁に物々しく並んでいる武器収納棚から取り出した。

マスターキーというのは鍵のことではなく、銃身を切り詰め、銃床を短く、あるいはなくした、いわゆるソウドオフショットガンを、アサルトライフルの下部に乗せ込したもののことだ。

普通、建物など建造物に侵入するときの先頭に立つ、ポイントマンは施錠されたドアを破るためにショットガンを持つことが多いが、一人で道を封鎖できるとまで言われる威力のあるショットガンは、殺傷能力を低めたゴム弾を利用してさえ至近距離で散弾が拡散しきる前に当たると、その破壊力は凄まじい。

ショットガンの銃身を短くすると、至近距離での破壊力を増大するものの、射程が極端に短くなり、命中を期待できないという欠点がでてしまつ。距離をとれないという難点があるため、突入後はアサルトライフルに持ち替えたりするのだが、持ち替える時間もかかるし、そうでなくとも重量がある銃を二丁持つていくのも取り回しが悪い。

重い上に次弾を装填するのに時間がかかるという欠点はあっても、取りあえず、建造物内を制圧するときのレコンが持つ武器としては悪くない選択だろう。

「ろくちゃんの得意なポジションは?」

「CVの運用者……かな」

「一戦闘車両 (Combat Vehicle) ? そんなのまであるの? 管轄は司法^{オマハ}庁なのに?」

「総司官の制圧班が、マスターキー使わされるご時世だもの」
亜衣里の質問に、セレはそらつとぼけたような返事をした。

「だけど、ACV (Armored Combat Vehicle)

e) でしょひね、もちろん

「当然」

「じゃあ、現場までの搬送の運転手もろくちゃんなのね」

「ああ、それは無理。生身にオイラの最高速度は耐えられないよ。オイラ自体だつて、このボディは生身なあいあいたちと変わらないから、耐G力プセルに入るよ。現場までは、4444がACVコントロールする。けど、現場到着後はACVコントロールはろくちゃん担当」

「じゃあ、基本的にずっと、セレのソロプレイしかしてないってこと?」

亜衣里の疑問に、セレが笑った。

「ろくちゃんのACV見れば、違うって分かるよ。オイラたちは二人ぽっちでもチームだつたよ、ずっと」

ACVのAはArmoredのAであり、すなわち、武装しているということだ。セレの説明を素直に文字通り受け取れば、装甲の分厚い高速移動艇だらう。それで運ばれて、そのあと、現場での戦闘に参加できるとなると、宇宙船の癖に、タイヤとかが出て来るのだろうか? テラフォームド・シティの中で、自由に移動できる宇宙船というのが、亜衣里の想像からは非常に遠かった。

「突入班の分担は決まつたみたいだな。いくぞ」

保志が亜衣里とセレの会話を遮った。

「オイラうずうずしちやう。あいあいと初デート」

「お前、今日からT-A-Eつて名前返上してY-A-Eつてのにしたらどうだ?」

言ひ捨てて、保志がハッチにむかつて歩きだす。

その背中を追いかけて歩きながら、セレが保志に言ひ。

「タイをワイにするつて、TをYに変えるんだよね。Yつて何の頭文字?」

亜衣里も取りあえず一人の背中を追つた。距離が近いから、保志とやつぱり見掛け迫神の会話は聞きたくなくても耳に入る。

「やりたい……の頭文字」

「やりたいって……何をさ」

不満そうなセレの言葉が終わらないうつに、保志が立ち止まってクルリと振り返る。

「気持ちいいことやりてえんだろ？ ウンコしたがるし、女とはやりたいみてえだし、お前にじんとこ最低にヘンタイ路線突っ走つてるだろ。A-Iの自覚低すぎらあ。それ以上ヘンタイ化が進行したら、オマルに言いつけて4444」と廃棄処分にしてやるからな」
ぶつと、亜衣里が噴き出す。A-Iのくせにウンコしたいって、それどういう欲求がまつたく分からぬ。

それに、武器を持つていい侵入者との直接接触が確実に予測される気持ちとして昂り易い状況はバケの皮を剥がすのか、どことなく保志の物言いは、いつもきちんとした言葉使いで、しゃべり方に乱れたところの気配もないものとは似ても似付かない。そう、保志総司官ともいえない下品さだ。

もつとも、こういう種類の男たちの方が、亜衣里は慣れていくといつて過言でない。眉間に不満そうな縦皺が寄つているけれど、いつもの能面みたいな保志よりずっといい。

「ひくちゃん……。ウンコしてみたってのは、認めるナビや、女とやりたいって、そりや、誤解。オイラやむじこひくわんに抱かれるだけで、十分満足してるのに……」

今度は保志ががっくり脱力した。

「あいあいに誤解されるだろうが。俺はおまえを抱いたことなんか、一度もねーからな」

そういうて保志がにらんだのにも、セレはまつたくめげなかつた。

「つれない」と言つたって、オイラはまくちやんをちゃんと知つてるもんね

「……そ、そういう仲なの？」

亜衣里が「ぐぐぐ」く眞面目に聞いてしまう。セレがふいと亜衣里を見つめて、にっこりと笑つた。ああ、迫神の笑顔だと、つい亜衣里は思つてしまつた。あいつにクソが付く眞面目な顔つきの代わりに、こんな笑顔がいつも張りついてたら、ちょっと惚れてしまいそうだ。自分がそう思つてしまふことに気付くと、思考回路が沸騰しそうだ。

「ただの[冗談]……。ほら、現場突入前は緊張感をほぐさないと」

亜衣里はセレの横を通り抜けて保志に並んだ。そしてセレに聞こえるように言つた。

「保志総司官、私はあなたのＴＡＩの運用には、問題があると判断したくなりますが」

保志が言い難そうに口を開いた。

「……うん、まあ、そななだけ。一応こんなでも、頼りになるよ」

セレが普通の声で言つた。

「あいあいがオイラのマスターになつたら、ちゃんと、あいあい好みのＴＡＩになるよ。だから、司法試験頑張つて、バッパーになつてね。オイラ、あいあいの一本背負い気に入つちやつた」

長い廊下には亜衣里がまだ把握しきれてない扉が延々と並んでいる。少し保志が進んだところで、一つのハッチが勝手に開いた。多分、そこが移動艇格納庫への入り口だろう。些細なことだけれど、こういう動きをこの官舎がするのは、保志の動きを正確に把握して制御をしているのだ。セレがいつたように、4444はきつとこの

派出所をコントロールしていながら、基本姿勢はバッパー保志のサーバントなのだ。

多分、保志が何とおつと、セレの言葉通り、^{TAI}彼は保志好みを把握して動いているのだろう。だとすると、取りつく島のない感じの保志こそが、よそ行きに作られた偽りの保志で、このごく少人数での構造物制圧戦を前に、つきつきと弛んでいる方の保志こそが地なのかもしれない。

保志に続いて格納庫に足を踏み入れて、亜衣里は思わず息をのんだ。

白い巨体。ところどころに置かれた赤いペイントがおしゃれ感たつぱりにエレガントを演出し、肩に置かれた黄色のラインも涼やかな……。巨像^{「コロッサス」}が横たわり、静かな眠りについていた。

「コロマ……？……宇宙仕様なの……これ？」

亜衣里の横にセレが立つた。

「さすがあいあい。コロマつて、ちらつと出て来るとこがいいねえ。ろくちゃんなんて、カタログで飛^{これ}門見たとき、モビール・アーマーって言いやがつたんだよ」

くつと亜衣里は噴き出した。巨像^{「コロッサス」}の車でコロマなどという名称は、確かに一般的ではないだろう。一般常識範囲での略称なら、マニピュレーター（手で操縦する機械）巨像^{「コロッサス」}から採ったマニ=コロが普通だ。

人型のロボットといえば分かりいいのだろうが、余りにも守備範囲が広すぎて、漠然としきりにいる。日本人は羊を羊としか呼ばないが、モンゴルの遊牧民は羊を種類や成長の過程、オスかメスかで事細かに呼び分ける。陶器に興味がない人には、陶器は陶器で終わ

るが、そのマニアには産地や窓、作家や時代で事細かに呼び分ける。自走しない、人型の巨大ロボットで、移動に特化したものならコロマ、戦闘メインならアムコロなど、メーカーや使役されるスタイルによって様々な呼称があるのは、それが身近であればあるほど、当然のことだ。

「あいあい、乗ったことは？」

「特車は配属なったことないのよねえ。大体、東京都下だと、土木目的に特化したところで、コロマで公道走るのって届け出いるし、届け出があつても全長四メーター以上のコロマは規制で走れないし。違法コロマ対策の特車三課にでもいかなきゃ、普通は乗れないよ。こんなに至近距離で見たのも初めて」

亜衣里は横たわる巨人に歩み寄りながら、惚れ惚れと美しいコロマの身体ボディを眺めた。それはもはや伝説の古典ですらある某アーメーションの中の、ビジュアル系棺桶に横たわる白雪姫のように、見るものを誘惑する。

「うん、マニアコレーターが基本だから、テラフォームド環境（いわゆる1G世界）では体勢制御が難しいもんね。ちょっとスタビライザーの調整があまいっていうのもあるけど、ろくちゃんんだってオイラが補佐しなきゃ、ただの傍迷惑人形だよ。だから、ろくちゃんの操作通りに動ける様に、オイラが頑張るの。これもまた一つの二人羽織二ツバオリつてやつで」

「二人羽織つて、じゃあ、操作はモーキャプ？」

「またしても大当たり。あいあいすごいなあ」

「……す”お……い。これ、そんなんで動かせるんだ。モーキャプ・

フィールドは中？ 外？」

「どっちもできるよ。基本インナー・モーキャプ。まあ、外、このモーキャプ・ルームからでも全然大丈夫。それにオイラは優秀だ

からで、口頭指示だけでもそこそこ働くよ。まあ、あいあいに乗られてもいいけど、ほらあいあいはジューードーレティちゃん。相手柔道着も来てないし、帯もしてないじゃん。ドライバーさん候補があいあいか半六ちゃんなら、彼氏の方が向いてるかなあって、オイラ密かに思つてんんだけど

「……迫神さん、鍛えてるって、わざわざ言ってたけど、あの人にやる人なの？」

迫神の外見をした物体と、迫神の噂話をするのも変な気分だと思いつながら亜衣里は聞いた。

「カラテマンだよ。彼。ついでにソロフレイが好きな山男だから、普段から重装備扱いで山登つてんだよねえ。だから下半身もバッチリよ。鍛え方がろくちゃんとは全然違う」

「……え？」

カラテマンに山男って、法服を着て「わたくし私」という感情はありません」というような顔をして、迫神のイメージと、全然そぐわない。亜衣里の戸惑いをどう捉えたのか、セレが続けた。

「それに、正義感たっぷりのいわゆる古風な判事さんだし。生涯賃金にも不足はないと思つよな。つまり、恋人候補としては優良物件だと思うんだけどな。一応、参考にしてね。半六ちゃんも、あいあいに欲……」

突然、距離を詰めてきた保志が、軽口発言を、話半ばでなんとか間に合つて、セレの後頭部を拳骨でぶん殴ることで阻止した。

「よべ？」

亜衣里はどうも会話の勢いがつかめない。

「なにするのさあ

「何じやねえ。それ以降は、おめえが言つていいことじやない。だまつとれ」

「ビーして怒るのさ。ろくちゃん

「てめーには分からん。説明する時間が勿体ない。さっさと棺桶：
：じゃなかつた、耐Gカプセル入るぞ」

保志が言う。亜衣里はもう一度つぐづぐ眠れる巨人をながめるが、どこから入るのかさっぱり見当もつかない。普通の操作なら、多分一番厚みがあつてスペースを確保できる胸部に部屋が確保されるはずだけれど、耐Gカプセルがそんなところにあるとは思えない。モーキャプ・フィールドには、少なくとも操作する人間の身長の1.3倍は要る。

「保志総司官、耐Gカプセルはどこに？」

ろくちゃんなどという呼び慣れない言葉は、意識しなければそうそう簡単に口からは出てこない。

「腹のとこ。入り方は教える」

「どうやって登るんですか？ 全然取つかかりとか、見えないんですけど」

セレが口を挟んだ。

「ちょっと待ってね。すぐやるから」

とたん、亜衣里の身体がふうわりと浮いた。とつさにもがいでしまって、うまく体勢が制御できない。と、その亜衣里の目の横で、慣れきった動作で保志が床を蹴るのが見えた。取つかかりを蹴りながら、うまく保志は飛んでいる。なるほど、人工重力を切ればハシゴなどをかけるより余程簡単にいける。もちろん、中の人間が無重力での移動になれているならば、ハシゴなどをかけるより数倍効率的だろう。

亜衣里は一番最初にグルグル回り始めてしまったせいで、どうにも姿勢を建て直せない。そこに、迫神の手がのびて、亜衣里の突入服の腰辺り、ガンベルトをトツ捕まえた。視線が合つと迫神はセレの人が悪げな笑顔になつた。

「可愛いあいあいだから、助けてあげる」

情けなくもセレのサポートで、やっと亜衣里はロロマの腹の上に先に到着していた保志の横に到達した。下ろしてもうと亜衣里は保志にならって、巨人の腹部に設置されていた小さい取っ手を握りしめて少し深呼吸をする。落ち着け自分。そして、呼吸がましに落ち着いてから文句を言った。

「セレ、お願ひだから、迫神さんの声でしゃべるのやめてくれない？」

「了解、あいあい」

その声は、深く低めに落ち着いた迫神の声ではなく、雰囲気として少年のそれになった。そしてそれは、ちょっと男の子にしては高めの透き通ったなかなかそれはそれで美声には違いない歌でも歌わせてみたくなる様なものだった。

「ちょっと狭いけど、固めるほど遠くないから我慢してね」
つかまっていた取っ手の丁度脇に、ぽつかりと穴があいた。ちょうど三つだ。

「これの耐Gカプセルって、三つだけってことは定員三なの？」
亜衣里が言うと、セレは何を野暮なことを聞いているんだといふ声になった。

「バッパーは普段ソロ。世代交代のときの三分の一だけ特別だけど、マックス三、それ以上乗せる必要がある？」

それもそうだと思いつつ、でも、やつぱり納得しきれなかつたあいあいが聞き重ねた。

「逮捕した犯人とかの移動とかには？」

「基本、最寄りの保安官事務所に預かってもらひながら、遠距離のお持ち帰りはしないよ」

「ああ、それで、保安官さんたちとは、繋がりが深いのね？」

「そういうこと」

「お前ら、べらべらおしゃべりしてゐ間があつたら、移動するぞ」
保志がそういうて、一つの穴に滑り込むや否や、出入り口の穴が
完全に見えなくなつた。時間差でもう一つ音がしたといひをみると、
エアロックのように、安全面の考慮から扉が一重になつてゐるよう
だ。

保志が耐Gカプセルに消えた。

セレは保志本人が聞いてる、聞いてないのに興味なくしゃべるつ
もりだったのが、たまたま保志が聞こえない場所に移動したからな
のか、しみじみという雰囲気になつて言つたのだった。

「あいあいは、もしかしたらろくちゃんのやり方に不満があるかも
しないけど、ろくちゃんは、意味がないことはしない人だよ。最
終的にはあいあいや、半六ちゃんが自身で判断することだけ、信
頼していい人だと思つ」

「この子は完璧に、あらゆる意味で……保志総司官の武器なんだ。

とびきり優秀な、オールマイティー国連総合司法庁と直リンクしているTAIであ

りながら、やんちゃな子供のように時間と場所をわきまえない悪ふ
ざけをする。それでいて、常に行動の全ては保志を中心に行き開かれ
てゐるようだ。なんとまあ、アンバランスな存在だろ。

考え方計算するのが基本のAIに思考がないとは言わないので、
人間的な意味で考えて次にすべきことを選択するという種類のもの
ではない。だから、こうじうものに、「考えられる」という当たり
前の単語を、しつこく冠してある理由が、この種のものに初めて触
れる亜衣里には、やつと見え始めた気がしてた。

「（考えられる）AI（人工知能）というのは、本当にその辺に
転がつてゐるあらゆる種類のAIとどこか決定的に違う。

亜衣里は自分も狭いハッチ口掛けて足から無理矢理ねじ込んだ。本当に狭い。膝を少しばかり曲げて姿勢を低くし、口を閉じて扉が閉まるその瞬間を待つ。

と、機械的に扉が閉まる音がして、どこからともなく湧いて出た扉に、あいあいは脳天を激しくぶつ叩かれた。

「痛つたい」

さすがにさすがのスペースで頭を押さえることもできず、亜衣里は、一人、不格好に大きい己を嘆くかのように毒づくのだった。

あいあい、大丈夫？

耳元辺りにスピーカーがあるのか、セレの声がした。
「だめ……頭ぶつけた」

「」めん。次から、閉めるとか、閉めるつてちやんと言つね。

申し訳なさそうなセレの声が、なんだか無性に可笑しい亜衣里だった。

いみじくも古人はこう言つたらしい。

人生至る所修羅場あり……。（違うだろ？）

* * *

あの日、迫神は面白くなかった。

「ひんふ。どうして、そんなに荒れてんのさ」

カラテ・ジムで爽やかならぬ冷や汗を回りにかかせまくつて、それでも不完全燃焼感に苛まれ、遠慮を斟酌しなくていい唯一無一とは言わないまでも数少ない悪友である、小学生のときからのカラテ仲間の啓介に、防具を懸々つけさせてからボロカスにぶん殴つてもスッキリしなかつた。フェイスをはぎ取つて、暢気な口調で啓介が言つ。妙なところが律儀なんだ。やつは。

「荒れてない」

迫神の名前^{ひらかず}の平和^{ひらかず}を、麻雀のショボイ役の読み方であるピンフと読むのは、啓介ぐらいなものだ。そういうえば迫神に麻雀を教えてくれたのは啓介で、雀頭待ちで平和^{ひんわ}あがりしようとすると、自分の名前の役ぐらい、きつちり落とせとよく分からぬ言いがかりをつけて来るようなヤツだつた。言いたくないが頭が悪いやつの要領を得ない教え方のせいだ、迷惑をしたのはこっちの方だ。

「荒れてる。大体、防具つけろつて言われたときに、警戒しとくん

だつたよ。俺は馬鹿だよなあ。悪いけど仕事で鬱憤たまつてるんだ
ら、カワラで遊んでたら?」

「自分の馬鹿さに今頃気付いたなんて、すうじく遅いよ。三十年超過
で生きてる癖に粗忽者だな」

迫神が取りつく島なく言つて、啓介は迫神が面白い冗談を言つた
とでもいうように大げさにぎやははと笑つた。啓介の馬鹿さについ
ては確信がある迫神は、そこにつける啓介のめでたさに、逆に毒氣
が抜けた。

「俺は、お前をボコりたかったんだ」

迫神がカラテじゃないのをやつとけばよかつたと心から思うのは、
むしゃくしゃがたまつたときで、自分がフルパワーで素人さんをぶ
んなぐつたらどうなるか予測が付けば、その辺にたむろしているチ
ンピラ程度にすら元気に喧嘩を売れないのだから、鍛えたことの意
味があつたのか正直悩む。もっとも、職業柄、喧嘩沙汰で御用にな
れば失職が待つてるのは想像に難くない。結果として、ブレーキ
を利かさなければいけないのを選んで正解だったのかもしれない。
「ひでー、ピンフ最低」

「仕方ないだろ? 遠慮せずにぶん殴れるのが、お前ぐらいなんだ
から」

「そりゃそうだ。師匠相手じゃボッコられる方だもんなあ」

もう一つ啓介は元気に笑つてそれから、突然真面目な顔つきにな
つた。迫神が見ても啓介はビジュアル的な意味合いでいい男だ。こ
いつにとつて顔が商売ネタだつて知らなかつたら、頭もなぐつてや
るのに……と、やはりこれが相手でも不完全燃焼感が残るのだ。

「上手くいってないのか? 例の三分の一……」

シンクロライドで世界に冠たる登山に入るのも悪くないが、啓介
と一緒に週末に丹沢辺りまで出掛けるのも迫神は好きだ。友達付き
合いの幅が狭いといわれればそれまでだが、カラテにしろ、山登り

にしろ、一人だけの趣味なら続いていたかよく分からない。

男は強くななくちゃ という啓介に倣つてカラテを始めて、山男
だつた啓介の父親と三人で、週末登山を楽しんだ。

啓介は小学校の単元テストで十点台を採れるような筋金入りの頭
脳不自由児だつたくせに、顔と性格とスタイルの抜群さで、トップ
モデルを皮切りに、大根の癖に俳優業に乗り入れ、オンチの癖にア
ルバムはオリコンチャートの上位に乗つて来る様などんでもないや
つだ。念の為に繰り返すが、百点満点で十点台だ。

多分、あのマツチヨな相澤だつて地味な自分と、派手な啓介を並
べたら、向こうを選ぶに違いない。

「そういうわけじゃない。基本……、やらされることは半端なく
たまりまくつた少額訴訟の判決言い渡しだから、今やつてることと
大差ない」

そう、本当に大差ない。大差ないことが、認識はしていなかつた
けれど、迫神の不満といえば不満だつたのだ。部屋に帰れば、四畳
半の畳みの間に、でんと鎮座している棺桶が、既に三分の一を異世
界に供出していることを思い出させる。

苦学してやつとこさつとこ司法試験を取つて、それでもこつちは
官舎の四畳半を窓口に宇宙の辺境で二ワトリの所有権に関するの判
決に頭をなませてゐるのに、何にも考へてないこいつが、あんな
に可愛い女房がいても浮氣相手に不自由せず、青山の億ションで優
雅な生活をしてゐるのは不条理だとつづく思つ。

「分かつた、たまつてゐんだ。三十面さげて、独身貴族だなんて悠
長なこと言つてるからさあ。だからさつさと女作れつてアドバイス
してやつてるのに

啓介が暢氣に言つた。作らつと思つてその日にできる自分を基準
にするなど、心の底から迫神は言いたかつた。

「独身貴族つて、いつたいいつの死語だそりや。今どきは嫁さんもらつてゐる方が勝ち組だつて」

「ピンフは脱げば一けてるのに、何だか服着ると地味だからなあ」

「お前と一緒にするな。俺は普通だ」

「仕事やめちやえば？ いつそのことヌードモーテルとかすればいいのに」

「だれがするか、そんなもん」

大体、自分が脱いだとこりで金払うような奇特なやつは世の中にない。こいつは自分を基準になんでも考へるから、本当に混じりツ氣なしの馬鹿なのだ。

啓介としゃべつてると、世の中に数ある訴訟^{サンスーシ}とのドロドロに人生を浪费している人間と、この憂いなし野郎と、同じ空氣をつて生きているという、余りにもの不公平に呆然とする。

どーせフュイスをつけているのだから、下手な同情などせず頭に蹴り入れてやればよかつたと、迫神は心底思つた。啓介ならば、少なくともこれ以上の馬鹿になる心配だけはない。

「まあ、一杯飲んで帰る？ 殴られ賃に奢られてやるぜ」

迫神が笑つた。

「なんで貧乏人にたかるよ」

「しがないアイドルに、判事様の安定した給料はつらやましいわけよ」

「……ふざけるよ。奢られてやる」

「だつたら、落ちぶれたら女房子供^ごと面倒みてくれよな」

「割に合わない……」

迫神が不満を表明すると、啓介は笑つた。

「ピンフみたいなやつは、わざと想い切らないと、独居老人、孤獨死^{リツナ}コースじやん。いくらピンフとの付き合ひが長くても、可愛いうちの理利菜は、いくら那人からピンフのファン申告あつても、絶対嫁にはやれねえし」

「だれが五歳の女の子嫁さんにするかよ」

「どういう理論の飛躍だか、付き合いきれないことだけ間違いない。

「飲みに行くなら、やつぱ、あつこかねえ……シンバシ高架下」
おしゃれなスポットは啓介の鬼門だ。おちおちしてたら、あつと言つ間に人だかり、将棋倒しでも起きた口には寝覚めが悪いことこの上ない。

何度か挑戦された再開発の甲斐もなく、若い子向けのスポットができたとしても、どうもあそこの垢抜けなさは変わらない。前時代的な高架下をいつその事古き日本の懐かしい風景として保存しようという、わけのわからない計画も、続いているのか頓挫しているのかよく分からぬのがシンバシ高架下飲み屋街だ。一般人が宇宙に行く様になつているご時世に、何を間違つているのかという町並みだ。

それは迫神が生息する東京地裁が、しつこく千代田にあるのと同じく、あの町はしつこく泥臭い。

* * *

保志美耶子は田ぞとかつた。その日の美耶子先生は、この間迫神に案内してもらつた串焼きが余りにも美味だったので、桐谷の慰労とどり息子への家族サービスをしようといきなり思い立つた。メールで確認すると大丈夫だという珍しく素直な返事が穰太から返つてきたので、気分よく早めに仕事を手仕舞にした。

新橋駅烏森口で息子をキャッチすべく網をはつていると、なんと、可愛い、素直、いい身体カラダと三拍子そろつて、すっかりファンになつ

てしまつた迫神が、彼より数段やぼつた格好をした友達らしき人物と連れ立つて、のそのそ改札を出て来るのが見えた。

視界が狭いのか、それとも美耶子がいるなんて思つていなか、目の前を通りすぎて、いこうとする、その態度が気に入らない。美耶子は手を伸ばして、迫神の袖口をむんずとつかんだ。

「うわっ」

迫神が奇妙な声を上げた。

いきなり知らない人間から手を出されたら、だれだつて驚く。けれど、迫神のその反応に、隣にいた野暮天がげらげらと笑いだした。どうやら迫神の友達は笑いの沸騰点が低いらしい。

「無視するなんて、いい度胸ね。半六ちゃん……」

言られて迫神は、その手の持ち主が保志美耶子だと氣付いた。

「み……美耶子先生？」

「なに、ピンフの彼女？ キレイなおばさんだけど」

おばさんという啓介の発言に、美耶子の柳眉せがれが逆立つた。

「……だれ、この失礼な坊やは。伴せがれと同年配のレベル以上から、おばさん扱いは許さないわよ」

美耶子はむんずと啓介の胸ぐらをつかんだ。スーツを着て、髪の毛を固めて、ハイヒールの弁護士美耶子でないとときは、田ごろの反動からか、どうしても態度ががらつぱちになる。笑っていた啓介のダサイフォルムの眼鏡がずれる。

「あ……、リップバー・ケースケ……？」

女ゴコロを引き裂く人・ケースケといつたら、イケメンに似合わぬ阿呆ぶりがなぜか受けて、バラエティ番組にもよく登場してくる、いわゆるタレントだ。ダンスも踊りも息子のほうが余程いくつて思つたが、どこか突き抜けたオーラが確かにあるのだ。それに悔しいことに至近距離で見てもいい男だ。

「げつ……、女弁護士・保志美耶子だ。えらく若作りに化けてるけど……おい、ピンフお前、職業柄こんなのがくつついたら、えらくまずいんじゃねえの？」

ほぼ同時に、啓介の方もタレント弁護士の美耶子の正体に気付いたらしく、わけのわからない突つ込みを入れて来る。けれど迫神はタレント専用弁護士と地裁の判事が親しく（そのつもりは迫神にはないが）個人的に付き合つのは問題があるのでと指摘したことの方になぜか感動した。

啓介ほどの非常識人でも、芸能界などというところが、社会常識育成に適した土壤ではけつしてなくとも、社会人生活十五年を超過すれば、最低限の常識ぐらいは身にくのだ。迫神は、少々驚いた。

「なんで半六ちゃんが、こんなのといるのよ」

「なんでピンフが、こんなのと知り合いだよ」

右方向から腐れ縁の親友と、左方向から掴みきれていない上司の
お内儀さん。二人から同時に迫られて、迫神の思考回路は麻痺した。ブリーズ

「母さん、皿い飯食わせるつておびき出しておいて、若いツバメを紹介するつもりなら、俺、そういうの趣味じゃないから、帰るぜ……。リアルオヤジとだって、慣れあいメシなんかしたことないのに……」

声がした方に視線をやると、目の前に一人のチャラけた若造が立っていた。シャラシャラと何十にもつけた細い金属の腕輪の音を立てて、青年が鬱陶しい前髪をざっくりとかきあげ、顎をしゃくつた。彼は不愉快そうな顔のまま、迫神を睨み付けて来る。

よくよくみると美耶子に似ているその若造が、言つに事欠いてツバメといったのは、自分のことだろうか、それとも、啓介に対してだろうか。

けれど、それより何より、その声に迫神は聞き覚えがありすぎた。

あの、オマルの管轄下にあるとはどんなも信じられない、あのナンパなTAIの声だ。

「……セレの……声？ なんで」

「セレってだれ？」

啓介がぽつつりと言つのをきつちり無視して、美耶子と一緒に穰太を待つていて、今や、すっかり影が薄かつた桐谷に、穰太は食つてかかつた。

「イソ弁兼ツバメだつたら、母さんが、わけわからん男遍歴ふやすの、食いとめたらどーなんだよ。ヘラヘラ笑つてて気に入らないな」

さすがの桐谷の顔が引きつった。

「穰太さん、それはないんじゃないですか。確かにツバメ兼用イソ弁つて陰口叩かれてますけどね、穰太さんぐらい、美耶子先生がそんなふしだらじやないこと分かつてるはずじやないですか？」

「ふしだらだらうが、若いツバメを乗り換え、乗り換え、第一の人生エンジョイモードだろ」

穰太が叫ぶと、啓介ががははと笑つて迫神に抱きついた。

「なんだあ、ピンフつたら、やることあやつてるんじやないの。ちよつとババ趣味は、俺としちゃいただけないけど、人の情欲にはいろいろあるしなあ。お前がちゃんとやることやつてて、俺の理利菜の貞操がおびやかされなきや、めでたいめでたい」

ケースケの五歳の娘が理利菜というのは、タレント御用達弁護士の美耶子には一般常識だ。

「えつ、半六判事つて、ペドフィリアなの？」

迫神が裁判をやつていて、何が我慢できないって、（それでも我慢するしかないのだが）幼児相手の性犯罪と虐待だ。

「違いますっ」

思わず大きな声が出て、迫神は美耶子の手をうつかりがつしり握りしめた。

「あ、やつぱり、半六ちゃん、いい手」

思わず美耶子が迫神の手を撫でる。美耶子が他意もなくそんなことをするのに、迫神は前回でうつかり慣れてしまったので、またかとこう感じで振り払うこともせずに触られている。と、ケッと短く罵詈雑言にもならない思いを吐き捨てて、穰太が自分たちの塊から背中を向けたのが見えた。彼はすたすたと改札口を逆戻りしていく。「の展開は、あの子が思い切り自分と美耶子の仲を誤解している」とことじで、それを保志などに伝えられたら、もう一段階えらいこいつやになることは明白なわけで……。

迫神が言葉を搜している間に、美耶子が息子を呼び止めた。

「……あら、穰太。今日「」はん一緒に食べようつて言つたじやない」

美耶子が言つたが、穰太の足は止まらない。

「幼女から、おばさんまで……が。やるなあ……。俺は今までパンフの何を見てたんだら?」

腕組みをしてうむうむと納得している啓介を見ると、迫神の堪忍袋が暴発した。加減なしのハイキックを啓介の後頭部にお見舞いするべく、そこ目掛けて鋭く繰り出した。

防具も覚悟もなかつた啓介は、そのヤバい気配を察知すると、とつさに両手を交差してがつしりとそれを受けとめた。が、手と足では手が負ける。かなりキレイに吹き飛ばされて床に沈んだ。

「あら、リッパー・ケースケつて、カラテするんだ。見直しちゃおうかなあ」

美耶子が嬉しそうにつぶやいた。仁王立ちしていた迫神は、どつと疲れて肩を落とした。

世の中不条理だらけだ。雑用に追われ、いきなり出動を命じられ、ついでに覚悟が決まつた直後に追い返され、TAIのセレには童貞ならまだしても処女などと言われ、美耶子先生にはからかわれ、多分保志総司官と美耶子先生の息子さんからは誤解され、空氣を読む気がないポン友啓介には幼女から熟女までの節操なしといふ濡れ衣を着せられ、ついでに殴り倒す予定の、渾身の一撃をあつさり受けられた。

……やめてやる。

生涯の仕事にしようと思つていた裁判官。その余りにも陰々滅々の氣に、果てし無く続く人間の負の感情のぶつかり合いに辟易して、人がいなさそうなところに行きたいと思つた自分が愚かだった。これは三分の一に浮氣した祟り^{たた}に違いない。

ただ、平和に過ぎる一ヶポンで、普通の裁判官に銃火器をぶつ放す機会なんかそうそうない。だから、宇宙辺境観光もかねてのきつちり五年間、相澤さんから薰陶を受けて兵隊じつこをして（もともと荒っぽいことはキライじやない）、シンクロライドで一、三回記念に死んでみて（山ではもう死んだことはあるんだけれど）、日常に帰つて来る。

「ピンフ……、お前、やっぱりたまつてるだろ……。自家発電でとりあえずいいんだから、ちゃんと出しなさい……」

憲りない啓介に向かつて、迫神は握り拳を突き出した。

人口密度稀少域国連参加国日本管轄下イットルビア地区。

人が少なく、犯罪も、訴訟^トとも少ないはずのこの地域に、とりあえず、近代法治国家に相応しい司法の光を当てるべく存在する、国連総合司法イットルビア可動派出所。

たとえそこに、住んでいる人間が一名しかいなくても、人が暮らす以上、最低限の重力環境は必須である。そんなわけで、小さいとはいえ、直径1・6キロメートルという巨大なドーナツ・リングをスロークでハブにつないだ形をしている。もちろん、その全ての可住空間を、人にやさしく整えたら、管理も大変なわけで、基本、ここの大、人口密度稀少域特例総合司法官保志の居住している官舎部分と、執務室以外は、無理なく人工重力を発生させるためのダミーチューブ^{チーブ}で生身者の居住環境など考慮していない貧弱な造りになつてている。

総司官保志^{バッパ}が、個人的宿敵（多分向こうは屁とも思つていい）、自称宇宙義賊ジョリー・ロジャーを逮捕するまで、引退などできるかと、三分の一の薄給取りに成り下がつてまで、後継者育成に尽力するプログラムの適用を希望したため、ここには、一月に十日ほどやつてくるシンクロライダー^{レア}が二名いる。

その二名は、生身の保志とちがつて有重力の方が宇宙酔いもなく過ごしやすいことに異論はなくとも、酸素を基本として必要としない身体である。温度さえコントロールしてもらえば、保志が宇宙仕様防護服なしで足を踏み入れたら即死する環境であつても、シンクロライダーには問題がない。

ケージで飼われているハムスターのための福利厚生施設である回し車よろしく、絶好のサー・キット・トレー・ニングの施設として、その贅沢すぎる空間を利用しようと鬼教官相澤が考えついたのは、まあ、無理もないと言わばいえよう。

「うちの連中にも、ここ使わせたいぐらいよねえ」

亜衣里が目の前で立ち止まってスクワットを始めた迫神に言った。完全に地球にある走査棺桶スキヤナの中で死体のように眠っている迫神の肉体の能力と、ほぼ完全にシンクロしていて、運動によつて加えられ、あるいは外からの刺激として可変筐体が受け取つた嗅覚と味覚を除く三感の全ての値は、本体にファードバックされる。

訓練を始めてこのかた、帰つたときの棺桶の中の悪臭に、我ながら辟易としている迫神は、それでもこっちの身体は汗をかかないのが有り難いと思っている。何しろ、着替えなくて済む。

「あいあい……」

積極的に亜衣里に打ち解けるつもりがないように見えた迫神だが、自分以外の一人と一台（？）が彼女をそう呼ぶ形になつていった。東京での仕事では、同僚を愛称で呼ぶなどというのは絶対に考えられない。

たとえ全労働時間のマックス三分の一の時間に限定した付き合いとはいえ、地球カレンダーで一年を過ぎたころには、むしろそう呼ぶ方がしつくらぐほどには彼女に打ち解けていた。

「私人間における人権保障に関する……記述について、……アメリカ合衆国連邦裁判所、最高裁判所の判決の要約として、……それぞれ正しい場合には1を……、誤つている場合には2を選べ。……憲法の自由権的基本権の保障規定は、……私人相互間の関係について当然に……適用ないし類推適用されるものでなく、……私立大学には学生を規律する包括的権能が認められるが……、私立大学の当該権能は……、在学関係設定の目的と関連し、か……つ、その内

容が……社会通念に照らして合理的と……認められる範囲においてのみ是認される」

迫神の言葉が切れ切るのは、十キロ超過している抗弾ベストを着て、抗弾ヘルメットを被り、レッグホールスターにハンドガンを携帯し、亜衣里のリクエストによるソウドオフ・ショットガンを小判鮫にしたライフルを担いでスクワットをしているからに他ならない。これで息が上がらない方が奇怪しい。

「アメリカ？ 日本じゃなくてだと……えーと」

「次にくるまでに……、ちゃんと考え……て……おく」と。一年目……玉砕してゐるから、あと四年しかないん……だから

迫神が言うのと、亜衣里は舌を突き出した。

「過ぎたことじやないですか。もう、いつまでも言わないでくださいよ」

迫神「ーチングが付いたとしても、一足のワラジに三分の一規制付き、ついでに仕事もそこそこある生活の中での、亜衣里は肝試しに受けに行つた第一種司法試験は、予測された通り、見事に滑つていた。迫神が軽く笑つた。

「だめ。年取つてからの一年は、学生時代のと全然違うの。さつさとやつつけないと、取りそこねるよ」

耳に痛いことを言つられて、亜衣里は逆襲することにした。

「迫神さん、腹這いからのスタート飽きたでしょ。仰向けからスタートで一百メートル、五本ね」

事も無げにいう亜衣里に迫神が苦情を言つた。

「あいあい、それ……おたくのぴちぴち一十歳前後の若者向けセットでしょ。年寄りにそんなことさせたら死ぬよ」

亜衣里はくすくすと笑つて取りあわなかつた。迫神が口ほどにへたつていなのは知つてゐる。むしろ精神的に軟弱なのが目立つ若者に比べて、訓練スタート時点で十分な持ち物があるといつていいぐ

らいだ。

「その程度で死ねるなら、死んでもらおううじやないですか」

人間には明朗陽気な人間と、陰鬱陰気な人間というと思う。自分はどちらかというと、陰気にもなれず、陽気にもなれず、ごくごく平凡なところで適度なオプチミストとペシミストを行つたり来たりしている俗人だと、迫神は思う。

そして、あの啓介となんだかんだけつて付き合いを切れないように、いつそ見事なぐらいなまでの陽性の人間に惹かれる傾向がある。イチゴの一件がなくても、豪華すぎる質量で負けても、あいあいのようになにだつて積極的で、過ぎたことに鬱々せずにはいられる存在には、多分魅せられたに違いないと最近は思う。

人間が暮らしている二十四時間サイクルのうちの、約三分の一の労働時間の、さらに三分の一でしか関わっていない自分を、しかも若干陰気臭くて、間違いなく面白みがないちょっと枯れかけた自分では、あの子にとつて魅力などないだろうのが残念だ。

基本形というかホームポジションとして陽気な、啓介や美耶子先生は、プライベートモードで全開になる非常識が多少やつかいだけれど、亜衣里の私生活など余りにも遠すぎてよく分からぬ。

とにかく、迫神は五年間の自分の生活に侵蝕してきた非日常を楽しんで、五年間の寄り道が終わつたら、潔くフロンティアを去り、つまらない、けれど使命のある人生に還ろうと決心した。だから、逆にちゃんと亜衣里に司法試験を採らせなければという情熱が湧いてきている。

あの子にしてみれば、休憩時間のすべてを一種司法試験の過去問題と対峙して過ごすのも、目の前にあるのが自分の顔なのも、きっとまらないに違いない。不機嫌などという言葉を知らないかのよくな笑顔で、いつもそこにいてくれているだけで、十分に有り難い。

さて、その亞衣里である。眞面目に取り組めば取り組むほど、合格ラインが遠くに霞んで見える一種試験の高い高い壁に、ほぼ挫折モードになっていた。一応、保志と迫神の手前、それとやろうと決めた自分への義務感から、ちゃんと暇さえあれば問題集と向き合うようにしているものの、投げ出したくてたまらないといつのが本音だった。

セレが言つていた通り、迫神そのものに足りないのは実戦経験と銃火器取り扱い経験だけだ。基本的な体力や反射神経などは十分にレベルに達している。正義感、倫理観、冷静さ。どれをとっても現役の、迫神と同年配のベテランの中に入れても全く遜色ないに違いない。

ただ、いかんせん、警察武装の基本のキの字も知らないというレベル以下なのが痛い。亞衣里が現在仕事で指導に当たつている若者たちは、一応警察学校で銃器の基礎は身につけている。

三分の一リスト登録者の中から、なぜか自分を選んでくれた保志の期待には応えたいけれど、なにはともあれ、一種司法試験持ちにならなければ、バッパーにはなれない。

おじいちゃんの域に入つてきている、イットルビアの宮崎保安官など、司法試験なんてやめちまつて、保安官の後継になれと頻りに誘つて来る。宮崎夫人の料理は美味しそうなので、一度で良いからホンモノをじ馳走になりたくてたまらない。

最先端の技術でテラフォーメドされたニューアイットルビーは、縁豊かで殺伐としたところの少ない、いい町だ。正直、あと十年後に、相変わらず突入班のポイントマンをしている自分といつのは想像できないし、また、したくもない。

ついでに宮崎保安官の管区だと、この辺一番の大都市、ニューヨカルビーの治安維持任務と、金の卵のようなイットリウムや、ルテチウム鉱山の保護という一大業務がもれなく付いて来る。家畜の面倒を見て、地場の野菜と物々交換をして、人工降雨と温

度管理のお陰で不作が殆どないという暢気な農業人をしながら、こ
とあれば治安維持警察として出動するという生活も楽しそうだなど、
本気で思いだしている。

人だらけの東京にそろそろ一十九年も住んでいるのに、未だに恋
人の一人もいないのだから、どうせなら若い男が回りにいない環境
の方が、いつその事スッキリしそうなそんな気もする。

ここにつながる棺桶にも、死地につながる棺桶にも、ほぼ毎日
ように入っているのに、自分の身体の中で目覚めたとき、田の前に
王子様の顔があつたことなど一度もない。多分これから引退まで入
り続けても絶対にない。

小柄で歌が上手いだけで、棺桶の前に王子様がいた某白雪姫はズ
ルいと思う。彼女と自分どこが違う？ ガタイと顔だけじゃない
か。能天気な楽観主義なら、アレにも勝つ自信があるので、まつた
く不公平だ。

現に迫神だつてそうだ。穏やかで、聰明そのもので、ちょっと要
領は悪いのだけれど、真面目な取り組みを根気よくできる人なので、
結果として何事もうまく裁いていく。魅力的な男性だと思う。でも、
あの人には、全く自分は三分の一の同僚にすぎず、銃火器の取り扱
いや殺伐とした犯罪の現場に汚れまくっている自分など、特殊部隊
の名物、鬼教官というやつが精々で、一応二十代の女の子などとい
う、ふわふわと甘い場所には分類にされていないに違いない。

亞衣里がここに来て初めてで、ついでに今のところの最後になっ
ている、武装出動したルテチウム鉱山の侵入立て籠もり事件。セレ
と組み、保志のバックアップで、ルテチウム鉱山への強盗を企んで
いたアバタロイドの武装軍団を見事制圧して、管区内に居住してい
る保安官に限定した有名人だった、総司官の三分の一見習い相澤亞
衣里の名は、イットルビア地区に住む一般人にまで一気に浸透した
ようだ。

さすが人口密度稀少域は常日ごろの話題に飢えていると見える。ときたま、アバタドライブではなく、飛閃に乗つて警邏に直接赴くと、相澤亜衣里などという本名でなく、三分の一あいあいという、いま一つ締まりのない愛称で呼ばれることも多くなってきた。

ここに住むのも悪くない。そのときのバッパーはもちろん迫神だ。彼が自分のところの保安管区に見回りに来ると、富崎夫人が保志総司富にお菓子や料理をふるまうように、もてなして……、うん、そんな四年後なら、十分に思い描ける。

そんな気がしている亜衣里だった。

彼がバッパーになつて、生身勤務に変わつた時、ちょっとしたゴチャゴチャを納めにいつて死ぬことがないようなレベルに鍛え上げる。それは突入に当然シンクロライドするS A Tのレコン候補を鍛える以上の配慮がいる。少なくとも、生身の迫神が死ぬところは見たくない。

「セレ……迫神さんの進行方向一百メートル付近に、ターゲット五回連続表示してあげて。もちろん、携帯物は全部違つもので」

「了解。あいあい、もちろん、動かすよね」

「当然」

フル装備で仰向けからスタートダッシュの一一百メートルの先に、その都度違うものを 武器だつたり、携帯電話だつたり、棍棒だつたり、鞄だつたり 持つた動くターゲットを撃つべきか、銃口を向けてすらいけないかを判断するのは、非常に難易度が高い。

大体、T A Iのセレが出して来るターゲットは、普段S A Tで使つてゐるようなチャチなものではない。本当にリアル感あふれる立体映像だ。誤射したときは、当たつたところから、血を噴き上げて、場所によつては中身までぶちまけるという念の入りようだ。赤ん坊を抱いた若いママをショットガン至近距離で射殺したときは、さす

がの迫神の脳味噌が、バーチャルであることをとつさに把握できず
に昏倒した。あれ以来、彼の撃ち^{早漏}急ぎは激減した。亞衣里は思う。

「」のシステム、マジにSATに欲しい。

「鬼……。高齢者には労りが必要……」

「文句言わない。いってらっしゃーい」

亞衣里は爽やかに迫神を送りだすのだった。

* * *

「あいあいの司法試験は、微妙なことだけど、半六ちゃんの仕上がり、田覚ましいんじやないの？」

少額訴訟よりちょっとやつかいな事案、オマルにランダム抽選してもらって、裁判官と弁護士をつけてもらつてちゃんととした裁判にしなければならないものの、日程調整をしていた保志に、セレが声をかけた。

もちろん、セレが使いたい身体は今はふさがつていて、よほどセレとして保志と話したいのか、執務室の壁面モニターに、これ見よがしに例の穰太の顔が大写しになつていて。

「……」

保志は、穰太ごっこをしているセレが映つていてると反対の壁面モニターに田をやつた。

フル装備でスクワットしていたのが、仰向けに横たわつてからのスタートでダッシュする。勝手に4444が計測しているのか、ス

トップウォッチが動き出している。あの装備で、あの年でと思つて、いいタイムだ。己に引き比べて大したものだと感動する。

タイマー換算でみて、多分一百ほど走った辺りから、ホログラム・ターゲットが出だした。軽機関銃を持っているサラリーマン風の男の腕を吹き飛ばし、ハンドバッグをふりまわしているおばさんのかきには、トリガーに指も掛けず、至近距離にハンドガンを携帯した男が湧いて出たときは、火力に頼らずに迷わずアサルトライフルを、インパクトウェポン打撃武器としてぶちました。

迫神の特徴は、やっぱりカラテマンとこうとこうにつきのだろう。はつきりいって、おちついて打撃武器を使つたときより、頭で判断する暇もなく、素手での打撃だの蹴りだのを炸裂させたときの方が、ターゲットの破損度が高い。

「そもそも、正直に白状して、応援頼んじゃつたら？ ジョリー・ロジャーと一緒にトップ捕まえようつてさあ

迫神と亞衣里がここに来る日を、実は保志はイットリウム輸送日に必ず設定していた。一応、いつでもモーキャプ・ルームに入れる体勢で、飛閃をセレにコントロールさせ、びつちりと張りついて、護衛してきた。あれからほぼ一年。イットリウムの抜き荷被害は未然に阻止できている。

こそ泥にすぎないジョリー・ロジャーが、義賊を名告る理由を考えて、保志は例えばテロリストのような、手前勝手な主義主張のためには民間人をも無意味に巻き込んで殺傷することに禁忌を覚えな連中と繋がっているのだつと、裏付けはないながら半ば確信している。

貴金属や現金そのものと、レアメタル類は違う。産業界に資源として売つて初めて金になるのだ。鉱物はそのままでは石の塊にすぎない。使用ルートか販売ルートがあるのだ。ジョリー・ロジャーが

抜き荷などというセロイ手段を用いて、断続的に仕事をしてきていたのは、貴重なものを一度に根こそぎにしては、当局も厳しく取り締まらざるを得なくなることを警戒してゐるといふことももちろんあるだらうけれど、既存の流通ルートにこゝそり乗るために、不自然な量のブツを扱えないといふこともあるのだつ。そう保志はにらんでいふ。

レアはレアだからレアなのだ。こゝで輸送船一台分のブツが盗まれ、別の場所からそれ相応分の物量が売りに出されれば、だれだつて、出てきたブツは盗られたブツに違いないと勘織るに決まつてゐる。

こゝ数十年、輸出量が相変わらず好調だつた中国産のレアアース。こゝのところ、荷動きが若干鈍つて高騰してきているのは間違いない。

単純な勘織りで、抜かれていたブツは、チャイニーズ・オリジン中国原産という名札をつけて、地球生まれの資源のふりをして流通してきていたに違いないのだ。

こゝ半年ほど、中国原産の流通量は、低迷したままだ。高値基調は連中にブツがある限り歓迎すべきことだらうけれど、如何せん在庫はそろそろ底をつくはすだ。

組織が企業かしらないが、ずっとそれを資金源にして活動してきた連中は、いろいろがたまつてゐるはずだ。何としても、ゲンブツを手に入れたいに決まつてゐる。

ジョリー・ロジャーをトツ捕まえるのに、何か特効薬はないかと日々悶えていた保志に天啓が訪れたのは、あの、あいあいの見事なルテチウム鉱山制圧のお手並みを田の当たりにしたときだつた。

保志はあいあいとセレが討ち漏らして、実行犯が坑道を出てきたときに備えて、飛閃の胸部にあるモーキャプ・ルームでスタンバつていたのだが、初めてチームになる一人の連携による制圧力は予想

以上のものだった。

亜衣里が使っている「サイズか、迫神とセレとたまに美耶子が使ったMサイズの可^{ボディ}変筐体のどちらか 最悪一つとも を買い換えなければならないことになることも覚悟して、現場に送り出したのだが、結果は全部で五体もあつたアバタロイドを完全制圧して、非破壊状態で確保し、一人の身体に被害はなかつた。

アバタロイド本体を確保できたことで、レコーダーの逆探知を利^用して、火星にあつた実行犯のアジトを押さえられたのも大きかつた。

そう亜空間通信が繋がつていなければ、アバタロイドの通信履歴をリセットできない。通信中ならアバタロイドをゲートに逆探知が利くし、消去する暇もなく通信を切られれば、通信履歴はアバタロイドに残る。いずれにせよアバタロイドを破壊することなく確保できたのが大きい。

レアースで食つているイットルビア地区で、亜衣里が一躍英雄になつたのは、自然のなりゆきといえる。みんな、こそ泥だらうと強盗だらうと、折角の採集物を目の前でさらつていかれるのは我慢ならないと思つていたのだ。

保志と給料と仕事をシェアしていく三分の一を、冷静に時間をかけて選んだならば、一種試験持ちでない相澤を保志が指名することはなかつただろう。自分の悪運に感謝するしかない。あれを鮮やかに制御した相澤は、間違いなく拾い物だ。あいつえお順名簿一番に過ぎなかつたという選択基準を今更だれに告げるだろ。

それはともかく、そのときに保志は閃いたのだ。

坑道でなら、ヤツラを出し抜ける。

ステルスモードの哨戒艇で、このこやつてきたジョリー・ロジャーが、あの海賊旗をペイントした高速艇で何度も取り逃してきた。飛閃単体で後ろから追いかけても、重空間航法に入れてしまえば追いようがない。

いくらジョリー・ロジャーでも、これ見よがしに張りついて飛閃が警護している輸送船に、船体を横付けするほど間抜けじやない。ルートを干されれば、そして、ブツを望めば、間違いなくやつは鉱山そのものに手を伸ばして来るだろう。

あいあいとこう、切り札がある今、アバタロイドだろうが、シンクロイドだろうが、ともかくCQB（Close Quarter Battle＝閉所戦闘）に持ち込めれば、勝算はこちらにある。

ジョリー・ロジャーを追つかけるのは、結局はトカゲの尻尾を掴みに行くのに等しい。ジョリー・ロジャーを確保して裁判にかけさせたとして、頭はのつのつと生き延びて、次の尻尾を生やして来るに決まっている。

それじゃあ殺された恨みは晴らせない。

鉱山に飛閃のようなジョリー・ロジャーがイットリウム鉱山を襲いに来る、その日が保志の待ちに待つたXデイだ。

正面モニターには、飛閃のカメラが捉えている、イットリウム輸送船の姿が、宇宙の闇にも負けじとばかり、クッキリと白光りして輝いているのであった。

海賊旗（ジョリー・ロジャー）に関する覚書（

かつて、帆船での海上輸送の全盛期。海賊といつものがございましてな。

海賊旗といつものは、海賊船が常に掲げていたものと思ひ向きもいらっしゃるがあ、基本、攻撃する意志を表明するサインでありますして、「降伏せよ、そもそもなくば汝の運命は骨と化す」という呼びかけの印がありました。

襲われた船にも抵抗するか徹底交戦するか表示する手段がございまして、これがかの有名な白旗。白旗を上げられたら、海賊は肅々と盗みだけ働き、決して危害を加えないというのが、この時代のおらかな共通理解がありました。

海賊さんも、白旗を掲げないよつなやつには、海賊旗を下ろして赤旗を掲げ、丁々発止の闘いが始まるわけでして、海賊映画で戦闘中にかの海賊旗が翻っているのは、これまた大間違でござります。帆船での接近戦なんて、横付けされるまでスピード感なんか無縁ですからねえ、旗ぐらい変える時間はあつたんでしょうな。

また、海賊を取り締まる軍艦も、海賊旗が掲げてある船を見掛けたら、容赦なく攻撃して略奪（？）の対象とすることが権利として認められておりました。

普通のセコイ海賊が、普段からあんなものを掲げていたわけは、そんなんでないわけでござりますな。

この海賊旗のネーミング、ジョリー・ロジャーであります

これまた確かな語源は分かつおりません次第で、諸説いろいろございます。

曰く、フランス語の「キレイな赤（joli rouge）」からきているという人もありますし、タミル人の海賊アリ・ラジャ（Ali Raaja）からという説もありますし、はたまた悪魔の古き良き名前オールド・ロジャー（Old Roger）だと、自信タップリにおっしゃるむきもいらっしゃる。

ただ、この下らない話の筆者としましては、觸體の口元が笑つている様に見えますことをもつて、笑う悪魔、「機嫌な悪魔」という説を支持したいとこつそり思います。なんたって、笑顔は人の心をくすぐる麻薬ですからねえ。

とにかく、故事來歴をわきまえず、始終船体にジョリー・ロジャーリを貼り付けている、かの我等がろくちゃん宿敵、海賊が、バッパー保志の読み通り火力を頼んでイットリウム鉱山に押し寄せてきたのは、三分の一参加者の三名が、それぞれに将来設計を勝手に引いていたあの日から、更に二ヶ月ほど後のことがありました。

* * *

迫神平和が三分の一プログラムに参加して一年目に突入した。誕生日が来てしまって三十三歳。新しい日常に足を踏み入れるには、些か躊躇が立つたお年頃。平和な日本にも人間同士がいる限り、必ず起ころる争いごとを、なだめすかすのが役所。東京地方裁判所勤務としては中堅に差しかかった裁判官十一年目。単独審をしきれる判事

になつて一年目である。

宇宙の開拓最前線は、彼の独身者用官舎にある、四畳半の中に鎮座している棺桶の向こうにある。^{フロンティア}

奇妙な一足のワラジ生活も、慣れてしまえば、日常に過ぎない。回りも迫神判事が宇宙まで出向いて何をやつているのか、気にするのをやめてしまつたような、まつたりした雰囲気のある今日このごろ。増加する訴訟件数に人手不足な東京地裁で、堅実な仕事をこなす迫神判事は、はつきりいつて忙しい。

同時に百件以上の訴訟・事件を扱うのが常態で、ついでに刑事事件はともかく、民事事件であれば公判期日を決めるのも、部屋の都合もあつて時間制約がある。

独立国家独自の司法制度の上に、国際連合規範ができたのは、人類が宇宙から飛び出して、最初はHRB（Human race・^{ハーブ}birthplace）の衛星軌道上に、それから近場の月、そして火星へとじわじわと生息範囲を拡大していくた時に、単独国家が独立的にその新しい都市を支配するのではなく、複数国が協働して運営していくという形を採つた現状を受け入れた結果だ。

司法試験に日本国憲法を含むいわゆる六法に基づいて肅々と判断していく従来のもの、いわゆる一種と、国際連合規範諸法と、国際連合準拠判例データベースに基づく判断を行う一種とができたのも、普通の訴訟・事件に関わる当事者が、複数の国籍保持者であるケースが増え、それに対応する新しい枠が必要になつたからで間違いはない。

とにかく、東京地裁であるつと、国連総合司法局最高裁所であると、一つの訴訟・事件の当事者に、複数の国籍保持者がいた場合、一種試験持ちでない裁判官は担当できることになつていて。逆に

いえば、ケースとしてはレアであるけれど、月や宇宙植民地での所
有権争いがあつたとして、当事者の全てが日本人であつた場合、日
本の一種試験を持つていれば裁判官としてあるいは検事として、弁
護士として活動できるということでもある。

実質、東京地裁の裁判官を任命している日本の最高裁判所の担当
官も、多分、一ヶ月のうち十日も留守にするような人間は、使いづ
らいに決まつているが、人・モノともに国際化が激しい昨今におい
て、至難といわれる第一種司法試験合格者には、一件でも多くの事
件を扱つてもらわないと現状として裁判が回つていかないのだろう。
はつきりいつて、三分の一に参加したとはい、それで一度に担
当させられる件数が三分の一に減つたかというとそうでない。月に
十日分も日程が使えない迫神の都合に合せて、日程が調整され、裁
判期間が長くなるという、どうにもあつちにもこつちにも申し訳な
い状況が続いている。

日本の法曹界において三十代ははつきりいつて漸く尻からタマゴ
の殻が取れたという扱いで、実質中堅までもいかない。裁判官三人
体制で臨む合議審の裁判長を張れるほどのベテランではない。ここ
のところ右陪席が定位置だ。

「そろそろ行きましょうかね、迫神君、屋島君」

そう後藤裁判長から促され、さて法廷に行こうときになつて、迫
神の携帯がけたましく着信音を立てた。

どうせ下らない用件だろうからと、そのまま問答無用に切つと
したのだが、その画面の表示が保志からのSUSCIだったので、迫神
は後藤裁判長に言つた。

「すみません。例の三分の一の、指導官からなんですが」

「手短かに済ませてくださいね。遅刻はしたくないものです」

「はい、申し訳ありません……はい、迫神です」

後藤にエクスキューズして携帯にすると、保志の素つ頓狂に裏返つた声がけたたましく響いた。

でたつ。出た、出た、出た。

「は？」

保志が壊れている。迫神に即刻通話をきりたくなつた。出たの連呼で炭坑節を思い出し、月でも出たのかと突つ込みたくなつたのは、もちろんたまたまのことだ。後藤と屋島の田がなければ、軽口の一つもだせるのだけれど、ここでは御法度だ。至極真面目な声を捻り出す。

「何が出たんですか、保志総司官」

ジョリー・ロジャーに決まってるだろ？俺たちの結成理由の。

（俺たちの結成理由？）
ますます、迫神は分からぬ。

「すみません、これから公判なんで、時差気にしなくても構わない
なら、終わってからコールバックします」

いいから、せひせひと全體いつかやつて来てくれ。

「無理です」

迫神はにべもなく言い捨てた。「出た」と「ジョリー・ロジャー」という組み合わせは、保志総司官にとつては、説明不要なのかもしれないけれど、迫神には意味を持たない。当然、たくさんの疑問符を貼り付けてはいたが、だからといって裁判長も、裁判そのものも待たせるわけにはいかない。そうでなくとも、迫神のスケジュール

は周りをふりまわして、不便を強いているのだから。

お、おい。半六つ、ちょっとま。

迫神は電源を落として携帯を私物の鞄にかけて投げた。ジョリー・ロジャーというのは、何かどつかで聞いたことがある気もするが、さて、何だったのかとなると、とつさに頭に浮かんでこない。思い出しそうで、出てこない。知っているはずが、ピンとこないというのは非常にスッキリしないけれど、今は……。

「いいのかね、迫神君」

「あ、大丈夫です。お待たせして申し訳ありませんでした」

「うむ、じゃあ、行こうかね」

後藤裁判長、屋島裁判官に続いて歩きながら、迫神は今日は、今日の原告と被告の代理人を務める弁護士の名前を脳内データベースの中^{びもん}で繙いて、長引く恐れがある事件だったかどうかを頭の隅で思い出そうとしていた。

* * *

「あーあ、半六ちゃんに振られちゃったねえ……」

遠く隔たつたイットルビア地区派出所の人口密度稀少域特例、総合司法官執務室。

繋がつたSSC電話を、迫神が一方的に終了させた直後、不肖の

「せがれの面をしたヤレバ、やつこいつは保志をからかった。」

「……半六の野郎」

「あつあつ握り込んだ拳を、保志はわなわなとぶるわせる。」

「でも、やくせやんが悪いんだよ。やさんと常口頃から、田舎とか問題意識とか、田指すとか情報開示して、透明性を確保して、共通理解にでおかないんだもん。そんなんだから、半六ちゃんが、ジョリー・ロジャースて単語でエキサイトしないんじゃない」「ヤレの指摘は至極真っ当だ。」いつのまにかの正論ほど腹が立つものはない。」

「いぬせー」

「保志はこわつ立つた。ヤレはこせにせに笑つて、あいあいへのホールを始める。自分が呼びつけるなら一度にこなせるが、保志は一度に一つの文章しかしゃべれない。」

「あいあいは基本訓練だからねえ。東京でそんなに日常茶飯事でＳＡＴ制圧活動しないだろ？ から、やつと今日が三分の一稼働日じやなくとも、すつとんで来てくれるよ。だつたら、まあ、前ひとつきのメンツだし、いいじゃん」

「ううのホール音が壁のスーパークーラーから聞こえる。迫神と違つてあいあいは出る気配もない。」

「半六ちゃんもがんばつてあいあいに絞りられて、やつとトーナー戦

できやうだつていうのこ、間が悪いよね」

「やつこいつ問題じやないかもしれねえ……」

「保志は難しい顔をしていた。」

「どうこつ問題？」

「あこあこも出撃中だつたら……やべえつてことだ」

「……？」

あいあいはまだ出ない。

「ジョリー・ロジャーのやつ……。いつのやつをおびき出したつもりだけど、やつは、用意周到に俺の仕掛けを逆手に取つてきたのかもしれないってことだ」

「意味分かんないよ……どうこうこと？」
セレが途方にくれたような反応を示す。

TAEにいつの反応を示されると、保志は正直、人工知能の限界を感じる。データは自分など足の爪先にも及ばないほどたくさん持つていて、それを同時並行処理で扱えるほどマッシュな演算力を持ちながら、こんなに簡単な因果律に直感が働くかないのだ。

「俺は輸送ルートを押さえれば、やつははずれ鉱山に手を出すといつてただろう？」で、そのござとこうとき、あいあいと半六と、お前、飛閃とフル体制で挑めるつて、そういう皮算用をしてた。皮算用つて意味分かるか？」

「タヌキぐらい知つてるよ。で？」

「今まで弱氣の後手後手対応しかできなかつた、弱腰のバッパーがなぜ人手も足りてないのに、仕掛けてくるのか。仕掛けられた気配が分かれれば、そいつに乗る前に普通の人間はなんで向こうがそうしてくるのか、考えるんだよ

ここまで説明してもセレにはピンとこないようだ。保志はもどかしかつた。

「つまりな、裏で繋がつてるのか、それとも別口かしらないが、あいあいがここで名前を売つたのは、ルテチウム鉱山の一件だ。鉱山に手を出してバッパーが珍しく事件を制圧して、ついでに火星にい

たコントローラーの逮捕に至った。ここいらじや新聞社がネット配信なんてしてねえが、その気になれば誰だつてあれについてはくつかやべつてくれる」「

あいあいへの呼び出し音は続いている。

「人間は誰だつて勝利の経験にはつけあがり、敗北の経験には萎れしづる。俺はルテチウム鉱山で天狗になつて、同じ勝利の状況に持ち込もうとしたが、ジョリー・ロジャーも自分の勝利した状況に持ち込もうとする。あいあいと俺たちでチームを組んで、俺たちは勝つた。半六判事がそういう意味で戦力になるかどうかは、さすがら向こうさんにもデータがないだろうが、ジョリー・ロジャーが人間ならこう考える。少なくとも前に、バッパー保志とガチ対決したときは勝つた。勝ちたかつたら、S A Tの現役隊員で難物の相澤が出られないうとき、戦力かどうかよく分からぬが、少なくとも頭数の一人迫神を排除できれば、前と同じ状況に持ち込める」

「あ……」

漸く、セレは保志が言おうとしていることに気付いたらしく。

「そうだ。俺たちだけなら、俺が四ツ裂きにされた、あのときと同じ状況だ」

「……る、ろくちゃん」

セレが棒立ちになつた。

「セレ、あいあいコールはなしだ。S S S (S A Tサポート・スタッフ)の金城さんにコールだ。あいあいが出動してるかどうかと、出動していたら、どんな事件で出張つてるかをちゃんと聞いてくれ。膠着状況が間違いないような事件であいあいが取られてるなら、あつちの事件も、ジョリー・ロジャーの親玉と繋がつてゐる可能性があ

る。その場合は、金城さんに、その可能性をちゃんと言つてくれ。

その上でオマルの雑賀さんから、改めて桜田門（警視庁）に相澤をこっちに回してもらえる様に頼んでもらつて

「アイサー。で、ろくちゃんは？」

「イットルビアの鉱山にジョリー・ロジャーのケツを持ち込んだのは俺だ。逮捕にいくに決まってるだろ？ シンクロナイザー・スキヤナ・スタンバイしてくれ。イットルビアに先に行く。富崎さんに、装備の準備してもらつて。あと、飛閃を鉱山まで移動させとけ……時間がない……」

「……ろくちゃん」

「なんだ？」

「オイラたち……勝てるよね」

「分かるか、そんなもん。行くぞ」

普段、セレや迫神が出て来る壁面に埋められた棺桶は、棺桶だけに、ちゃんと走査器の機能も当然もつてゐる。保志は縦置き棺桶の扉を開けると迷わず飛び込んでスタート操作をした。

かすかな動作音。聞き慣れたアドバイス・ボイス。目を閉じる。スキヤナーが今彼を忠実に読み取つていく。ちらつとソロプレイなら飛閃にアバタドライブするべきだったかもという考えが頭の隅をよぎつたが、今更戻るのも時間が勿体ない。飛閃はセレに任せられない。

そうすると、あのときと状況は同じだ。自分がシンクロライドして突入し、セレが飛閃を操つてバックアップにたつた そう、ジョリー・ロジャーに敗北を喫したあの日と。

あいあい、半六。どっちでもいい、間に合つてくれ……。

棺桶の中の保志の祈りは、果たして神様に届くのかどうか。

* * *

言葉を尽くしても、尽くしても、自分の声を大きくすることだけに配慮して、相手の言葉に耳を傾ける気がないと決して噛み合つことなどない。証人一人と被告本人、三人を連續で実質三時間半、休憩を挟んで四時間。言い分の矛盾も、時系列の混乱も、事件から五年もたつていれば、「記憶を基に証言」するしかないのなら、はつきりいって狂つてきて当たり前だ。

最初から理解点がないのに、時間をかけてすれ違ひの溝を決定的に広げていく。すればするほど、時間をかけねばかけるほど、どちらも鬱屈をためていく。

国連準拠の考え方でいけば、そもそも公判までこれだけの時間を経過していることが違法なのに、国内で仕事をするかぎり手続と手続が無為に時間だけを積み上げていく現状に、目を瞑らなければやつていけない。

多分、迫神だけでなく、ペーパードライバーならぬ、国内限定一種持ちならばともかく、国際法廷で国連準拠裁判をしたことがある者なら、その乖離にとまどいは深くなるばかりだ。

被告にも原告にも、当たり前だが双方の言い分があり、双方の正義がある。だから、自分は法に照らして、法が正義とするならば、こうなるということを分かりやすく、しかも説明しなければならない。

一つの事件にじっくり付き合えれば、まあ違う対応も可能なのだ

ろうけれど、余程の事件でなければ、その都度思い詰めていたら人間が壊れてしまつ。

取りあえず、迫神は宇宙の彼方にある、もつ一つの日常のことこ意識をもつて「いくことにした。

「ねえ、後藤さん」

迫神は、この中で一番年長だからと「うからでなく、雑学大辞典と渾名される博識に信頼を寄せている」という故をもつて、後藤に話しがけた。狭いわけではないのに、この通路は音が非常によく響く。

「何だね？」

「ジョリー・ロジャーって……なんでしたつけ。後藤さんなり」存じですよね」

「ジョリー・ロジャー？」ああ、あれだ

「あれといいますと？」

質問が正答へ至るまでの回路より、それを脳から口の運動指令までの回路の方が長いのか、後藤はしばらく、あれだ、あれだと指を振っていた。それから、やっと、どうにか一つの言葉になった。

「海賊旗」

「え？」

「海賊旗だ。髑髏マークに、ほら、大腿骨でバツテン書いた毒薬マーク。ほら、宝島とかの絵本の挿絵で、海賊船が掲げてる、あの旗だ。もつとも……あれは、いざ鎌倉マークだから、普段からそんなものを掲げていたはずはないんだがね。まあ、娯楽というものは分かりやすさが一番だから、江戸町奉行所に看板がなかつたのと一緒で分かりやすさに史実が蹴飛ばされて常識化

「……海賊？」

「出た、出た、出たつ

あのとき出たのは、三池炭鉱に用じやなくて、イットルビアに海賊か。

いいから、せつせつ金部つりやつて来てくれ。

あれ、もしかして、保志総司官からの非常、応援要請だったのか？

「後藤さん、ありがとうございます。ちょっと急ぎますので、失礼」裁判官がここを通路を走るなど以ての外。迫神は軽く会釈すると可能な限りの早足で自分の携帯電話に手掛けた突進した。

電源を入れて、通話履歴のトップ。ホール音半分で、会話が繋がった。この素早さは保志ではありえない。

「セレ？ 済まなかつた。保志総司官は今電話に出られる状況か？」
半六ちゃん、『めん、お願いだからすぐ来て。オイラじや動けない。

聞こえてきたのは半分ベソをかいていふよつたセレの声。

「T A I の癖に泣くな。どうこつことだ？」

「オイラ、人間に発砲したり、攻撃したりしようとするとき、すげー動作決定に時間がかかるの。オマルのホストとSSCで完全同期して、適正かどうかを一々許可もらわないと次のステージいけないし。ろくちゃん一人で坑道の入り口、なんとか封鎖してるけど、もう四時間近くたつし、絶対限界。人間、そんなに集中力続かないもん。

「あいあいは？」

「どうやら鉱山への立て籠もりが発生しているようだ。

「ユースつけてみたら絶対生中継やつてると思つけど、小学校に武装したアバタロイドが乱入して、そつちにS.A.Tが出動してる。桜田門はオマルの要請なんか、屁としか思つてないんだ。

「落ち着いて、セレ。あいあいは手が放せないで、保志総司官が一人で坑道に湧いて出た海賊を逃がさない様に、坑道の入り口を封鎖してるんだな。で、お前は生存権優先順位のせいで、実質戦力外と、そういうことか？」

「そう。

「分かつた、すぐ行く。タクシー飛ばすから、あと三十分後、とりあえず派出所にシンクロライドする。それでいいか？」

「だめ。今、半六ちゃんの棺桶、ろくちゃんが入つて、ライド中。

「あいあいの身体は？^{ボディ} 大は小を兼ねるだろ。足りない分にはどうしようもないけど、材料余る分には何とかならないのか？」

迫神は次善を探して頭をフル回転させる。

「だめ。全然桜田門はこっちのことなんかどうでもいいのか動きないんだけど、一応、オマル経由であいあいの出動要請だしてるんだ。許可が下り次第、転送先をこっちのボディに変えてもらえるよう、あいあいの身体は受信スタンバイしてS.A.Tの転送器にチャネル合せてる。

「じゃあ、どうしていいんだ？ いけないじゃないか」

「飛閃に乗つて。できる？ シンクロライドじゃない。アバタドライブ。」

「飛閃……に、乗る？ どうやって。乗つたとひるで操作は出来ないよ」

飛閃はモーキャップで動く。身体の制御はオイラがするから、考えて動くのを半六ちゃんに頼みたいんだよ。

「モーション・キャプチャ？ そんなのどう出来るんだ？」

「スマ・シンクロライド・トラベラーズ・ジャパンって会社、知つてるでしょ？」

もちろん知つていて。世界の入山規制がある名山への、シンクロライド・クライミングをコーディネートしている旅行代理店の日本店で、迫神の心のオアシスだ。

「あ？ それは知つてるけど、あそこはシンクロライド専門の旅行会社だよ」

そこの通りからみて右隣に、バーチャファイトっていうゲーム屋さんあるの、知つてる？ テーマ上だとあることになつてるんだけど。

隣はカラオケショッピングと、ボウリング場とゲーセンが入つていて巨大アミューズメント・ビルだったはずだ。迫神自体は足を踏み入れたことなど当然ないけれど、バーチャファイトという名前から連想できるような、アバタドライブで擬似空間でのコツバット・ゲー

ムができる施設ぐらいあつても、別に違和感はない。

「知らないけど、多分あると思つ」

オマルの強制執行権つかつて、そこの一合借り上げて、回線をインターネットじやなくてSSCにしたから、そこに行つて。山手線ですぐ行けるでしょ？ タクシーより近いよね。

迫神は途中で通話をハンズフリーに切り換えていて、法服を脱ぎ、ジヤケット脱ぎ、そのついでに日常まで脱ぎすべてた。財布とIDカードと携帯だけチョッキのポケットに突つ込み、走りにくい革靴を通勤用の運動靴に変える。

早くきて、お願い。もう、しきは限界……。

セレのその言い方は、色っぽすぎてやばい。まるで自分が恋人の少年を泣かせている様に受け取られかねないじやあないか。迫神は遅れて部屋に入つてきて、呆れた様な目つきになつた後藤、屋島両裁判官に泡を食つて言い訳した。

「三分の一のTAIは、こいつ感じしゃべるんです。別に私用じやありませんから」

どこまで信じたのか定かではないが、後藤は分かつた分かつたというように頷いた。

「……迫神君。あつちもこつちも忙しそうだね」

「向こうじや、左陪席（初心者）なんで、それなりに大変です」

迫神は正直に言つた。自室の四畳半から宇宙の彼方へ出勤するのも、旅行会社の棺桶から山に入るのも慣れた。何か奇怪しいとは思うけれど、取りあえずそれを日常とすることに迫神の思考回路は設

計完了している。

けれど、ゲーセンから飛閃にモーキヤップで乗つて、鉱山へ侵入している犯罪者の制圧に出動するところは、どうこう[冗談だ？

「何だか取り込み中みたいだけど、……まあ、取りあえず、明日はこっちに出勤で、日程調整しなくていいのかな？」

「分かりません……。取りあえず、行つてきます」

迫神は、裁判所の敷地を出るまで走り出すのを我慢するのに、自制心を総動員しなければならなかつた。

「半六判事が……、左陪席ねえ……」
ルーキー

迫神が消えた扉を、あつけにとられた田つきでしばりく見ていた屋島裁判官が呟いた。屋島はもううるさいのでの経験が浅いからこそ、左陪席の位置に座る。

後藤がうんうんと何度も唸つてから、思いついた様に親指を立てた。

「取りあえずは、行き先がどんな修羅場にしろ、ドラマのワーンシーンみたいに、こういう感じじょうかね、屋島裁判官……。グッドラック」

後藤のキャラクターに合わない、その仕種じべに屋島が小さくぷつと噴き出していた。

信じられないことに、宇宙空間に浮いていた。

雪山の中、ふぶかれてしまつと、どこまでも続く白い世界の中にぽつねんと取り残される。自分まで、白く白くなつて、景色に溶け込んでしまいそうなあの感覚。

前も後ろも天も地も、全てが消え失せて、大気がない宇宙独特的の点灯しつぱなしの星たちが、圧倒的な量でさんざめいていた。

どちらが上でどちらが下なのか。自分が宇宙の中心なのか、それとも一つの星に過ぎないのか。人工大気に守られていない状態で、体感として間近かで輝く恒星を見やる。その眩しさに手で庇を造ろうとする。

白く光る金属の、いかにもゴツゴツとした手。

迫神は呆然とした。

あの普段は静かに横たわっていることが多い白い印象が強い巨体。物騒な武器を満載させているのに、威嚇としてすらそれを使わずに、保志総司官が移動に使っているそれ。

この一年と数ヶ月の間に、武力行使が目的で出動したことはほとんどないはずだ。

今……飛閃なんだ。

それにしても、静けさはおそらくほどだった。シンクロライド

でも、聴覚はオリジナルの感覚に近く反映されるものだから、ここが真空に近く近い、宇宙空間の真っ只中であるゆえに、飛閃の動作音すらも伝わってきていないので分かる。

それでも、闘いに来た迫神にとって、その静けさは居心地が悪いものだった。

「手遅れ？」

一人呟く。

耳元でセレの声がした。

「大丈夫……まだ間に合つ」

少しだけ、安堵の吐息。それから声に出せば、セレと会話ができることに気付いた迫神は現状把握しようと取りあえず口を開いた。

「現状は？」
「現状は？」

「ふくちゃんはちょっと前に落ちちゃつた。また、しばらく不機嫌だらうな」

と、高性能力メラがぐぐつと足元にあつた星を拡大していく。テラフォームド・シティと違つて宇宙に向かつて剥き出しの鉱山施設は、高性能力メラを遮らない。どんどん拡大されたその先に、壊してバラバラに放り投げられたマネキンのような形状の、元は人型だったと思しき物体が映し出された。

あれは保志だ。そう思ったとたんに、迫神は胸を駆け上がつて来る吐き気と闘わなければならなかつた。シンクロライド中の感覚は、味覚、嗅覚を除いて全て本体にダイレクトにファイードバックされる。どれほどの痛みを彼が味合わされたのか推し量ることもしたくないが、一気に裂かれて即死いたつたことを祈りたい。そうでなければ、

地獄だ。

武装して強化スーツを着込んだ、見るからに戦闘用のアバタロイドが、後藤が言っていた髑髏マークを船体に白々と浮き上がらせた、^{サブ・スペースシップ}SSSに積み込んでいる。

「それからここはイットルビア地区の名産、イットリウムの採掘施設で……」

迫神が立て続けに投げた三つの質問に、順序よくセレは答えるつもりらしい。

「オイラたちは、ジョリー・ロジャーがSNS（垂直空間航法）に入る前にトツ捕まえる」

これで三つの疑問に対する答えは、全てそろつた。迫神は少し微笑んでから、表情を引き締めた。あいあいからも、保志総司官からも指令もバックアップもなく、そんなものをトツ捕まえる手段が分からぬ。

「勝負になるのか？ セレ」

迫神が言うと、笑い声が聞こえた。

「マニアックなコロマと、ただのSSSが勝負になるとでも？ オイラの飛闘は軍隊相手でもタメはれるのよ」

「マニアックなコロマ？」

「マニアックレイテッド・アームド・コロッサス。武装巨人型特殊車両つて感じかな」

「つっこむ？」

「イットリウム鉱山の施設ぶつ壊したら、始末書じや済まないよ。三世代ローンの賠償金抱え込まないと」

「子供もいないのに、三世代ローンが組めるわけないだろ？ そうなつたら自己破産してやる。じゃあ、タイミングは離陸してから、加速しきる前だな」

迫神が言つ。

「それでいいと思う。でも、半六ちゃんは、子供の前に奥さん見繕わないと」

「面白みがない男だからなあ……もてない」

「もてる必要なんかないじゃん。結婚なんて、一人好きだつて言つてくれる人がいればいいんだから」

「その一人がいなの」

「あいあいは？」

迫神がつまる。たかがAエにこの複雑な心境が分かつてたまるか。相手にされないと分かつてゐる。けれど、それでも学生ならば受け入れられようと、拒否されようと、素直に思いを伝えることにためらわないでいい。あとは野となれ山となれだ。

けれど、ともかくにも、あいあいは仕事仲間なのだ。気まずく、やりにくくなるぐらいなら、このままでいい。

「仕事中だる。余計なこと言つな」

「ズルいよ。生き物のなんだから、気持ちいいこと……ちゃんとするべきいいじゃん」

「……セレ。人間は、自分だけ気持ち良くてもいいって話じゃないんだ」

セレは黙らなかつた。

「だつて機械と生き物の差つて、そこじゃん。あんたたちは、気持ちいいって感じる能力がある。特別に何も磨かなくても、ごはん食べれば気持ちいいし、うとうと寝てても気持ちいいし、トイレで排泄行為したつて、ずっと気持ちいいって顔してるじゃん。生き物の特権だよ、それつて。オイラたちはどうやつたつて、分からぬ。どれだけデータを積み上げても、想像もつかない……ズルいよ……」

「セレ……。人間はただの生き物よりも、もうちょっと複雑なんだ。気持ちいいって感じる力が生き物の能力だとしても、自分だけがよくても……それはそれでいいって考えるやつもいるんだけどな……でも、それじゃ半分しか埋まらないんだ」

迫神は不思議な気分だった。なんで、機械の身体になつたあげく、気持ちいいという感覚がどうやっても分からるのは不公平だと嘆くA.I.相手に恋愛談義を繰り広げなきやならないんだ？

気持ちいいことをしていいというのが、生き物の権利だとしても、弱いものを蹂躪して刹那の快感にはしるものの見苦しさを、日常的に垣間見ている者にしてみれば、その権利には制限が付くのはいたしかたないと思うのだ。

本能に任せて自分を穿ち込んで、自分が快楽に酔いしれて、された人間が生涯癒えぬ傷をそれで負うとしたら、そんなものクソクラエだ。

まあ、あいあい相手では、自分如きが暴力で蹂躪することが果たして可能なのかどうかは別としてだ。

「……そんなん、言い訳だよ」
セレが呟いたとき、S.S.Sのハッチが閉じられた。

「その話はあとだ。セレ。行くぞ……とにかく、あいつらをぶちかませばいいのか？ 飛閃の装備一覧、表示できるか？」

田の前の仮想モニターに、使用可能な武器のものものしい名前がずらすらと並ぶ。その方面的知識は相変わらずお粗末な迫神は決めあぐねて、ただの記号の羅列を見つめる。

「どれ……使っていいんだか……」

「半六ちゃん。オイラ……思うんだけどさ」

「何？」

「お得意のカラテキックで、SSSSの推進装置、壊せない?」

「飛閃で、カラテキック?」

「モーキャプだから、できるでしょ?」

「できるとは思うけど……なんで?」

「アバタロイドと盗まれつづあるイットリウム、両方とも無傷で確保できるじゃない?」

たしかに、アバタロイドを無傷で確保できれば、可能性として犯人を探知できるかもしない。それと、高価なイットリウムをロスしないで済むのも大きい。

「足場がないのに?」

「そつちにはあるじゃない足場。そこ、ゲーム屋さんの、モーキャプ・ブースなんだから。体感カメラモードやめて、データカメラモードにして」

「モード切り換えついでやってるんだ?」

「音声指示でいけると思つ」

セレの言葉が終わる前に迫神は叫んだ。

「カメラモード切り換え」

と、田の前に「ピコン」と「体感」「アラウンド」「3D」「こう文字が三種類浮かんだ。「文字が出てきた。今これが体感なら、アラウンドと3Dって?」

「アラウンドは、ろくちゃんの執務室の三面モニターの後ろもモニターがあるってこと。モニターを見る感じになる。3Dは田の前に立体映像がでて、そこにオイラが映るはず。選択は視線で選んで瞬き2回でマウスのダブルクリックと一緒に。多分、ゲーム屋さんのだから、音声でも選択できると思う」

迫神は少し考えた。カラテ技をかますなら、宇宙空間で上下左右が分からぬのはどうにも勝手が掴めない。

迫神がそう言葉にすると、次の瞬間には、コントロール・コンソール・パネルのようなものが目の前にできて、その先に大きな立体映像として宇宙空間が浮かんでいた。

「セレ、お前への指示もこいつ、アバウトなので大丈夫か？」

「もちろん、なんとでもスリ合わせするよ」

「分かった、SSS目掛けて移動。ポイントはここの辺」

なんとなく視線を合せて瞬きしてみるとそこがぽつと赤く光る。「半六ちゃん、すごい車幅感覚いいね。オイラも丁度そのへんでうまくキャッチできると思ってた」

「飛閃つて車両なのか？」

「統計分類だとそう」

目の前でジョリー・ロジャーの軌跡と、飛閃の軌跡がだんだん近寄る。迫神が焦点を合せた箇所辺りで大体交差しそうだ。

でも、こいつでカラテ技をかけるのは難しい。

そのとき、迫神の頭に、あいあいと訓練でやっていたとき、セレが表示させるターゲット・ホログラムが甦った。

「セレ、こここの俺を飛閃と仮定させて、SSSの位置を射撃訓練のとき出してくれるホログラムみたいな形で表示できるか？」

「……そのくらい、お易い御用だけど」

「じゃあ、そうしてくれ。あ、それから、俺の位置はSSSからみた定點にしてみてくれ。立つてこっちの目の前を、やつが通りすぎていく……そういうイメージで」

ふいに、目の前が暗くなつた。周囲の星たちが光の線になつて通りすぎていく。迫神は静かに、すべての世界の中央に立つていた。

星々が自分を中心に回り、そして、その中を一つの機影がぐんぐんと迫つて来る。静かに立つて集中する。あれを蹴り落とす。チャンスは一度。

迫つて来る光。

ふいと息をとめて、迫神はその点の進行方向を遮る形にならうに身体を使い、正確無比のひと蹴りを、その光の弾丸掛けて繰り出した。

手応えあり。

そう思った瞬間に、セレの叫ぶような声が耳の間近かで爆発するかのように響いた。

「やつたあ。すいこー！」

これで空振りしたら、めちゃくちゃ間抜けだつたよなア。と、迫神はこちが済んでから、背中に冷や汗が伝うのが分かつた。セレは自分が空振りしたら、そのときはバズーカでもぶつ放して、撃墜するんだつたのかなどと、もつするはずのない失敗に迫神がうじうじしそうになる前で、全ての音が甦つてきた。

モーキャプ・ブースは並んでいる。隣の賑やかなBGMが、うすい壁を通して洩れて聞こえて来るのだ。ドシャン、ガシャンという効果音も伴っている。いま自分がしたことは、現実なのか、それとも妄想なのか。

とにかく、田の前で運動エネルギーを完全に阻止されて、たよりなく浮かんでいる玉だつたものが、ゆっくりとSSSSの形を描いていく。どうやら、飛閃の胴ぐらいの大きさなのだ。この大きさのものを蹴り損なつたら、それはそれで恥ずかしかつたか、と、考えて、それから迫神はチープなゲームセンターのブースで、自分が何をし

たのかを捉えきれずへたり込んだ。しばらく立ちたくない。

「近くの富崎保安官事務所に強制連行してオマルにつないで、実行犯をたどれるかどうかやってみる。シンクロイド・ボディとの通信を切られてるかもしれないけど、一応頑張る。ろくちゃんはあいあいみたいに、死になれないから、多分棺桶で悶絶してると思う。オイラろくちゃんひっぱりだして、医療ベッドで寝かしてから、ふらふらしないで、ちゃんと棺桶入つておくから、三分の一より超過勤務で申し訳ないんだけど、あとで来てくれる?」

「うん、分かつた……。情けないけど、……ちょっとエキサイトしたのの振り戻しで力入んない。少しだけ休んでから……行く。ホント……情けない。飛閃みたいな反則的に強いモノをアバターにして、仮想空間で光の玉ぶん殴つただけなのに、力尽きた……」

つい、自虐的な笑いが洩れる。こんな緊張感は自分には向かないと、つぐづぐ迫神は思った。あいあいは……こんな、一か八か、タイトロープを渡るような緊張感を強制される現場で、凶悪な武器を持つている犯人を生きて逮捕して、ちゃんと裁判という正義の場に引きずり出すために、行動不能にさせるまで五秒もかかるへボい武器を持たされて、そこがレコンのポジションだからと、平氣で死にに出掛けしていく。

正義のために闘う。同じ大義名分を共有しながら、なんという違ひだろう。自分の様な立場のものが不要だとは決して思わない。直接、報復に報復を塗り重ねていく愚を、近代化は拒絶した。それは賢い大人の選択だと信じる。

けれど、悪意を持つて武力で来る人間に對して、なんと人は無力なのだろう。そして、無力が蹂躪されることに断固として異を唱えれば、暴力という同じ言語で圧倒するという汚れ役が、平和のためにある。

「……、ネットに繋がる？　あいあいのところがどうなつてるか知りたい」

「うん……」ニュース画面にしつづく。そこ、半六ちゃんが出るまで、オマルで押さえとくから。『レビュー戦……勝利お疲れ……』

セレは不思議な存在だと思つ。人間になりたいのだろうか。

「人間に……なりたいのか？」

「違うよ……。知りたいんだ。どうして、あんなに優しい存在にも、強い存在にも……。愚かで、醜い存在になれるのかを……オイラ……知りたいんだ。ねえ、半六ちゃん、あなたには分かる？　どうして、同じ人が夜叉にも菩薩にもなれるのか……」

セレの言葉が、胸にささる。

立て籠もり事件の現場の、緊迫感が続く中継の画面が迫神を取り巻く。武装して、闘つている男たちの中に混じつて、装備のせいで誰が誰だか区別が付かない。無力な子供たちを盾にして、残酷な行いを恥もせず、正義だの主義主張だとゴタクを並べて、命を奪う連中がいる。己の命や安全を差し出して、盾になろうとする人たちがいる。そして、自分たちが醜い存在だと気付きもせずに、血まみれな担架で運ばれる子供たちに縋り付く親に、カメラやマイクを向ける人たちがいる。

それを見ている、もつと愚かな自分がいる。

同じ人間なのに。

「うん……セレ……。不思議だ……。不思議だよ……ね」

* * *

棺桶の中で、亞衣里には自分の中に帰ってきたのが分かる。慣れきった感覚。余りにも、死ぬまで時間が掛かったせいで、傷もないのに体中が痛む。

宇宙でのミッションは、思えば非常に楽だった。向こうもどうせ機械に乗っている死なない身体。そして、守るものは資源だの設備だのそんなもの。

「あいあい、大丈夫？ 今日は酷かつたね……」

小さな手。血まみれの小さな手。あれを抱いていた自分の手は、いくらでも使い捨てできる仮初めの手。そして、死んだのも偽モノの死。だけど、あの小さい身体にあつた命は、あの子だけの命で……取り返しは付かない。

金城さんの声が普段より優しい。

なんで、犯人を射殺できない？ なんで、電子レンジでトツ捕まえなきやいけない？ なんで、殺す方に殺される方と同じだけの命の重さを保障しなきやならない？

疑問が次から次へと湧いてきて、涙が止まらない。

「どうなりました……？」

喉が言葉をだすのに苦労している。死んだとき、喉を撃ち抜かれ

たのを身体が覚えているのだろう。目の前で女の子が頭を撃ち抜かれた。即死していたらそのまま無視するところだった。けれど、あの子は生きていてそして言った。

ママ。

だから、必死で運んだ。必要だと思ったからそうした。突入しても解決せず、現場が膠着してしまえば、説得にあたるプロにがんばつてもうしかない。自分たちのような人間が次に必要になるのは、当局が犯人たちを生きて捉えるより、射殺していくと判断したときだ。今は、自分でなければできないことは何もない。

こんな服を着て動けば、格好の的になるのは分かつていた。S A Tの制圧班の人間がほぼシンクロイドしていることは、ドラマや映画でされている。撃ち殺してこちらの戦力をそき落とすことに、生身でさえ平氣で殺せる人間が、ためらいを覚えるはずもない。シンクロイド・ボディは丈夫だ。血などないから、失血死などしない。骨は金属で、皮膚はただの筐^{ハコ}だ。

それでも、第三次救急医療チームに引き渡せれば、助かるかもしれないと思えた。

「だめ……だつた……？」

「あいあい……。残念だつた……わ」

涙が出るのは生きているからだ。

悔しいのも……生きてるからだ。

「ごめん……ね。ズルイよね。撃たれても死がないなんて、ズルい……よね。」

「それでね……、今あなたに言い難いんだけど……、あなたのシンクロライド先を、学校の現場からイットルビアに変えてくれつてずっと……保志総司官から応援要請があつたの……」

「あんなところで……人は死なない。どうせいるのは、ロボットだのアンドロイドだの、シンクロイドだの……そんなのばつかりだ。子供たちが命を取られている地獄の現場と、そんなところと天秤にかけようがない。保志という人は何を考えているんだ。」

怒りに身を任せて身体を起こそうとして、全身が覚えている、あるはずのない痛みに亜衣里は苦痛のうめき声を上げた。

「……あいあい。保志総司官からの言伝でだつて、セレという人からあなたに伝えてつて、頼まれたの。そこを攻めているやつはそこつて今日の現場になつてる学校だと思うんだけど……思想犯でも、愉快犯でも、狂人でもない。金に目が眩んだ守銭奴が……鉱山から三分の一のあいあいを剥がそうとしているだけだ。こっちからひっぱれば……同じ根っこに辿り着く。応援頼む……って言つてた……つて。それでね……。意味、分かる?」

「……分かりません」

セレをなぜ挟むのだ。保志が直接言つて来ればいいじゃないか。聞きにいかないといけない。

「あいあいを……。

私を?」

鉱山から剥がそうと……。

ここに張り付けるために……、そんなことのために……、どうして普通に今日を生きて、明日信じている人の人生を、壊せるのだ?

私は聞かなかよ……。

私がいなければ、今日の事件はなかつたのかどうか……それを、ちゃんと確認しなければ。自分がその伝言を受け取つて、そつちに行つていれば、私が抱いていたあの子は死なかつたのか、ちゃんと聞かないと……。

亜衣里はのろのろと、おつかなびっくり、身体を棺桶から引き剥がした。

時間帯のせいか、それとも忙しかった一日のせいか、常日頃以上にくたびれて見える男たちが、向かい合っていた。

「医療ベッドに入っていると思つてましたよ」

「……まあ、正直、しばらく動きたくないけどな、ちょっとやらな
いと、やってられない気分だつた……」

保志はプライベート・モードで官舎のいわゆるくつろぎ向けソファセットの大きいやつにだらしなく寝そべっていた。ソファとソファの真ん中で、でんと居すわっているテーブルには、珍しくアルコールが出ていた。つまり物一つでていなのが、彼らしい。

セレがいれば、何かと世話をやくのだろうけれど、今は自分がこの身体を使っているのだから乾きもの一つ並べてやれないのにざわざわしてゐるに違ひない。

迫神は彼の前に座るのをやめて、そのまま続き間になつてゐるキツチンに移動して冷蔵庫の中を覗いてみた。なんやかやと、料理の材料になりそうなものが一杯入つてゐる。

「意外とまめみたいですね。保志さんは

「俺が?……まさか」

保志自身に声をかけた気はなかつたのだが、即答された。

「普段は、セレが?」

「まあ、美耶子がこないときはそうだな……」

美味しそうに飾られたカナッペが手をつけられずに入れられていた。

「セレ……」れ、まだ食べられるもの?」

一応聞くと、壁のスピーカーから聞き慣れたあの声が返ってきた。
「もちろん……。わざと、美耶子さん、それ作って帰ったとこだから……。どうせ、死んだら落ち込んで今日は」はんなんか食べないだろ？
「アルコール食う前にちょっと腫瘍予防させといてくれって言つて、作つていつたんだよ。美耶子さんなんだかんだいつて、ろくちゃんに甘いから……」

「この可変筐体（シンクロイド・ボディ）をみんなで使つてるとと思つと、なんとなく不思議な気がする。セレ、美耶子先生、それから自分の三人……。

ほかに何かないか冷蔵庫を見回したものの、あまりイメージが湧かなかつたので、迫神はそのまま、その皿を取り出しだけで冷蔵庫の扉を閉める。

「……美味しそうだけど、美耶子先生は、これ味見なしで作るんだよね」

「うん、だからたまに、とんでもないができるみたい。ろくちゃんが富崎保安官夫人の料理に飢えるの分かるでしょ？ 美耶子さんも家じやしてないだろ？ けど、計量しながら作つてるよ」

保志の皿の前のテーブルにカナッペの皿を置いて、それから思つた。

「（）相伴に預かれるのは……残念かな……」

「一緒に食えつて言えないのもな……」

昼間、忙しくしている保志しか、そういうえば知らない。普通は、一年以上も一緒に仕事をしていて、一度も食事を一緒にしたことがない付き合いなんて有り得ないだろ？

そういうえば、自分もそうだ。一度もちゃんと生身あいあいと待ち合わせて食事に行つたことなんかない。やれりと思えばできるはずなのに、どこかで、（）の仕事をちゃんとした自分の人生から切り離して考えてたのかもしね。

生身のふれあいをしていないから、あいあいとも保志とも、いつまでもどこか遠いままだったのだろうか。

「一つ聞きたかったんだけど、セレ」

「何？」

「私がどういう状態か、君は分かるだろ？」

「そうじゃなきゃ、シンクロナイザーのシステムを監視しているホスト・コンピュータとして情けないでしょ。ちゃんと見てなきゃ、マウント・オンもオフもできないし」

迫神は自分の胸に手を当てた。

「何を考えてるか……は？」

「分かるわけないじゃん。オイラが分かるのは、この身体に乗つてる人間の身体が、何を求めてるか……、それだけだよ。水分の補給が必要なのか、栄養分の補給が必要なのか、休息が必要なのか、排泄が必要なのか。ライダーさんの感覚を転送するときに、そういう数値も向こうの棺桶監視装置に送つてやらないと、八時間も飲まず食わずにいる生身の本体をちゃんと維持できないじゃん。ちゃんと疲れてる情報も送つてやらないと、休むの忘れちゃう人いるんだよね……。棺桶の中の人は眠つてるわけじゃないんだから実際問題として身体が活動してなかつたとしても、してたことにしないと。睡眠つて大事だから、脳にインプットされた体験情報を整理したり、疲れた身体を元にもどしたり」

なるほどね。と、迫神は納得した。道理で身体は動いてないはずなのに、疲れも残るし眠くなるはずだ。一日の仕事を終えて自分の身体に帰宅したとき、寝ていたはずの身体が疲れているのが不思議だつた。

「快感の閾値の判定もそつ。一意に決めることができないでしょ？」

ライダーさんの身体をずっと監視して、動作状況を確認しながら微調整してかないと。飛閃の運動制御と一緒に。ライダーさんは人間

だから、曖昧の処理がうまいけど、オイラたちは無器用だから

迫神はざわつとした。

「……それで、お前あんないと言ったのか？」

生き物なんだから、気持ちいいことをちゃんとすればいいといふ、あのとき保留にしたセレへの答えを自分は見つけていない。

「だつて、オイラ思うんだ。ちゃんと脳味噌に身体が感じる快感のインプットが、定期的にある状態じゃないと、人間つてろくでもないことしちゃうのかなって」

「でも、身体の快感だけで、人間は幸せじゃないだろ？」

「何いつてるよ半六ちゃん。オイラ知ってるよ。ごはん食べても、眠つても、トイレいつても、いつだって快感を感じてるでしょ？大人の男の人ならちゃんと女の人と性交するのもそうだよね。そういう生き物の快感をずっと阻害してると、快感が欲しくて、欲しくて、おかしくなる……っていうのが、オイラの人間つてものに対する、あの疑問の答えなのかなって……」

セレの疑問というのは、同じ人間が夜叉にも菩薩にもなれるのか、という、そつそつ^{まつこう}抹香臭いあれだろう。けれど意味は分かる。分かるだけじゃない、聞いたとたんに、それこそがまさに、ずっと自分の胸に突き刺さっていた疑問だったのだと分かった。

「お前がずーっとほざいてる夜叉と修羅の問題が、快感の閾値だけで説明がつくなんて思うところが、浅はかなんだよ」

保志が言葉を挟んだ。言葉の勢いは辛辣なのだが、その言い方は、小さな子供が自分はもう何でも分かるんだと胸をはつてゐる愚かさごと抱きしめてゐる父親のようだと迫神はは思つた。

「違つていうの？」

「いや……それも大切だよ。成長過程で生物が感じる権利がある真っ当な快感を阻害されて……虐待とか、貧困とか……あるいは単純な不運とかでね……、そういう者が犯罪を犯す確率の高さを思えば、それが真実だつて思えば簡単だ。だけど、忘れちゃいけない。同じ貧困とか、同じ最低な境遇とか、同じ運命の容赦ない打撃に打ちのめされるとかしたところで、悪いことをしないやつは、悪いことをしない。するやつが多いってだけだ」

その言葉の持つ意味を、直接受け取つてゐるだらうセレと一緒に考えながら、迫神は保志が何を考えているのか、そういうえば知りうともしてこなかつたのだと、思った。

「犯罪を犯すやつの率をさげるために、成長過程で身体に快感を感じる機会をちゃんと確保してやるのが福祉つてもんだとしたらな……」

…

ちびりと、保志はグラスの中の液体を舐めた。

「自分が不幸だつたから、他人を傷つけていいつて思つてゐたが、それをぶん殴る理由がなくなつちまうだろうが……ボケ。悪いものは悪い。誰が何といつても悪い。お前の不幸はお前のせいじゃないかもしぬないけど、お前の悪さは間違いなくお前のせいだつて、ちゃんと言つてやらねえと、司法なんて絵に描いた餅だろうが」

酔つぱらつてゐるからかもしれないけれど、その迷いのなさは、羨ましいぐらいだ。迫神は半ばあきれつと思つた。

「自分がルールブックですか？」

「迫神、お前も阿呆の一人か。司法のルールブックは六法つて決まつてるだろうが。ボケ。自分の感情でお前が悪いとぶん殴つたら、そりや、ただの犯罪だろ？」

迫神は目を閉じた。なぜか保志の言葉が染みわたつた。

「俺たちが毅然としていられるのは、一人一人がもがいていたちつぽけな人間たちが、こういう考え方でいけば、回りとうまくやつて行けるんじやないかって、文明つてやつが発生したのつけのそもそもから、忘れない様に書き留めて、積み上げて、整理して、見直して、失くさない様に、失くさない様に……つて、大切に育ててきた法が、居てくれるからだ。法つてのは、面倒で、小回りがきかなくて、不格好だと思うけどよ……。俺は、人類の財産だと思うわけ。

フランスの1791年憲法は古くさいか？　『全ての市民は、法の下の平等にあるので、彼らの能力に従つて彼らの徳や才能以上の差別なしに、全ての公的な位階、地位、職に對して平等に資格を持つ』。え、どこが古くさいよ？　障害者は能力が低いから差別を助長するような文言だつて？　ふざけるなよ、バステイユ襲撃の六週間前だぜ？　ぶん殴るには、特定の個人の迷惑じやなくて、法によつて立つことでだけ許されるつてちゃんと分かつてる人間がいたつてことじやないか。

『われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する』1947年日本国憲法がGHOの押しつけだから捨てちまえ？　ふざけるなよ。テメ工だけ幸せじやいけない、『全世界の国民』が、『ひとしく恐怖と欠乏から免れ』るのが理想だつて、全然古くさくない。おれはね、学生時代にロースクールの世界憲法変遷史の先生から教えてもらつた。憲法は努力目標だつて。ぴかぴかに磨いて、壁にかざつて、たまにじっくり読んで「ああそだな、がんばろう」、それでいい。ただ、埃がたまるからいつも磨いて読める様にちゃんとしていくのが、法曹の使命だつてな。君たちがこれから法曹界の現実に絶望することがあつたとしたら、思い出せばいいつてな。理想があると思うからしんどい。理想は追いかけるもんだつて……。あると思って、足元を探してもそんなものはない、つて。星を目標に地上を走つたつて、

地べたにいる限り無理だよ。だけど、それが分かつてもきっと辿り着けると信じて走る阿呆ができるのが、人間の甲斐性だつて……。いい先生だつたなあ……」

足元を探しても理想なんかない……。その言葉は迫神を打つた。無理だと知つても、辿り着けると信じて走る阿呆ができるのが……。

人間の甲斐性。

饒舌な保志など見たことがないけど……。迫神は思つた。
「こんなにしゃべってくれるなら、毎日アルコール漬けにしどきたいな……」

「……死んだ記念の躁病で間違いないな。本当に、あいあいは、よくもまあ、あれだけ死ねるな……まったく、すうい……」
嫌そうに顔を歪ませているのは、死んだときの痛みが実際問題として彼を苛んでいるからだ。

「実は私も、彼女はすごいんだなあと、改めて思いましたよ、今日。何もなくとも、お互にとんでもない破壊力のある武器を持つて対峙するつてだけのことが、すごく疲弊するんだつて……思い知りました。飛駆みたいなマニーア＝ロロに乗つていてさえ、自分が怖がつてゐつてことすら、嵐が通り過ぎるまで気付かなかつたぐらいですね。あんなの、身がもちません……」

保志がぽつつと言つた。

「……ふふ。そては……畠衣里に、惚れちまつたか?」

「まさか……とんでもない……」

迫神は思つ。今更惚れたんじやない。一目惚れなんて、信じてなかつたはずなのに……。あんなのは物語の中のじ都合主義だつていたのに。

時間をかけてその人に馴染んでいくものだと思つていた。でも、多分、あのイチゴのときからずつと好きだつた。運命みたいなものが、まず好きという気持ちを運んできてくれなければ、恋も愛も育てようがない。一番最初の言葉にすらならない「好きかもしない」という気持ちは、種なのだ。大好きの種を受け取つた瞬間は普通は多分曖昧なのだけれど、たまにどうしてか掌にその小さな粒が置かれた瞬間に気付くことがある。それに一目惚れという名前がついているなら、きっとそういうなのだ。

そういうえば、あの啓介は理利菜リリナが生まれたときに、一目惚れしたとか言つていた。初めて見たとき、ああ、よくぞ自分のところにきててくれたと感謝したと、あの馬鹿らしくもなく神妙な顔つきでいつた。

うつかり一目惚れしそびれたら、親でいるのつて……多分しんどいよな。

臆病でもなんでもなく……怠惰で、気付かないふりをしてきただけだ。そして育てようとなかったのも、ただの怠慢だ。気持ちというものに關しても、生まれつきの反射神経というか運動能力のようなものがあつて、それは人によつてバラバラなのだと思う。手に握つていたのが好きの種ということに気が付かなかつたのだから、蒔けなかつたのは愚かではない。それが種だと氣付いたとき、ちゃんと蒔かないのが愚かなのだ。

遅いかもしれないけれど、ちゃんと蒔いてみよう。もしかしたら……ちゃんと花が咲くかもしれない。風媒花のようひつそりとした花かもしれないし、艶やかな園芸種の牡丹かもしれない。もしかしたら、種というのが思い込みの勘違いに過ぎないかもしれない。だけど……阿呆になろう、心が届くと信じじうことができる阿呆に、

がんばつてちゃんとなろう。……。

迫神は、目の前に置いてあるグラスの中の液体を、飲んでも仕方がない今の自分が残念だった。一緒に酔いたかった。

* * *

今日は最低の日だ。

亜衣里は思った。眞実を知りたいと、教えてほしいと、痛む身体、疲れ切つた身体を引きずつてやつと辿り着いた先で、真つ先に耳にした言葉があんなのなんて、最低だ。

亜衣里に惚れたか？

まさか、とんでもない。

これ以上の明白な否定があるだろうか。分かつてた、ずっと分かつてた。迫神にとつて自分が可愛い女の子になる日は来ないと分かっていた。

自分だつてもうすぐ三十になつてしまつ。今更可愛いといつ年でもないのも、分かつている。それでも……やっぱり不公平だ。

大人になる前に死んでしまつた子供を抱いていた手が、そんなことで自分が不幸だなどと感じることは愚かだと教えてくれていたけれど、それでも、闇の中に蹴りだされた氣分だつた。あの人の笑顔が好きだつたのだと気付いたのは、自分を否定する言葉を聞いた瞬間だというのは、どういう皮肉だらう。

全部の勇気をかき集めて、亜衣里はあいていた扉をノックした。

あの人があ自分を見て……微笑む。なんて人なの？聞こえてないと思つて、そんなふうに偽りの笑顔をくれるなんて、反則だよ。お母さんが言つていた。好きつて気持ちは、感染するから、どっちかだけが死ぬほど好きなんて、本当は奇怪しいんだつて。好きだと思つている人間は、大体向こうも好きでいてくれてる。ママのこと亜衣里が好きなら、ママが亜衣里を好きだつて、疑わなくていいつて。

あれはいつのことだつたらう。お姫様の絵本を読んでもらつていったときだつたらうか。白雪姫のどこに、いつたいつ王子様が恋をしたのか、教えてほしいとねだつたときのことだらうか。

ママは言つた。

信じじるつて魔法なのよ。白雪姫は王子様と恋をするつて信じたから魔法がかかつたの。だから、亜衣里も大人になつたら分かるよ。信じることは簡単でも、信じきることは難しいの。だから……分かる。信じじるこつが魔法だつて。

「あいあい、今日は疲れただろう？　しつちで座るといい」迫神が手招きをする。漏れ聞いた言葉は自分を否定していた。なのに……どういつつもりでそんなふうに笑うのだろう。

「私は、保志総司官に話を聞きたんです。意味を……教えてもらいたくて」

「保志さんはちよつと死んだばかりだから……ゆつくり話そつたしかに保志の顔色は悪い。自分で悪い自信はある。久しぶりに死ぬまでたっぷり意識があつたお陰で、傷一つない身体がぎし

ぎし痛む。

「私も……今日も懲りずに死んできたわ……。でも、話ぐらいできます。どうせ……冗談みたいな、ズルい死にざま……ですもの」
とげとげした口調を、どう取ったのか、迫神が寂しそうな顔になつた。そんな言い方をするなど、瞳が言つていた。ずるい。

絶対にずるい。私だつて十分疲れてる。十分泣きたい。なのに……、保志総司官を思いやつてくれるほど、迫神は殺しても死なないような自分には心配をくれないのだろうか。

「迫神君、相澤君、私は……君たち一人に。……私は、謝らなければならぬ。私の浅はかが……事態を最悪にしてしまつた。申し訳ない……」

保志が背中を伸ばして自分たちの方を見てから、頭を深々とさげたのが見えて、亜衣里は……多分泣いた。シンクロイド・ボディは涙を流さないけれど、向こうの棺桶の中の自分が泣いているという確信が亜衣里にはあつた。

* * *

複雑な……けれど、職業柄か端的に知りたい情報が遗漏なく盛り込まれた保志の説明が終わつたとき、亜衣里は怒るべきか、泣くべきか迷つた。保志が三分の一を決めたのは、そのジョリー・ロジャーーとかいう自称・宇宙義賊とやらを捕まえたかつただけで、そのためには引退するわけにはいかなかつたと。

あのルテチウム鉱山の一件で、保志が密かに一匹田の泥鮋を狙つて、布石を打つていたこと。

教えてもらつていたとして、昼間の……日付が変わつてゐるから昨日のあが、そんな動機 S A T の相澤を足留めする で、行われたのだとは思いたくない。

居間の壁面モニターには、あの公認野次馬であるカメラマンがいままさに切り取つてゐるあの学校の風景がながれている。音声を出していくので、マイクを持つてゐる女の人が何をしゃべつてゐるのかなど分からぬ。

けれど、多分今も仲間たちが必死の思いで、一人でも多くの人質を助けて、一人でも多くの犯人を殺さずに逮捕しようと頑張つてゐる。あそこでの日常とは遙かかけ離れた宇宙開拓最前線の辺境で採掘されている資源をめぐる争いのとばつちりで、幼い子が殺されるなんて、そこまで馬鹿にした話があるだらうか。

「ソロプレイの習性が抜けなかつた、保志総司官の判断の不適当について糾弾するのは、とりあえず後に回すとして……」

亜衣里がそういうと、保志がいたたまれないという顔になつた。

「後でちゃんと糾弾されるのか……私は」

「当たり前です。責任はきつちり取つていただきます。私がこんなところで変に名前を売つてしまつたから、小学生が頭撃ち抜かれて、私の腕の中で死んだなんて、どうやつて、自分を納得せたらいいつておっしゃるんですか?」

「……すまない」

亜衣里はその言葉を無視して続けた。

「セレ……、結局、迫神さんが飛閃で蹴り落とした S S S に乗つてアバタロイドのトレースは成功したの?」

絶対に逃がさない。万単位なのか億単位なのか、はたまた兆単位なのか。そんなことはどうでもいい。ただ、金なんてもののために、

子供を殺せる様なやつをのぞむりむかわおこては、警察官の名がすたる。

「オマルのメインにメモリデータ全部転送して分析してもうつたけど、消去された後だつた」

「行動不能になつてから確保までの時間が長かつたか……。くそ、やっぱり迫神さん、蹴り倒すよりバズーカぶちこんでやればよかつたんですよ」

「打ち所が悪かつたら、かけらの情報もゲットできなかつたんだし、蹴り倒せつていつたのはオイラだし、そんなに半六ちゃんのこと苛めないでやつてよ」

亜衣里は、セレが迫神をかばうのが、これまた心外だつた。

「セレ……、かけらの情報つて何よ」

「アバタロイドは日本製」

「何馬鹿なこと言つてるのよ。アバタロイドの七割強がメイドインジャパンなんだから、そんなの分かつたつて、使つてるやつの国籍まで限定できないわよ」

「少なくともタイでもヨーロッパでもチャイナでもないつて分かつただけ、マシじやん」

「そんなん役にも立たないわよ」

「言ひがかりだ。ほとんどヒステリーに近い。自分で自分が嫌になるけれど、感情がささくれだつているのを宥めようがない。死んでしまつた小学生の重みが腕に残つてゐるのが悪い。冷静になれない。

一人掛けのソファの隣に座つていた迫神が……自分のことなんかどうでもいいと言つた男が、そつと亜衣里の手を握りしめた。温度センサーは再現されている皮膚温度を正確に伝えてきた。

あつたかい……。

「あいあい、今日はもう寝た方がいい」

「馬鹿な女は口を挟むなってこと？」

最低な気分のところに、とじめの一撃を落とした男の言葉とは思

……這二
癪れでるときは
仇敵方かしい
それだけだ」

女として興味はないのだろうけれど、同僚として十分勞ってくれている。彼の真摯な優しさは、少なくとも偽者じゃない。

イドばかりしていると、疲労困憊になるのはいつものことだ。代謝率を落として過負荷にならないようコントロールされているといえ、飲まず食わずで動き回っているのと同じなのだ。身体にちゃんと帰つて、消化にいいものを食べて、ゆっくりお風呂にでも浸かる。そして、寝よう。何もかも忘れて……。

疲れがとれなければ、思考がらしくもなく悲觀ルートを突っ走ってしまう。ちゃんと建設的な対策を取るには、そうする方がいいに決まっている。

「あいあい……今度」

「え？」

「一緒に飯食いにいかない？」新橋高架下に並い串揚げ屋があるんだ。この力ナツペ作つた保志総司官の奥さんにも絶賛だつたから、美味しいことは保障するよ」

保志が聞き捨てならぬといつよし、文句を言った。

「一九一九年十月三十日。」

「お前、本題だ
とせ……」

お前、本当に……」

「じの迫神の言い方では、言い訳にもならない。正直保志は呆れてしまう。

「石橋がぶつこわれるまで叩き続ける主義か？ じに来る前にそんなことしてやがったのか。ケツの穴の小さいやつめ。あいあいは、即答だつたつて聞いたぞ」

「……だつて」

話を振られても困る。宇宙つてところに来てみたかつたという、野次馬根性でやつてきましたなどと、正直に言つのもちよつと抵抗がある。

しかたなく、迫神が握ったままの手に亜衣里は視線を落とした。それに気付いて迫神が保志を無視した。

「もしかして、彼氏に怒られるかな？」

顔を上げると、目の前に迫神の顔があつた。そんなもんいたら、三分の一なんかする前に嫁に行つてます、そう言いたいのを亜衣里は我慢した。

「私はリッパー・ケースケ命なんです。その辺の男なんて、メジやありません」

アイドルなんか好きなはずもないけれど、亜衣里程度の芸能界情報音痴にも、顔と名前が一致するほどのぶつちぎりの今をときめく旬の人だ。

亜衣里の手を握っていた迫神の手がふるふると数瞬間ふるえて、それからぼそつと言つた。

「……あの野郎、今度こそぶちかましてやる……」

「……え？」

亜衣里はどうしようもなく可笑しくなつた。東京地裁の判事が、突然テレビ局か何かに押しかけて、リッパー・ケースケをカラテでのしたら、ものすごい週刊誌ネタだ。原因が、私がケースケ命と言

つたから……。「冗談にしても、有り得ない。迫神さんは懲戒免職まではいかないだろ？けど、退職勧告が出るに決まってる。

笑うというのは確かなエネルギーなのだと思います。可笑しいと思つたら、帰つてちゃんと眠つて、頭をさつぱりさせたところだ、もう一度ちゃんと考えようといつう気力が湧いてきた。

「セレ……帰るわ。マウント・オフして」

セレからの返答がない。

「……？ 4444でもいいわ。今日はもう帰つて寝るから、シンクロライド終了させてくれない？」

迫神は、亜衣里に握つた手を振りほどかれたのが、嬉しかつた。次はちゃんと自分の身体で、^{レア}生身あいあいの手に触れたい。心からそつ思つていた。

「あいあい、帰つた？」

「……うつと、まだいる」

保志が口を挟んだ。

「おこ、4444、あいあいを返してやつてくれ。おふざけするようなタイミングじゃないだろ？」「へり向でも空氣読まなすぎだぞ」

セレの悲痛な声がスピーカーから洩れてきた。

「操作……できない。……大変だ、どうしよう、何度もトライしても

アクセスが弾かれる」

「え？」

亜衣里の声が怪訝そうに裏返つた。

「UUC（亜空間通信）システム・ホール？」セレ、迫神さん……の……は？」

「半六ちゃんのは大丈夫。あいあいだけ見つからない。どうしてもあいあいの操作画面までいけない。あいあいの疲労度考えると、ライド限界に近いのに……どうじよつ」

保志が立ち上がった。

「迫神、一度東京に帰れ。あいあいの棺桶がどうなってるか、見に行つてくれ。通信システムのエラーじゃないと、向こうの棺桶の方で何かトラブルかもしねない」

「そんなケースあるんですか？」

迫神は焦る。黎明期ならともかく、現在ではシンクロライド・システムは技術として安定しているはずだ。滅多なことでトラブルはないはずだ。大体、そうでなければ、もつと事故の噂を耳にするに決まっている。

「聞いたことはないが、人間の作ったもんだ。ぶつ壊れることぐらいい、普通にあるだろう。あいあい、迫神に見られて困る様な「ミ屋敷」だつたとしてもだ、今は見に行つてもらえ。さつさと身体の方ケアしてやらねえと、マズイだろう」

「保志さん、失礼な。私の部屋はいつだつてキレイにしてます」

「そいつはよかつたな。恥かかずに済んで。人間日ごろの行いが、いざつてときに役に立つ。迫神の携帯端末に、住所とか、部屋の鍵^キ」「コードとか送れるか？」

迫神があの部屋に入る？

亜衣里はくらべらしそうだった。『ミ屋敷では断じてない。けれど、別の意味でいつてしまつている部屋なのだ。思いつきり少女趣味全開で飾りたてられた、見事に悪趣味な部屋……。窓にはレース

たっぷりのカーテンが掛かり、狭い六畳なのに照明はシャンデリア。家具は全て白の猫足で、彈けもしないオルガンに、天蓋付きの丸型ベッド。手入れをする時間がないから、造花ばかりをゴテゴテした花瓶にこれでもかと盛り上げてある……。クローゼットにはパニエ入りサテンのドレス。……最悪だ。

アバタードライブと、シンクロライド。一つを続けてやってみて、疲労度の歴然とした違いに驚く。自宅の四畳半、棺桶の蓋がスライドして開く。ウツカリ足を踏み出しても起き上がりないので、一呼吸して自分の身体の軸が重力方向に対して九十度変化していることを確認する。

それから迫神はゆっくりと身体を起こした。帰つたら仮眠を少しどつて、それから仕事に向かおうと思っていたので、帰ってきたときのままの部屋の状態だ。

頑張つて汚したつもりもないのに、雑然とした部屋をなんとなくながめて、ちょっとだけ落ち込みそうになる。シンクロライド・システムが不調になつて、メンテナンス技師がくる可能性があるなら、もうちよつといつ何時、誰に見られてもかまわない程度に片付けておくべきだと、次のオフの日は片付けだと心に決める。

食べようと思つて買つてきていたのに、なんとなくそのまま、DKに置いてある小さなテーブルに放り出していた弁当を見る。

空腹を思い出したけれど、とにかく、ずっと連續でライドしている亜衣里の疲れ切つた表情を思い出すと、それに手をつける気になれなかつた。多分、彼女は水分を補給したぐらいで保志に話をするためにやつてきたに違ひない。

シンクロライドしている間、最低の代謝で済む様にコントロールされてるとはい、長時間ライドの場合、基礎代謝分を補つてやらないと、最悪の場合、命に関わる。長期間の連續ライドをする場合は、普段迫神たちがやつているよつて、昏睡に近い状態に身体の機能をおとすのではなく、ニア・コールドスリープと呼ばれる状態にまで、つまり仮死に近い状態にまで体機能を制限してやらなければ

いけない。

完全に凍らせてしまつと、細胞組織が破壊されてしまつ。その壁を人類の技術はまだ越えていない。その技術の壁を越えれば、人はもうちよつと遠くまで行けるようになるのかもしれない。それが人類の規模からいつて、もはや必要なこととは、迫神には思えないのだけれど……。

そんなわけで、この短期ライドと長期ライド中に生身の身体が経験している睡眠の種類の違いは、多分熊の冬ごもりと、爬虫類や両生類の冬眠ほどの違いぐらいだといえ、分かりやすいだろうか。少なくとも、亜衣里がちょっと保志と話すためにライドしたなら、迫神とどつこいで、食事をするのを忘れている、または、そういう気になれなかつた可能性がある。

亜衣里は何も言わなかつたけれど、多分、あの日本では未だに珍しい、武装集団による学校占拠事件に出動して、何かを見て、最悪とこうものを味わうことになつたのだろう。いつも明るい彼女が、とことん疲れていたように見えた。

すぐに携帯を見て、亜衣里からのメールを確認して、それから移動手段を考える。この時間、さすがに公共交通機関は死んでるだろう。タクシーしかないか……。

そのまま飛び出そうとして、ふと思ひなおした。生身^{ペア}あいあいと初めて会つかもしれないのだ。彼女が啓介の野郎のファンだというなら、むさ苦しいのは問題外に違ひない。持ち物が違うのだから勝負にはならんが、『不潔』は可能なだけ排除しておくにこしたことはない。けれど、洗面台に直行し、鏡の中の自分のむさ苦しさを睨むように見るにつけ、短時間での修正は不可能だと認識するしかなかつた。

仕方ない。

ザババババと顔だけ洗つて、取りあえず顔の上をこりてりとコーティングしていた、脂だけ排除する。見掛け的には変わっていないだろうけれど、少なくとも自分はさっぱりした。

それに、柄にもなく鏡を覗いた時間は無駄ではなかつた。電話で二十四時間街を走り回つてゐるタクシーを呼ぶ方が、流しているのを捕まえるより確実だと思つたからだ。ネットで調べて、タクシー会社に電話をかけ、至急で配車してもらうよう依頼すると、隙間時間を身なりを整える方に費やすより、人間としてのダイレクトな気持ちよさを維持する方を選ぶことにした。

冷えきつた弁当を開けると、「はんを一口、三口飲み込んだ。実感として、胃腸が喜んでいるのが分かる。セレの生育期における快感添加による犯罪率低下についての考察は、まあ検証するよつなもんでもないけれど、真実の一一面だとは思つ。

一気に最後まで食べてしまいたくなつたのをぐつと我慢して、冷蔵庫を開け、胃と食道の境目辺りでもそもそしていた塊を、ボトル入り緑茶で無理やり胃袋に送り込んでやる。と、ペットボトルは冷蔵庫に戻さないで手にしたまま、迫神は玄関に向かつた。

亜衣里が目を覚ましたら、取りあえず水分補給が一番必要だらう。乾いた身体に、ただの緑茶は甘露といつて言葉そのままにとして染みわたるぐらいに頭かつた。

住所が示す、ちょっと洒落た外装の集合住宅の前で止まつたタクシーから下りると、ちょっと年配の、多分保志美耶子と同じぐらいの年頃の女性が、こんな時間なのもに関わらず、エントランスの前

で出入りするものを通せんぼする位置で仁王立ちになっていた。闇夜でも絶対に車に轢かれることはなさそうなシルバーのツナギに、夜なのに大きいサングラスで顔の半分が隠れている。若作りにしているが、口元と喉の皺が隠せない年齢を語っている。

「こんな時間に腐つても女性が、なぜに立っているのだろうと思つと、アンタッチャブルという単語が迫神の頭にフラッシュと共に思い浮かんだ。

「おばさん……怪しそう……。

立っていたのはS.S.S（S.A.Tサポートスタッフ）の金城だった。彼女にしてみれば、迫神の年頃の男から、おばさん扱いされるのは心外だつたに違いない。

なるべく目を合わさない様に言い聞かせて、女の横をすり抜けようとしたとき、その女性が呟いた。

「東京地裁の半六判事こと……迫神平和君、33歳独身……。これは、君のことで当たつてる?」

「ぶつと、迫神は噴き出しけた。なんで、33歳独身まで知ってるんだ。

「何者ですか、あなたは」

「桜田門のS.A.T、制圧一班の名物レコン、相澤亜衣里のS.S.Sをしている金城よ」

「ああ……、あなたが金城さんですか」

金城の名前なら、あいあいから何度も聞いたことがあった。往年の名S.A.T隊員。今は後継育成とそのカウンセリングに当たつているとかで、信頼しているだけでなく、女性が少ない職場だから、お姉さんのように慕つていると、そんなことを言つていたと思つ。

お姉さんのよつにとこつ形容詞が、金城に相応しいところがどうかは以後の検討を要するとして、一人であいの部屋にいきなり押しかける氣まぎせに比べたらと、そつ思ひと正直助かつたと思つた。

「あら、あいあい、私の噂してたの。どうせみくな」と言つてなかつたでしょ」「

「そんなことあつませんよ。とにかく、相澤さんからの依頼ですか？」

「やうなのよ、さうして夜中に起されたのよ。美容に悪いけど、しかたないじやない。システムエラーで身体に帰れないから、勢いでうつかりあなたに鍵を渡してしまったけど、助けてくださいって、泣きつかれたんだもの。……そりやそうよ。どう考へても一度も会つたことのない男性に、部屋に侵入されるのって、女にしてみりやたまらないわ。しかも連續ライドしたならべとべとに決まつてゐるじやない。どう考へたつて無防備な状態でしうが。はこどうぞ、レイプしてくださいつて言つてるようなもんぢやない」

あいあいにとつて、自分に触られるのは、レイプと一緒になのかと思つと、さすがに落ち込む。迫神は世の中の哀愁のすべてを背負いたくなつた。

「なに、一小时前の青少年みたいに落ち込んでるのよ。行きましょう、急ぐんでしょ」「

「どうせ信じないでしょ」けど、これでも男はピュアなんですよ」「あり……意外といつのね。もつと、面白みのない子だと思つてたんだけど」

あいあいの噂話を聞いて、面白みがない男だと、金城が判断したところなら、あいあいにとつても全然面白くないといつことだらう。

「せひ、 せりをとく。 レイプしないでわよ。 私が許可する」

「どうこう文脈ですか、 どういつ」

「せひ、 迫神君はさあ、 朴念仁で、 不感症。 ついでに空氣が徹底的に読めない最上級の鈍感で、 及び奥手で照れ屋で、 乃至、 自己評価低い魅力零野郎。 あと、 何か言い忘れてたかな」

初対面の怪しげおばさんに、 どうしてここまで虚偽にされるいわ
れがあるのかと思うと、 怒るべきだと思うのだけれど、 あまりにも
その言葉が出てくるスピードがF-1級なので、 どこにつけむべき
か考へてる間に通りすぎてしまった。

「ああ、 そうだ。 レイプ許可する前に聞いとかなきや。 迫神君、 あ
なたさ、 あいあいのこと…… どう思つてるの？ そうそう、 あいあ
い情報だとあなたとことんズレてるみたいだから、 ちゃんと前提も
はつきりさせとかないと。 同僚としてとかS A T隊員としてとかじ
やなくて、 あのあいあいを女として、 どう思つてるか。 私が聞きた
いのはそれだけ」

今日はどういい日なのだろう。 セレにも突っ込まれ、 そして見知
らぬ女性からも、 煮え切らないできた態度を責められる。 あいあい
をどうにもこうにも好きだとうのに、 ようやく気付いたばかりな
のこ、 どうして世の中はこんなに人を急がせるんだろう。

「…… イチ」「……」

「え？」

迫神の答えが、 金城の回答文例集になかったのか、 彼女はサング
ラスをカチューシャの位置にまでずり上げて、 綺麗な強い瞳を向けてきた。

「イチ」「って…… 果物のあの赤い、 粒々の？」

「好きなんですよ。あれ。……たまに無性に食べたくなる……」

一瞬、金城は目を白黒させ、それから大仰な身振りで噴き出した。
「何よ、あいあいのうそつき。全然朴念仁[じやないじやない]。迫神君、あんた最高。あの子が惚れるだけのことはあるわ。あはは、その回答[気]に入った。レイプ許す」

「え……」

今度は迫神が凍りついた。

あいあいが……だれに惚れてるって?

瞬間迷子モードの迫神をうつかり置いていきそうになつて、金城は自分が鍵を持つていないと気付いていらしたら立ち止まる。
「はやく行くわよ。迫神君、さつさと鍵開けて。解錠するの、こんなところで警官[サッカン]がマスターキー使うわけにいかないでしょ!」

金城の半歩後ろに少し並ぶ様にして廊下を歩くと、彼女が足音をほとんどたてないことに気付いた。金城は迫神を従えて長い通路を歩き、何度も来たものだけが持つ勝手知つたる迷いのなさで一つの扉の前に立つ。

「キーデータ入ってる携帯貸して」

金城が迫神の携帯を受け取つて、呼び鈴の横にあるスキャナに押し当てるごとに、がちゃりと古風な音と共に鍵があいた。

あ、生身[レア]あいあいと、……初顔合せ。
とたんに、迫神は緊張した。

「あの子は、迫神さんは絶対に部屋に入れるなつて、泣いてたけど、私は見るべきだと思う。あの子のこと、よく分かるから……」

「相澤さんが嫌がつていたなら、私は遠慮しておいた方が」

「だれだつて、自分がイタイと思つてゐる部分は触られたくない。だけど、手当てつていうでしょ。痛いところに触れることで癒せることがある。あの子のお母さんも、多分、そんなに悪気はなかつたんだと思うんだけど、外見的な意味で、女の子は可愛くなきやだめだつて思い込ませてしまつたんだよねえ。あの子に。……あのあいあいでしょ。自分が可愛くないつてことに、非常に確信があるから、可愛い小さな女の子になれなかつた自分がいつまでも許せないみたいなの。あの子の可愛さが分かる男が少ないつてのも問題なんだけどねえ……」

「オープンセサミ。迫神の田の前にカオスというより、シユールの域に届いている乙女の部屋が出現した。こんなところで、あのあいあいは、落ち着けるんだろうか。中途半端に乙女チックならば失笑の一つも出て来ると思つただけれど、ここまで徹底してると逆に感心してしまう。

「乙女ちば、あの子が女のナース乙女するときの部屋。で、あの子の棺桶は仕事場……」

靴を脱ぎすてて部屋に上ると、金城は最短距離でドアハンドルームを通りすぎてスライドドアを開けた。

そこにはこれでもかといつぱり無駄を排除して、殺風景の趣まである部屋だ。学生のような勉強机にある本棚には、法解釈や、判例集分析や、司法試験対策の参考書がきちんと並んでいる。

きつちつと手順を馴染ませておけば、こわとくつに迷わないで済むという彼女の持論がそのまま生きてる様な部屋だ。けれど……。

「……棺桶が……ない？」

「乙女に置いてあつたんですか？ 間違いなく」

「ざつくりと切り取つたに、何もない空間がそこにある。

「あのや、隣の部屋見たでしょうが。ここにしかあんな『力いもん

がおけるスペースないでしょ？

「でも、ないつてことないでしょ？……」

「トイレとか、風呂場に入れると思う？ 一応精密機器よ」

絶対にないと断言しつつ、それでも部屋数がないのか、金城はバスルームへの扉を開けた。女の子のにおいがたちこめているような気がして、なんとなく恥ずかしい。

「迫神君、来て、早く」

バスルームへ消えた金城が、大きな声で迫神を呼んだ。何かあつたのかと、バスルームに飛び込む。と、そこには、石鹼なのか、化粧品なのか、それとも香水とかの類なのか、甘いようなほの酸っぱいようなにおいが仄かに漂っていた。シンクロライドモード限定の今までのあいあいとの付き合いで、彼女に関して嗅覚情報と味覚情報はまつたくゼロだ。酷く新鮮な感じがした。

金城が指さしていた先には、女の子のタシナミといつやつなのか、大きな姿見が壁の一面を占めていた。けれど問題は姿見ではなくて、その上に口紅で書かれていたものだった。口紅の太い線のためなのか、単に絵心がないやつが書いたせいなのか、頭蓋骨というよりピースマークのように見える顔の下にバッテンの……。

「ジョリー・ロジャー……」

迫神は文字を読もうと近付いた。

『愛すべきバッパー殿 並びに、その三分の一のタマゴビもに警告する。

君たちは大いなる間違いを犯している。

荷主をつぶすほど、また、正統なる価格を破壊する様な強盗では我々はない。

我々の活動の妨害を続けるのは、人類にとっての敵対行為だ。
即刻、愚かな振る舞いをやめるのだ。

君たちが誠意を見せることによってのみ、大事な棺桶は取り返せると思いたまえ。

残念だったな、君たちの万能が発揮できるのは、ここではない。

迫神が握り拳をじこに叩きつければ、何も壊さずに済むだらうかと、じく真面目に考えてとき、隣でガキンと何かがぶち壊れる音がした。

「ジョリー・ロジャーっていうの？ このド外道、現役のS.A.T隊員にちよつかいかけて只で済むと思ってるなんて、いい根性だ……」洗面台の方にくつついている鏡が粉々だ。見事な突き手だが、褒めている場合ではない。

「金城さん、落ち着いて」

「落ち着く？ お前、状況分かつてんのかあ。今怒らんで、人間に怒るんだ、馬鹿野郎。落ちつくなんざあ、そんなん、相手を追い詰めてからで結構よ。バッパーが役立たずだろうが、桜田門は東京の法律だあ」

保志の法律論とはまったくガチ対立しそうな発言をかまして、金城が銀ピカのツナギの胸ポケットから携帯を取り出して、ちゃかちやか操作した。

「へーちゃん？ あいあいが棺桶ねぐらこと攫われた。緊急捜索隊員募集。非番の連中かき集めて……何、無理イ？ 学校がまだ立て込んでて非番なんかいねえ？ だったら、アンタはあいあい見捨てるのか？ うん、うん、悪かった。言い過ぎた」

金城は電話を切ると、すわったまづきで迫神をにらんだ。

「学校やつづけるまで、動けないって抜かしやがる……」

「あ……当たり前だと思いますけど……。でも、保志総司官の予測だと、学校の件の黒幕も……多分、ジョリー・ロジャーと根っこは一つだつて」

金城は腕組みをした。

「でも、学校は完全に硬直だ。日本人の大嫌いな強行突入でもしなきや、向こうが消耗するのを悠長に待つパターンだ。最悪だね……。だけど、あいあいは、そんなに待てない。ほとんど一日、水分と栄養分補給してないからね。一回目にライドする前に何か補給してたとしても、基本的な疲労値は高い。災害出動の考え方と一緒にいいと思ひ。あいあいは長時間ライドを想定してないで乗ってるはずだろ? ケアなしで棺桶に閉じ込められたままだと予測すると、生死分岐点は七十一時間」

生死分岐点という金城の言葉がどうそこに何を意味するのか、迫神には分からなかつた。

金城は続けた。

「だけど、一日の半分、十一時間ぐらいはそもそも切迫してからスタートだと考えていい。一日と半分、六十時間以内にちゃんと取り返さないと、あいあい……死ぬよ」

死ぬ? あの……あいあいが?

「さてと、金城さん……、どこから攻めたらいい?」

金城は自分にそういうと、携帯をもう一度取り出した。カメラを起こして鏡の文面を写真におさめると、わくわくと転送してそれから「ホールした。

「ああ、あいあい? 私、金城よ。最悪の事態発生。アンタの棺桶

行方不明だ。詳しく述べ、メール添付の写真を見ること。いい、私とあんたの迫神さんで、絶対にみつけてやるから、アンタは本体が消耗するようなこと一切しちやだめだよ。ソファでも借りてのんびり寝てなさい。いい？ 一步でも動いたらぶん殴るからね……「うん？ 分かった」

あいあいと話していた金城が、自分の携帯を迫神に突き出した。

「話したいって……」

迫神は受け取って耳に当てる。息づかいが聞こえる。

見ちやつたでしょ……部屋。

「うん」

あのジョリー・ロジャーのメッセージを読めば、それを金城が迫神に見せないはずがない。

笑つていいよ。バカみたいだらね。自分で分かってる。

「うん、バカみたいだ」

萎れた声が、お陽さまみたいなあいあいらしくもない。

……最低なやつ。少しほとこよどんでくれてもいいのに……。

迫神はあいあいに何といつべきなのか、少なくともその時点ではまるで迷わなかつた。

「あいあいはそのままで十分可愛い……」

「うそつき……。言つてたでしょ。私聞いたんだから……。まさ

か今更つて。

あれをあいあいは聞いたのか。タイミング悪すぎだ。迫神は微笑んだ。

「うん、今更……だ。ずっと……つたから」

いつもの照れで、消え入りそうな声になつた迫神の後頭部を金城が殴りつけた。

「悠長に睦言^{ヒイガム}交わしてる場合か。愚か者^{ビホ}も。現場検証。聞き込み、通信記録トレース。差し当たつてできることは全部やるんだから。今日どこまで手がかりを追えるかが勝負よ。ああ、……あはは、私もバカだねえ。」

いきなり金城が五秒ほどがははと笑つた。

「よく考えたら誘拐はS A T仕事じゃないね。捜査一課のS I Tに電話しよ……。宇宙人は宇宙でだけ悪さしてればいいものを、スマイリー野郎、桜田門のお膝^ハ元でいい根性だ。舐めたことやらかした、愚かさ加減を、徹底的に後悔させてやるわよ。」

迫神のポケットの中で、携帯が着信音をたてた。控えめな音にしていたけれど、深夜過ぎのせいか、いつもより大きく聞こえた。見ると、啓介になつていてる。まったく、忙しいときに、昼も夜もない芸能人都合で電話を掛けてくるとは非常識な。

と、そう思つてから、三分の一に参加して生活がハードになつてから、啓介のとんでもない時間のコールが絶えていたことに気がついた。あんなでも、あんななりに、こっちの体調を気づかつてのかと思うと、なんとなく感謝の気持ちが湧いてくるから不思議だ。

「ピンフッ！ 生きてるか？

通話にするなり、ハンズフリーモードでもないのに、啓介のがなり声が聞こえて苦笑する。この時間に電話で生きてるも何もないだろ。う。『起きてたか？』の間違いなら、いつその事奴らしいというべきだらうか。

「おい、啓介、この時間に電話してきて、その言いぐさはないだろう。死んでないよ

知らないのか？

「何を？」

で、出掛けたんか？ この夜中に……。ひょっとして女のとこ？

夜の外出で、それしか発想力がいかないのはタラシの啓介ならではだが、まあ、あいあいの件で出でることは間違いない。迫神は若

千見栄を張つた。

「悪いか」

迫神がそうこうと、啓介の声は聞こえなくなつた。何を言つてゐるのか聞き取れない。携帯電話を耳に当てるとい、啓介の声ではなくて、息づかいだけが聞こえた。

「おい、啓介、どうした？……お前、大丈夫か？」

馬鹿野郎。心臓が止まると思つたぜ。よかつたよ……。一度と会えないと思つた。

大きさな言い方だけれど、ふざけていふふつではない。長い付き合いだ。本気の発言か、ふざけていふかぐらいは区別がつく。

俺、お前の彼女に生涯感謝するぜ……。女の代わりなんていくらでも見つかるけど、ピンフの代わりはいねえからな……。

女の財布で食つてゐるようなもののくせに、相変わらずのバカ発言だ。

「ちょっとこいつらは立て込んでるんだ。生存確認で用件が済んだなら、またことが片づいてからにしてくれないか？」

彼女のところだつてテレビぐらいはあるだろ？ニュースつける。俺たまたま、夜中のニュースショーのゲストで来てたんだけじか、あんまり現実感ないんで、気絶しそうになつた。

「……学校占拠事件で新展開でもあつたのか？」

仕事部屋の方にはテレビがなかつたので、あの、乙女部屋のフリ

フリクリッショングが山積みになつたソファの前にある小さなティーテーブルの上にあつた、マルチリモコンらしきものをひっぱりだして電源を入れてみる。

電源を入れると同時に選択画面になる。ニコース番組や、時事解説の番組ばかりがリストにあつて、ちらつと覚悟したようなケースケ追っかけを自称する者のメニューではない。ニコースを選ぶと、ニコースヘッドラインがだだだつと表示される。

最新のものと、今現在の視聴件数が一番高いものと、二列で表示されている。最新のものは、そこそこ動いて、徐々に下に押し流されしていくが、視聴件数順の方は、それほどがしがし動かない。一番上が当然、今現在進行している都立小学校の正体不明武装グループによる占拠事件関係だ。

最新順の上の方に、『東京 未確認巨像作業ロボット、公務員官舎を破壊。テロの可能性?』というタイトルに気付く。

未確認巨像作業ロボット……。その言い方が一般に分かりやすくするために敢えてチョイスされたものだらうけれど、飛閃のようないわゆる巨像型のロボットで、武装はしていずに、土木などの現場で働く、道交法上、特殊作業車扱いになつているマイ=ロロのことだろう。

それを選ぶとよく知つた風景なのに、ビことなくよそ行きの印象になつた自分が住んでいる官舎が映つてゐる。そして、迫神の部屋辺りのところが完全につぶれてなくなつていて、もう動いていないマニ=コロが彫像のようになんでいた。ただ、あれが手にした巨大ツルハシの先が、見事に建物にめり込んでいる。

「これ……。このマニ=ロロの道具がつつ込まれてゐるところ、聞くまでもないと思うけどと思うけど、迫神君の部屋?」

画面を見た金城に聞かれ、迫神はやつとのことで頷く。あれじや

あ、もしあそこにいたらひとたまりもなかつた。ぞつと背中に冷や汗が伝う。

「あいあいがどれだけ強くても、棺桶にはいつてる状態なら無力。抵抗力のない女の身体を人質にとつて、武装巨像型特殊車両をドライブして、輸送船を蹴りおとした男の方は、ためらいもなく殺そつとした。卑怯者の典型つてやつ？ こんななんが、正義を謳うなんて、ちゃんとちゃらおかしいわよね」

金城が吐き捨てる様に言つた。

「でも、スマイリー野郎……あなどれないわね。迫神君のところのA-I、シンクロライドを監視していたのに、実際操作しようとするまで制御権を乗つ取られてたこと、感知できなかつたんでしょう、話を聞くと」

「そうなりますね」

「I-Iの、マニ=口口、どう見ても、誰か直接乗つてるんじやなくて、リモートコントロールされてたつて見え見えよね。あなたが、こいつからアバタードライブして、マニ=ア=口口を操作したことも知つてるつてことよね。そうじやなきや、武装してないとはい、マニ=口口一台、あんなふうに捨てるような思い切つたことはしなかつたはず。迫神君、よつぽど、警戒されたんだねえ。あなたの命、マニ=口口一台分だつて」

迫神は怖かつた。自分が殺されるところを、偶然生き延びたといふことも、その一つだけれど、なにより、あいあいの身体が、人の命を奪うことに何もためらいがない者の手の内にあるという事実が何よりも怖かつた。

初めて生身のあいあいに触れるのが、趣味の悪い隠語でいうところのそれではなく、ホンモノの棺桶になつちまつた走査器の中に横たわつてゐるあいあいだなんていふのは、自分が死ぬより我慢なら

ない。

「私が死んでも、そんなに保険は下りませんけどね。女房子供もないんで、葬式代が出ればいいからってぐらいしか掛けてないですから……」

「まあ、あいあい女房にする気なら、一億ぐらいは入っておいてやんなさいよ。高給取りの官舎住まいなんだから……そのくらい余裕あるでしょ」

「まだ付き合つてもらつてもないのに、結婚後の保険金額まで心配しなくても」

迫神がつい言つと、金城がもう一度迫神の後頭部を匕突いた。

「悲しい現実だけど、女には匂つづーもんがあるの。子供欲しかつたらある程度急がないと、産むのも育てるのも大変よ。私なんか子供4つで生んだからね。下手したら、ばあちゃんだよ、これじゃある兄弟なんてとんでもないし、成人まで死なないで稼いでられるかも微妙じやん。子供もまだチビだからママ、ママつて可愛いもんだけど、十年後に怒られない自信はないね」

迫神は自分の年を考える。確かに、学生のころとくらべて、年月を重ねただけ人間がマシになっている実感はない。けれど、少なくともあの頃より息が上がるのも早くなつたし、随分体力がへたつてきているのも間違いようがない。

時間はいつも、待つてくれない。今、レアあいあいを抱きしめるまで、時間が止まつていてくれたらどんなんに願つても、容赦なく時計の針は進んでいく。意識していくても、していなくて、時間は立ち止まりはしない。

外が騒がしくなる気配がした。

「S.I.Tの連中が着いたみたいだね。どうする？ 一いつで棺桶探す？ それとも、向こうでのこの出て来るスマイリー・ロジャーをどうにかする？」

「出て来る？」

疲労困憊で思考力が落ちてるのか、迫神は金城と同じ速度で考えが回らない。

「あいあい人質にとつて、ブツよこせって言つてるんだよ。結局は、じやあ、人質が生きてる時間が交渉期限じゃないか。多分、大甘の甘ちゃんで見積もつて、脳の後遺障害が残らないレベルのあいあいを保護できる時間切れが約七十一時間。まあできれば六十時間以内を目標にしたいけど。今までの経過をみれば、向こうがオマルの通信を監視できちゃつてるって最悪な状態なのは間違いないでしょ。

まあ、宇宙人は宇宙で万能なんだから、向こうに利があつて当然。警察通信まで奴らはまだ把握していないだろ？ し、S.A.Tを釘付けしておけば、安全だと思ってる。私も忘れてたぐらいだから、こっちにはS.I.Tもあるんだってこと、誘拐事件なら堂々と連中を使えるってこと、多分考えにないでしょ。こっちからも当然、誘拐犯を追いかける。でも、保志総司官のところには、輸送船の監視を停止するようにそのうち要求が行くでしょうね、間違いなく。……迫神君、頭働いてる？」

「……ええ……何とか」

迫神は緊張してて、せいでしゃつきり見えているに過ぎなかつたのだろう。どうやら自分が命を拾つたことを目の当たりにして、身体が疲労を思い出したらしい。金城は冷静に迫神を観察しつつ、話を続けた。

「迫神君ができる」とは、こっちであいの棺桶追いかける人たちを手伝うか、向こうで保志総司官に接触してくるはずのジョリー・

ロジャーとやらを直接トッ捕まるか、何もしないか、これだけよ「ちゃんとした組織に素人が混ざつても邪魔だと……前にあいあいに言わされましたから……。もう一度、どつかで棺桶探して、向こうに行きます」

「……そうね、その方がいいかもしれない。……あいあいがドタバタして消耗しないように言う必要があつたから言つちやつたけど、自分が人質に取られて、しかも何もできないつてのは、あの子の性分だと辛いだろうからね。向こうが手詰まりでも、迫神君が傍にいてやつてくれるだけで……いいかもしない」

「……あいあいを……絶対に見つけて……ください。頼みます」

やつとそれだけを口にした迫神の手から、金城は携帯を問答無用で取り上げた。通話がまだ切られていなことを画面で確認すると顔に当てた。

「電話の向こうの誰かさん、迫神君の友達？」

あ、あなたが俺の恩人の、ピンフの彼女？ 隨分渋い声だなあ……。まあピンフは幼女から老婆までだから驚かないけど……。不需要に明るい声。どつかで聞いたことがあるような気がするけれど、氣のせいだろう。

「だれだか知らないけど、あなたの恩人になんかなつた覚えないわよ

あなたといたからピンフが死ななかつたんじょ。ありがとう、ほんとにありがとうございます。俺、一生、感謝します。

緊張感もかけらもない。電話の向こうのこいつは、完全に迫神が無事だったことで何も事件が解決されたかどうかなどということや、今迫神がどういう状況なのかまで、全然考えが及んでいない。多分、間違いなく馬鹿なのだろう。でも、こいつは単純な人間は、神経質にいろいろ疑わなくて済むから有り難い。

どう見ても活動前に迫神は休憩が必要だ。

この一連の事件をしかけているジョリー・ロジャーとやらは、なりふり構っていない。保志総司官の憶測が正鶴を射ていたとしたら、そいつは一年以上も状況を観察して、ここが正念場だと一気に仕掛けってきたことになる。

一年待てる狡猾さ。たつた一人の戦力を削ぐために、学校占拠などというとんでもないことをやらかせるやつ。捨て駒として、マニア口で官舎を破壊するなどという行動に出ることができるやつ。テロップをみれば官舎での死者、重軽傷者は十一人。小学校の占拠事件さえなれば、一週間はぶち抜きでトップ見出しをはれるインパクトがある事件だ。

一つ一つのピースは、臆病にも見えるし、狂人にも思えるが、全体を見るとただの利己主義、目的のためにはどんな手段を取ることもまるでためらわない、方向性を間違った強い意志だけが見えて来る。

けれど……背水の陣を引いたつてことは、向こうは余裕がないということかもしれない。一年、資金源を干されるのはつらいだろう。ガタイが大きい組織ほど、ボディーブローよろしく、じわじわと利いてくるだらう。

そうすると、宇宙の辺境に生息しているコソ泥、ジョリー・ロジャーとやらが、昨日から始まる三日間で白黒がつくように勝負を仕掛けてきたのは、逆にいえば、ジョリー・ロジャーがどこの組織の

パシリなのかは不明なままだけれど、少なくともそいつを潰せるならば、それを使っているどこの資金源を、しばらく絶つことができるといふことだ。

「車運転できる人だつたら、迫神君を迎えてくれない。ちょっとエキサイトしすぎたみたいだから、休憩させないと使い物にならないんだけど、まだやる気十分で、ほつとくと休みそうにないのよ。あなた、五時間ほど彼に食事と水分と睡眠とらせるように監督できる?」

「分かりました、何だか知りませんが、五時間強制休憩させればいいんですね。今からすぐ営業車で迎えに行きます。場所のデータください。」

「了解、よろしく。つてわけで、いい? 迫神君、今の勢いでライドしても、向こうでも邪魔なだけだから、少し休みなさい。災害救助と同じと考へて。救助者がついでに遭難されるほど、回りにとつて迷惑なことはない。あなたは、今は休むのが最優先事項。いいね。寝すぎて活動できないなんてことないよう、あなたの友達に五時間きつちりで起こすようにちゃんと言つといったから、分かった? お友達……なんて言う人か聞かなかつたけど、電話の彼氏、営業車で迎えに行くとかいつてたから、エントランスに出て待つてればいいと思う。彼、サラリーマン?」

啓介の営業車といえば、おしゃれで格好がいいのがアイドルの義務だとかなんとかいつて転がしている、クラシック・スーパーカーのことだ。シリーズ最高台数を出荷したとはい、全世界で六百五十七台しか販売されなかつた25thアニバーサリーモデルの1989年型ランボルギニー・カウンタックだ。

そんな皿立つもんで迎えにくるな、馬鹿野郎。

言いたかったけれど、ヒートの捜査官や、お巡りさんみたいな警察官たちがじやどさせってきて、車種の注文をつけるために電話をするようなのんきな状態ではなくつてしまつた。

事情聴取には、金城が一人いれば十分だろ。捜査の邪魔にならないよう一足先に帰ると云ふと、金城も頷いた。

「迫神君……」

歩きだそうとして呼び止められ、迫神は振り返つた。金城がすぐこしゃべりださなかつたので、ちよつとだけ見つめあつ形になつた。

「何ですか？」

「ジヨリー・ロジャーはわちに任せせるしかないから……、あいあいはいひ任せて。最善を頼へますわ……」

「……はー。お願ひします」

本当は、金城は、いつおうかと迷つたのだ。六十時間経過しても、事態が何も動かなかつたら、意識があるついにあいあいを抱いてやれど。偽物の身体同士でも、まったく知ることがなく終わるより、あいあいにとつても、迫神にとつても悔いが残らないだらうから。でも、そんなことを云うのは、今から敗北を予言するようなものだ。代わりに金城は再び歩きだそうとして向きを変えた迫神の背中をじやしつけた。

「あいあいが、何かバタバタしようとしついたり、しゃべりを二

……レイプしておしまい。この際だ、私が許す」

迫神はこなそうになりながら、踏みとどまつていやそつと云つた。

「勘弁してください。そういうタイプじゃないんですから……」

「ふん、チキンな野郎だ。間違えるなよ。あいあいが暴走しない様

にするのも、あんたに任せたつてことだからな。どんどん動けなくなつてぶつ倒れることが確実なやつは戦力にはならん。捨て駒にすらなれないなら、邪魔をするなと伝えといてくれ。人間混乱すると基本を忘れがちになるからね」

口は悪いが、金城は金城の最大限のやりかたであいを心配しているのだろう。

* * *

車が動き出すとすぐに寝てしまったのだろう。迫神は豪華なベッドの中で目が覚めた。深い眠りだった気がする。けれど、何度もひどい夢を見た。

棺桶の中にあいが横たわっている。彼女はもつ息をしていない。起き抱いても、呼んでも、その瞼は開かれることがない。唇を無理に重ねて舌を絡めようとしても、冷たく強張った身体は、まるで自由にならない。

おどぎ話だと、真実の恋人のキスで、棺桶に入ってる女は起きるんじゃなかつたか？ それとも、ただ思つてるだけじゃダメなのかな？ どんな馬鹿野郎だろうと、真面目な男だろうと、そんなことは関係なしに、ただ王子様じゃないと魔法は使えないのか？

「よつ、目が覚めたか。ピンフ。丁度起にそうと思つてたところだ。四時間ぐらいだ。お前が寝てたのは。風呂ためといたから、入つてこい。里佳子に飯作らせるから」

寝ていたのは、啓介の億ションのゲストルームのベッドらしい。

自分で歩いた記憶がないので、啓介が駐車場からここまで運んでくれたのだろう。里佳子というのは、啓介の奥さんで、あいつにしては上出来すぎることに、ちゃんと常識をわきまえている、優しい美人だ。ガードががっちりした億ションを買ったのも、わけの分からないことを考えるやつが家族をターゲットにしないように、つまり里佳子を守るためにだろう。

「……すまない。手間掛けた……ありがとう」

「よせやい。ピンフに礼なんか言わると、縁起が悪い。世界が終わつちまうよ」

「お前になんかにだれが言つたか。里佳子さんにてえといてくれつて意味だ」

憎まれ口をたたいて、何とか身体を起こす。身体が強張っている。喉が渴いていて、腹が減っていると思った。飲まず食わずでいるしかないあいあいのことを考えると、風呂につかってのんびり食事をとるなどが後ろめたかつたが、救助者がついでに遭難するが最悪だとこつ金城は間違つていない。

「あつ……今何時だ？ 後藤さんたちに連絡取らないと」

「……ああ、それは大丈夫だ。お前が寝てる間に、金城さんつて人と何回か話しててね、ジョリー・ロジャーとやらを安心させるために、お前、行動不能つてことになつてゐるから……」

「……へ？」

「死亡者で発表しちまうと、さすがにお前の知り合いが葬式の準備に大騒ぎしちまうだらうから、官舎への何てつたつけマニマニ何とかつてやつ、あれの突つ込み事件、すごいニュースになつてゐるんだけど、その重傷者のリストに名前乗せて記者発表とかして。一応お前があのとき部屋にいれば、死んでも奇怪しくないから別に違和感はないだらう。死に損なつたのはスマイル何とかにしちゃ計算ミスだらうけど、少なくとも行動できなつてことは、油断さ

せる材料になりそだからだとさ。お前が行動可能な駒でいることを隠せたら、役に立つかもしれないって。それから、心配させちまう親・親戚・友人・ご近所さま等、思い当たる一同には、後でちゃんとオトシマエつけとけって伝言。……あの金城さんって、おばさんだけですげー頭いいのな。お前の女の趣味はぜつたに分かりそくもないけど

「ばか……金城さんは人妻だ」

「げ、お前まさか、やるにことかいてふーりん？」

「それを言うなら不倫だろうがっ」

啓介の顔目掛けて拳を繰り出すと、啓介の手が、いつもの様にピシリッと気持ちいい音をたててその拳を受け止めた。……反射神経だけは、とことんいい奴。

「それだけ元気がありや、風呂はいって飯食えば……こけないで乗れるな」

目が合つ。啓介は笑つていない。その瞳は問いかけている。大丈夫かと。まったく、これだから啓介には勝てないのだ。仕方なく笑うと、すつと啓介の瞳が微笑みを帯びた。

それから、酷く下品に……にやつとばかりに表情を崩した。

「なんてつたつけ、あいあいちゃん？ 職場の女の子に手を出すなんて、三十過ぎた独身男はなりふりかまつてないのね」

金城と啓介がどういう会話をしたのか、想像もしたくない。勝手知つたる啓介の家だ。風呂場など迷うこともない。

「風呂もひらう……」

「おう、そうしろ。いつも言つてるけど、うちにあるもんは、理利^{リリ}菜以外なら、何だつて好きにしていいんだからな……」

「里佳子さんは？」

啓介の殺氣とともにぶん回された蹴りをガツキリとブロッカしてやつた。

受けられて非常に悔しそうな啓介を見るといしは溜飲が下がる。
ざまあみる。

廊下へ至るドアがあいていて、女の子のかわいらしき顔が見えていた。理利菜だ。まだ寝間着を着ている。迫神と田が合ひつと、理利菜はバタバタと駆けだした。

「ママ～つ、またパパとピンちゃんが喧嘩します～」

台所キッチンの方で里佳子の優しい声がした。

「～」あいさつと一緒にだから、ほつときなさい。ああ、あぶないから近寄っちゃダメよ～」

「はあ～い。分かつてます」

俺たちは危険物扱いかと思つと心外だけれど、まあ、言いたい気持ちも分かる。消化にいいものとつことで気遣いをくれているのだろう。キッチンから漂つて来る匂いは、多分野菜スープだ。あいににも食べさせてあげたいと、迫神は思つのだった。

* * *

湯船につかり足りなかつたけれど、思い切つて短く切り上げて、迫神は用意されていた啓介の服を着るとキッチンに向かつた。啓介のパンツなど穿きたくもないけれど、下着なしよりはマシだ。野菜

スープという予測は大外れで、迫神を待っていたのは野菜たっぷりリゾットだった。おいしく食べながら、迫神は頭が再び回り始めるのが分かった。

時間の余裕は目減りしたが、自分の余裕は取り戻した。

「お前んとこの棺桶壊れたんだろ？ どこのチャーターして飛ぶんだ？ よかつたらここにどつかから棺桶運んでもらうか？ 僕もその方が心配ないし。他人に殺されるぐらいなら、お前だつて俺に止めをさせたいだろ？」

「やめてくれ、心残りが多すぎて幽霊になれたとしても、化けて出る先がお前だと思うとやる気も失せる……」

「ひでえ奴。あれ、すぐ注文して届けてもらえる様なものなのか？」

「……分からん。でも、総合司法厅の通信がどうやら盗まれてるみたいなんで、面倒だけど民間のシンクロライド・トラベル扱つてる旅行会社に駆け込んで、イットルビアに行こつかと思う。それなら監視ははずれるだろ？ どしちみち、今俺が動けると、ジョリー・ロジヤーが思つていらないなら、あいあいの棺桶確保したところで、監視が揺るんでもる可能性もあるけどな」

食べだすと、逆に止まらなかつた。リゾット何かじや物足りないと思つてたら、里佳子は、何も言わずにおにぎりの皿を置いてくれた。啓介と里佳子が付き合つていたころから勘定すると十年超過する付き合いだ。細身の割に迫神がよく食べることには里佳子にとつて常識だらう。

「でも、それだと、お前のあいあいちゃんのとこ行けないんじゃないのか？」

「だから、金城さんから何をどつ聞いたのか知らないけど、あいあいは、三分の一の同僚……」

言いかけたが、また啓介の瞳がキリリと絞られていくのが分かつて思い止まつた。啓介の瞳が嘘をつくなと言つている。に「う」と

きにひじまかすと、後が怖い。

「……彼女にはまだ好きだつて伝えてもいない」

「馬鹿か？ 好きなんだろ。お前本当にトロいんだよな。告白して振られたらどうしようなんて青いのが可愛いのは十代まで。三十面さげて何考えてんだか。そんなんだから里佳子だつて俺に取られたんだろうが。まあそれについちゃ、俺としても、お前が速攻得意じやなくてありがとうだけどな」

「自分でいうな……」

啓介がにせにや笑つている。本当に、遠慮なしにぶん殴れる数少ないサンドバッグじゃなかつたら、こんなやつ、とつぐに縁を切つてる。

「まあ、こんなことちやつちやと終わらせて、あいあいちゃんに告白でもなんでもして、万が一お前なんかでいいという悪趣味な女性だつたら連れてこいや。お前の彼女なら、俺の家族と一緒にだから。里佳子も理利菜も喜ぶだろう」

「やうだな、お前が生放送に出て、絶対に家にいな」ときにしそうしそうつ。「

そういういかけて、迫神は止まつた。迫神の脳内でその言葉が踊りだした。

「……家族……？」

迫神が呟いた。

「うん、家族……」

啓介が繰り返した。

「家族つて言つたよな」

「言いました。家族。絶対家族、死んでも家族、血縁なくても家族」

「つるさい、黙れ」

迫神はポケットに手を伸ばそうとして、携帯が入つてゐるはずが

ないのを思い出し、啓介を見た。

「携帯？ ならいい」

迫神は啓介の手からもぎ取る様に携帯を奪つと電話帳から田指すものを見つけ出し、コールした。

* * *

「はい、保志」

ちょうど美耶子が朝シャワーをしていたので、渋々と電話に出た穰太は、名乗りかけたのが終わらないうちに、電話の向こうから切羽詰まつた様な若い男の声が洩れて来るのに顔をしかめた。

保志先生のお宅ですか？ 美耶子先生と話をしたいのですが、
ご在宅でしょうか。

きつと風呂場は『宅』には入らないだろ？ 穰太はにべもなく言
い捨てる。

「居ません」

この切羽つまり方は、きつと美耶子に捨てられたのだ。捨てられたら素直に泣き寝入りをしておけばいいのだ。鬱陶しい奴。

じゃあ、あの、穰太さんでしょう？ 穰太さんは『在宅ですか？

「あのね、しゃべってるんだから『る』でしちゃうが。オイラに用なん
てないでしょ？」

ふつと向こうで小さく噴き出すのが分かつた。どうにいともりなんだか失礼なやつ。

「これから出掛けるんで、三分後から留守です」

すみません、今から大至急でお邪魔しますので、棺桶貸してください。

「棺桶貸してつて？ どういづ……」

すみません、用があるのは棺桶の方なんで、美耶子先生ご不在でも結構ですから。私が棺桶入つたら、お出かけになつて全然構いませんし、何かお出かけのご予定があるのでしたらタクシー代も持ちますから、お願ひします。もう少し出掛けないでいてください。

それだけ言い捨てられて、電話は一方的に切られた。どういうこつちやと思つ前に、多分パンツも穿いてないだらうバスローブ姿の美耶子が、髪から滴り落ちる滴をタオルで受け止めながら出てきた。

「穰太、朝っぱらから、電話だれ？」

「あなたのツバメから。居留守使つといたけど、なんか、押しかけて来るつてさ。あんたらね、夫不在の息子同居してゐる家で不倫なんて、ちょっとタガ外れまくつてんじゃないの？」

「はあ？」

美耶子には穰太の言つことが、まるでピンとこない。

「棺桶貸せつてす」い勢いだつたよ。母さんのことだから、どうせ遊んでポイつちやつたんだろ？ あの人、オヤジぶつ殺しにいくつもりじやないの？ あんなやつでも仕事場で殺されたら、遺族年金だけじゃなくて、労災もつくよね。うつき～」

何のこいつかやといつ顔で、美耶子はしづらへ考へていたが、取りあえず服を着て化粧でもしておこいつと、バスルームに戻つていつた。

「ろくちゃんの家からとは、考えたね、半六ちゃん。もし、向こうが見てても、保志さんの家から誰かがライドしたとしても、いつも家族訪問で、まさか半六ちゃんだとは思わないだろうしね」耳元でセレの声がする。

迫神は棺桶に横たわり、自分の今の状態全てが分析されていくのを待っていた。シンクロイドから下りるときは簡単だけれど、乗るのには時間がある程度かかる。「データを読み取るのにまず時間がかかり、それから膨大なデータを転送するのに掛かり、その後、可変筐体が変形する時間もかかるから、飛閃にアバタドライブするような手軽さはない。

「会話、盗聴されてたりしないの？」

「多分データを監視してるだけだと思つ。盗聴されてたら、ジョリー・ロジャーだつて、東京の官舎に半六ちゃんの身体があるつて思わないでしょ？　あいあいの方を見に行くつて大急ぎで帰つたんだから」

「……まあ、いい方に信じるしかないか……。あいあいは？」

「頑張つてるけど、ちょっと弱つてきてる。お茶一杯飲んでこなかつたのは、失敗だつたつてぶつぶついつて、たまにお腹すいたーつとか叫ぶぐらいの元気はあるよ」

「意識ははつきりしてるんだな」

「……お腹すいたつて言わなくなつたら……脱水が進んでるつてことだから……。まだ大丈夫かな……」

迫神は少しだけほつとする。同時にお腹がすいても、喉が渴いても、何もできないあいあいが不憫でならなかつた。代われるものなら代わりたいぐらいだ。

「そのオイラつていうの……穢太さんの口癖だつたんだな……」

「ふと思ひ立つて迫神が言づ。

「うん、なんかしょーもないアニメに出て来るキャラクターが使ってた一人称らしいんだ。そんな言葉づかいするなつて、ろくちゃんがガキのころの穢太さん叱つたらしくてね、それ以来、穢太さん、ろくちゃんの前でだけ、絶対に一人称オイラだよ」

親子の対立というにはくだらない。それも保志らしいと迫神はほほえましい。

「まつたく、穢太さんとろくちゃんは徹底的に合わないみたいだけど、だからつて家族だよ。美耶子先生が忙しくて、料理作りに来れないとき、ここにきて料理していくのは穢太さんだからね……」

「あ、…… そうなんだ」

「美耶子さんから頼まれたときに無視すると、お小遣い不払いの刑が待つてからつてだけで、オヤジさんに料理作りに来ないでしょ、普通の子は。あんただけど一種試験持ちだしね、まあ、よくできる方なんじやない？ トンビとトンビだからトンビの子。タカとタカの子はタカ。そんな感じかな。でも、穢太さんは死んでもろくちゃんに、こつちにライドしてきてるの知られたくないつていうから、それでオイラが穢太さんの帰つた後、アバタドライブするよくなつたわけ。穢太さんがふらふらしてるとこ見つかっても、『セレか』で済むじやん。ああそう、ろくちゃんにバラしたら、オイラ基盤に砂糖液突つ込まれるらしいから、絶対にこのことだまつててよね、

「半六ちゃん」

くくくと迫神は笑いたくなつた。同じ身体を使つている関係で、迫神はセレと直接会つたことがない。だから実際のセレというのが、どんなふうなTAIのか聞いたことがあつた。保志はセレのことを、「たまに料理をしながら、歌つて踊つてやがる。狂つたんじや

ないかつて思うだろ？ 第一、不気味だ、と言っていた記憶がある。多分そのときの歌つて踊れる召使は、セレではなく穰太さんだつたのだろう。

一風変わつてゐるけど、保志さんとこほはいい家族だ。自分も啓介や保志さんのところのように自分を大切に思つてくれる人を、大切にしていく当たり前の関係を、あいあいと作ることができるのだろうか。

棺桶から出ると、身体が浮かぶような感触があつた。

「あれ……」

全体的にいろいろなものが雑然として浮きまくつてゐる。

「ああ、ろくちゃんが、あいあいの身体に負担が少なくなる様につて重力弱くしたから。あんまりいろんなもの固定してなかつたから、後で片付け大変だけど、そんなんあいあいにやらせりやいいだつて。半六ちゃんも手伝つてやんなね」

「そうするよ……。あいあいはどう？」保志さんとこほ。

「つうん、なんか、普通に食べたり飲んだりしてゐるの見ると腹立つからつて、あいあいの部屋。ろくちゃんは、ジョリー・ロジャーが犯行预告をしてくるはずだから、それまで休むつて寝てる」

「……冷静な判断だな」

「まあ、食べてたつていつても、ろくちゃんが、あんなもん人間の食いもんじやないつて普段毛嫌いしてゐる、高カロリー・エネルギー補充ゼリーだけだね」

「……食べて飲んで眠つてつて、ちゃんとやらないと壊れちまつ。人間は不便だな」

「……でもいやいやしなくて済むよつこ、全部気持ちいいんだから、いこじやん

「違いない……」

素直に笑つた迫神に、セレの声が聞こえた。

「ね……半六ちゃん。やっぱあなたってどうか鈍いんだよね。何が、変だと思わないの？」

「何が……」

「オイワの趣……『』から聞こえてる？」

「……耳元……？」

「どうしてだと思つ？」

スキャナに入つてから、シンクロライドに移行するまでの間、珍しきずっとしゃべつていたから、耳元でセレの声が聞こえ続けることに、何の違和感もなかつたのだが、よく考えるとおかしい。棺桶から出た直後から、壁に埋めてあるスピーカーから聞こえる遠い声としゃべることになるはずだ。

立ち止まつて考えようとするのだが、足は勝手に進む。低重力とはいえ、奇怪しい。考えようとするのだが、セレがつむかへて考えられない。

「ねえ……半六ちゃん。あいあいの」と……好き？」

ぶつと迫神は噴き出しぬけになつた。どうしてどこにもこつも、あいあいが死ぬかもしれない、ジヨンニー・ロジャーが動いてくれないと何もできないだらつて、この状態で、そんなことばっかり気にするんだ。

そんのは、あいあいをちゃんと取り戻してからゆくつやればいいじゃないか。

「それがどうした？」

「まあむ、その、最初つから勃つてるぐらいだから、キライじゃないとは思うんだけど、ろくちゃんは、そんなの男の生理で好き嫌いとは関係ないって言つた」

最初から勃つてたといつその表現に、文句はあるが否定はできない。セレは自分の身体の状態は全部把握している。どうなっているかを全部。

「だから何だ?」

腹が立つ。指摘されて嬉しいことではこれっぽつちもない。あのときのあれは、男の生理で、好き嫌いとは全然関係ない。

「一応不注意の上に行行為を強制するのは、犯罪だらうからさ

「……セレ、どういう意味だ?」

「半六ちゃんの転送、実は完了してないんだよねえ……」

「はあ?」

転送が完了していないといつことせ、普通に考えたら、動けないといつことじやないのか? 迫神は思い切り混乱した。大体、だつたらなんで蓋が開くんだ? 普通に有り得ないと思う。

「で、何の機能を排除したかつづつと、運動機能なんだけどね……」

「今、歩いてるが

「半六ちゃんの思い通りに?」

「じやないのか?」

「まあ、それもあると思つけど……。今半六ちゃんの身体をコントロールしてるの、実はオイラなんだ。『メンネ。飛門ドライブのときの逆バージョン?』

立ち止まりつとしだが、なぜか歩くのが止まらない。

「どうこつ意味だ、ひが、セレちゃんと説明しり

* * *

遙か彼方の地球、東京にある保志邸では、シンクロライド・システムの実行監視装置のいわゆる黄色ゲージ……すなわち、受信監視装置のシンクロイド率を示すゲージが、いつまでも振り切れないまま止まっていた。それに気付いた穰太が仕切りに首を傾げていた。向こうの棺桶はオープンになっていることはモニターで分かる。ということは、転送は完全になされたことになる。棺桶の中からぶつくさしゃべるのが聞こえて来るのは、多分、寝言に違いない。普通向こうに完全シンクロすれば、こっちの身体が動くことはない。なぜなら、行動しようという意志が送り出す信号は、ぜんぶあっちに転送されてしまうからだ。

何か中で「そごそご」そやつているような気もするが、うん、……単にモニター表示が流れているだけなんだろう。まあ、最悪、本体の不調だったとしても、乗ってるのが自分と美耶子でなければ、問題はない。でも、本格的な不具合ならいやだと思う。こんなのは危なつかしくて使うのは気が進まない。

「あとで、オマルに電話して、メンテの人にもうもらわなきゃな……」

……

ぶつぶつとひとり言をいつて、そのままサンダルを突っかけて出掛けていこうとした。と、玄関を出るなり、家の前に「つついカツコいことだけは確かに 古くさいのだか未來くさいのかよく分からぬ 真っ赤な車が止まっているのが見えた。少し驚いた。しかも、乗っているサングラスの男は……。

リッパー・ケースケ？ うちの前に？ ……ははは、まさかね。

* * *

「ちょっと待て、『じつこと』だ……」

あいあいの棺桶部屋にまっすぐ至ると、自分はドアを開ける。開けたいのは自分じゃない。まあ、あいあいに会いたかったし、ここに直行するつもりでもいた。何も不思議も問題もない。……けど、俺は今は立ち止まって、セレとちゃんと話したい。

「……迫神……さん。お帰りなさい……」

あいあいの顔色はますます悪い。迫神ははっと胸をつかれるようだつた。あいあいに向かつて歩くのはこれは自分の意志だらつか。それともセレの意志？

「セレ……やつてくれた？」

「あいあいの『注文』じゃ、オイラ断れない」

自分の口からセレの声が出る。なんじやこりや。

「ちょっと待て、あいあい、セレ、何を企んでる？」

今度は自分の声で言葉が出てほつとした。

「じめん、怒るならわたしに怒つて。……あのね、迫神さん。……わつき、私のことずっと好きだったって言ってくれたでしょ？」

あいあいがちょっと微笑んだ。ああ、可愛いなと心から思つ。迫神は頷く。これは、多分セレじゃない。

「何もしなくても可愛いって……。いつたよね。これ言質とつたつてつもりじゃないんだけど、声小さかったから、単に確認」「言つたよ。それがどうした？ いつからか知らないけど、惹かれてたみたいだ。ずっと気になつてた。俺みたいな冴えない男じゃ、

君みたいな若い子の眼中にはないだろうと思つてたから、好きだと
いうことをちゃんと気が付く前に、諦めてたみたいだ。こういう間
抜けだけど……ちゃんと気が付いた。だからもう迷わないし、わり
とこれでいて、しつこい方だと思つ。あいあいが振り向いてくれる
まで結構つきまとつかもしれないよ……。鬱陶しいと思つけど諦め
て……うわっ

あいあいが飛んだ。低重力だから、軽く蹴るだけで済むんだろう
けど、かつとんできた亜衣里にいきなり抱きつかれて、彼女の重量
が重量ゆえにがつつりと受け止めるほどの甲斐性はない。迫神は彼
女を抱きかかえる姿勢になつて、そのまま一人で飛んだ。

「……抱いて」

「はあ？」

耳元でささやかれて、迫神は間抜けた声をだした。
「体力消耗するようなことは、一切禁止だろ？ が。金城さんにも言
われたはずだ」

「……それなのよ。頑張つて、頑張つて、頑張つて何もしないで七
十一時間かかって死ぬのつて、私の趣味じゃないのよねえ。普段か
ら、死ぬときは一気つて決めてるの。昨日のは下手を打っちゃつて、
じわじわ死んで、マジにしんどかつた……」

「あいあい、金城さんを信じて。絶対に君を見つけてくれる」

「……死んでから見つかる確率だつて、今のところどう考へても五
割越えると思うのよ。私は……。くやしいけど、いつも同じことに関
しては楽観主義になれないの」

「……というと？」

「脱水症状が進んで、意識混濁したらオシマイでしょ」

当たり前だが、人の生死を間近でみるような仕事をしているだけ
あって、あいあいには楽観など紛れ込むことはなさそうだ。

それでも迫神は言い募つた。

「……信じる。俺を信じろなんて言えないけど、金城さんのことは信用できるんだろう？ それに、信じることで強く信じることで、願いといつのはまつと力になる」

いかにもケツという勢いで、亜衣里は鼻先で囁いて飛ばした。

「わたしはずっと信じたけど……小さくも可愛くもなれなかつたわ」

「……大きくて豪華なのもいいじゃないか。可愛いのは主観であつて、絶対尺度があるもんじゃないし……。少なくとも、俺はあいあいの口づけで、迫神の「タクは塞がれた」

自分の手が勝手に亜衣里をまさぐる。そのなんともいえない手触りについ陶酔しちゃうになる。が、そんな場合ではない。

「やめろ……セレ、勝手なことをするな」

「……セレ、止めたら穰太さんみたいに砂糖液なんて生ぬること言つてないで、意識なくなる前に本体にグレネードランチャーぶち込むわよ」

「アイサー、あいあい。優しくするから、不満があつたらちゃんと言つてね」

「大丈夫、初心者だから、上手いも下手も区別付かないから」

セレが……というか自分が、女の喉に舌を這わせ、手が服の隙間から滑り込んでやわらかい塊を揉みしだく。

亜衣里が小さく声をあげるのが耳を直撃してくる。真面目に脳味噌が沸騰しそうだ。

「やめろ……俺は……ちゃんと、俺の意志で……生身のあいを

「……」

「あのね、迫神さん……。私、意識があるうちにちゃんとあなたを知つておきたい。金城さんたちとか、S.I.T.の人たちが私を助けて

くれて、生き延びたら、ちやんとやり直せばいいだろうけど……。黙りだつたら、こんなところでプラトニックなんて洒落込んだの後悔すると思うわけよ、私。パパ・ママキスしか知らないで死ぬなんて、十代の女の子ならそれも儂げでいいかもしないけど、私の柄じゃないわ。まあ、どうでもいいのとするのは、ここまで折角持つてのもんだもん、御免被るけど、たまたま好きだつていてくれる、人がいるんだもん。女の経験ぐらいしてみたい……つて、人情だと思うわけ。だいたい、三十間近かの女のバージンなんて、有り難くもないだらうけど、うまくこの場をしのげたら、結果として二度も楽しめるんだからいいじゃない」「…………え？」

何を聞いたのか迫神は一瞬把握できなかつた。バージンつてまさか。こんなに可愛いのに？

自分の手がその間も大胆に、けれど乱暴のかけらもない優しさで動く。高ぶつているのに、身体が熱いのに、急ぐこともなく、身勝手でもなく、皮膚と皮膚で会話をするように、彼女の反応を確かめながらすべての肌をなぞるようにたどつていいく。

「…………いや……」

亜衣里への入り口に指先がふれる。亜衣里の口からもれた言葉にセレの声がする。

「本当に？」

表情筋が微笑んでいるのが分かる。目を閉じて、首を振つて、亜衣里は自分の裸の胸に顔を押しつけて来た。

「…………やめないで。お願ひ」

やばいぐらいに……可愛い。

「…………アイサー…………あいあい…………」

指が深く女に刺さると、肉の襞が締めつけて来るのがわかつた。

「力…………ぬいて。怖くないから」

腕の中できつて目を閉じた亜衣里が「ぐんと頷いた。ぐも。

セレ……お前、そのセリフ……せめて俺の声で出してくれ……。

「おい……セレ……お前、やけに……つまらないか？」

時間をかけて女の身体をほぐし、開かせる。迫神の身体の下で、女の肌が上気し薄桃色に色づく。凄絶なまでに色っぽく声をもらして、狂いそうになる声を押しとどめるよつにもだえる。どんなに触っていても、もつと触れたいといつも気持ちをとどめることができない。

自分だつたらどんなふうにしただろ？ふと、どにかにいる冷静な自分が他人事のように考へる。自分勝手に、暴走して、何も考えず身勝手に突き進み、ひたすら押し込むことしかできないかもしない。セレのやり方は……悔しいが練れている。亜衣里の息が上がる。迫神は胸を噛まれた。痛い。でも痛いのがなんとも癖になりそうだ。

止めたせるために押さえつけて唇を口づけでふさいだ。熱い。考える力が全部とろけてしまう。ただどこまでもいくことしか思い浮かばない。きっと一人でやつていたらとつぐに一回戦終了してゐるに違ひない。じいつはなんで、こう粘つこいといつか、何といつか。そう、初々しさが足りない。自分もセレに翻弄されてゐるようだ。

苦しそうに眉をしかめ、目をきつと閉じて唇をかみしめて耐えていた亜衣里を開き、中に男を沈める。自分かセレかどちらか分からぬ男が、締めつけられることで高まる快感に責められていた。もつと奥を求めて動くと、亜衣里が小さく喘いだ。

耳元もとで……、もしかしたら鼓膜付近に直接なのか冷めた声が

する。

「……まあ、情報元が……あれだし
げ……まさか、保志^{ヒサシ}夫妻？」

亜衣里の中で激しく動いている自分がいた。全身の熱が背筋に集まって、一点に絞られていくのがわかる。

「あいあい、そろそろ……いきたい？」

首に縋り付く様につかまって、何かに耐えていた亜衣里が、二つくりと頷くのが分かつた。

「セレ、てめえ、砂糖液ぶっかけてやる。なんで一々亜衣里に聞くんだ？」

「だつて、オイラの方は……気持ちいいっての、分かんないんで……加減がちょっと分つかんないんだよね。でも、一々聞いたら興ざめなのかな、半六ちゃん」

今……聞くな、今……。

苦しそうな息だけがもれる。あつけらかんと、セレが言った。

「いいなあ、気持ちいいって、楽しそう。……まったく、人間つてズルいんだよなあ」

そういう問題じゃない……たのむ、セレ、いかせてくれ。

迫神は言いたかったが、亜衣里に聞かれるのは何だか気が引ける。

激しく女を穿つていながら、手はずつと柔らかな動きを止めない。それからセレが亜衣里の耳たぶをしゃぶりながら、ととやきをねじ込んだ。

「あいあい。可愛いよ……」

迫神はよつやくひと言紛れ込ませる」とができた。

「……そのへり、俺に言わせり……」

とたん、ふと畳衣里が小さく顎を出した。

「やつぱり嫌だ、この音声多重……。ね……このタイミングで……聞くのも変だけと思つけど……私どっちに抱かれてる……の？」

「オイラ……快感の感受性つてないから……やつぱり、半六ちゃんじゃないの？ もう、すこしよ彼氏。行きたくてたまらない……みたい。ホントなら、もつもつてなこと思つなあ」

「セレ……てめえ……ぶちこるす」

「残念でした。命がないものは死にません……、そろそろ半六ちゃんいかせてあげていー？ あいあい。もうちょっとイジワルしてもいいけど。決めるのはそつち……」

「いい……もうだめ」

男の快感は非常にシンプルにできている。その頂点は紛れもなく一つの行為で極まる。頂上はここら辺なのではなく、飽くまで一点だ。いったのか、いかされたのかそんなのはこの際どうでもいい。間違いなく快感の絶頂を感じて 直後、力なく畳衣里の上に崩れ落ちた。激しく息をしながら この重力なら重くはないだらう畳衣里の体温を感じる。信じられないほど気持ち良かつた。

一方で、残念なことに一気に冷める。あっちの棺桶の中で自分の生身がどうなつているのか、考えるのも嫌だった。ことが叶づいてあることはタイムロミットで 身体に帰ったとき……考えたくない。

「お前ら……絶対レイプだからな……これ」

やつと声を絞り出す。

じぱりと畠を閉じて迫神の体温を感じながら余韻に浸っていた畠

衣里が、ぱちりと目を開けてしばらく見つめ、それからたまらない
といつよつにくくすくと笑つた。

「……ね、これって噂に聞くヨツテ……やつ?」

「……あいあい。頼む、怖いこと言わないでくれ」

亜衣里は迫神の頭を抱きしめた。

「ね……迫神……わん……絶対に助けてね。あーあ、失敗だつた
かな、こんなん、却つてあと引いちやう。私、生身の迫神さん食べ
ないで死んだら、ますます思いつきり迷つちやつて成仏できなさそ
う……。絶対未練残りすぎて化けて出ると思う……」

迫神は自分の意志で深く亜衣里の唇をすつた……のだと思つ。ど
うにも、どこまでが自分で、どこからがセレなのか分からぬ。
「俺は幽霊はキライなんだ……。刺身でもフルーツでも、生が好き
なんだ」

もう一度くすつと笑つてから、亜衣里は目を閉じた。彼女の腕が
確かめるように迫神の背中をたどる。

「じめん……乱暴して。でも後悔してない」

亜衣里が愛おしかつた。知る前とは好きの色が変化するのを感じ
ていた。

「……死にたくない」

小さくふるえて、亜衣里は迫神の背中に爪を立てた。

完全にシンク口するには、もう一度棺桶入りしろといつて、少しの時間を棺桶に入った。出て来ると、迫神のこのくの出入り口は、保志の執務室にある。

「保志さん……」

「……お帰り」

保志のスカした顔は、絶対に、セレとあいあいのやつたことを知っている。その通りかもしだいが、そこまでお膳立てしないと、女一人抱かずには終わってしまうと思われているらしいところが情けない。まあ、照れ臭いが、知らぬふりをしてくれているのなら別に自分から言つ必要はない。自分で少しほは学生するのだ。

「ジヨリー・ロジャーからコンタクトありますか？」

「……ねえ。まずいな。あいつらが交渉していくと思い込んでたが……もしかして、交渉しきものはするつもりがなくて、条件提示はあれつこつきりにするつもりかもしだいな」

「……とこ'うと?」

正面モニターには、例のどうみても髑髏ではなくて、スマイルマークに見える、口紅で書かれていたメッセージが映っている。

「手を出すな……だけだ。で、俺たちがちょっとかいをかけたら、別に態々向こうは手をかけるまでもない。どつか見つからないところにあれを放置しとくだけでいい。亜衣里の棺桶は、そのままホンモノの棺桶にドロン」

「……金城さんからは、何か連絡入りますか?」

「ああ、誘拐つづるのはな……、金城女史によると……だ」

保志は椅子を座面“”と回転させて、迫神を睨み付ける様な瞳でひたと射抜いた。

「犯人に何か交渉してくる意志があるときだけ……、どうにかできる場合があるって程度の犯行らしい。日本の場合、容疑者の検挙率は高いけど……被害者の死亡率もついでに高いらしい。もしかして、交渉下手な国民性だから……ヤケになりやすいのかな……」

「まあ、拉致監禁とか自体が目的だと……辛いでしょうね」

「一応、アレでかいからな、運び出されるところは目撃者がいたみたいだ」

「……どうやって?」

「普通に梱包して、台車に立てかけて””やつてたらしい。エントランスでそれ違ってる人がいたらしくて、大きな荷物だなって思つたそうだ。知らない顔だつたので挨拶とか別にしなかつたらしけど、普通の軽トラにつんでつたんで、「大変そうだな」つて思つただけだそうだ」

「それだけなんですか、あんなテカイもんなのに」

「まあ、梱包されてたら、家具と棺桶は区別付かないのかもな。よく考えりや、丁度食器棚とかソファぐらいの“テカさだらつ”……?」

迫神が腕を組む。

「鍵は?」

「あいあいのところは電子キーだ。その手のプロなら破れるんじやないのか?」

迫神が苦い顔になつた。

「とにかく、向こうから接触がないと、多分追えないと言つてた。下手したら局面が動かないまま、なし崩し的に終わつてしまつかも……だとさ。現場の人の勘は当たるから怖いんだよな……」

「まだ……待ちですか?」

迫神が聞く。

「それ以外にどうできるか？」

保志も聞く。

二人の男たちは難しい顔でお互いの顔を見つめ合つた。

「半六、お前シンクロライドで遭難死以外に殺されたことあつたつ
け？」

「……え？ いや、まだですけど」

「おそろいにしないか？」

保志がニヤッと笑つた。迫神は背中の毛がゾクッと泡立つ氣がし
た。

「おそろいって……どつかで死んでこいつて、そういうことですか
？」

「ああ、お前トロイの木馬って知つてるか？」

「トロイの木馬……。コンピュータウィルスの？」

「馬鹿、そつちじやなくして、その名前のもともとの由来になつたギ
リシャ神話の方」

迫神はちょっとだけ考える。確かに、でつかい木馬を作つて兵士だ
かなんだかを潜ませて、敵自身に城内に運んでもらつて、あとはキ
タナイ不意打ちという……話だったか？

* * *

トロイの木馬についての覚書

知らない人間も多いかもしれないのに、一応説明すると、トロイア戦争というのは、当時の大國であるギリシャと、アッテカ方言でトロイア、イオリア方言でイーリアスとよばれた一都市の戦争である。

このストーリーのキモは、神託によつて最初からギリシャの勝利が予言されていたということ。そして神託には「この二つの条件が整つたとき」という条件が三つ付加されていたこと。

どつちかというと腕つぱし命のギリシャ神話の英雄たちの中でも、知力に長けてていると言われるオデュッセウスという有名な御仁が、このトロイの木馬作戦を提案したことになっている。

端的に説明すれば、木馬を作つて中に兵士を潜ませておいて、守りが堅い敵（イーリオス市）の城壁の中へ入れてもらつて、戦勝祝いで酔つぱらうのを待つて虐殺しちまつぜー、という古代にしろ異様にギリシャとオデュッセウスには、この都合主義満載の仕掛けがなぜか上手くいったという不思議な展開の物語ですな。

まあその中に敵に勝利を確信させるために、自ら志願して、命懸けのミスリード作戦に携わったシノーンという男の存在があつたとしてもですよ。普通どう考えたつて、今まで闘つてた敵が消えて、でっかい木馬が湧いて出てたら、警戒すると思ひます。……よね？ どう考えたつて、それ怪しいだらつ。

あいあいなら、その場で火をつけて燃やすと思つただけど。

* * *

「それがどうかしたんですか？」

「つまり、お前がさ……、イットリウム輸送船のコンテナに潜むかなんかして、やってきたジョリー・ロジャー自身に盗んでいただきて、あいあいのところまで運んでもらうの……」

「……それ、本気で言つてます?」

迫神が呆れた。

「まず、やつらのやつよつは抜き荷です。全部のコンテナに潜むなんてできません」

「やつだけど、奴らは今回はちょっと業突張りにたくさん欲しがると思つんだ。奴らが輸送船を開けたとき、コンテナがちつとしかなかつたら……根こそぎにしていかない?」

「普通は、輸送船の中がガラガラだったら、コンテナの中身を怪しむと思いますけど?」

保志がぽりぽりと頭を搔いた。

「それに……あいあいがいるところに輸送される可能性はゼロより低いと思つますけどね」

「……でも、ジョリー・ロジャー本人だか、その仲間のところまでいけたら、迫神君なら直接そいつら締め上げて、あいあいのところまで案内させるぐらい、できない?」

「……ご都合主義が全部主人公に味方するのは、昔話かおどき話しかないんですよ」

保志が首を捻る。

「そりやか？ 物語なんて、そんなのばつかじやないかな。大体、幸せを堪能できる種類の人間つて、人生そのものが『都合主義』だし……」

「何ですかそれ」

保志はちょっとだけ照れるようなそぶりを見せてから言った。

「お前、三分の一なんかに参加したとき、もう一人の物好きとできちゃうと思つてた？」

どういう直截表現なんだと、迫神は呆れる。

「こんなときだから白状するけど、俺はジョリー・ロジャーをトツ捕まえるのに時間が欲しかった。五年か十年の延長を勝ち取ればそれでいい。だから、お前ら一人じやなくともよかつた。もうちょっと無能で、役立たずで、床磨きしかできないやつだとしても、俺は感謝したと思う。俺にとっては、よりによつてお前とあいあいが来てくれたこと自体が十分に、『都合主義展開』なんだ」

迫神は自分たちも自分たちの都合だけでこの三分の一に関わることを受け入れたのだけれど、保志は四十五の若すぎる定年を拒否するためだけに三分の一を受け入れたのか。とすると、自己中心野郎は自分だけじゃなくて、保志も結局自分の都合だけでこの道を選択したのだということになる。

三分の一なんて、結局、三人が自分だけの都合で、勝手に自分が主人公の人生を続けてただけなんじゃないか。

「私も白状すると……宇宙にタダで来てみたかった……だけなんですかけど」

あいあいの声が聞こえて、迫神は振り返った。

「白雪姫よろしく、棺桶の中に入つてゐる見知らぬ女を、若くて綺麗で腐る前だからつて、マウスツーマウスのキスができるようなヘンタイ野郎なのに、王子様だつてだけで好きになる人生に憧れてたはずなのに……」

「あいあい、それ……おどき話の解釈として変じやない？」

「だつて……迫神さん、保志総司官。普通の男の人つて、美人で抵抗しないからつて、初対面の人の棺桶暴いてキスしますか？」

迫神が首をふる。

「俺は無理かな……」

保志が頷く。

「しない……」

につこりとあいあいが笑つた。

「でしょ。だけど、白雪姫は幸せになるみたいだし……。でもね、グリム童話のオリジナル王子様、キスはしないんです」

なんかこんな悠長な会話をしている場合じやないと思いつつ、迫神はあいあいの話の先がしりたかつた。

「もつとすごいんですよ。『死体でもいいからください』つて小人

さんに棺桶ごともらつちゃうんです」

「……そいつ、絶対悪いことするつもりだつたな」

保志が腕組みをして何度も頷いた。

「屍姦つて2004年にアーノルド・シュワルツネッガー知事が禁止したのが、法に載つてきたそもそもその事始めだつたかな」

「そうそう。日本じや罪じやないですけどね。大体火葬にするところじや、あんまりないんです。でも、どう考へても肉体がそこにあらからつて、やつちやう感性つて分かんないけどな」

一人の法曹のマニアックな会話に、亜衣里は笑いだした。

「それでです。死体相手にやるのって、相手絶対抵抗しないじゃないですか。その王子様、死体でいいから欲しがるところなんか、絶対に確信犯なんですよ。「死体でも」じゃなくて、「死体が」いいんです。あの人。絶対にママが怖いタイプですよ」

「……あいあい、お前そこまで冷静に馬鹿にして、それであの部屋作り上げるわけ？」

迫神に「お前」扱いされて、あいあいはちょっとだけ引っ掛けた。男ってこれだ。一回やつただけ、しかもレイプされた側の癖して、もう、女が自分のものだつて勘違いしている。

「だけど、運んでるときに、家来がけつづまづいて、棺桶落つことして、喉に詰まつてたりんごがぽろり。彼女生き返っちゃうんですね。王子様誤算ですよ。だけど、欲しい言つてしまつた手前、仕方ないから結婚したと。昔の貴族つて、別に奥さん一人じゃないですからね。死んでる方がよかつたけど、生きててもまあ、仕方ないかつて」

「何だよそれ。全然潤いない話だな。どういう教訓だ？」

保志が言つて、亞衣里はいたずらっぽく続けた。

「昔話には教訓なんかないんです。あるのは、しつちやかめつちやかでいいかげんな話。だけど出て来る人間みんな自分に素直なんです。だから、魅力的なんですよねえ」

「どこが？」

「自分より綺麗なのが気に入らなきや、実の娘だつて殺そうとする。お金もらつて殺人を引き受けながら、殺したくないからつて動物の肝を出して知らん顔を決めこむ。白雪姫つてすごく懲りない馬鹿で、どんなに小人に諫められてもすぐ簡単に罠にはまっちゃうし、白雪姫は、自分の結婚式で自分を殺そうとした実のママに、焼けた鉄の靴を履かせて死ぬまで踊らせる……最低なんだけど、やりたい放題してるの」

「お前そんな殺伐とした楽しみ方してたわけ？　お姫様が好きな女の子だつたんでしょう？　金城さんによると……」

「お姫様」「今は今も好きよ」

「亞衣里の顔色が悪い。迫神がふれると熱っぽい。

「……あいあい、頭痛いとか、そういうのは？」

「ちょっとだけ……。まだ大丈夫、……だと思つ」

保志は少しだけ安心して、先を急いだ。

「で、この話の流れで、あいあいは何が言いたいんだ？」

「私も自分の『都合主義の人生生きてるんです。それで、私としては、金城さんに起こされるのはそろそろ飽きてるので、迫神さんに……起こしにきてもらいたいなあつて。ほら、白雪姫の『ディズニー・バージョンです。王子様と白雪姫はかつて出会つてたつていう、ストーリーを挟んで、知らない女の死体にいきなり欲情するつていう無茶なストーリーに修正かけようとした、あれのやつ。私は王子様を知つてゐるし、丁度棺桶に入つてゐるし、キッスで目覚めない理由はないでしょ」

迫神はその無茶な理論に立ちくらみがしそうだつた。もしかして、啓介とタメをはる馬鹿なんぢゃないか……あいあいつてのは。だったら、まづい、自分は絶対に勝てない。

「王子様じやないし、王子」「もできないんだけどなあ……。残念ながら趣味の問題で」

「そこは、妄想でカバーしますから、『心配なく。で、保志総司官は、トロイの木馬のオデュッセイアになつて、歴戦の勇者を『コンテナに閉じ込めてジョリー・ロジャーを逮捕するつて、そういう絵空事の主人公に、迫神さんをキャスティングしたいんでしよう？』

「別に、迫神にこだわらなくてもいいんだけど、結局この二人の中では半六の役所だと思うんだけど。もつこまできたら、それしかないかなって思つたりね……。まあ、何もしないより、ましかなつて……その程度なんだけど」

「だから、保志さん、あいあい、じつは勇者じやないし……」

あいあいも、結局、破れかぶれの「かハカ、リスクばかりの保志作戦を支持してるとこことかと思つと、迫神は頭が痛くなつた。

「迫神さんは……なんで三分の一に応募したんですか?」

亜衣里がいきなり話題を変えた。ここにもう一つのおどき話を仕込めたから、完璧なのだろう。

「日常の隙間に非日常が挟まるのが……凄く好きだから。普通の生活をしながら、変なこともしてみたかった。息抜きつていつか……何といふか……。面白みがない答えで」めん……

とたん、保志と亜衣里が爆笑した。

「おもしれーつ。非日常が挟まるのが好きつて、まさにロロイの木馬に入るに相応しい」

「迫神さん、そのとんでもない理由、宇宙に行つてみたかったってだけの私より随分いっぢやつてますつ」

一人に笑われて……迫神は逆に途方にくれる。

「木馬……木馬……、世界は『都合主義』で回つている」

「王子様……王子様、最高のキャラはもちろんお姫様」

ところどころは……勢いと、勢いと、勢いだけに押されて、イットリウム輸送船のコンテナの中で、計画どおり盗まれて、ジョリー・

ロジャーをひとついて、あいあい姫の棺桶までたどついて……、そんなんうまくいくのか？

「まあ、ほら、迫神さん、シンクロライドで行くんだから、死んでも痛いだけだし。迫神さんだけ殺された経験ないっていうの……ズルいし」

「……あいあい。あのね……」

保志も言つ。

「一応金城さんの方も、宇宙人は桜田門を舐めるな宣言してたから、逮捕するまで追及やめないだろうし……」

亜衣里が付け足した。

「時間切れになつたとしても……多分、絶対に諦めないで探していくれると思う。それだけは分かる。だから、私も……迫神さんに探してもらいたい……かな。ダメ？」

「トロイの王子女様……拝命しました」

仕方なく、相変わらず慣れない敬礼を迫神はした。

「血口中心野郎の三分の一ずつだけど……ハッピーホンダ……いくると思つ？」

迫神の了承を勝ち取つた後で、今更ながら、亜衣里が保志に向かつて聞いた。

「まあ、取りあえず、できることをやってみよつか。セレ……聞いてるだろ？ 歌と踊りの後は、演技だとわ……」

「マンライクを演じているオイラには、そんなん目新しいことじやないけど、それよりオイラが入ると全部足して一と三分の一になっちゃわない？ オイラ入れて要素を複雑にするより、シンプルな方

がマシなんじゃない?」

保志が重々しく言った。

「何を今更……。どうせ人生なんてもんは、常に複雑怪奇だ……」

* * *

迫神は亜衣里のリクエストにより、彼女の身体をしっかりと抱き上げて静かに廊下を歩いていた。

「……これ、癖になる。」

「ううの、憧れてたのよね……」
楽しそうにクスクスと笑っている。認めたくはないが、亜衣里の消耗は目に見えてきている。心配をかけまいとして、明るくふるまつているのがいじらしい。迫神はかける言葉がうまく見繕えない。

「これ……東京でも……できる?」

亜衣里の方が話題を見つけた。

「……自信はないけど……鍛えればなんとか……」
「……じゃ、約束して」

亜衣里はそのまま迫神の胸に顔を押しつけた。

「」の物語の最終シーンは、絶対に結婚式で……S A Tの連中が見てる前で、三歩は歩くこと。プラスドレスの重量だけ……絶対だからね

「ま……何とかなつたら……な」

「なんとか……して」

「がんばります」

亜衣里の棺桶部屋まで辿り着く。

「ね……迫神さん。シノクロレーショントロット」

「何の……」

「金城チームより先に、私の棺桶見つけて、もうひとキスで起こすつてアレの」

「……分かった」

もう、ここまできたら、能天気に信じきって、できることをできることぎりやることで、幸運を驚掴みにして無理に逮捕する以外、ハッピーエンドに至る道はありそうもない。

迫神は両手が塞がっていたので、足で蹴飛ばして、シンクロナイザ・レシーバーのスイッチを押して蓋を開けると、そこに亜衣里を静かに下ろした。

「……信じてる……からね」

亜衣里は、迫神の頭をがっしりと押さえると、その脣に、何かを奪つようなくついて食いついた。

「無味無臭……。でも……悪くない」

長い口づけのあと、亜衣里はぼつそりと呟いた。迫神は仕方なしに呟いた。

「生身な俺も楽しみにしてくれ」

亜衣里は横たわって目を閉じた。

「物語のエンドは、めでたし、めでたし……よね

「まあ、がんばります……」

今度は迫神の方が、亜衣里の唇に深く自分のそれを重ねるのだが

た。

22・アロイの木彌と白雲姫とロマな勇者（後編）

おー、おー一人さん、時間なーつひまつひのこ、なにこいつまでもこち
やこちやしてるんですか！

大体、ジョリー・ロジャーは何者だったんですか？ おー、おー

…。

……だめだー！

……おーはーつ、皆さんの信じる力でハッピーホーリーを祈りまじょ
か…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0843o/>

さんぶんのいち

2011年10月3日06時14分発行